

Takekasa, Hifumi
Heian-cho monogatari shu



平安朝物語集

全

爐邊に攜へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに最も有用なる書籍なり。

ジョンソン



緒言

我邦古今の載籍、屢冠するに「物語」の名を以てし、其内容區々にして類を同じうせず。而して平安朝は、實に「物語」の始めて我が文學史上に現はれ來れる時代なり。此時代の「物語は、大凡分ちて二類となすべし。一は假作物語にして、竹取、源氏等之に屬し、一は事實に據りたる小話集にして、伊勢、大和等之に屬す。

本集題して平安朝物語集といふと雖も、其長篇大作は、別に之を刊行すべきを以て、爰には短篇數種を收めたり。

竹取物語は、古來我が小說の鼻祖として尊ばるゝ傳奇的物語にして、滑稽の裏に寓するに人情を以てし、頗る興味に饒なり。其作者を詳にせずと雖

も延喜以前の作として信ぜらる。伊勢物語は所謂歌物語の嚆矢にして、大和物語は之に嗣ぎたるもの、共に古来歌人必讀の書として推重せらる。作者は何れも詳ならず。伊勢は業平の自記に後人の加筆せるものといふ説信に近かるべく、大和は花山天皇在原滋春の二説共に信を置くに足らざれども、亦以て略其時代を推すべし。落窪物語は、源氏物語に先だてる人情小説にして、文章洗練、敍事緊密、平安朝に於ける名作の一たり。亦其作者を詳にせず。住吉物語は、原作早く亡び、今存せる者は、鎌倉時代の假托の作に過ぎずと雖も、今姑らく唐物語と共に附載す。唐物語は支那の故事を、なだらかなる邦文に書下したる者、亦鎌倉初期を下らざるべしと謂はる。

今回の覆刻に際して用ひたる本左の如し。

竹取物語　流布本素本二册物。參照竹取物語解。

伊勢物語　流布本（定家卿自筆本に據ると稱するもの。）參照、玉選抄、拾穗抄、古意。

大和物語　大和物語首書。參照、直解。

落窪物語　古活字本。參照、上田秋成校訂本。

住吉物語　古活字本。參照、寶曆板流布本。

唐　物　語　淸水濱臣校訂本。

本集の校訂につきては鳥野幸次、中村健兩氏を煩はしたること多し。特に記して謝意を表す。

大正二年二月　　　　校訂者　武　笠　三

目録

○かぐや姫おひたち

よごとに―節と節との間毎に

髪上―童形の放ち髪を上げ結ぶこと

裳著―裳を始めて着する祝

竹取物語

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、萬の事につかひけり。名をば讃岐造麿となむいひける。その竹の中に、本光る竹ひとすぢありけり。怪しがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いと美しうて居たり。翁いふやう、「われ朝ごと夕ごとに見る竹の中に、おはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なゝめり」とて、手にうち入れて家に持て來ぬ。妻の嫗にあづけて養はす。美しきこと限なし。いと幼ければ籠に入れて養ふ。竹取の翁この子を見つけて後に、竹をとるに、節を隔ててよごとに、金ある竹を見つくること重りぬ。かくて翁やう／＼豐になり行く。この兒やしなふ程に、すく／＼と大になりまさる。三月許になる程に、よきほどなる人になりぬれば、髪上などさだして、髪上せさせ裳著す。帳の内よりも出さ

けうら―清ら。

赫映姫―光彩陸離たる姫の義

うちあげ遊ぶ―酒宴し遊ぶ

のつきどひ

よばひ―呼びの延言、呼び續けて

す、いつきかしづき養ふ程に、この兒の容貌のけうらなること世になく、家の内は暗き處なく光滿ちたり。翁心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しき事もやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。翁竹をとることひさしくなりぬ。勢猛の者になりにけり。この子いと大になりぬれば、名をば三室戸齋部秋田を呼びてつけさす。秋田なよ竹の赫映姫とつけつ。此のほど三日うちあげ遊ぶ。萬の遊をぞしける。男女うけきらはず呼び集へて、いとかしこく遊ぶ。

世界の男、貴なるも賤しきも、いかでこの赫映姫を得てしがな見てしがなと音に聞きめでて惑ふ。そのあたりの垣にも家の外にも居る人だに、容易く見るまじきものを、夜は安き寢もねず、闇の夜に出でても穴を抉り、こゝかしこより覗き垣間見まどひあへり。さる時よりなむ、よばひとはいひける。人の物ともせぬ處に惑ひありけども、何の驗あるべくも見えず。家の人どもに物をだに言はむとて、いひ懸くれども、事ともせず。あた

情を通ずること

おろかなる—志淺き

わび歌—戀ひ佗びて詠める歌

さりとも—今は心強く斷るとも

りを離れぬ公達、夜を明し日を暮す人多かり。おろかなる人は、益なき歩行はよしなかりけりとて、來ずなりにけり。その中に猶いひけるは、色好といはるゝかぎり五人、思ひ止む時なく夜晝來けり。その名、一人は石作皇子、一人は車持皇子、一人は右大臣阿倍御主人、一人は大納言大伴御行、一人は中納言石上麻呂、只この人々なりけり。世の中に多かる人をだに、少しもかたちよしと聞きては、見まほしうする人々なりければ、赫映姫を見まほしうして、物も食はず思ひつゝ、かの家に行きて、たゝずみ歩きけれども、かひあるべくもあらず。文を書きてやれども、返事もせず、わび歌など書きて遣れども、かへしもせず、效なしと思へども、十一月十二月の降りこほり、六月の照りはたゝくにもさはらず來けり。この人々、ある時は竹取を呼び出でて、「娘を我に給べ」と伏し拜み、手を擦り宣へど、「己がなさぬ子なれば、心にも從はずなむある」といひて、月日を過す。かゝれば、この人々家に歸りて物を思ひ、祈をし、願を立て、思やめむとすれども止むべくもあらず。さりとも遂に男合せざらむやは、と思ひて頼をかけたり。强に志を見え



門も廣く—一家繁昌に
かうても—此儘獨身にても
一人々々に—誰か一人に
思の如くも云々—我が

ありく。これを見つけて、翁、赫映姫にいふやう、「我が子の佛變化の人と申しながら、こゝら大さまで養ひ奉る志疎ならず。翁の申さむこと聞き給ひてむや」といへば、赫映姫、「何事をか宣はむ事を承らざらむ。變化の者にて侍りけむ身とも知らず、親とこそ思ひ奉れ」といへば、翁、「嬉しくも宣ふものかな」といふ。「翁年七十に餘りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、男は女にあふことをす、女は男にあふことをす、その後なむ門も廣くなり侍る。いかでかさる事なくてはおはしまさむ」。赫映姫のいはく、「なでふさる事かし侍らむ」といへば、「變化の人といふとも、女の身もち給へり。翁のあらむ限は、かうてもいまずかりなむかし。この人々の年月を經て、かうのみいましつゝ宣ふ事を思ひ定めて、一人々々にあひ奉り給ひね」といへば、赫映姫いはく、「よくもあらぬ容を、深き心も知らで、あだ心つきなば、後悔しき事もあるべきをと思ふばかりなり。世のかしこき人なりとも、深き志を知らではあひ難しとなむ思ふ」といふ。翁いはく、「思の如くも宣ふかな。そも〳〵如何やうなる志あらむ人にかあはむと思す。かばかり志疎な

かれて、星の語れる如く

うけつ—領承す

うそを吹き—口笛を吹く

らぬ人々にこそあゝめれ」赫映姫のいはく、「何ばかりの深きをか見むといはむ。いさゝかの事なり。人の志ひとしかゝなり。いかでか中に劣勝は知らむ。五人の人の中にゆかしき物見せ給へらむに、御志勝りたりとて仕うまつらむと、そのおはすらむ人々に申し給へ」といふ。「よき事なり」とうけつ。日暮るゝ程、例の集りぬ。人々或は笛を吹き、或は歌をうたひ、或は唱歌をし、或はうそを吹き、扇をならしなどするに、翁出でていはく、「辱くもきたなげなる所に、年月を経てものし給ふ事、極りたるかしこまりを申す。翁の命けふ明日とも知らぬを、かく宣ふ君達にも、よく思ひ定めて仕うまつれ、と申せば、深き御心を知らでは、となむ申す。さ申すも理なり。いづれ劣勝おはしまさねば、ゆかしき物見せ給へらむに、御志の程は見ゆべし。仕うまつらむ事は、それになむ定むべき、といふ。これよき事なり。人の怨もあるまじ」と五人の人々も、「よき事なり」といへば、翁入りていふ。赫映姫、「石作皇子には、天竺に仏の御石の鉢といふ物あり。それをとりて賜へ」といふ。「車持皇子には、東の海に蓬莱といふ山あゝなり。そ

おいらかに云々―かゝる難題をかけむよりは何ぞ手短にこの邊へも寄り付くなとは言はぬ
○佛の御石の鉢
したくみ―工夫

れに白銀を根とし、黄金を莖とし、白玉を實として立てる木あり。それ一枝折りて賜はらむ」といふ。「今一人には、唐土にある火鼠の裘を賜へ。大伴大納言には、龍の首に五色に光る玉あり。それを取りて賜へ。石上中納言には、燕のもたる子安貝一つ取りて賜へ」といふ。翁、「難き事どもにこそあゝめれ、此國にある物にもあらず。かく難き事をばいかに申さむ」といふ。赫映姫、「何か難からむ」といへば、翁、「とまれかくまれ申さむ」とて、出でて、「かくなむ。聞ゆるやうに見せ給へ」といへば、皇子達、上達部聞きて、「おいらかに、あたりよりだにな歩きそ、とやは宣はぬ」といひて、倦じて皆歸りぬ。

猶この女見では、世にあるまじき心地のしければ、天竺にある物も持て來ぬものかは、と思ひめぐらして、石作皇子は心のしたくみある人にて、天竺に二つとなき鉢を、百千萬里の程行きたりとも、いかでか取るべき、と思ひて、赫映姫の許には、今日なむ天竺へ石の鉢とりにまかる、と聞かせて、三年ばかり經て、大和國十市郡にある山寺に、

ひた黒―眞黒

面なき―面目なき

○蓬萊の玉の枝

賓頭盧の前なる鉢のひた黒に墨つきたるを取りて、錦の袋に入れて、作花の枝につけて、赫映姫の家にもて來て見せければ、赫映姫あやしがりて見るに、鉢の中に文あり、ひろげて見れば、

海山のみちにこころをつくしはてみいしの鉢のなみだながれき

赫映姫、光やあると見るに、螢ばかりの光だになし、

おく露のひかりをだにぞやどさまし小倉山にてなにもとめけむ

とて、かへし出すを、鉢を門に棄てて、この歌の返しをす。

しら山にあへば光のうするかとはちを棄ててもたのまるるかな

とよみて入れたり。赫映姫返しもせずなりぬ。耳にも聞き入れざりければ、いひ煩ひて歸りぬ。かれ鉢を棄てて又いひけるよりぞ、面なきことをば、はぢを棄つとはいひける。

車持皇子は、心たばかりある人にて、公には、筑紫國に湯あみに罷らむ、とて、暇まう

おはしましぬと—遠く舟出しつゝと

内匠—禁裡の工匠

知らせ給ひつる云々—十六ヶ所の知行所

くど—窓、竈の後の穴くどはくら(倉)の誤ならんとも言ふ

優曇華—經

して、赫映姫の家には、玉の枝とりになむまかる、といはせて下り給ふに、仕うまつるべき人々、みな難波まで御送しけり。皇子、「いと忍びて」と宣はせて、人も數多率ておはしまさず、近う仕うまつる限して出で給ひぬ。御おくりの人々、見奉り送りて歸りぬ。おはしましぬと人には見え給ひて、三日許ありて漕ぎ歸り給ひぬ。かねて事みな仰せたりければ、その時一の工匠なりける内匠六人を召しとりて、容易く人寄り來まじき家を作りて、構を三重にしこめて、工匠等を入れ給ひつゝ、皇子も同じ所にこもり給ひて、知らせ給ひつるかぎり十六所をかみにくどをあけて、玉の枝をつくり給ふ。赫映姫のたまふやうに、違はずつくり出でつ。いとかしこくたばかりて、難波に密にもて出でぬ。「船に乘りて歸り來にけり」と殿に告げやりて、いといたく苦しげなる樣して居給へり。迎に人おほく參りたり。玉の枝をば長櫃に入れて、物覆ひて持ちて參る。いつか聞きけむ、「車持皇子は、優曇華の花持ちてのぼり給へり」とのゝしりけり。これを赫映姫聞きて、我はこの皇子にまけぬべし、と胸つぶれて思ひけり。かゝる程に門を叩きて、「車持皇子

おはしましたり」と告て、「旅の御姿ながらおはしましたり」といへば、逢ひ奉る、皇子のたまはく、「命を捨てて、かの玉の枝持てきたり」とて、「赫映姫に見せ奉り給へ」といへば、翁もちて入りたり。この玉の枝に文をぞつけたりける。

いたづらに身はなしつとも玉の枝を手折らで更に歸らざらまし

これをもあはれと見て居るに、竹取の翁走り入りていはく、「この皇子に申し給ひし蓬萊の玉の枝を、一つの所をあやしき處なく、あやまたずもておはしませり。何をもてか、とかく申すべきにあらず。旅の御姿ながら、我が御家へも寄り給はずしておはしましたり。はやこの皇子にあひ仕うまつり給へ」といふに、物もいはず頰杖をつきて、いみじう歎かしげに思ひたり。この皇子、今さら何かといふべからずといふまゝに、縁にはひのぼり給ひぬ。翁ことわりに思ふ。「この國に見えぬ玉の枝なり。この度はいかでかいなみまをさむ。人さまもよき人におはす」などいひ居たり。赫映姫のいふやう、「親ののたまふ事を、ひたぶるにいなみ申さむことのいとほしさに、得がたきものをかかし、

文中に見ゆる花、既課しく略

ひたぶるに——一向に

むくつけげなるもの—恐ろしきもの

とは申しつるを、かく淺ましく持て來ることをなむ、ねたく思ひ侍る」といへど、なほ翁は閨の內しつらひなどす。翁、皇子に申すやう、「いかなる所にか、この木はさぶらひけむ、怪しく麗しくめでたきものにも」と申す。皇子答へて宣はく、「一昨々年の二月の十日比に、難波より船に乘りて、海中に出でて、行かむ方も知らず覺えしかど、思ふこと成らでは、世の中に生きて何かせむ、と思ひしかば、ただ空しき風に任せてありく。命死なばいかがはせむ、生きてあらむ限はかく步きて、蓬萊といふらむ山にあふや、と浪にただよひ漕ぎありきて、我が國の內を離れてありき廻りしに、或時は浪荒れつゝ海の底にも入りぬべく、或時は風につけて知らぬ國に吹き寄せられて、鬼のやうなるもの出で來て殺さむとしき。或時には來し方行末も知らず、海にまぎれむとしき。或時には糧盡きて、草の根を食物としき。或時にはいはむ方なくむくつけげなるもの來て、食ひかからむとしき。或時には海の貝を取りて命をつぐ。旅の空に助くべき人もなき所に、いろいろの病をして、行方すらも覺えず、船の行くに任せて、海に漂ひて、五百日といふ

舟のうちをなむせめて見る—舟の中より強ひて

ほうかむるり—寶玖瑠璃なるべし、仙女の名

そばひら—側平、山の側

辰の時許に、海の中に遙に山見ゆ。舟のうちをなむせめて見る。海の上に漂へる山いと大きにてあり。その山の樣高くうるはし。これや我が覓むる山ならむと思へど、さすがに畏しく覺えて、山の周を指し廻らして、二三日ばかり見ありくに、天人の裝したる女、山の中より出で來て、銀の金椀をもて水を汲みありく。これを見て船よりおりて、この山の名を何とか申す、と問ふに、女答へて曰く、これは蓬萊の山なり、と答ふ。之を聞くに嬉しき事限なし。この女に、かく宣ふは誰ぞ、と問ふ。我が名はほうかむるり、といひて、ふと山の中に入りぬ。その山を見るに、更に登るべきやうなし。その山のそばひらを廻れば、世の中になき花の木ども立てり。金銀瑠璃色の水流れ出でたり。それにはいろ〳〵の玉の橋渡せり。そのあたり照り輝く木ども立てり。その中に、この取りて持てまうで來たりしは、いとわろかりしかども、のたまひしに違はましかばとて、この花を折りてまうできたるなり。山は限なくおもしろし。世に譬ふべきにあらざりしかど、この枝を折りてしかば、さらに心もとなくて、船に乗りて追風ふきて、四百餘日になむま

こゝら—多く

作物所—禁中の細工所

けご—家の子

うで來にし。大願の力にや、難波より昨日なむ都にまうで來つる。さらに潮にぬれたる衣をだに脱ぎかへなでなむ、こちまうで來つる」と宣へば、翁聞きて、うち歎きてよめる。

　呉竹のよよのたけとる野山にもさやはわびしきふしをのみ見し

これを皇子聞きて、「こゝらの日比思ひわび侍りつる心は、今日なむおちゐぬる」とのたまひて、かへし、

　わが袂けふかわければわびしさのちぐさの數もわすられぬべし

と宣ふ。かゝる程に、男ども六人連ねて、庭に出できたり。一人の男、文挾に文をはさみて申す。「作物所の寮のたくみ漢部内麿まをさく、玉の木を作りて仕うまつりしこと、心を砕きて、千餘日に力を盡したること少からず。しかるに祿いまだ賜はらず、これを賜はりて、分ちてけごに賜はせむ」といひて捧げたり。竹取の翁、この工匠等が申すことは何事ぞ、とかたぶきをり。皇子は我にもあらぬ氣色にて、肝消えぬべき心地してゐ給へり。是を赫映姫聞きて、「この奉る文を取れ」といひて見れば、文に申しけるやう、

皇子は千餘日にいやしき工匠等と諸共に、同じ所に隠れ居給ひて、かしこき玉の枝を作らせ給ひて、官も賜はらむと仰せ給ひき。これを、この比案ずるに、御使とおはしますべき赫映姫の要じ給ふべきなりけり、と承りて、この宮より賜はらむ」と申して賜はるべきなり。

といふを聞きて、赫映姫、暮るゝまゝに思ひわびつる心地笑ひ榮えて、翁をよび取りていふやう、「誠に蓬萊の木かとこそ思ひつれ。かくあさましき虚事にてありければ、はや疾くかへし給へ」といへば、翁答ふ、「さだかに造らせたる物と聞きつれば、かへさむこといと易し」と頷きをり。赫映姫の心ゆきはてて、ありつる歌のかへし、

まことかと聞きて見つれば言の葉をかざれる玉の枝にぞありける

といひて、玉の枝も返しつ。竹取の翁さばかり語らひつるが、さすがに覺えて眠りをり。皇子は、立つもはしたに居るもはしたにて居給へり。日の暮れぬれば、すべり出で給ひぬ。かのうれへせし工匠等をば、赫映姫呼びすゑて、「嬉しき人どもなり」といひて、祿いと多く

御使—御使人の事にてこゝにては妻などの意

さだかに—確に

うれへ—愁訴

ちょうぜさせ—打擲せしめ
宮司—皇子の宮に奉仕せる人々
御供に云々—世人には勿論從者にも耻ぢて身を隱し給はんとてなり
○火鼠の裘

とらせ給ふ。工匠等いみじく喜びて、「思ひつる樣にもあるかな」といひて、かへる道にて、車持皇子血の流るゝまでちょうぜさせ給ふ。祿得しかひもなく、皆とり捨てさせ給ひてければ、逃げうせにけり。かくて、この皇子、「一生の恥これに過ぐるはあらじ。女を得ずなりぬるのみにあらず、天の下の人の見おもはむことの恥かしき事」と宣ひてただ一所深き山へ入り給ひぬ。宮司さぶらふ人々、みな手を分ちて求め奉れども、身まかりもやし給ひけむ、え見つけ奉らずなりぬ。皇子の御供に隱し給はむとて、年比見え給はざりけるなりけり。是をなむ、たまさかるとはいひ始めける。

右大臣阿倍御主人は、財豐に家ひろき人にぞおはしける。その年わたりける唐土船の王卿といふ者の許に、文を書きて、火鼠の裘といふなるもの買ひておこせよ、とて、仕うまつる人の中に、心たしかなるを選びて、小野房守といふ人をつけてつかはす。もていたりて、かの浦に居る王卿に金をとらす。王卿文をひろげて見て、返事かく。



ひじり―聖僧

たび送れ―送り給へ

火鼠の裘、我が國になきものなり。音には聞けども、いまだ見ぬものなり。世にある物ならば、此國にももてまうで來なまし。いと難き商なり。然れども、若し天竺にたまさかにもて渡りなば、もし長者の邊にとぶらひ求めむに、なき物ならば、使に添へて金をば返し奉らむ。

といへり。かの唐土船來けり。小野房守まうで來てまう上る、といふことを聞きて、あゆみ疾うする馬をもちて、走らせ迎へさせ給ふ時に、馬に乘りて筑紫よりただ七日に上りまうで來たり。文を見るに、いはく、

火鼠の裘、辛うじて、人を出して求めて奉る。今の世にも昔の世にも、この皮は容易くなきものなりけり。昔かしこき天竺のひじり、この國にもて渡りて侍りける、西の山寺にあり、と聞き及びて、公に申して、辛うじて買ひ取りて奉る。價の金少し、と國司使に申ししかば、王卿が物加へて買ひたり。今金五十兩たまはるべし。船の歸らむにつけてたび送れ。もし金賜はぬものならば、裘の質かへしたべ。

いろへて―彩色して
うべ―宜
御身―右大臣自身
化粧―裝づくり
おもひ―思、火
家―竹取の家

といへる事を見て、「何おぼす、いま金少しの事にこそあなれ、必ず送るべき物にこそあなれ。嬉しくして遣せたる哉」とて、唐土の方に向ひて伏し拜み給ふ。此裘入れたる箱を見れば、種々のうるはしき瑠璃をいろへて作れり。裘を見れば紺青の色なり。毛の末には金の光輝きたり。げに寶と見え、うるはしきこと比ぶべき物なし。火にやけぬ事よりも、清らなる事比なし。「うべ、赫映姫の好しがり給ふにこそありけれ」と宣ひて、「あなかしこ」とて、箱に入れ給ひて、物の枝につけて、御身の化粧いといたくして、やがてとまりなむものぞ、と思して、歌よみ加へて持ちていましたり。その歌は、

かぎりなきおもひに燒けぬかはごろも袂かわきて今日こそは着め

といへり。家の門に持ていたりて立てり。竹取いで來て取り入れて、赫映姫に見す。赫映姫、かの裘を見ていはく、「うるはしき皮なゝめり。わきて眞の皮ならむとも知らず」。竹取答へていはく、「とまれかくまれ、まづ請じ入れ奉らむ。世の中に見えぬ裘の樣なれば、是を眞と思ひ給ひね。人ないたくわびさせ奉らせ給ひそ」といひて、呼びすゑ奉

人の—右大臣

なごりなく—悉く

れり。かく呼びすゑて、この度は必ずあはむ、と嫗の心にも思ひをり。この翁は、赫映姫のやもめなるを歎かしければ、よき人にあはせむ、と思ひはかれども、切に否といふことなれば、え強ひぬはことわりなり。赫映姫、翁にいはく、「この裘は、火に燒かむに燒けずはこそ眞ならむと思ひて、人のいふことにもまけめ。世になき物なれば、それをまことと疑なく思はむと宣へ。猶これを燒きて見む」といふ。翁、「それさもいはれたり」といひて、大臣に「かくなむ申す」といふ。大臣答へていはく、「この皮は唐土にもなかりけるを、辛うじて覓め尋ね得たるなり。何の疑かあらむ。さは申すとも、はや燒きて見給へ」といへば、火の中にうちくべて燒かせ給ふに、めら〳〵と燒けぬ。「さればこそ異物の皮なりけり」といふ。大臣これを見給ひて、御顏は草の葉の色してゐ給へり。赫映姫は、あなうれしと喜びて居たり。かの詠み給ひける歌の返、箱に入れて返す。

　なごりなくもゆと知りせばかは衣おもひの外におきて見ましを

とぞありける。されば歸りいましにけり。世の人々、「安倍大臣は、火鼠の裘をもてい



あへなし——張合なし

○龍の首の珠

まして、赫映姫にすみ給ふとな。こゝにやいます」など問ふ。或人のいはく、「裘は火にくべて燒きたりしかば、めら〱と燒けにしかば、赫映姫あひ給はず」といひければ、是を聞きてぞ、とげなきものをば、あへなしとはいひける。

大伴御行の大納言は、我が家にありとある人を召し集めて、宣はく、「龍の首に五色の光ある玉あッなり、それを取りて奉りたらむ人には、願はむ事をかなへむ」と宣ふ。男ども仰の事を承りて申さく、「仰のことはいとも尊し。ただしこの玉たやすくえ取らじを、況や龍の首の玉はいかがとらむ」と申しあへり。大納言のたまふ、「君の使といはむものは命を捨てても、己が君の仰事をば叶へむとこそ思ふべけれ。この國になき天竺唐土のにもあらず。この國の海山より龍は下り上るものなり。いかに思ひてか、汝等かたきものと申すべき」。男ども申すやう、「さらばいかがはせむ。難きものなりとも、仰事に從ひて求めにまからむ」と申す。大納言見笑ひて、「汝等君の使と名を流しつ。君の仰事を

いもゐ—齋居、精進のこと

すき事—好色

つきなき—便宜なき

はいかゞは歸くべき」と宣ひて、龍の首の玉とりにとて、出し立て給ふ。この人々の道の糧食物に、殿の内の絹・綿・錢など、ある限とり出でて添へて遣はす。「この人々ども、歸るまでいもゐをして我は居らむ。この玉とり得では家に歸りくな」と宣はせけり。おのおの仰承りて罷り出でぬ。「龍の首の玉とり得ずは歸り來な」と宣へば、いづちも〳〵足のむきたらむ方へいなむとす。かゝるすき事をし給ふ事、と誹りあへり。賜はせたる物はおの〳〵分けつゝ取り、或は己が家に籠りゐ、或はおのが行かまほしき所へいぬ。親と君と申すとも、かくつきなき事をおほせ給ふ事、と、ことゆかぬもの故、大納言を誹りあひたり。「かぐや姫すゑむには、例のやうには見にくし」と宣ひて、麗しき屋をつくり給ひて、漆を塗り、蒔繪をし、いろへし給ひて、屋の上には糸を染めて、いろ〳〵に葺かせて、内々のしつらひには、いふべくもあらぬ綾織物に繪をかきて、間毎に張りたり。もとの妻どもは追ひはらひて、かぐや姫を必ずあはむとまうけして、獨り明し暮し給ふ。遣はしし人は、夜晝待ち給ふに、年越ゆるまで音もせず。心もとながりて、いと忍びて、た

召繼—取次などの雜役をするもの

をぢなき—無智なる事を知らで

こゝら—多年

だ舍人二人召繼として、やつれ給ひて、難波の邊におはしまして、問ひ給ふことは、「大伴大納言の人や、船に乘りて龍殺して、そが首の玉とれるとや聞く」と問はするに、船人答へていはく、「怪しきことかな」と笑ひて、「さるわざする船もなし」と答ふるに、をぢなきことする船人にもあるかな。え知らでかくいふ、とおぼして、「我が弓の力は、龍あらばふと射殺して首の玉は取りてむ。遲く來るやつばらを待たじ」と宣ひて、船に乘りて、海ごとにありき給ふに、いと遠くて、筑紫の方の海に漕ぎ出で給ひぬ。いかがしけむ、はやき風吹きて、世界くらがりて、船を吹きもてありく。いづれの方とも知らず、船を海中にまかり出でぬべく吹き廻して、浪は船にうちかけつゝまき入れ、雷は落ちかゝるやうに閃きかゝるに、大納言は惑ひて、「まだかゝるわびしき目は見ず、如何ならむとするぞ」と宣ふ。楫取答へて申す。「こゝら船に乘りてまかりありくに、まだかくわびしき目を見ず。御船海の底に入らずは雷落ちかゝりぬべし。若しさいはひに神の助あらば、南海に吹かれおはしぬべし。うたてある主の御許に仕へ奉りて、すずろなる死をすべかゝめ

け―氣色
あがりて―明るくなりて

ろかな」とて、楫取泣く、大納言これを聞きて宣はく、「船に乗りては楫取の申すことをこそ、高き山ともたのめ。など斯くたのもしげなきことを申すぞ」とあをへどを吐きて宣ふ。楫取答へて申す、「神ならねば何業をか仕らむ。風吹き浪はげしけれども、雷さへいただきに落ちかゝるやうなるは、龍を殺さむと求め給ひ候へば、かくあなり。はやても龍の吹かするなり。はや神に祈り給へ」といへば、「よき事なり」とて、「楫取の御神聞しめせ、をぢなく心幼く龍を殺さむと思ひけり。今より後は毛の末一筋をだに動し奉らじ」と、祝詞をはなちて立居、泣く〳〵呼ばひ給ふこと、千度ばかり申し給ふけにやあらむ、やう〳〵雷なりやみぬ。少しあかりて、風はなほ早く吹く。楫取のいはく、「これは龍のしわざにこそありけれ。この吹く風はよき方の風なり。あしき方の風にはあらず。よき方に赴きて吹くなり」といへども、大納言は、是を聞き入れ給はず。三四日ありて吹き返しよせたり。濱を見れば、播磨の明石の濱なりけり。大納言、南海の濱に吹き寄せられたるにやあらむ、と思ひて、息つき臥し給へり。船にある男ども國に告げたれ

風いとおもき云々—風邪に冒さるる毎に重く煩ふ人にて
によぶ〳〵—呻吟しつゝ

ば、國の司まうで訪ふにも、え起きあがり給はで、船底に臥し給へり。松原に御筵しきておろし奉る。その時にぞ、南海にあらざりけりと思ひて、辛うじて起き上り給へるを見れば、風いとおもき人にて、腹いとふくれ、こなたかなたの目には、李を二つつけたるやうなり。これを見奉りてぞ、國の司もほゝゑみたる。國に仰せたまひて、腰輿つくらせ給ひて、によぶ〳〵荷はれて家に入り給ひぬるを、いかで聞きけむ、遣しし男ども參りて申すやう、「龍の首の玉をえ取らざりしかばなむ、殿へもえ參らざりし。玉のとり難かりしことを知り給へればなむ、勘當あらじとて參りつる」と申す。大納言起き出で宣はく、「汝等よくもて來ずなりぬ。龍は鳴神の類にてこそありけれ。それが玉を取らむとて、そこらの人々の害せられなむとしけり。まして龍を捕へたらましかば、又こともなく、我は害せられなまし。よく捕へずなりにけり。赫映姫てふ大盜人のやつが、人を殺さむとするなりけり。家のあたりだに今は通らじ。男どももなありきそ」とて、家に少し殘りたりける物どもは、龍の玉とらぬ者どもにたびつ。これを聞きて、離れ給ひ

本の上——もとの妻

○燕の子安貝

大炊寮——宮内省の東にあり諸國の稲田及び公私の熟食等の事を掌る

つく——束柱、和名鈔に、豆賀波之良

あぐら——今いふ足場

し本の上は、腹をきりて笑ひ給ふ。糸を葺かせて造りし屋は、鳶烏の巣に皆喰ひもていにけり。世界の人のいひけるは、「大伴大納言は、龍の首の玉や取りておはしたる」「否さもあらず。御眼二つに李の様なる玉をぞ添へていましたる」といひければ、「あな堪へ難」といひけるよりぞ、世にあはぬ事をば、あなたへがたとはいひ始めける。

中納言石上麻呂は、家につかはるゝ男どもの許に、「燕の巣くひたらば告げよ」と宣ふを、うけたまはりて、「何の料にかあらむ」と申す。答へて宣ふやう、「燕のもたる子安貝をとらむ料なり」と宣ふ。男ども答へて申す、「燕をあまた殺して見るにだにも、腹になきものなり。ただし子産む時なむいかでかいだすらむ、はら〳〵と、人だに見れば失せぬ」と申す。又人の申すやう、「大炊寮の飯炊く屋の棟のつくの穴毎に燕は巣くひ侍り。これにまめならむ男どもをゐてまかりて、あぐらを結ひて上げて窺はせむに、そこらの燕子うまざらむやは。さてこそ取らしめ給はめ」と申す。中納言喜び給ひて、「をかしき事に

あななひ—あぐらに同じ

額を合せて—親しく語り合ふ様

あれて—遠離して

もあるかな。もともえ知らざりけり。興あること申したり」と宣ひて、まめなる男ども二十人ばかり遣して、あななひに上げすゑられたり。殿より使ひまなく給はせて、「子安貝とりたるか」と問はせ給ふ。燕も人の數多のぼり居たるにおぢて、巣に上りこず。かかるよしの御返事を申しければ、聞き給ひて、いかがすべきと思しめし煩ふに、かの寮の官人くらつ麿と申す翁申すやう、「子安貝とらむと思しめさば、たばかり申さむ」とて、御前に參りたれば、中納言額を合せてむかひ給へり。くらつ麿が申すやう、「この燕の子安貝は、あしくたばかりて取らせ給ふなり。さてはえ取らせ給はじ。あななひにおどろおどろしく二十人の人の上りて侍れば、あれて寄りまうで來ずなむ。せさせ給ふべきやうは、このあななひを毀ちて、人みな退きて、まめならむ人一人を荒籠に載せすゑて、綱をかまへて、鳥の子産まむ間に綱を釣りあげさせて、ふと子安貝を取らせ給はむなむよかるべき」と申す。中納言宣ふやう、「いとよきことなり」とて、あななひを毀ちて、人みな歸りまうで來ぬ。中納言、くらつ麿に宣はく、「燕はいかなる時にか子を産むと知

誰ばかり云々—誰か之を爲し得むと思ひ廻らすにその人を思ひ寄らねば

わそ、人をはあぐべき」と宣ふ。くらつ麿申すやう、「燕は子うまむとする時は、尾をささげて七度廻りてなむ、産み落すめる。さて七度廻らむ折ひきあげて、その折り子安貝は取らせ給へ」と申す。中納言喜び給ひて、萬の人にも知らせ給はで、みそかに寮にいまして、男どもの中に交りて、夜を晝になして取らしめ給ふ。くらつ麿かく申すを、いといたく喜び給ひて宣ふ、「ここに使はるる人にもなきに、願をかなふる事の嬉しさ」と宣ひて、御衣ぬぎてかづけ給ひつ。「更に夜さりこの寮にまうで來」とのたまひて遣しつ。日暮れぬれば、かの寮におはして見給ふに、誠に燕巣つくれり。くらつ麿申すやうに尾をささげて廻るに、荒籠に人を載せて釣りあげさせて、燕の巣に手をさし入れさせて探るに、「物もなし」と申すに、中納言、「あしく探ればなきなり」と腹だちて、「誰ばかりおぼえむに」とて、「我のぼりて探らむ」と宣ひて、籠にのりて釣られ登りて窺ひ給へるに、燕尾をささげていたく廻るに合せて、手を捧げて探り給ふに、手にひらめるものさはる時に、「われ物にぎりたり。今はおろしてよ。翁しえたり」と宣ひて、集りて疾くおろ



しらめ―白眼、氣絶して瞳の上りたる貌

紙燭―又紙燭と書く、松材を細く削り油を塗りて燈火の料とす

御ぐし―御頭

いはけたる―心幼く不覺なる

さはとて、綱を引き過ぐして、綱絶ゆる間、やしまの鼎の上にのけざまに落ち給へり。人々あさましがりて、寄りて抱へ奉れり。御目はしらめにてふし給へり。人々御口に水をすくひ入れ奉る。からうじて息いで給へるに、また鼎の上より、手とり足とりしてさげおろし奉る。からうじて、「御心地はいかがおぼさるゝ」と問へば、息の下にて、「ものは少し覺ゆれど、腰なむ動かれぬ。されど子安貝をふと握りもたれば、嬉しく覺ゆるなり。まづ紙燭さして來。この貝顔見む」と、御ぐしもたげて御手をひろげ給へるに、燕のまり置ける古糞をにぎり給へるなりけり。それを見給ひて、「あなかひなのわざや」と宣ひけるよりぞ、思ふに違ふことをば、かひなしとはいひける。かひにもあらず、と見給ひけるに、御心地もたがひて、唐櫃の蓋に入れられ給ふべくもあらず、御腰は折れにけり。中納言は、いはけたるわざして病むことを、人に聞かせじとし給ひけれど、それを病にていと弱くなり給ひにけり。貝をえ取らずなりにけるよりも、人の聞き笑はむことを、日にそへて思ひ給ひければ、ただに病み死ぬるよりも、人ぎき恥しく覺え給ふなりけり。

○御狩のみゆき

いうに―優に

これを赫映姫、聞きてとぶらひにやる歌、

　年をへてなみ立ちよらぬ住の江のまつかひなしと聞くはまことか

とあるを讀みて聞かす。いと弱き心地に頭もたげて、人に紙をもたせて、苦しき心地に辛うじて書き給ふ。

　かひはかくありけるものをわびはてて死ぬる命をすくひやはせぬ

と書きはてて絶え入りたまひぬ。これを聞きて、赫映姫少し哀とおぼしけり。それよりなむ少し嬉しきことをば、かひありとはいひける。

さて、赫映姫容世に似ずめでたきことを、帝きこしめして、内侍中臣のふさ子に宣ふ、「おほくの人の身を徒になしてあはざゝなる赫映姫は、いかばかりの女ぞとまかりて見てまゐれ」と宣ふ。ふさ子、承りてまかれり。竹取の家に畏りて請じ入れてあへり。嫗に内侍のたまふ、「仰ごとに、赫映姫の容いうにおはすとなり。よく見て參るべきよし

うたても—憂くも

宣はせつるになむ参りつる」といへば、「さらばかくと申し侍らむ」といひて入りぬ。赫映姫に、「はやかの御使に對面し給へ」といへば、赫映姫「よき容貌にもあらず。いかでか見ゆべき」といへば、「うたても宣ふかな。帝の御使をばいかでか疎かにせむ」といへば、赫映姫答ふるやう、「帝の召して宣はむこと、かしこしとも思はず」といひて、更に見ゆべくもあらず。うめる子のやうにはあれど、いと心恥しげに、疎なるやうにいひければ、心のまゝにも責めず。嫗、内侍の許にかへり出でて、「口惜しくこの幼き者は、こはく侍るものにて、對面すまじきと申す」。内侍、「必ず見奉りて參れ、と仰事ありつるものを、見奉らではいかでか歸り參らむ。國王の仰事を、まさに世に住み給はむ人の、承り給はではありなむや。いはれぬ事なし給ひそ」と、詞はづかしくいひければ、これを聞きて、まして赫映姫聞くべくもあらず。「國王の仰事を背かば、はや殺し給ひてよかし」といふ。この内侍歸り參りて、このよしを奏す。帝聞しめして、「多くの人を殺してける心ぞかし」と宣ひて、止みにけれど、なほ思しめしおはしまして、この女の謀に

たいぐくし—疎略に

冠—官位

やまけむと思しめして、竹取の翁を召しておほせ給ふ、「汝が持て侍る赫映姫を奉れ。顔容よしと聞しめして、御使を給びしかど、かひなく見えずなりにけり。かくたいぐくしくやはならはすべき」と仰せらる。翁畏まりて御返事申すやう、「此の女の童は、絶えて宮仕つかうまつるべくもあらず侍るを、もてわづらひ侍り。さりとも罷りて仰せ給はむ」と奏す。是を聞し召して仰せ給ふやう、「などか翁の手におほし立てたらむものを、心に任せざらむ。この女もし奉りたるものならば、翁に冠をなどかたばせざらむ」。翁喜びて家に歸りて、赫映姫にかたらふやう、「かくなむ帝の仰せ給へる。猶やは仕う奉りたまはぬ」といへば、赫映姫答へて曰く、「もはら左樣の宮仕つかう奉らじと思ふを、強ひて仕う奉らせ給はば消え失せなむず。御官冠つかう奉りて死ぬばかりなり」。翁いらふるやう、「なし給ひそ。官冠も、我が子を見奉らでは何にかはせむ。さはありともなどか宮仕をし給はざらむ。死に給ふやうやはあるべき」といふ。「猶そらごとかと、仕う奉らせて、死なずやあると見給へ。數多の人の志疎ならざりしを、空しくなしてしこそあれ。

やさし―恥かし

何か心もなくて云々―とかくの考のなき所に不意に

ふたぎて―塞ぎて

昨日今日帝の宣はむ事につかむ、人聞やさし」といへば、翁答へて曰く、「天の下の事はとありともかゝりとも、御命の危さこそ大なる障りなれ。猶仕うまつるまじき事を参りて申さむ」とて、参りて申すやう、「仰の事のかしこさに、かの童を参らせむとて仕う奉れば、宮仕に出し立てなば死ぬべし、と申す。造麻呂が手にうませたる子にてもあらず。昔山にて見つけたる。かゝれば心ばせも世の人に似ずぞ侍る」と奏せさす。帝おほせ給はく、「造麻呂が家は山本近かなり。御狩の行幸し給はむやうにて見てむや」とのたまはす。造麻呂が申すやう、「いとよき事なり。何か心もなくて侍らむに、ふと行幸して御覧ぜられなむ」と奏すれば、帝俄に日を定めて、御狩に出で給ひて、赫映姫の家に入りたまひて見給ふに、光みちて清らにて居たる人あり。是ならむと思して近く寄らせ給ふに、逃げて入る袖をとらへ給へば、面をふたぎて候へど、初よく御覧じつれば、類なくめでたしと覚えさせ給ひて、許さじとすとて、率ておはしまさむとするに、赫映姫答へて奏す、「おのが身は、この国に生れて侍らばこそ使ひ給はめ、いとゐておはし難くや侍らむ」と

きと—俄に

あるじ—饗應

奏す。帝、「などかさあらむ、猶率ておはしまさむ」とて、御輿を寄せ給ふに、この赫映姫、きと影になりぬ。はかなく口惜しとおぼして、實にただ人にはあらざりけり、とおぼして、「さらば御供には率ていかじ。もとの御かたちとなり給ひね。それを見てだに歸りなむ」と仰せらるれば、赫映姫もとの形になりぬ。帝、なほめでたく思し召さるゝ事せきとめ難し。かく見せつる造麿を悦び給ふ。さて仕うまつる百官の人々に、あるじいかめしう仕う奉る。帝、赫映姫を留めて歸りたまはむ事を、飽かず口惜しく思しけれど、たましひを留めたる心地してなむ、歸らせたまひける。御輿に奉りて後に、赫映姫に、

　歸るさのみゆき物うくおもほえてそむきてとまるかぐや姫ゆゑ

御返事を、

　葎はふ下にもとしはへぬる身のなにかはたまのうてなをも見む

これを帝御覽じて、いとど歸り給はむそらもなく思さる。御心は更に立ちかへるべくも



赫映姫の傍に云々―傍にも寄りつかぬ程の劣り方なり

こと人―他人

○天の羽衣

人間―人の見ぬ隙

思されざりけれど、さりとて夜をあかし給ふべきにもあらねば、かへらせ給ひぬ。常に仕う奉る人を見たまふに、赫映姫の傍に寄るべくだにあらざりけり。こと人よりはけうらなりとおぼしける人の、かれに思しあはすれば人にもあらず。赫映姫のみ御心にかかりて、ただ一人すぐしたまふ。よしなくて御方々にもわたりたまはず。赫映姫の御許にぞ、御文を書きて通はさせ給ふ。御返事さすがに憎からず聞えかはし給ひて、おもしろき木草につけても、御歌を詠みてつかはす。

かやうにて、御心を互に慰めたまふ程に、三年ばかりありて、春の初より、赫映姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたる樣なり。ある人の、月の顔みるは忌む事と制しけれども、ともすれば人間には月を見ていみじく泣き給ふ。七月のもちの月に出で居て、切にもの思へるけしきなり。ちかく使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、「赫映姫例も月をあはれがり給ひけれども、この比となりては、ただ事にも侍らざんめり、

うましき—嬉しき
あが佛—吾が本尊とも頼む人

いみじく思し嘆く事あるべし。よく〳〵見奉らせたまへ」といふを聞きて、赫映姫にいふやう、「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見たまふぞ。うましき世に」といふ。赫映姫、「月を見れば世の中心細くあはれに侍り。なでふ物をか嘆き侍るべき」といふ。赫映姫のある所にいたりて見れば、なほ物思へるけしきなり。これを見て、「あが佛何事を思ひ給ふぞ。思すらむこと何事ぞ」といへば、「思ふこともなし。物なむ心細く覺ゆる」といへば、翁、「月な見給ひそ。これを見給へば、もの思すけしきはあるぞ」といへば、「いかでか月を見ずにはあらむ」とて、なほ月出づれば、出で居つゝ嘆き思へり。夕暗には物思はぬ氣色なり。月の程になりぬれば、なほ時々はうち嘆き泣きなどす。是を、使ふ者ども、「猶もの思す事あるべし」とさゝやけど、親を始めて何事とも知らず。八月十五日ばかりの月にいで居て、赫映姫いといたく泣きたまふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも、「何事ぞ」と問ひさわぐ。赫映姫泣く泣くいふ、「さき〴〵も申さむと思ひしかども、かならず心惑はし給はむものぞと思ひて、

さらず—逃れず

今まで過ぐし侍りつるなり。さのみやはとて、うち出で侍りぬるぞ。おのが身は、此國の人にもあらず、月の都の人なり。それを昔の契なりけるによりてなむ、この世界にはまうで來りける。今は歸るべきになりにければ、この月の十五日に、かの本の國より迎に人々まうでこむず。さらずまかりぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり」といひて、いみじう泣く。翁、「こはなでふ事を宣ふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大さおはせしを、我が丈たち竝ぶまで養ひ奉りたる我が子を、何人か迎へ聞えむ。まさに許さむや」といひて、「我こそ死なめ」とて、泣きののしることいと堪へがたげなり。赫映姫のいはく、「月の都の人にて父母あり。片時の間とてかの國よりまうで來しかども、斯くこの國には、數多の年を經ぬるになむありける。かの國の父母の事もおぼえず。こゝにはかく久しく遊び聞えてならひ奉れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど己が心ならず罷りなむとする」といひて、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人々も年比ならひて、立ち別れなむことを、心ばへなど

あてやかに―貴く上品に

六衛のつかさ―左右近衛、左右兵衛、左右衛門

あてやかに美しかりつることを見ならひて、戀しからむことの堪へがたく、湯水も飲まれず、同じ心に歎しがりけり。この事を帝きこしめして、竹取が家に御使つかはさせ給ふ。御使に竹取いで逢ひて、泣くこと限なし。この事を歎くに、鬢も白く、腰も屈り、目もただれにけり。翁今年は五十許なりけれども、物思には片時になむ老になりにけると見ゆ。御使、仰事とて翁にいはく、「いと心苦しく物思ふなるは、誠にか」と仰せ給ふ。竹取泣く泣く申す、「この望になむ、月の都より姮娥の迎にまうで來なる。尊くとはせ給ふ。この望には人々たまはりて、月の都の人まうで來ば、とらへさせむ」と申す。御使かへり參りて、翁のありさま申して、奏しつる事ども申すを、聞し召して宣ふ、「一目見給ひし御心にだに忘れ給はぬに、明暮見馴れたる姮娥をやりては、如何思ふべき」かの十五日、司々に仰せて、勅使には少將高野大國といふ人をさして、六衛のつかさ合せて、二千人の人を竹取が家につかはす。家に罷りて築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々いと多かりけるに合はせて、あける隙もなく守らす。この守る人々も弓箭を帶し

塗籠—屋の内に土をあつく塗りこめて今の土藏の樣にし、器財などを入れ置く所

さが—其が

まさなし—正體なし

いますがりつる—在りつるの敬語

て居り。母屋の内には女共を番にすゑて守らす。嫗、塗籠の内に赫映姫を抱かへて居り。翁も塗籠の戸をさして戸口に居り。翁のいはく、「かばかり守る所に、天の人にもまけむや」といひて、屋の上にをる人々に曰く、「つゆも物空にかけらば、ふと射殺し給へ」。守る人々の曰く、「かばかりして守る所に、蝙蝠一つだにあらば、まづ射殺して外にさらさむと思ひ侍る」といふ。翁これを聞きて、たのもしがり居り。これを聞きて、赫映姫は、「鎖し籠めてまもり戰ふべきしたくみをしたりとも、あの國の人をえ戰はぬなり。弓箭して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの國の人來ば皆あきなむとす。相戰はむとすとも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらじ」。翁のいふやう、「御迎に來む人をば、長き爪して眼をつかみつぶさむ。さが髮をとりてかなぐり落さん。さが尻をかき出でて、こゝらのおほやけ人に見せて恥見せむ」と腹立ちをり。赫映姫いはく、「聲高になな宣ひそ。屋のうへに居る人どもの聞くに、いとまさなし。いますがりつる志どもを思ひも知らで、罷りなむずることの口惜しう侍りけり。ながき契のなかりければ、程

なく罷りぬべきなめりと思ふが、悲しく侍るなり。親たちのかへりみをいさゝかだに仕う奉らで、罷らむ道も安くもあるまじきに、月比も出で居て、今年ばかりの暇を申しつれど、更に許されぬによりてなむ、かく思ひ歎き侍る。御心をのみ惑はして去りなむ事の、悲しく堪へがたく侍るなり。かの都の人はいとけうらにて、老いもせずなむ。思ふこともなく侍るなり。さる所へ罷らむずるもいみじくも侍らず。老いおとろへ給へる様を見奉らざらむこそ戀しからめ」といひて泣く。翁「胸いたき事なし給ひそ。麗しき姿したる使にもさはらじ」とねたみ居り。かゝる程に宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり晝のあかさにも過ぎて光りたり。望月のあかさを十合せたるばかりにて、ある人の毛の孔さへ見ゆるほどなり。大空より人雲に乘りており來て、地より五尺ばかりあがりたる程に立ち連ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物におそはるゝやうにて、相戰はむ心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓箭を取りたてむとすれども、手に力もなくなりて、萎え屈りたる中に、心さかしき者、ねむじて射むとすれども、外ざ

ねむじて—こらへて

しれて—ぼけて
羅蓋—薄絹にて張れる蓋
をさなき人—愚なるものよ

まへいきければ、あれも戰はで、心地ただしれにしれて守りあへり。立てる人どもは、裝束のきよらなること物にも似ず。飛車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王と覺しき人、「家に造麿まうで來」といふに、猛く思ひつる造麿も、物に醉ひたる心地してうつぶしに伏せり。いはく、「汝、をさなき人、聊なる功德を翁つくりけるによりて、汝が助にとて片時の程とて降ししを、そこらの年比そこらの金たまひて、身をかへたるが如くなりにたり。赫映姫は、罪をつくりたまへりければ、かく賤しきおのれが許にしばしおはしつるなり。罪のかぎりはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く、あたはぬことなり。はや返し奉れ」といふ。翁答へて申す、「赫映姫を養ひ奉ること二十年あまりになりぬ。片時と宣ふに怪しくなりはべりぬ。また他處に赫映姫と申す人ぞ、おはしますらむ」といふ。「こゝに御座する赫映姫は、おもき病をし給へば、え出でおはしますまじ」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛車をよせて、「いざ赫映姫、穢き所にいかでか久しくおはせむ」といふ。立て籠めたる所の戶、卽ただあきに開きぬ。格子どもも人はなく



天の羽衣―重さ六銖、經緯なしとぞ

して開きぬ。嫗抱きてゐたる赫映姫外に出でぬ。えとどむまじければ、たださし仰ぎて泣きをり。竹取心惑ひて泣き伏せる所に寄りて、赫映姫いふ、「こゝにも心にもあらでかくまかるに、昇らむをだに見送り給へ」といへども、「何しに悲しきに見送り奉らむ。我をばいかにせよとて、棄てては昇り給ふぞ。具して率ておはせね」と泣きて伏せれば、御心まどひぬ。「文を書き置きてまからむ。戀しからむ折々、とり出でて見給へ」とて、うち泣きて書くことばは、

この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬ程まで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬること、返す〴〵本意なくこそ覺え侍れ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見すて奉りてまかる空よりも落ちぬべき心地す。

と、書きおく。天人の中にもたせたる筥あり、天の羽衣入れり。又あるは不死の藥入れり。ひとりの天人いふ、「壺なる御藥奉れ。きたなき所のもの食しめしたれば、御心地あしからむものぞ」とて、持てよりたれば、聊なめ給ひて、少しかたみとて、ぬぎおく衣

なめげなる―無禮らしき

に包まむとすれば、ある天人つゝませず。御衣を取り出でて着せむとす。その時に赫映姫、「しばし待て」といひて、「衣着つる人は心ことになるなり。物一言いひおくべき事あり」といひて文かく。天人おそしと心もとながり給ふ。赫映姫、「物知らぬことな宣ひそ」とて、いみじく靜かに、おほやけに御文奉りたまふ。あわてぬさまなり。

かく數多の人をたまひて留めさせ給へど、許さぬ迎まうで來て、とりゐて罷りぬれば、口惜しく悲しきこと、宮仕つかう奉らずなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば、心得ずおぼしめしつらめども、心づよく承らずなりにし事、なめげなるものに思し召し止められぬるなむ、心にとまり侍りぬる。

とて、

いまはとて天のはごろもきるをりぞ君をあはれと思ひいでぬる

とて、壺の藥そへて、頭中將を呼び寄せて奉らす。中將に天人とりて傳ふ。中將とりつれば、ふと天の羽衣うち着せ奉りつれば、翁をいとほし悲しと思しつることも失せぬ。

なみだ―涙、無

この衣きつる人は、物思もなくなりにければ、車にのりて百人許天人具して昇りぬ。其後翁嫗、血の涙を流して惑へどかひなし。あの書きおきし文を讀みて聞かせけれど、「何せむにか命も惜しからむ。誰が爲にか何事も益もなし」とて、薬もくはず、やがて起きもあがらず病みふせり。中將人々を引具して歸り參りて、赫映姫をえ戰ひ留めずなりぬる事をこまぐ\と奏す。薬の壺に御文そへて參らす。展げて御覽じて、いといたく哀れがらせたまひて、物もきこしめさず、御遊などもなかりけり。大臣、上達部を召して、「何の山か天に近き」と問はせ給ふに、ある人奏す、「駿河國にある山なむ、この都も近く、天も近く侍る」と奏す。是をきかせ給ひて、

あふこともなみだに浮ぶわが身には死なぬくすりも何にかはせむ

かの奉る不死の薬の壺に、御文具して御使に賜はす。勅使には、つきのいはがきはといふ人を召して、駿河國にあゝなる山の頂にもて行くべきよし仰せ給ふ。嶺にてすべきやう教へさせ給ふ。御文不死の薬の壺ならべて、火をつけてもやすべきよし仰せ給ふ。そ

のよし承りて、兵士どもあまた具して山へ登りけるよりなむ、その山をばふじの山と名づけける。その煙、いまだ雲の中へたち昇るとぞいひ傳へたる。

竹取物語　終

初冠―始めて冠を著くる儀式、元服

しのぶもぢずり―陸奥信夫郡より出る織物、縦横に紋樣

伊勢物語

〔初段〕むかし、男、初冠して、奈良の京、春日の里にしるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。おもほえず古里にいとはしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の著たりける狩衣の裾をきりて、歌をかきてやる。その男、信夫摺の狩衣をなむ著たりける。

春日野のわかむらさきの摺衣しのぶのみだれかぎり知られず

となむ、おひつきていひやりける。ついでおもしろき事ともや思ひけむ。

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑにみだれそめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやき風流をなむしける。

〔二〕昔、男ありけり。奈良の京ははなれ、この京は人の家まださだまらざりける時に、



西の京に女ありけり。その女世の人には勝れりけり。其人、かたちよりは心なむ勝りたりける。獨のみにもあらざりけらし。それをかのまめ男うち物がたらひて、歸り來ていかが思ひけむ、時は三月のついたち、雨そほふるにやりける。

おきもせず寐もせで夜をあかしては春のものとて眺めくらしつ

〔三〕昔、男ありけり。懸想じける女のもとに、鹿尾菜といふものをやるとて、

おもひあらば葎の宿にねもしなむひしきものには袖をしつつも

二條后の、まだ帝にも仕うまつり給はで、ただ人にておはしける時のことなり。

〔四〕昔、東の五條に、大后宮おはしましける。西の對にすむ人ありけり。それを本意にはあらで、志ふかかりける人、行きとぶらひけるを、正月十日ばかりの程に、ほかに隱れにけり。あり所は聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつつなむありける。又の年の正月に、梅の花盛に、去年をこひて、いきて、立ちてみ居てみ見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に、月の傾くま

なもぢり摺りたるもの
まめ―眞實
そほふる―しよぼしよぼと降る
ひしきもの―鹿尾菜、引敷物
二條后―藤原高子、淸和天皇の女御
大后宮―文德天皇の御母藤原順子
五條后


みちのく

でふせりて、去年を思ひ出でてよめる。

月やあらぬ春や昔のはるならぬ我が身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほの〳〵と明くるに、泣く〳〵歸りにけり。

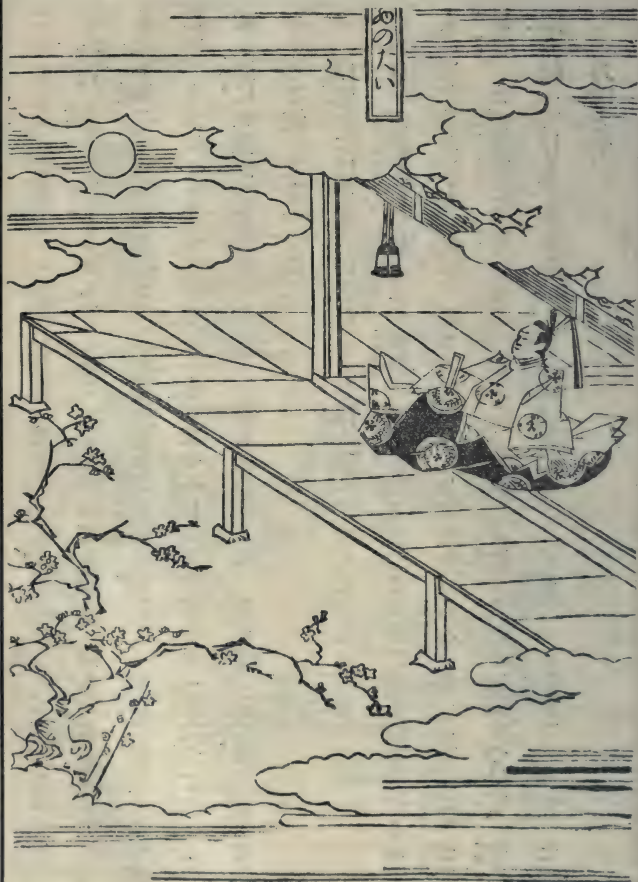
〔五〕昔、男ありけり。東の五條わたりにいと忍びていきけり。密なる所なれば、門よりもえ入らで、童のふみあけたる築地のくづれより通ひけり。人しげくもあらねど、度重りければ、あるじ聞きつけて、その通路に、夜毎に人をすゑて守らせければ、いけどもえ逢はで歸りけり。さてよめる。

人知れぬわがかよひ路の關守はよひよひごとにうちも寐ななむ

と詠めりければ、いといたう心やみけり。あるじ許してげり。二條后に忍びて參りけるを、世のきこえありければ、兄等の守らせ給ひけるとぞ。

〔六〕昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を經てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いとくらきに率てゆきけり。芥川といふ河をいきければ、草の上




のたい

神―雷

胡簶―矢を盛りて背に負ふ具

におきたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。ゆくさきおほく夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたうふりければ、あばらなる蔵に、女をば奥におし入れて、男は弓胡簶を負ひて、戸口に居り。はや夜も明けなむ、と思ひつゝ居たりけるに、鬼、はや一口にくひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴る騒にえ聞かざりけり。やう／＼夜も明けゆくに、見れば、ゐて来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

　白玉かなにぞと人のとひしとき露と答へてきえなましものを

これは、二條后の、いとこの女御の御許に仕うまつるやうにてゐ給へりけるを、容のいとめでたくおはしければ、ぬすみて負ひて出でたりけるを、御兄堀河大臣、太郎國經大納言、まだ下臈にて内へまゐり給ふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、留めてとり返し給うてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、后の、ただにおはしける時とや。


あくた川

過ぎ行く—過ぎこし、過ぎにし、とし

蜘手—蜘の手のやうに幾筋にもなりて

餉—乾飯

〔七〕昔、男ありけり。京にありわびて、東にいきけるに、伊勢、尾張のあはひの海づらを行くに、浪のいと白くたつを見て、

　いとどしく過ぎ行くかたの戀しきにうらやましくもかへる浪かな

となむ詠めりける。

〔八〕昔、男ありけり。京や住み憂かりけむ、東の方に行きて、すみ所もとむとて、友とする人、一人二人して行きけり。信濃國、淺間の嶽に、烟のたつを見て、

　信濃なる淺間のたけに立つけぶりをちこちびとの見やはとがめぬ

〔九〕昔、男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方にすむべき國もとめにとて、往きけり。もとより友とする人、一人二人していきけり。道しれる人もなくて惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋とはいへる。その澤の邊の木の陰におり居て、餉くひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見


みかはの国八はし

すゞろなる—思はぬ
つく—托す
鹽尻—海濱にて鹽を製するに砂に

てある人の曰く、「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて、旅の心を詠め」といひければ、よめる、

　唐衣きつつ馴れにしつましあればはるばる來ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、みな人、餉の上に涙落してほとびにけり。行き〳〵て駿河國にいたりぬ。宇津の山に至りて、我が入らむとする道は、いと暗う細きに、蔦楓は茂り、物心ぼそく、すゞろなるめを見る事と思ふに、修行者あひたり。「かゝる道は、いかでかいまする」といふに、見れば、みし人なりけり。京にその人の御許にとて、文かきてつく。

　駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり

富士山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。

　時しらぬ山はふじの嶺いつとてかかのこまだらに雪の降るらむ

その山は、こゝにたとへば、比叡山を二十ばかり重ねあげたらむ程して、なりは鹽尻のやうになむありける。猶行き〳〵て、武藏國と下總國とのなかに、いと大なる河あり、

潮水を浸し集めて堆を爲すもの、

ことと人—他人

あてなる人—貴人

なほ人—ただ人

たのむ—田の面

それを角田河といふ。その河の邊にむれゐて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかな、とわびあへるに、渡守、「はや舟に乘れ、日も暮れなむ」といふに、乘りて渡らむとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と脚とあかき、鴫の大さなる、水の上にあそびつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人えしらず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

〔十〕昔、男、武藏國までまどひ歩きけり。さて、その國なる女をよばひけり。父は「こと人にあはせむ」といひけるを、母なむ、あてなる人に と心づけたりける。父はなほ人にて、母なむ藤原なりける。さてなむ、あてなる人にと思ひける。このむこがねに詠みて遣せたりける。住む處なむ、入間郡みよし野の里なりける。

みよし野のたのむの雁もひたぶるに君がかたにぞよると鳴くなる



若草の―つまの枕詞
武藏野は―古今集「春日野は」

むこがね、かへし、

　我が方によると鳴くなるみよし野のたのむの雁をいつか忘れむ

となむ。人の國にても、なほかゝることなむ止まざりける。

〔十一〕昔、男、東へ行きけるに、友だちどもに道よりいひおこせける。

　忘るなよほどはくも井になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで

〔十二〕昔、男ありけり。人の女をぬすみて、武藏野へゐて行くほどに、盜人なりければ、國守にからめられにけり。女をば叢の中に隱しおきて逃げにけり。道くる人、「この野は盜人あなり」とて、火つけむとす。女わびて、

　武藏野は今日はな燒きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり

と詠みけるを聞きて、女をば取りて、ともに率ていにけり。

〔十三〕昔、武藏なる男、京なる女の許に、「聞ゆれば恥かし、聞えねば苦し」と書きて、表書に武藏鐙と書きて、おこせて後、音もせずなりにければ、京より、女、

武蔵鐙さすがにかけてたのむには訪はぬもつらし訪ふもうるさし

とあるを見てなむ、堪へがたき心地しける。

訪へばいふ訪はねばうらむ武蔵あぶみかかる折にや人は死ぬらむ

（十四）むかし、男、陸奥國にすゞろに行き至りにけり。そこなる女、京の人はめづらかにや覺えけむ、せちに思へる心なむありける。さて、かの女、

なかなかに戀に死なずはくはこにぞなるべかりける玉の緒ばかり

歌さへぞ、ひなびたりける。さすがに哀とや思ひけむ、いきて寝にけり。夜ふかく出でにければ、女、

夜も明けばきつにはめなでくた鶏のまだきに鳴きて夫をやりつる

といへるに、男、京へなむまかるとて、

栗原のあねはの松の人ならばみやこのつとにいざといはましを

といへりければ、よろこぼひて、「思ひけらし」とぞいひ居りける。

さすがぶみ●—鐙の名所武蔵のさすがにの意な義の
うるさし—煩し
死なずは—死なむよりは
くはこ—蠶兒、蠶
くた—腐
はめなで—はめなむとも
栗原の—古今集「をぐろ崎みつの小島の人ならば」


河内の家

さやうにて―人に通はせて

さがなき―よからぬ

三代の帝―仁明、文德、淸和

ごとし―如く

まかる―尼になる

（十五）　昔、みちの國にて、なでふ事なき人の妻に通ひけるに、怪しうさやうにてあるべき女ともあらず見えければ、

信夫山しのびてかよふ道もがな人のこころのおくもみるべく

女限なくめでたし、と思へど、さるさがなきえびす心を見ては、いかゞはせんは。

（十六）　むかし紀有常といふ人ありけり。三代の帝に仕うまつりて、時に遇ひけれど、後は世かはり時うつりにければ、世の常の人のごともあらず。人がらは心美くしうあてはかなることを好みて、こと人にも似ず貧しく經ても、なほ昔よかりし時の心ながら、世の常のことも知らず。年比あひなれたる妻やう〳〵床はなれて、遂に尼になりて、姉の先だちてなりたるところへ行くを、男、まことにむつまじき事こそなかりけれ、今はとて行くを、いとあはれとは思ひけれど、貧しければするわざもなかりけり。思ひわびて、懇に相語らひける友だちの許に、「かう〳〵今はとてまかるを、何事も聊なる事もえせで遣はすこと」と書きて、奥に、

夜のもの―夜具

みけし―御衣

手を折りてあひみしことをかぞふれば十といひつゝ四は經にけり

かの友だちこれを見て、いと哀と思ひて、夜のものまで送りて詠める。

としだにも十とてよつは經にけるをいくたび君をたのみきぬらむ

かくいひ遣りければ、

これやこの天の羽ごろもむべしこそ君がみけしとたてまつりけれ

よろこびに堪へで、又、

秋やくる露やまがふと思ふまであるはなみだの降るにぞありける

〔十七〕年比おとづれざりける人の、櫻の盛に見に來たりければ、あるじ、

あだなりと名にこそ立てれさくらばな年にまれなる人も待ちけり

かへし、

今日こずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや

〔十八〕昔、なま心ある女ありけり。男ちかうありけり。女、歌よむ人なりければ、心

とをを―撓む貌

御達―宮中にて宜しき女房衆

かれ―離れ

天雲のよそにのみして―古今集に、ゆきかへり空にの

みむとて、菊の花のうつろへるを折りて、男の許へやる。

くれなゐに匂ふはいづらしら雪の枝もとををに降るかとも見ゆ

男、知らずよみに詠みける。

くれなゐににほふがうへの白菊は折りける人のそでかとも見ゆ

〔十九〕昔、男、宮づかへしける女の方に、御達なりける人をあひ知りて、程もなくかれにけり。同じ所なれば、女の目には見ゆるものから、男はあるものかとも思ひたらず。女、

天雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆるものから

と詠めりければ、男、かへし、

天雲のよそにのみしてふることはわが居る山のかぜはやみなり

と詠めりけるは、また男ある人となむいひける。

〔二十〕昔、男、大和にある女を見て、よばひてあひにけり。さて程經て、宮づかへする

みして」

こと心—異心

けしう—怪しう

何處をはかり—何處をそれとあてどにする

人なりければ、歸りくる道に、三月ばかりに、かへでの紅葉のいとおもしろきを折りて、女のもとに道よりいひやる、

きみがため手折れる枝は春ながらかくこそ秋のもみぢしにけれ

とてやりたりければ、返事は、京につきてなむもて來たりける。

いつの間にうつろふ色のつきぬらむ君がさとには春なかるらし

〔廿一〕昔、男女、いとかしこく思ひかはして、こと心なかりけり。さるを、いかなる事かありけむ、いさゝかなる事につけて、世の中をうしと思ひて、出でていなむと思ひて、かゝる歌をなむよみて、ものに書きつけける。

いでていなば心輕しといひやせむ世のありさまを人は知らねば

とよみ置きて出でていにけり。この女かく書きおきたるを見て、けしう心おくべきことも覺えぬを、何によりてかかゝらむ、といといたう泣きて、いづ方に求め行かむ、と門に出でて、とみかうみ見けれど、何處をはかりとも覺えざりければ、歸り入りて、

思ふかひなき世なりけりとし月をあだにちぎりて我やすまひし

といひてながめ居り。

人はいさ思ひやすらむ玉かづらおもかげにのみいとど見えつつ

この女いと久しくありて、念じわびてにやありけむ、いひおこせたる。

今はとてわするる草のたねをだに人のこころにまかせずもがな

かへし。

忘草ううとだに聞くものならばおもひけりとは知りもしなまし

又々ありしよりけにいひかはして、男、

忘るらむとおもふ心のうたがひにありしよりけにものぞ悲しき

かへし、

中空に立ちゐる雲のあともなく身のはかなくもなりにけるかな

とはいひけれど、おのが世々になりにければ、うとくなりにけり。

玉かづら―女の顔にかくるもの

忘草―萱草の異名、文選養生論に、萱草忘憂

けに―まさりて

あひ見ては—あひは見で（新釋）

〔廿二〕　昔、はかなくて絶えにける中、なほや忘れざりけむ、女の許より、

うきながら人をばえしも忘れねばかつうらみつつなほぞ戀しき

といへりければ、「さればよ」といひて、男、

あひ見ては心ひとつをかはしまの水の流れて絶えじとぞおもふ

とはいひけれど、その夜いにけり。いにしへゆくさきの事どもなどいひて、

秋の夜のちよを一夜になずらへて八千夜しねばや飽く時のあらむ

かへし、

秋の夜の千夜をひと夜になせりともことば殘りて鳥や鳴きなむ

いにしへよりも、あはれにてなむ通ひける。

〔廿三〕　昔、田舍わたらひしける人の子ども、井のもとに出でて遊びけるを、成人になりにければ、男も女も、はぢかはしてありけれど、男は、この女をこそ得めと思ふ、女は、この男をと思ひつゝ、親のあはすれども聞かでなむありける。さてこの隣の男の許



井筒—丸く筒形に掘りたる井
まろ—自稱の詞
前栽—庭前の植込
けさう—化粧、顔づくり
しら波—盜賊の意を懸く

よりかくなむ。

筒井筒ゐづつにかけしまろがたけすぎにけらしな妹見ざるまに

女、かへし、

くらべこしふりわけがみも肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべき

などいひ〳〵て、遂に本意の如くあひにけり。さて年比ふる程に、女、親なく、たよりなくなるまゝに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、河内國高安郡にいきかよふ所いで來にけり。さりけれど、このもとの女、惡しと思へる氣色もなくて、出しやりければ、男、こと心ありて、かゝるにやあらむと思ひ疑ひて、前栽の中にかくれ居て、河内へいぬる顔にて見れば、この女いとようけさうじて、うち眺めて、

かぜ吹けばおきつしら波たつた山よはにや君がひとり越ゆらむ

とよみけるを聞きて、かぎりなく悲し、と思ひて、河内へもいかずなりにけり。まれまれかの高安に來て見れば、はじめこそ心にくゝもつくりけれ、今はうちとけて、手づか

飯匙―杓子

ら飯匙をとりて、笥子の器にもりけるを見て、心うがりて行かずなりにけり。さりければ、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり見つつを居らむ生駒山くもなかくしそ雨は降るとも

といひて見いだすに、「からうじて大和人来む」といへり。よろこびて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君こむといひし夜毎に過ぎぬれば頼まぬものの戀ひつつぞふる

といひけれど、男すまずなりにけり。

〔廿四〕昔、男女、片田舍にすみけり。男、宮づかへしにとて、別惜みて行きけるまゝに、三年來ざりければ、待ちわびたりけるに、又いと懇にいひける人に、「今宵はあはむ」と契りたりけるに、この男きたりけり。「この戸あけ給へ」と叩きけれど、あけで、歌をなむよみて出したりける。

あらたまの年の三年を待ちわびてただ今宵こそにひまくらすれ


大内

あづさ弓まゆ—梓・檀、槻にて作れる弓。かく弓に品々ある如く我も種々の苦勞を經てもなほ汝を愛せし如くに新夫を愛せよ

および—指

いたづらになる—死ぬ

といひ出したりければ、

　あづさ弓ま弓つき弓としを經てわがせしがごとうるはしみせよ

といひて、いなむとしければ、女、

　あづさ弓ひけどひかねど昔よりこころは君によりにしものを

といひけれど、男かへりにけり。女いと悲しくて、後に立ちて追ひゆけど、え追ひつかで、清水のある所にふしにけり。そこなる石に、およびの血して書きつけける。

　あひ思はでかれぬる人をとどめかね我が身は今ぞ消えはてぬめる

と書きて、そこにいたづらになりにけり。

〔廿五〕昔、男ありけり。逢はじともいはざりける女の、さすがなりけるが許にいひやりける。

　秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はでぬる夜ぞひぢまさりける

色ごのみなる女、かへし、

袖に湊の―涙の多き喩

貫簀―水の飛び散らぬやうに盥の上にかけ置く簀

かたみ―竹籠、難きの意を懸く

花の賀―花の頃行ふ賀

みるめなき我が身を浦と知らねばやかれなで蜑の足たゆく來る

〔廿六〕 昔、男、五條わたりなりける女をえ得ずなりにける事、とわびたりける人の返事に、

おもほえず袖に湊のさわぐかなもろこしぶねの寄りしばかりに

〔廿七〕 昔、男、女の許に一夜いきて、又もいかずなりにければ、女の手洗ふ所に、貫簀をうちやりて、盥の影に見えけるを、みづから、

我ばかり物思ふ人はまたもあらじと思へば水の下にもありけり

と詠むを、かの來ざりける男たち聞きて、

水口にわれや見ゆらむかはづさへ水のしたにてもろごゑになく

〔廿八〕 むかし、色ごのみなりける女、出でていにければ、

などてかくあふごかたみになりにけむ水漏らさじと結びしものを

〔廿九〕 昔、春宮の女御の御方の花の賀に、召しあげられたりけるに、

玉の緒ばかり—暫時

うけへば—咒詛すれば

花にあかぬ歎はいつもせしかども今日のこよひに似る時はなし

〔三十〕むかし、男、はつかなりける女のもとに、

逢ふことは玉の緒ばかりおもほえてつらき心のながく見ゆらむ

〔卅一〕昔、男、宮の中にて、ある御達の局の前をわたりけるに、何の仇にか思ひけむ、「よしや草葉よならむさがみむ」といふ。男、

罪もなき人をうけへば忘れ草おのがうへにぞ生ふといふなる

といふを、ねたむ女もありけり。

〔卅二〕むかし、物いひける女に、年比ありて、

いにしへのしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな

といへりけれど、何とも思はずやありけむ。

〔卅三〕むかし、男、津國菟原郡に通ひける女、このたびいきては又は來じ、と思へる氣色なれば、男、

こもり江—蘆などにおほひ隱されたる江

沫緒に云々—結び方の名、結び固めたる仲なれば中絶すとも後に又逢はんと也

うしろめたく—不安心

　蘆邊よりみち來るしほのいやましにきみに心をおもひますかな

かへし、

　こもり江に思ふこころをいかでかは舟さす棹のさして知るべき

田舍人のことばにては、よしやあしや。

〔卅四〕むかし、男、つれなかりける人の許に、

　いへばえにいはねば胸の騷がれてこころひとつに歎くころかな

おもなくていへるなるべし。

〔卅五〕むかし、心にもあらで、絶えたる人の許に、

　玉の緒を沫緒によりてむすべれば絶えての後も逢はむとぞ思ふ

〔卅六〕むかし、男、忘れぬるなめりと問言しける女の許に、

　谷せばみ峯まではへるたまかづら絶えむと人にわが思はなくに

〔卅七〕むかし、男、色好なりける女に逢へりけり。うしろめたくや思ひけむ、

われならで下紐とくなあさがほの夕かげ待たぬ花にはありとも

かへし

ふたりして結びし紐をひとりしてあひ見るまでは解かじとぞ思ふ

〔卅八〕むかし、紀有常がり行きたるに、ありきておそく来けるに、詠みてやりける、

君により思ひならひぬ世のなかのひとはこれをや戀といふらむ

かへし

ならはねば世の人ごとに何をかも戀とはいふと問ひしわれしも

〔卅九〕昔、西院の帝と申すみかどおはしましけり。その帝のみこ、崇子と申すいまそかりけり。その皇子うせ給ひて、御葬の夜、その宮の隣なりける男、御葬見むとて、女車にあひ乗りて出でたりけり。いと久しうゐていで奉らず、うちなきて止みぬべかりける間に、天の下の色好、源　至といふ人、これも物見るに、この車を女車と見て、寄り來てとかくなまめく間に、かの至、螢をとりて車に入れたりけるを、車なりける人、

西院の帝ー淳和天皇

べみ―べし
なほ―平凡
さかしら―賢ぶる
すまふ―爭ひ拒む
出でていぬ―古本には此の次に女の歌として「いづこまで送りはしつと人問はばあかぬ別の涙川まで」の一首

この螢のともす火にや見ゆらむ、ともし消ちなむずるとて、乘れる男のよめる。

　出でていなばかぎりなるべみ燈けち年經ぬるかとなく聲を聞け

かの至、かへし、

　いとあはれなくぞきこゆる燈けち消ゆるものとも我は知らずな

天の下の色好の歌にては、なほぞありける。至は順がおほぢなり。親王の本意なし。

〔四十〕 昔、若き男、けしうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする親ありて、思ひもぞつくとて、この女を外へ逐ひやらむとす。さこそいへ、まだ逐ひやらず。人の子なれば、まだ心いきほひなかりければ止むる勢なし。女もいやしければ、すまふ力なし。さる間に思はいやまさりにまさる。俄に親この女を逐ひうつ。男、血の涙を流せども、止むるよしなし。ゐて出でていぬ。男泣く泣くよめる。

　いでていなば誰かわかれのかたからむありしにまさる今日は悲しも

とよみて絶え入りにけり。親あわてにけり。なほざりに思ひてこそいひしか。いとかくし

あせ
いでていな
ば—眼前道
集っいとび
てば
なほざりに
—一通りに
袍を洗ひて
—袍は朝服
の上衣、元
日の用意に
なるべし
緑衫—六位
の着る緑色
の服
武藏野の心
—古今集に
「紫の一本
ゆゑに武藏
野の草は皆

らあらじと思ふに、眞實に絶え入りにければ、惑ひて願など立てけり。今日の入相ばかりに絶え入りて、又の日の戌の時ばかりになむ、からうじて生出でたりける。昔の若人は、さるすける物思をなむしける。今の翁まさに死なむや。

〔四十一〕昔、女はらから二人ありけり。一人は賤しき男の貧しき、一人はあてなる男持たりけり。賤しき男もたる、十二月の晦日に、袍を洗ひて、手づから張りけり。志はいたしけれど、さる賤しき業も習はざりければ、袍の肩を張りやりてけり。せむ方もなくてたゞ泣きに泣きけり。これを、かのあてなる男聞きて、いと心苦しかりければ、いと清らなる緑衫の袍を、見いでてやるとて、

　むらさきの色濃きときはめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

武藏野の心なるべし。

〔四十二〕昔、男、色好としる〳〵女をあひ云へりけり。されど惜く將あらざりけり。屢いきけれど猶いと後めたく、さりとて、いかではた得あるまじかりけり。猶はた、

がらあはれとぞ見る」とある歌の意

けしきをとりて—疑へる様子を悟りて

しでの田長—郭公の異名、賤の田長の義

馬のはなむけ—餞別

えあらざりける中なりければ、二日三日ばかりさはる事ありて、え行かでかくなむ。

出でて來しあとだにいまだかはらじを誰が通路と今はなるらむ

物の疑はしさに詠めるなりけり。

〔四十三〕昔、賀陽親王と申す皇子おはしましけり。その親王女を思しめして、いとかしこう惠みつかう給ひけるを、人なまめきてありけるを、我のみと思ひけるを、また人聞きつけて、文やる。郭公のかたを書きて、

ほととぎす汝がなく里のあまたあれば猶疎まれぬ思ふものから

といへり。この女、けしきをとりて、

名のみたつしでの田長は今朝ぞなく庵あまたにうとまれぬれば

時は五月になむありける。男、かへし、

いほり多きしでの田長はなほたのむわが住む里に聲し絶えずは

〔四十四〕昔、縣へゆく人に、馬のはなむけせむとて、呼びて、うとき人にしあらざりけれ

家刀自—一家の主婦
し—宴、饗

ば、家刀自に盃さゝせて、女の装束被けけとす。主の男、歌よみて裳の腰に結ひつけさす。

いでて行く君がためにと脱ぎつれば我さへもなくなりぬべき哉

この歌はあるが中に面白ければ、心留めてよます、腹に味ひて、

（四十五）　昔、男ありけり。人のむすめのかしづく、いかでこの男にものいはむ、と思ひけり。うち出でむこと難くやありけむ、物病になりて死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」といひけるを、親聞きつけて、泣く〳〵告げたりければ、惑ひ来りけれど、死にければ、つれ〴〵と籠り居りけり。時は六月晦日、いと暑きころほひに、宵はあそび居りて、夜ふけてやゝ涼しき風吹きけり。螢たかく飛びあがる。この男見ふせりて、

ゆくほたる雲のうへまでいぬべくは秋風ふくとかりに告けこせ

暮れがたき夏の日くらしながむればその事となくものぞ悲しき

（四十六）　昔、男、いとうるはしき友ありけり。片時去らずあひ思ひけるを、人の國へいきけるを、いとあはれと思ひて別れにけり。月日經ておこせたる文に、

めかるれば—遇はねば

大幣—祓する時陰陽師の持つ串にさしたる幣にて、祓終れば之を人々ひき寄せて撫づるなり

あさましう對面せで、月日の經にけること、忘れやし給ひにけむといたく思ひわびてなむ侍る。世の中の人の心は、めかるれば忘れぬべきものにこそあゝめれ。

といへりければ、よみてやる。

めかるともおもほえなくにわすらるる時しなければ面影にたつ

〔四十七〕昔、男、ねんごろにいかでと思ふ女ありけり。されど、この男をあだなりと聞きて、つれなさのみ増りつゝいへる。

大幣のひく手あまたになりぬれば思へどえこそたのまざりけれ

かへし、男、

大ぬさと名にこそ立てれ流れても遂による瀬はありてふものを

〔四十八〕昔、男ありけり、馬のはなむけせむとて、人を待ちけるに、來ざりければ、

今ぞ知るくるしきものと人待たむ里をばかれず訪ふべかりけり

〔四十九〕むかし、男、妹のいとをかしげなりけるを見居りて、

とりの子ー鶏卵

うら若みねよげに見ゆる若草をひとのむすばむことをしぞ思ふ

ときこえけり。かへし、

初草のなどめづらしきことの葉ぞうらなくものを思ひけるかな

〔九十〕むかし、男ありけり。怨むる人をうらみて、

とりの子を十づつとをはかさぬともおもはぬ人を思ふものかは

といへりければ、

朝露は消えのこりてもありぬべし誰かこの世をたのみはつべき

また、男、

吹く風に去年のさくらは散らずともあな頼みがた人のこころは

また、女、かへし、

行く水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり

また、男、



ゆく水とすぐるよはひと散る花といづれ待ててふことをきくらむ

あだくらべ、かたみにしける男女の、忍びありきしける事をいふなるべし。

〔五十一〕昔、男、人の前栽に菊うゑけるに、

植ゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

〔五十二〕昔、男ありけり。人のもとより飾粽をおこせたりける返事に、

あやめかり君は沼にぞ惑ひけるわれは野に出でてかるぞわびしき

とて、　をなむやりける。

〔五十三〕昔、男、逢ひがたき女に逢ひて、物語などする程に、鳥の鳴きければ、

いかでかはとりの鳴くらん人しれず思ふこころはまだ夜ぶかきに

〔五十四〕むかし、男、つれなかりける女にいひやりける。

行きやらぬゆめ路をたのむたもとには天つそらなる露やおくらむ

〔五十五〕昔、男、思ひかけたる女のえ得まじうなりての世に、

かたみに—互に

飾粽—粽は五月五日の節物、それを五色の糸にて巻き飾りたるもの

たのむ—又「たどる」とも、此歌後

撰集には「夢路にまどふ袂には天つ空なる露ぞおきける」とあり

われから―海草に住む虫の名、我からの意を兼ぬ

すだく―多く集る

思はずはありもすらめど言の葉のをりふしごとに頼まるるかな

〔五十六〕 むかし、男、臥して思ひ起きて思ひ、思ひあまりて、

わが袖は草のいほりにあらねども暮るれば露のやどりなりけり

〔五十七〕 昔、男、人しれぬ物思ひけり。つれなき人の許に、

戀ひわびぬ蜑の刈る藻に宿るてふわれから身をも碎きつるかな

〔五十八〕 昔、心つきて色好なる男、長岡といふ所に家造りて居りけり。そこの隣なりける宮腹に、事もなき女共の田舍なりければ、田刈らむとて、此男のありけるを見て、「いみじのすき者の所行や」とて、集りて入り來ければ、此男、にげて奥に隱れにければ、女、

荒れにけりあはれいく世の宿なれや住みけむ人の音づれもせぬ

といひて、この宮に集り來居てありければ、この男、

葎おひて荒れたるやどのうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり

となむいひ出したりける。この女ども「穗ひろはむ」といひければ、

身をかくすー俊頼集「爪木こる」
とわたるー河門を渡る
まめー眞實
祇承の官人ー勅使を馳走する役人

うちわびて落穂ひろふときかませば我も田面に行かましものを

（五十九）昔、男、京をいかゞ思ひけむ、東山にすまむと思ひ入りて、

住みわびぬ今はかぎりと山ざとに身をかくすべき宿もとめてむ

かくて、ものいたく病みて死に入りたりければ、面に水そゝぎなどして、息出でて、

わがうへに露ぞおくなる天の河とわたるふねの櫂のしづくか

となむいひていき出でたりける。

（六十）昔、男ありけり。宮仕いそがはしく、心もまめならざりける程の家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の國へいにけり。この男、宇佐の使にていきけるに、ある國の祇承の官人の妻にてなむあると聞きて、「女あるじにかはらけとらせよ、さらずは飲まじ」といひければ、かはらけ取りて出したりけるに、肴なりける橘をとりて、

さつき待つ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする

といひけるにぞ、思ひ出でて、尼になりて、山に入りてぞありける。

そめ河—筑前の名所染河
たはれ嶋—肥後の名所風流島
濡衣—無き名を負ふこと
こけるからとも—櫻花をこき散せし枝とも

〔六十一〕 昔、男、筑紫までいきたりけるに、「これは色好むといふすきもの」と簾の中なる人のいひけるを聞きて、

　そめ河をわたらむ人のいかでかは色になるてふことのなからむ

女、かへし、

　名にしおはばあだにぞあるべきたはれ嶋波の濡衣きるといふなり

〔六十二〕 昔、男の年ごろ音づれざりける女、心かしこくやあらざりけむ、はかなき人のことにつきて、人の國なりける人につかはれて、もと見し人の前にいで來て、物くはせなゝどしけり。「夜さりこのありつる人給へ」と主人にいひければ、遣せたりけり。男「我をば知らずや」とて、

　いにしへのにほひはいづら櫻花こけるからともなりにけるかな

といふを、いとはづかしと思ひて、答もせで居たるを、「などいらへもせぬ」といへば、「涙のこぼるゝに目も見えず、ものもいはれず」といふ。また男、

これやこの我にあふ身をのがれつつ年月ふれどまさりがほなき

といひて、衣脱ぎて取らせけれど、棄てて逃げにけり。いづちいぬらむとも知らず。

（六十三）昔、世ごころづける女、いかでなさけあらむ男にあひ得てしがなと思へど、いひ出でむもたよりなさに、まことならぬ夢がたりをす。子みたりを呼びて語りけり。二人の子は、情なくいらへて止みぬ。三郎なりける子なむ、「よき御男ぞいで來む」とあはするに、この女けしきいとよし。こと人はいと情なし。いかでこの在五中將にあはせてしがな、と思ふ心あり。狩しありきけるにいき逢ひて、道にて馬の口をとりて、「かうかうなむ思ふ」といひければ、あはれがりていきて寝にけり。さて後男見えざりければ、女男の家にいきてかいまみけるを、男ほのかに見て、

百年に一年たらぬつくも髪われを戀ふらしおもかげに見ゆ

とて、出で立つけしきを見て、むばら唐橘にかゝりて、家に來てうち臥せり。男、かの女のせしやうに、忍びて立てりて見れば、女なげきて寝とて、

つくも髪―つくもは江浦草、藺の類、老女の髪の短く亂れたるに喩ふ。

さむしろに衣かたしきこよひもやこひしき人に逢はでのみ寝む

とよみけるを、男、哀と思ひて、其夜は寝にけり。世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、此人は、思ふをも思はぬをも、けぢめ見せぬ心なむありける。

〔六十四〕 昔、男、女、密に語ふわざもせざりければ、いづくなりけむ怪しさに詠める。

吹く風にわが身をなさば玉すだれ隙もとめつつ入るべきものを

かへし、

とりとめぬ風にはありとも玉簾誰がゆるさばかひまもとむべき

〔六十五〕 昔、公おぼしてつかう給ふ女の、色許されたるありけり。大御息所とていますかりけるいとこなりけり。殿上に侍ひける在原なりける男の、まだいと若かりけるを、この女あひ知りたりけり。男、女方ゆるされたりければ、女のある所にきて向ひ居りければ、女、「いとかたはなり。身も亡びなむ、かくなせそ」といひければ、

、思ふには忍ぶることぞまけにける逢ふにしかへばさもあらばあれ

さむしろ―狭き席
けじめ―差別
公―清和天皇
おぼして―寵愛して
色許されたる―禁制の色の衣を着ることを特許せられたる

曹子―官人女官などの川區域

主殿寮―宮庭の灑掃を掌る者

巫―禰宜

御手洗川―神社の傍を流るゝ川

といひて、曹子におり給へば、例のこの御曹子には、人の見るをも知らでのぼり居ければ、この女思ひわびて里へゆく。されば何のよき事と思ひて、いき通ひければ、皆人聞きて笑ひけり。つとめて主殿寮の見るに、沓はとりて奥に投げ入れてのぼりぬ。斯くかたはにしつゝ有りわたるに、身も徒になりぬべければ、遂に亡びぬべしとて、「此男いかにせむ、我がかゝる心やめ給へ」と佛神にも申しけれど、いや増りにのみ覺えつゝ、猶わりなく戀しうのみ覺えければ、陰陽師、巫よびて、戀せじといふ祓の具してなむいきける。祓へけるまゝに、いとど悲しきこと數まさりて、ありしよりけに戀しく覺えければ、

　戀せじと御手洗川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな

といひてなむ往にける。

この帝は、顏貌よくおはしまして、佛の御名を御心に入れて、御聲はいと尊くてまをし給ふを聞きて、女はいたう泣きけり。かゝる君に仕うまつらで、宿世つたなく悲しきこと、この男にほだされて、とてなむ泣きける。かゝる程に帝聞し召しつけて、この男


京の町

しなりー折檻し

知る所ー領地

をば流し遣してければ、この女のいとこの御息所、女をばまかでさせて、藏に籠めてしなり給うければ、藏にこもりて泣く。

海士のかる藻にすむ虫のわれからと音をこそなかめ世をば恨みじ

と泣きをれば、この男、人の國より夜ごとに來つゝ、笛をいとおもしろく吹きて、聲はをかしうてぞ哀にうたひける。かゝれば、この女藏に籠りながら、それにぞあなるとは聞けど、あひ見るべきにもあらでなむありける。

さりともと思ふらむこそ悲しけれあるにもあらぬ身を知らずして

と思ひ居り。男は女しあはねば、かくし歩きつゝ、人の國にありきて斯くうたふ。

いたづらに行きては來ぬるもの故に見まくほしさに誘はれつつ

水尾の御時なるべし。大息所も染殿の后なり。五條后とも。

（六十六）昔、男、津の國に知る所ありけるに、兄弟友達などひきゐて、難波のかたにいきけり。渚を見れば、舟どものあるを見て、

難波津をけふこそみつの浦ごとにこれや此世をうみわたる舟

これをあはれがりて、人々かへりにけり。

〔六十七〕むかし、男、逍遙しに、思ふどちかい連ねて、和泉國へ二月ばかりにいきけり。河内國生駒山を見れば、曇りみ晴れみ、たちゐる雲やまず、朝より曇りて、晝晴れたり。雪いと白う木の末に降りたり。それを見て、かの行く人の中に、たゞ一人よみける。

昨日けふ雲のたちまひかくろふは花のはやしを憂しとなりけり

〔六十八〕昔、男、和泉國へいきけり。住吉郡すみよしの里住吉の濱を行くに、いとおもしろければ、おりゐつゝ行く。ある人、「住吉の濱を詠め」といふに、

かり鳴きて菊のはなさく秋はあれど春のうみべにすみよしの濱

とよめりければ、みな人々よまずなりにけり。

〔六十九〕昔、男ありけり。その男、伊勢國に狩の使にいきけるに、かの伊勢の齋宮なりける人の親、「常の使よりは、この人能くいたはれ」といひやれりければ、親のこと

みつ—三津、見つ
うみ—倦み、海
かくろふ—隱す
おりゐつゝ—馬より下りて
狩の使—勅使を立てて鷹もて鳥を取らせらるる使

われて—強ひて
使實—使の中の主たる人

なりければ、いと懇にいたはりけり。朝には狩にいだし立てゝやり、夕さりはかへり
つゝそこに來させけり。かくて懇にいたつきけり。二日といふ夜男、われて逢はむといふ。
女も、はた逢はじとも思へらず。されどいと人目繁ければ、え逢はず。使實とある人な
れば、遠くも宿さず。女の閨も近くありければ、女、人をしづめて、子ひとつばかりに
男の許に來りけり。男、はた寢られざりければ、外の方を見出して臥せるに、月の朧な
るに、小さき童をさきに立てゝ人立てり。男いと嬉しくて、我が寢る所にゐて入りて、子
ひとつより丑三つまであるに、まだ何事も語はぬに歸りにけり。男いと悲しくて寢ずな
りにけり。つとめて、いぶかしけれど、我が人をやるべきにしもあらねば、いと心もと
なくて待ち居れば、明け離れてしばしある程に、女の許よりことばは無くて、

君や來し我や行きけむおもほえず夢かうつつか寢てかさめてか

男、いといたう泣きて詠める。

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとはこよひさだめよ

齋宮のかみかけたる—國守にて齋宮寮の頭を兼ねたる
かち—徒歩
續松—たいまつ

と詠みてやりて、狩に出でぬ。野にありけど、心はそらにて、今宵だに人しづめて、いと疾く逢はむと思ふに、國守、齋宮のかみかけたる、狩の使ありと聞きて、夜ひと夜酒飲しければ、もはら逢ひごともえせで、明けば尾張國へ立ちなむとすれば、男も人知れず血の涙を流せどえあはず。夜やう〱明けなむとする程に、女がたより出す盃のさらに、歌を書きて出したり。とりて見れば、

　かち人のわたれどぬれぬえにしあれば

と書きて末はなし。その盃のさらに、續松の炭して歌の末を書きつぐ。

　またあふさかの關は越えなむ

とて、明くれば尾張國へ越えにけり。

齋宮は水尾の御時、文德天皇の御女。これたかの皇子のいもうと。

〔七十〕昔、男、狩の使より歸り來けるに、大淀のわたりに宿りて、齋宮のわらはべにいひかけける。

いがき—垣、神社の周圍の垣
いさむ—禁ず
うらみ—浦見、怨み
月のうちの桂—和名抄

みるめかるかたやいづこぞ棹さしてわれに教へよあまのつり舟

〔七十一〕昔、男、伊勢の齋宮に、内の御使にて參れりければ、かの宮にすきごといひける女、私事にて、

ちはやぶる神のいがきも越えぬべし大宮人の見まくほしさに

男、

戀しくは來ても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに

〔七十二〕昔、男、伊勢國なりける女に、又え逢はで、隣の國へいくとて、いみじう怨みければ、女、

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪かな

〔七十三〕昔、そこにはありと聞けど、消息をだにいふべくもあらぬ女の、あたりをありきて思ひける。

目には見て手にはとられぬ月のうちの桂のごとき君にぞありける

に兼名花を引きて曰く、「月中有河河上有桂高五百丈」

世に―世にすぐれての意

〔七十四〕むかし、男、女をいたう怨みて、

岩根ふみかさなる山にあらねども逢はぬ日おほく戀ひわたる哉

〔七十五〕昔、男、「伊勢國に率ていきて逢はむ」といひければ、女、

大淀の濱に生ふてふみるからにこころはなぎぬかたらはねども

といひて、ましてつれなかりければ、男、

袖ぬれて蜑の刈り乾すわたつ海のみるを逢ふにて已まむとやする

女、

岩間より生ふるみるめしつねなくは汐干汐滿ちかひもありなむ

また、男、

なみだにぞ濡れつつしぼる世の人のつらきこころは袖のしづくか

世に逢ふことかたき女になむ。

〔七十六〕昔二條后の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに、近

御前にさぶらひける翁、人々の祿たまはるついでに、御車よりたまはりて、詠みて奉りける。

　おほはらやをしほの松も今日こそは神代のこともおもひ出づらめ

とて、心にも悲しとや思ひけむ、いかが思ひけむ知らずかし。

〔七十七〕昔、田村の帝と申すみかどおはしましけり。その時の女御、多賀幾子と申すみまぞかりけり。それ亡せ給ひて、安祥寺にて、みわざしけり。人々捧物奉りけり。奉りあつめたるもの千捧ばかりあり。そこばくの捧物を木の枝につけて、堂の前に立てたれば、山もさらに堂の前に動き出でたるやうになむ見えける。それを、右大將にいまぞかりける藤原常行と申すいまぞかりて、講の終るほどに、歌よむ人々を召しあつめて、今日のみわざを題にて、春の心ばへある歌奉らせ給ふ。右馬頭なりける翁、目はたがひながら詠みける。

　山のみな移りて今日に逢ふことは春のわかれをとふとなるべし

氏神—大原野神社、藤原氏の祇神天兒屋命を祀れり

田村の帝—文德天皇

右馬頭—業平のこと

目はたがひ—捧物な山と見まがへて

と詠みたりけるを、今見ればよくもあらざりけり。そのかみはこれや勝りけむ、あはれがりけり。

〔七十八〕 昔、多賀幾子と申す女御おはしましけり。亡せ給ひて、七々日の御わざ安祥寺にてしけり。右大將藤原常行といふ人いまぞかりけり。その御わざにまうで給ひて、かへさに、山科の禪師の親王おはします、その山科の宮に、瀧落し、水走らせなどして、おもしろく造られたるにまうで給うて、「年比よそには仕う奉れど、近くはいまだ仕うまつらず。今宵はこゝに侍はむ」と申し給ふ。親王喜び給うて、夜のおましのまうけせさせたまふ。さるに、かの大將、いでてたばかり給ふやう、「宮仕のはじめに、たゞなほやはあるべき。三條の大行幸せし時、紀國の千里の濱にありけるいとおもしろき石奉れりき。大行幸の後奉れりしかば、或人の御曹子の前の溝にすゑたりしを、「島このみ給ふ君なり。この石を奉らむ」と宣ひて、御隨身舍人してとりに遣す。いくばくもなくて持て來ぬ。この石、聞きしよりは見るは勝れり。これをたゞに奉らばすゞろなるべしとて、

かへさに―歸路に

おまし―御座

なほ―何もせず默して

御隨身―近衞の舍人の弓箭を執り帶劔して供する者

舎人—近侍雜使の官

氏—在原氏

千尋ある竹—崑崙山の北に生ふといふ、親王を竹に比する事は梁の孝王の故事に由る

人々に歌よませ給ふ。右馬頭なりける人のをさむ、青き苔をきざみて、蒔繪のかたに、この歌をつけて奉りける。

あかねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのなければ

となむよめりける。

（七十九）昔、氏のなかに親王うまれ給へりけり。御産屋に人々歌よみけり。御祖父がたなりける翁の詠める、

わが門に千ひろある竹を植ゑつれば夏冬たれか隠れざるべき

これは、貞數親王、時の人、中將の子となむいひける。兄の中納言行平の女の腹なり。

（八十）昔、おとろへたる家に、藤の花植ゑたる人ありけり。三月の晦日に、その日雨そほふるに、人の許へ折りて奉らすとて詠める、

ぬれつつぞしひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば

（八十一）昔、左大臣いまぞかりけり。賀茂川の邊六條わたりに、家をいとおも



かたゐ―乞食、卑下していふ

惟喬親王―文德天皇の第一皇子、母は紀名虎の女

しろく盛りて住み給ひけり。十月の晦日がた、菊の花うつろひさかりなるに、紅葉の千種に見ゆる折、親王達おはしまさせて、夜ひと夜酒飲しあそびて、夜あけもて行くほどに、この殿のおもしろきを褒むる歌よむ。そこにありけるかたゐ翁、板敷の下にはひありきて、人にみな詠ませ果て詠める。

　鹽竈にいつか來にけむあさなぎに釣する舟はここによらなむ

となむ詠みける。陸奥國にいきたりけるに、怪しくおもしろき所々おほかりけり。わがみかど六十餘國の中に、鹽竈といふ所に似たる所なかりけり。さればなむ、かの翁、更にこゝをめでて、鹽竈にいつか來にけむ、とはよめりける。

（八十二）昔、惟喬親王と申すみこおはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ所に宮ありけり。年ごとの櫻の花盛には、その宮へなむおはしましける。その時右馬頭なりける人を、常に率ておはしましけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩は懇にもせで酒を飲みつゝ、やまと歌にかゝれりけり。いま狩する交野の渚



上中下―上﨟中﨟下﨟

おほみきまゐる―大御酒を獻す

の家、その院の櫻ことにおもしろし。その木の下におり居て、枝を折りてかざしにさして、上中下みな歌よみけり。馬頭なりける人の詠める、

世のなかに絶えてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし

となむ詠みたりける。また、人の歌、

散ればこそいとど櫻はめでたけれうき世になにか久しかるべき

とて、その木の下は立ちてかへるに、日暮になりぬ。御供なる人、酒をもたせて野より出できたり。この酒を飲みてむとて、よき所をもとめ行くに、天河といふ所に至りぬ。親王に馬頭おほみきまゐる。親王の宣ひける、「交野を狩りて天河の邊に至るを題にて、歌よみて盃させ」と宣ひければ、かの馬頭よみて奉りける。

狩りくらし棚機津女に宿からむあまの河原にわれは來にけり

親王この歌をかへすがへす誦し給うて、かへし得し給はず。紀有常御供に仕うまつれり。それがかへし、

あかなくに―飽かぬに
まだき―時より早く
おしなべて―一般に
入らじを―入らじ
一本かくれじ
祿―御下賜品
大殿籠らで―御寢ならで

ひととせにひとたび來ます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ

かへりて宮に入らせ給ひぬ。夜ふくるまで酒飲み物語して、あるじの親王、醉ひて入り給ひなむとす。十一日の月も隱れなむとすれば、かの馬頭のよめる。

あかなくにまだきも月の隱るるか山のはにげて入れずもあらなむ

親王に代り奉りて、紀有常、

おしなべて峯もたひらになりななむ山の端なくは月も入らじを

〔八十三〕昔、水無瀨にかよひ給ひし惟喬親王、例の狩しにおはします。供に馬頭なる翁つかう奉れり。日ごろ經て宮にかへり給うげり。御送して疾くいなむと思ふに、大御酒たまひ祿たまはむとて遣さざりけり。この馬頭心もとながりて、

まくらとて草ひき結ぶこともせじ秋の夜とだにたのまれなくに

と詠みける。時は三月の晦日なりけり。親王大殿籠らであかし給うてげり。かくしつゝまうで仕うまつりけるを、思の外に御髮おろし給うてげり。正月にをがみ奉らむとて、

小野—山城愛宕郡にあり

宮—伊登内親王、業平の母

いとかなしうし—勝れて愛し

とみ—頓の字音、急の意

小野にまうでたるに、比叡山の麓なれば、雪いと高し。強ひて御室にまうでて拜み奉るに、つれ〲といと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、いにしへの事など思ひ出でて聞えけり。さても侍ひてしがな、と思へど、公事どもありければ、え侍はで、夕暮にかへるとて、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは

とてなむ泣く〱來にける。

〔八十四〕昔、男ありけり。身はいやしながら、母なむ宮なりける。その母長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕しければ、まうづとしけれど、しば〱得まうでず。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さる程に十二月ばかりに、とみの事とて御文あり。驚きて見れば、歌あり。

老いぬればさらぬ別のありといへばいよいよ見まくほしき君哉

かの子いたう打ち泣きて詠める、

俗なる禪師なる—俗人と法師と

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もといのる人の子のため

〔八十五〕 昔、男ありけり。童より仕うまつりける君、御髮おろし給うてげり。正月には必ずまうでけり。おほやけの宮仕しければ、常にはえまうでず、されど、もとの心失はでまうでけるになむありける。昔仕う奉りし人、俗なる、禪師なる、あまた參り集りて、正月なればことだつとて、大御酒賜ひけり。雪こぼすがごと降りて、終日に止まず。みな人醉ひて、雪に降り籠められたり、といふを題にて歌ありけり。

思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるぞ我が心なる

と詠めりければ、親王いといたうあはれがり給うて、御衣脫ぎて賜へりけり。

〔八十六〕 昔、いと若き男、若き女をあひいへりけり。おの〳〵親ありければ、つゝみていひさして止みにけり。年比へて女の許に、猶こゝろざし果さむとや思ひけむ、男、歌を詠みてやれりけり。

今までに忘れぬ人は世にもあらじおのがさまざま年の經ぬれば

とてよみけり。男も女も、あひ離れぬ、宮仕になむ出でにける。

(八十七) 昔、男、津の國菟原郡蘆屋の里にしるよしして、いきて住みけり。昔の歌に、

あしの屋のなだの鹽燒いとまなみ黄楊の小櫛もささず來にけり

と詠みけるぞ、この里を詠みけるなりける。ここをなむ蘆屋の灘とはいひける。この男、なま宮仕しければ、それを便にて、衞府佐ども集り來にけり。この男のこのかみも衞府督なりけり。その家の前の海のほとりに遊びありきて、「いざ、この山の上にありといふ布引の瀧見に登らむ」といひて登りて見るに、その瀧ものよりことなり。高さ二十丈、廣さ五丈ばかりなる石のおもてに、白絹に岩を包めらんやうになむありける。さる瀧の上に、わらふだの大きさしてさし出でたる石あり。その石の上に走りかゝる水は、小柑子、栗の大きさにてこぼれ落つ。そこなる人にみな瀧の歌よます。かの衞府督まづ詠む。

我が世をば今日かあすかと待つかひの涙の瀧といづれ高けむ

あるじ、次によむ。

いとまなみ―暇無き故に

このかみ―兄、業平行平衞門佐、行平左兵衞督なりし時の事なるべし

わらふだ―圓座、藁にて造れる敷物



笑ふことにや云々—歌の拙きを笑ひ興さめて

渡つ海—海神

かざし—挿頭、髮にさす飾

ぬき亂る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに

と詠めりければ、かたへの人笑ふことにやありけむ、この歌にめでて止みにけり。歸り來る道遠くて、うせにし宮内卿もちよしが家の前くるに日暮れぬ。やどりの方を見やれば、海士のいさり火多く見ゆるに、かのあるじの男よむ。

はるる夜の星か河邊の螢かもわが住むかたのあまの焚く火か

と詠みて家に歸り來ぬ。その夜、南の風吹きて波いとたかし。つとめて、その家のめのこども出でて、浮海松の波に寄せられたるを拾ひて、家の内にもて來ぬ。女がたより、その海松を高杯に盛りて、柏をおほひて出したる、柏にかけり。

渡つ海のかざしにさすといはふ藻も君がためには惜まざりけり

田舍人の歌にては、あまれりやたらずや。

（八十八）昔、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちども、集りて月を見て、それがなかにひとり、

あぢきなく云々―益も無く、神の祟にて死したりといづれの神に無き名を負するならむ
物ごしに―簾又は障子を隔てゝ
匂ふとも―「匂ふらめ」とも
棚なし小舟―舟棚のな

おほかたは月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの

〔八十九〕昔、賤しからぬ男、我よりは勝りたる人を思ひかけて、年經ける。

人知れずわれ戀死なばあぢきなくいづれの神になき名おふせむ

〔九十〕昔、つれなき人をいかでと思ひわたりければ、あはれとや思ひけむ、「さらば、明日物ごしにても」といへりけるを、かぎりなく嬉しく又疑はしかりければ、おもしろかりける櫻につけて、

さくら花けふこそかくも匂ふらめあな頼みがたあすの夜のこと

といふ心ばへもあるべし。

〔九十一〕昔、月日の行くをさへなげく男、三月の晦日がたに、

をしめども春のかぎりの今日の日の夕暮にさへなりにけるかな

〔九十二〕昔、戀しさに來つゝかへれど、女に消息をだにえせで詠める、

あしべ漕ぐ棚なし小舟いくそたび行きかへるらむ知る人もなみ

ゐ小

になき—二

おふなおふな—分に随ひて

なぞへなく—比類なく

嘲じて—あざけりて

ちへまさる—非常に立勝る、異本たちまさる

〔九十三〕昔、男、身は賤しくて、いとになき人を思ひかけたりけり。少し頼みぬべき様にやありけむ、臥して思ひ起きて思ひ、思ひわびて詠める、

おふなおふな思ひはすべしなぞへなく高き賤しき苦しかりけり

昔もかゝる事は、世のことわりにやありけむ、

〔九十四〕昔、男女、ありけり。いかがありけむ、その男住まずなりにけり。後に男ありけれど、子ある中なりければ、こまかにこそあらねど、時々ものいひおこせけり。女がたに、絵かく人なりければ、扇にかきにやれりけるを、今の男のものすとて、一日二日おこせざりけり。かの男いとつらくて、「おのが聞ゆる事をば今まで給はねば、ことわりと思へど、なほ人をば恨みつべきものになむありける」とて、嘲じて詠みてやれりける。時は秋になむありける。

秋の夜は春日わするるものなれやかすみに霧やちへまさるらむ

となむ詠めりける。女、かへし、

はるかさむ—晴さむ

ひこぼし—牽牛星

瘡—腫物

口舌—やかましき事

千々の秋ひとつの春にむかはめや紅葉も花もともにこそ散れ

〔九十五〕 昔、二條后に仕うまつる男ありけり。女の仕うまつるを、つねに見かはしてよばひわたりけり。「いかで物ごしにだに對面して、おぼつかなく思ひつめたること、すこしはるかさむ」といひければ、女いと忍びて、物ごしに逢ひにけり。物語などして、男、

ひこぼしに戀はまさりぬ天の河へだつる關をいまはやめてよ

この歌にめでて、逢ひにけり。

〔九十六〕 昔、男ありけり。女をとかくいふこと月日へにけり。石木にしあらねば、心苦しとや思ひけむ、やうやうあはれと思ひけり。その比六月のもちばかりなりければ、女、身に瘡一つ二つ出で來にけり。女いひおこせたる、「今は何の心もなし、身に瘡も一つ二つ出で來たり。時もいと暑し。少し秋風吹き立ちなむとき必ずあはむ」といへりけり。秋立つころほひに、こゝかしこより、その人の許へ行なむずなりとて、口舌出で來にけ



え—縁
天の逆手—吉事には手を前方にて打ち凶事には手を後方にまはして打つとの說あれど詳ならず
堀河大臣—右大臣藤原基經、後に太政大臣
太政大臣—忠仁公藤原良房

り。さりければこの女の兄、俄にむかへに來たり。さればこの女、かへでの初紅葉をひろはせて、歌を詠みて書きつけておこせたり。

秋かけていひしながらもあらなくに木の葉降りしくえにこそありけれ

と書きおきて、「かしこより人おこせば、これをやれ」とていぬ。さて、やがて、後つひに、今日まで知らず。善くてやあらむ、惡しくてやあらむ、いにし所も知らず、かの男は、天の逆手をうちてなむ呪ひ居るなる。むくつけきこと、人の呪ひ事は、負ふものにやあらむ、負はぬものにやあらむ、今こそは見め、とぞいふなる。

〔九十七〕昔、堀河大臣と申すいまぞかりけり。四十賀、九條の家にてせられける日、中將なりける翁、

さくら花散りかひ曇れおいらくの來むといふなる道まがふがに

〔九十八〕昔、太政大臣と聞ゆるおはしけり。仕うまつる男、九月ばかりに、梅のつくり枝に雉をつけて、奉るとて、



我がたのむ—古今集、
かぎりなき
ひをりの日—五月六日右近衞の官人どもの騎射をする日
あやなく—わけもなく

我がたのむ君がためにと折る花は時しもわぬものにぞありける

と詠みて奉りたりければ、いとかしこくをかしがり給ひて、使に祿たまへりけり。

〔九十九〕 昔、右近の馬場のひをりの日、むかひに立てたりける車に、女の顔の下簾よりほのかに見えければ、中將なりける男の詠みてやりける。

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなく今日やながめ暮さむ

かへし、

知る知らぬ何かあやなくわきていはむ思のみこそしるべなりけれ

後は誰と知りにけり。

〔百〕 昔、男、後涼殿のはざまを渡りければ、あるやんごとなき人の御局より、忘草を忍草とやいふとて、さし出ださせ給へりければ、賜はりて、

わすれ草生ふる野邊とは見るらめどこは忍ぶなり後もたのまむ

〔百一〕 昔、左兵衞督なりける在原行平といふ人ありけり。その人の家によき酒ありと

まらうどざね―主賓
あるじのはらから―兄弟
すまひ―辭し
太政大臣―藤原良房
うんじて―倦みて

聞きて、殿上にありける、左中辨藤原良近といふ人をなむ、まらうどざねにて、その日は饗應まうけしたりける。なさけある人にて、瓶に花をさせり。その花の中に、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ三尺六寸ばかりなむありける。それを題にて歌よむ。よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじまうけし給ふと聞きて來たりければ、とらへて詠ませける。もとより歌のことは知らざりければ、すまひけれど、強ひて詠ませければ、かくなむ、

咲く花のしたにかくるる人多みありしにまさる藤のかげかも

「など、かくしも詠む」といひければ、「太政大臣の榮花の盛にみまそかりて、藤氏のことに榮ゆるを思ひて詠める」となむいひける。皆人誹らずなりにけり。

〔百二〕昔、男ありけり。歌はよまざりけれど、世の中を思ひ知りたりけり。あてなる女の尼になりて、世の中を思ひうんじて、京にもあらず、遙なる山里に住みけり。もと親族なりければ、詠みてやりける。

深草の帝――仁明天皇

さる歌の云々――主ある女に通じて思ひ改めもせぬ心を謗りしなり。

うみ――海、倦み

あま――海士、尼

めくはせよ――目くばせせよ、和布

背くとて雲には乘らぬものなれど世のうき事ぞよそになるてふ

となむいひやりける。齋宮の宮なり。

〔百三〕 昔、男ありけり。いとまめに實樣にて、あだなる心なかりけり。深草の帝になむ仕うまつりける。心あやまりやしたりけむ、親王たちの使ひ給ひける女をあひいへりけり。さて、

寢ぬる夜の夢をはかなみまどろめば彌はかなくもなりまさる哉

となむ詠みてやりける。さる歌のきたなげさよ。

〔百四〕 昔、ことなる事なくて尼になりける人ありけり。形をやつしたれど、物やゆかしかりけむ、賀茂の祭見に出でたりけるを、男、歌よみてやる。

世をうみのあまとし人を見るからにめくはせよともたのまるるかな

これは、齋宮の物見給ひける車に、かく聞えたりければ、見さしてかへり給ひにけりとなむ。

食はせよ

ぬく—貫く

なめし—無禮なり

ちはやぶる—神の枕詞

くくる—絞染にすること

をさ／＼し—巧なる

案—草案

ひぢて—濡れて

〔百五〕昔、男、「かくては死ぬべし」といひやりたりければ、女、

しら露は消なば消ななむ消えずとて玉にぬくべき人もあらじを

といへりければ、なめしと思ひけれど、心ざしはいやまさりけり。

〔百六〕昔、男、親王たちの逍遙し給ふ所にまうでて、立田河のほとりにて、

ちはやぶる神代も聞かずたつた河からくれなゐに水くくるとは

〔百七〕昔、あてなる男ありけり。その男の許なりける人を、内記にありける藤原敏行といふ人よばひけり。されどまだ若ければ、文もをさ／＼しからず、ことばもいひ知らず、況や歌は詠まざりければ、かのあるじなる人、案を書きて書かせてやりけり。めでまどひにけり。さて、男のよめる。

つれづれのながめにまさる涙川袖のみひぢて逢ふよしもなし

かへし、例の男、女にかはりて、

あさみこそ袖はひづらめなみだ川身さへ流ると聞かばたのまむ

身をしる雨―涙
しとゝ―俗言のびつしより
衣手―袖

といへりければ、男いたうめでて、今までまきて文箱に入れてありとなむいふなる。

男、文おこせたり。えて後の事なりけり。「雨の降りぬべきになむ見わづらひ侍る。身さいはひあらば、この雨は降らじ」といへりければ、例の男、女に代りて詠みてやらす。

かずかずに思ひ思はずとひがたみ身をしる雨は降りぞまされる

と詠みてやれりければ、蓑も笠もとりあへで、しとゞに濡れてまどひ來にけり。

〔百八〕むかし、女、人の心を怨みて、

風吹けばとはになみこす石なれやわが衣手のかわくときなき

と、常のことぐさにいひけるを、聞きおひける男、

よひ毎にかはづのあまた鳴く田には水こそまされ雨は降らねど

〔百九〕昔、男、友だちの人を失へるが許にやりける。

花よりも人こそあだになりにけれ何れをさきに戀ひむとか見し

〔百十〕昔、男、密に通ふ女ありけり。それが許より、「今宵夢になむ見え給ひつる」と

いへりければ、男、

思ひ餘り出でにし魂のあるならむ夜深く見えばたまむすびせよ

〔百十一〕 昔、男、やんごとなき女の許に、なくなりにけるを弔ふやうにて、いひやりける。

古はありもやしけむいまぞ知るまだ見ぬ人を戀ふるものとは

かへし、

下紐のしるしとするも解けなくに語るがごとは戀ひずぞあるべき

又、かへし、

戀しとはさらにもいはじ下紐の解けむを人はそれと知らなむ

〔百十二〕 昔、男、懇にいひ契りける女の、ことざまになりにければ、

須磨のあまの鹽やくけぶり風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

〔百十三〕 昔、男、やもめにて居て、

たまむすび—人魂を見たる時のまじなひ、後世には「魂は見つぬしは誰とも知らねども結びぞとむる下がへのつま」の歌を三度唱へて衣の下がへの褄を結ぶ事あり

いたみ—烈しき故に

仁和の帝—光孝天皇
もとつきにける—もとより鷹飼の方につきたる

長からぬいのちのほどに忘るるはいかにみじかき心なるらむ

〔百十四〕 昔、仁和の帝、芹川に行幸し給ひける時、今はさること似げなく思ひけれど、もとつきにける事なれば、大鷹の鷹飼にてさぶらはせ給ひける摺狩衣の袂に、書きつける。

翁さび人なとがめそ狩ごろも今日ばかりとぞたづもなくなる

おほやけの御氣色あしかりけり、おのがよはひを思ひけれど、若からぬ人は聞きおひけりとや。

〔百十五〕 昔、陸奥國にて、男女すみけり。男「都へいなむ」といふ。この女、いと悲しうて、「馬のはなむけをだにせむ」とて、沖井手・都島といふ所にて、酒飲ませてよめる。

おきのゐて身を燒くよりも悲しきはみやこしまべの別なりけり

〔百十六〕 昔、男、すゞろに陸奥國まで惑ひいにけり、京に思ふ人にいひやる。

なみ間より見ゆる小島の濱びさしひさしくなりぬ君に逢ひみで

瑞籬の—久しの枕詞
こころの—昔の眞とも
世へず—男に合はぬ
筑摩のまつり—この祭

「何事も皆よくなりにけり」となむいひやりける。

〔百十七〕昔、帝、住吉に行幸し給ひけり。

　われ見てもひさしくなりぬ住吉の岸のひめ松いく代へぬらむ

御神現形したまひて、

　むつまじと君は知らなみ瑞籬の久しき世よりいはひそめてき

〔百十八〕昔、男、久しく音もせで忘るゝ心もなく、「参り来む」といへりければ、女、

　玉葛はふ木あまたになりぬれば絶えぬこころのうれしげもなし

〔百十九〕昔、女、あだなる男のかたみとて、置きたるものどもを見て、

　かたみこそ今はあだなれこれなくは忘るる時もあらましものを

〔百二十〕昔、男、女のまだ世へずと覚えたるが、人の許にしのびて物聞えて、後ほど経て、

　近江なる筑摩のまつりとくせなむつれなき人のなべのかずみむ

は氏子中の女その合へる男の數程鍋をかづきて詣づる風俗ありきといふ

おもひ｜思、火

手にむすび｜手にすくふこと、深く契りかはしゝ喩

〔百廿一〕　昔、男、梅壺より雨に濡れて人のまかり出づるを見て、

うぐひすの花をぬふてふ笠もがな濡るめる人にきせてかへさむ

かへし、

鶯のはなを縫ふてふかさはいなおもひをつけよ乾してかへさむ

〔百廿二〕　昔、男、契れることあやまれる人に、

山城の井手のたま水手にむすびたのみしかひもなき世なりけり

といひやれど、答もせず。

〔百廿三〕　昔、男ありけり。深草に住みける女を、やう〳〵あきがたにや思ひけむ、かゝる歌を詠みけり。

年を經てすみこし里を出でていなばいとゞ深草野とやなりなむ

女、かへし、

野とならば鶉となりて鳴きをらむ狩にだにやは君はこざらむ



と詠めりけるにめでて、行かむと思ふ心なくなりにけり。

〔百廿四〕 昔、男、いかなりけることを思ひける折にか、よめる。

思ふこといはでぞただに止みぬべきわれとひとしき人しなければ

〔百廿五〕 昔、男、わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、

つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

伊勢物語 終

大和物語

上之巻

○亭子院の帝、今はおり居給ひなむとする比、弘徽殿の壁に、伊勢の御の書きつけける。

わかるれどあひもをしまぬ百敷を見ざらむことのなにか悲しき

とありければ、帝御覧じて、その傍に書きつけさせ給ひける。

身一つにあらぬばかりをおしなべて行き廻りても何か見ざらむ

となむありける。

○帝おり居給ひて、又の年の秋、御髪おろし給ひて、所々山踏し給ひて、行ひ給ひけり。備前の掾にて、橘良利といひける人、内裏におはしましける時、殿上に候ひて、御髪おろし給ひければ、やがて御供に頭おろしてけり。人にも知られ給はで、歩き給ひける御

亭子院—宇多天皇

おり居—位を退き

弘徽殿—清涼殿の北、女御などの居る所

伊勢の御—藤原繼蔭の女、宇多天皇の更衣、御は婦人の尊稱

逢ひつゝ―内裏の意志に反しつゝ

大徳―僧

たびね―旅寝、日根

故源大納言―源清蔭

京極御息所―時平の女名は褒子宇多帝の皇后

供に、これかれむ後れ奉らで随ひける。かゝる御ありきし給ふ。いと悲しきことなりとて、内裏より少將、中將など、此彼随へとて、奉らせ給ひけれど、逢ひつゝありき給ふ。和泉國に至り給ひて、日根といふ所におはします夜あり。いと心ぼそうかすかにておはします事を思ひて悲しかりけり。さて日根といふことを、歌に詠めと仰事ありければ、この良利大徳、

故郷のたびねの夢に見えつるはうらみやすらむまたと問はねば

とありけるに、皆人泣きて、え詠まずなりにけり。その名をなむ、良遲大德といひて、後までもさぶらひける。

○故源大納言宰相におはしける時、京極御息所より、亭子院の御賀仕うまつり給ふとて「かゝる事をなむせむと思ふ。捧物、一枝二枝せさせて賜へ」と聞え給ひければ、鬚籠を數多せさせ給ひて、とし子に色々に染めさせ給ひけり。敷物の織物ども、色々に染め、よりくみ何かと皆あづけてせさせ給ひけり。そのものどもを、九月晦日に、皆いそぎはて

髯籠—竹籠の竹の端を編み殘して鬚の如くしたるもの
とし子—藤原千兼の妻
よりくみ—鬚籠などを板に結び付くる紐
かたかげ—島蔭などのこと
しら浪の—さわぐの序
野大貳—太宰大貳小野好古
正月の加階

てけり。さてその十月朔日の日、このもの、いそぎ給ひける人の許におこせたりける。

千々の色にいそぎし秋は過ぎにけり今は時雨に何を染めまし

その物急ぎ給ひける時は、まもなく、これよりも彼よりも言ひかはし給ひけるを、それより後は、そのこととやなかりけむ、消息もいはで、十二月の晦日になりにければ、

かたかげの船にや乗りししら浪の騒ぐときのみ思ひいづる君

となむいへりけるを、その返をもせで、年越えにけり。さて二月ばかりに、柳のしなひ、物よりけに長きなむ、この家にありけるを折りて、

青柳のいとうちはへてのどかなる春日しもこそ思ひいでけれ

とてなむ、遣り給へりければ、いと二なく愛でて、後までなむ語りける。

○野大貳、純友がさわぎの時、討手の使にされて、少將にて下りけり。公にも仕うまつり、四位にもなるべき年に當りければ、正月の加階賜りのこと、いとゆかしう覺えけれど、京より下る人もをさをさ聞えず。或人に問へど、四位になりたりともいふ。或人はさも



—正月除目に四位に叙せられんことを望みし也

玉櫛笥—ふたの枕詞

あけながら—開け、赤、赤は五位の袍色

前坊の君—前皇太子保明親王

きさいの宮—保明の母藤原穏子

ゆゝし—忌はし

あらず、といふ。定なることいかで聞かむ、と思ふ程に、京のたよりあるに、近江守公忠君の文をなむ持て來たりけり。いとゆかしうて、あけて見れば、萬の事ども書きもていきて、月日などかきて奥に、

玉櫛笥ふたとせ逢はぬ君が身をあけながらやはあらむと思ひし

これを見て、限なく悲しくてなむ泣きける。四位にならぬよし、文の詞にはなくて、只かくなむありける。

○前坊の君うせ給ひにければ、大輔、限なく悲しくのみ覺ゆるに、きさいの宮、后に立ち給ふ日になりにければ、ゆゝしとて隱しけり。さりければ、詠みて出しける。

わびぬれば今はと物を思へどもこころに似ぬはなみだなりけり

○朝忠中將、人の妻にてありける人に、忍びてあひわたりけるを、女も思ひかはしてすみける程に、かの男、他國の守になりて下りければ、これもかれも、いとあはれと思ひけり。さて詠みて遣しける。

たぐへやる―附加しやる

監の命婦―近衛將監の女などの命婦たりし者

中務の宮―元良親王

一夜めぐり―天一神のこと、その

たぐへやる我がたましひをいかにしてはかなき空にもて離るらむ

となむ、下りける日いひやりける。

○男女、相知りて年經けるを、いさゝかなる事によりて離れにけり。飽くとしもなくて、やみにしかばにやあらむ、男も哀と思ひけり。かくなむ云ひ遣りける。

逢ふことは今はかぎりとおもへども涙は絶えぬものにぞありける

女、いとあはれと思ひけり。

○監の命婦の許に、中務宮おはしまし通ひけるを、「方の塞がれば、今宵はえなむ參うでぬ」と宣へりければ、その御返事に、

逢ふ事のかたはさのみぞふたがらむひと夜めぐりの君となれれば

とありければ、方塞がりたりけれど、おはしましてなむ、大殿ごもりにける。かくて又、久しく音もし給はざりけるに、「嵯峨の院に狩すとてなむ、久しく消息なども物せざりける。いかに覺束なく思ひつらむ」など宣へりける。御かへりごとに、

神の一夜づつ巡行する如く君も通ふ方多ければ．
おほとのごもり―御寢
桃園の兵部卿宮―敦固親王
北の方―慶子内親王
堤―賀茂川堤
かは―彼は、川
忠房―太宰大貳廣敏孫信濃掾興嗣の男

　大澤のいけの水ぐき絶えぬともなにか恨みむさがのつらさは

御返はこれにや劣りけむ、人忘れにけり。

○桃園の兵部卿宮うせ給ひて、御はて九月晦日にし給ひけるに、とし子、かの宮の北方に奉りける。

　大かたの秋のはてだに悲しきに今日はいかでか君くらすらむ

限なく悲しと思ひて、泣き居給へりけるに、かくいへりければ、

　あらばこそ初も終も思ほえめ今日にもあはで消えにしものを

となむかへし給ひける。

○監の命婦、堤にありける家を、人に賣りて後、粟田といふ所に住きけるに、その家の前を渡りければ、詠みたりける。

　ふるさとをかはと見つつも渡るかな淵瀬ありとは宜もいひけり

○故源大納言君、忠房のぬしの御女、東の方を、年比思ひてすみ渡り給ひけるを、亭子院

亭子院の若宮—韶子内親王
同じおとゞ—源大納言千兼—忠房の男
内の藏人—女藏人
一條の君—貞平親王の女

の若宮につき奉り給ひて程經にけり。子どもなどありければ、事も絶えず、同じ所になむ住み給ひける。さて詠みてやり給ひける。

すみの江の松ならなくに久くも君と寢ぬ夜のなりにけるかな

とありければ、かへし、

久くはおもほえねどもすみの江の松やふたたび生ひ代るらむ

となむありける。

○おなじ大臣、かの宮をえ奉り給ひて、帝のあはせ奉り給へりけれど、はじめごろ忍びて、夜々通ひ給ひける比、かへりて、

あくといへばしづ心なき春の夜の夢とや君をよるのみは見む

○右馬允藤原千兼といふ人の妻に、とし子といふ人なむありける。子ども數多出で來て、思ひて棲みける程に、なくなりにければ、限なく悲しくのみ思ひありく程に、内の藏人にてありける、一條君といひける人は、とし子をいとよく知れりける人なりけり。か



くなりにける程にしも、訪はざりければ、あやしと思ひありく程に、訪はぬ人の從者の女なむ逢ひたりけるを見て、かくなむ。

「思ひきや過ぎにし人の悲しきに君さへつらくならむものとは

と聞えよ」といひければ、かへし、

なき人を君がきかくにかけじとて泣く泣く忍ぶほどな恨みそ

○本院の北方の御おとうとの童名を、おほつぼねといふいまそがりけり。陽成院の帝に奉りけるに、おはしまさざりければ、詠みて奉りける。

あらたまのとしは經ねども猿澤の池の玉藻は見つべかりけり

○又釣殿の宮に、若狹の御と云ひける人を召したりけるが、又も召しなかりければ、詠みて奉りける。

數ならぬ身に置くよひの白玉は光見えさすものにぞありける

と詠みて奉りければ、見給ひて、「あなおもしろの玉の歌よみや」となむ宣ひける。

訪はぬ人の云々—一條の君の召使の女に逢ひたればことづけし也

きかく—きくの延音

本院の北の方—藤原時平の妻

御おとうと—妹

猿澤の云々—奈良の帝を恨みて身を投げし采女に比せしならむ

釣殿の宮に云々—陽成院の配綏子内親王の宮殿、こゝにて天皇が若狹の御を召されし也

式部卿の宮—敦慶親王

すみける—通ひける

二條の御息所—藤原善子、右大臣定方の女、醍醐帝の女親

若菜—七日

○陽成院のすけの御、繼父の少將の許に、

春の野ははるけながらも忘草生ふるは見ゆるものにぞありける

少將、かへし、

春の野におひじとぞ思ふわすれぐさつらき心のたねしなければ

○故式部卿宮の、出羽の御に、繼父の少將のすみけるを、離れて後、女薄に文をつけて遣りたりければ、少將、

秋風になびく尾花はむかし見したもとに似てぞこひしかりける

出羽の御、かへし、

たもとともしのばざらまし秋風をなびく尾花のおどろかさずは

○故式部卿、二條の御息所に絶え給ひて、又の年の正月の七日の日、若菜奉り給ひけるに、

ふるさとと荒れにし宿の草の葉も君がためとぞまづは摘みける

七種の若菜を服すれば人をして病なからしむるよし漢土の傳說
おなじ人—前の御息所
桂の皇女—宇多の皇女孚子內親王
良少將—良岑義方
かしは木—兵衞の異名

とありけり。

○おなじ人、同じ親王の許に、久しくおはしまさざりければ、秋のことなりけり。

世に經れど戀もせぬ身の夕さればすずろに物の戀しきやなぞ

とありければ、かへし、

夕ぐれに物おもふ時は神無月われもしぐれにおとらざりけり

となむありける。心に入らであしくなむ詠み給ひける。

○故式部卿宮を、桂の皇女、切によばひ給ひけれど、おはしまさざりける時、月のいとおもしろかりける夜、御文奉り給へりけるに、

久かたの空なる月の身なりせば行くとも見えで君は見てまし

となむありける。

○良少將、兵衞佐なりけるころ、監の命婦になむ住みける。女のもとより、

柏木の森の下草おいぬとも身をいたづらになさずもあらなむ

かへし、

かしは木の森の下草おいのよにかかる思ひはあらじとぞおもふ

となむいひける。

○良少將、太刀の緒にすべき革を求めければ、監の命婦なむ、我が許にありといひて、久しく出さざりければ、

あだ人のたのめわたりしそめかはの色の深さを見でや止みなむ

とよめりければ、監の命婦めでくつがへりて、もとめてやりけり。

○陽成院の二の皇子、俊蔭中將の女に、年比すみ給ひけるを、女五の皇女を得奉り給ひて後、更に訪ひ給はざりければ、今はおはしますまじきなめりと思ひ絶えて、いと哀にて居給へりけるに、いと久しくありて思ひがけぬ程に、おはしましたりければ、え物も聞えで、逃げて戸の内に入りにけり。歸り給ひて、皇子あしたに、「などか、年比の事も申さむとて、まうで來たりしに、隱れ給ひにし」とありければ、詞はなくてかくなむ。

そめかは—染革、筑前の名所染川

陽成院の二の皇子—元平親王

女五の皇女—依子内親王

先帝―醍醐天皇
右大臣の女御―三條御息所
しとく―師德
室―僧房

せかなくに絶えと絶えにし山水のたれ忍べとか聲を聞かせむ

○先帝の御時に、右大臣の女御、うへの御局にまうのぼり給ひて、おはしましやする、と下待ち給ひけるに、おはしまさざりければ、

日ぐらしに君まつ山のほととぎす問はぬ時にぞ聲もをしまぬ

となむ聞えけり。

○比叡の山に、念覺といふ法師の山籠にてありけるに、しとくにてまし〳〵ける大德の早う死にけるが、室に松の木の枯れたるを見て、

主もなき宿の枯れたる松見れば千代過ぎにける心地こそすれ

と詠みければ、かの室に泊りたりける弟子ども、あはれがりけり。この念覺はとし子が兄なりけり。

○桂の皇女、密に逢ふまじき人にあひ給ひたりけり。男の許に、詠みて遣せ給へりける。

それをだに思ふ事とて我が宿を見きとないひそ人のきかくに

かいせう――不詳、後撰の作者に戒仙あり此歟
あらはひ――洗濯
むづかりて――憤りて
いますがらぬ事――居給はぬ事

となむありける。

○かいせうといふ人法師になりて、山にすむ間に、あらはひなどする人のなかりければ、親の許に、衣をなむ洗ひに遣せたりけるを、いかなる折にかありけむ、むづかりて、「親兄弟のいふ事も聞かで、法師になりぬる人は、かくうるさき事いふものか」と言ひければ、詠みて遣りける。

今は我いづち行かまし山にても世のうきことは猶も絶えぬか

○同じ人、かの父の兵衛佐、うせにける年の秋、家にこれかれ集りて、宵より酒飲みなどす。いますがらぬことの哀なる事を、客人も主人も戀ひけり。朝ぼらけに霧立ち渡りけり。客人、

朝霧の中に君ますものならば晴るるまにまにうれしからまし

と云ひけり。かいせう、かへし、

ことならば晴れずもあらなむ秋霧の紛れに見えぬ君と思はむ

三條右大臣―定方
上達部―公卿
類しては―うちつれて
かづけ物―裝束などの贈物
なりいづべき―出身すべき
ふけゐ―吹井、紀伊の名所、風の吹くに懸く

客人は、貫之、友則などになむありける。

○故式部卿宮に、三條右大臣、他上達部など類して參り給ひて、碁うち御遊などし給ひて、夜更けぬれば、此彼醉ひて、物がたりし、かづけ物などせらる。女郎花をかざし給ひて、右大臣、

　女郎花折る手にかかるしら露はむかしの今日にあらぬなみだか

となむありける。他人々の多かれど、よからぬは忘れにけり。

○故右京大夫宗于君、なりいづべき程に、我が身のえなり出でぬことを、思ひ給ひけるころほひ、亭子の帝に、紀伊國より石つきたる海松をなむ、奉りたりけるを題にて、人人歌よみけるに、右京大夫、

　沖つ風ふけゐの浦に立つなみのなごりにさへやわれはしづまむ

○おなじ右京大夫、監の命婦に、

　よそながら思ひしよりも夏の夜の見はてぬ夢ぞはかなかりける

あはれてふ―古今集「紫の一本ゆゑに武藏野の草はみながら哀とぞ見る」
そうづの君―僧都の君か、名不詳
躬恒―凡河内躬恒
堤中納言―藤原兼輔
大内山―嵯峨仁和寺の山

○亭子の帝に、右京大夫よみて奉りける。

あはれてふ人もあるべく武藏野の草とだにこそ生ふべかりけれ

また、

しぐれのみ降る山里の木のしたは居る人がらやもりすぎぬらむ

とありければ、顧み給はぬ心ばへなりけり。帝御覽じて「何事ぞ、これを心得ぬ」とて、そうづの君に見せ給ひける、と聞きしかば、「かひなくなむありし」と語り給ひける。

○躬恒が、院に詠みて奉りける。

立ち寄らむ木のもともなき蔦の身は常磐ながらに秋ぞかなしき

○右京大夫の許に、女、

色ぞとはおもほえずともこの花は時につけつつおもひ出でなむ

○堤中納言、内裏の御使にて、大内山に、院の帝おはしますに參り給へり。物心細げにておはします、いとあはれなり。高き所なれば、雲は下よりいと多く立ち昇るやうに見

えければ、かくなむ。

　白雲のここのへに立つ峯なればおほうち山といふにぞありける

○伊勢國に、前齋宮おはしましし時に、堤中納言、勅使にて下りたまひて、

　呉竹のよよのみやこと聞くからにきみは千年のうたがひもなし

御かへしは聞かず。かの齋宮のおはします所は、多氣の都となむいひける。

○出雲が兄弟、一人は殿上して、我はえせざりける時に詠みたりける。

　かく咲ける花もこそあれ我がために同じ春とやいふべかりける

○先帝の五の皇子の御女は、一條君といひて、京極御息所の御許に候ひ給ひけり。よくもあらぬ事ありて、罷出給ひて、靱負督の妻にていますがりて、

　たまさかに問ふ人あらばわたの原歎きほに擧けていぬと答へよ

○伊勢守もろみちの女を、正明中將君に婚せたりける時に、其處なりけるうなゐをば、右京大夫呼び出でてかたらひて、朝によみておこせたりける。

前齋宮―柔子内親王宇多皇女

呉竹の―よよの序、齋宮を竹の都の縁にて取り出づ

出雲―出雲の守

五のみこの御女―五は四の誤にや清和第四皇子貞平親王の女に一條君あり

正明―是忠親王の子源氏
うなゐ―男女共にいまだ結髮せぬほどの童
おく露の云云―暫時の逢瀨は
汗衫―童女の上に着る衣
曹子―局
このむすめ姉にあたる―とし子の女の中にて姉にあたる

おく露のほどをも待たぬ朝顔は見ずぞなかなかあるべかりける

○桂の皇女に、式部卿宮すみ給ひける時、その宮に候ひけるうなゐなむ、この男宮を、いとめでたし、と思ひかけ奉りけるをも、え知り給はざりけり。螢の飛びありきけるを、「かれ捕へて」と、この童に宣はせければ、汗衫の袖に螢を捕へて、包みて御覽ぜさすとて聞えさせける。

つつめども隱れぬものは夏蟲の身よりあまれるおもひなりけり

○源大納言君の御許に、とし子は常に參りけり。曹子して住む時もありけり。をかしき人にて、萬の事を常に云ひかはし給ひけり。徒然なる日、このおとゞ、とし子、またこのむすめ、姉にあたるあやつ子といひてありけり。母に似て心もをかしかりけり。又をとこの許に、よぶ子といふ人ありけり。それも物のあはれ知りて、いと心をかしき人なりけり。これ四人集ひて、萬の物語し、世の中のはかなき事、世間の哀なる事いひ〳〵て、かのおとゞの詠み給ひける。

はかなき—無常
或人—或婦人
驗者—祈禱者
庭のしも—霜、下
切懸—板塀の如きもの
たつき—鐇、廣刃の斧

いひつつも世ははかなきを形見には哀といかで君に見えまし

と詠み給ひければ、誰も〳〵返しはせで、集りてよゝとなむ泣きける。怪しかりける者どもにこそはありけれ。

○惠秀といふ法師の、或人の御驗者仕うまつりけるほどに、とかく世の中にいふ事ありければ、詠みたりける。

里はいふ山にはさわぐしら雲の空にはかなき身とやなりなむ

となむありける。又この人の御許に詠みたりける。

朝ぼらけわが身は庭のしもながら何を種にてこころおひけむ

この大德、坊にしける所の前に、切懸をなむせさせける。そのけづりくづに書きつけける。

鐇する飛驒の匠のたつき音のあなかしかましなぞや世のなか

などいひて、「おこなひしに、深き山に入りなむとす」といひて往にけり。ほどへて「何處

にかあらむ、と云ひて深き山に籠り給ひぬとありしは、何處ぞ」と云ひ遣り給ひたりければ、

何ばかり深くもあらず世の常の比叡を外山と見るばかりなり

となむいひたりける。横川といふ所にあるなりけり。

○おなじ人に、ある人、「山へのぼりたまふべき日はとほくやある、いつぞ」といへりければ、

登りゆく山の雲居の遠ければ日も近くなるものにぞありける

とぞいひ遣せたりける。かくのみ、よからぬ事の、あるがうへに出で來ければ、

のがるとも誰か著ざらむぬれ衣あめの下にし住まむかぎりは

○堤中納言君、十三のみこの母御息所を、内裏に奉りける初に、帝はいかゞ思し召すらむなど、いとかしこく思ひ歎き給ひけり。さて帝に詠みて奉り給ひける。

人の親の心はやみにあらねども子をおもふ道に惑ひぬるかな

外山—前山

日も—天日、時日

ぬれ衣—冤

十三のみこの母—醍醐の皇子章明親王の母藤原桑子

かしこく—甚しく

平仲―平貞文、字は仲
閑院の御―宗于の女
いそのかみ―ふるの枕詞なれば君にふるされたればの意とす
齋院の皇女―君子内親王宇多皇女

先帝いとあはれに思し召したりけり。

○平仲、閑院の御に絶えて後、程經て逢ひたりけり。さて後に云ひおこせたる。

うちとけて君は寢つらむ我はしも露のおきゐてこひにあかしつ

女、かへし、

白露のおきふし誰を戀ひつらむ我は聞きおはすいそのかみにて

○陽成院の一條君、

奥山にこころを入れてたづねずばふかき紅葉のいろを見ましや

○先帝の御時、刑部君とて、候ひ給ひける更衣の、里にまかり出で給ひて、久しう參り給はざりけるに遣しける。

大空をわたる春日のかげなれやよそにのみしてのどけかるらむ

○おなじ帝、齋院の皇女の御許に、菊につけて、

行きて見ぬ人のためにとおもはずば誰か折らまし我がやどの菊



うち―天皇

おなじ枝な云々―御兄弟の御中隔あるよりの御述懐と見えたり

うちの御―天皇の御歌

おき―置、沖

うらみ―浦恨

齋院の御かへし、

我が宿に色をりとむる君なくばよそにもきくの色を見ましや

○戒仙、山に登りて、

雲ならで小高き嶺にゐるものはうき世を背く我が身なりけり

○齋院よりうちに、

おなじ枝をわきて霜おく秋なれば光もつらくおもほゆるかな

御かへし、

花の色を見ても知りなむ初霜の心わきてはおかじとぞおもふ

これも、うちの御、

わたつ海の深き心をおき乍らうらみられぬる物にぞありける

○陽成院にありける、坂上のとほみちといふ男、おなじ院にありける女、障る事ありて逢はざりければ、

秋の野をわくらむ鹿も我が如や繁きさはりに音をば鳴くらむ

○右京大夫宗于君、三郎にあたりける人、博奕をして親にも、兄弟にも憎まれければ、「足の向かむ方へ行かむ」とて、他國へいきける。さて思ひける友たちの許へ、詠みて遣せたりけり。

しをりして行く旅なれどかりそめの命しらねば歸りしもせじ

○男、限なく思ひける女を置きて、他國へ往にけり。いつしかと待ちけるに、死にきといひて來たりければ、

今來むといひて別れし人なればかぎりと聞けど猶ぞ待たるる

となむいひける。

○越前權守兼盛、兵衛君といふ人にすみけるを、年比はなれて又往きけり。さてよみける。

夕さればみちも見えねど故郷はもとこし駒にまかせてぞゆく

博奕―盤と釆とに行ふ雙六に似たるかけ遊び

しをり―道しるべ、折檻

もと來し駒―老馬道を知る事管仲の言にあるよし蒙求に見えたり

平中興—延喜中の人

はふれて—零落して

らうある人—行き届ける人

閑院の三の御子—貞元親王の第三子源兼信

鬼こもれり—美女を戯れて鬼といへり

女、かへし、

　駒にこそまかせたりけれはかなくも心のくろと思ひけるかな

○近江介平中興、女をいといたうかしづきけるを、親なくなりて後、とかくはふれて、他國にはかなき所にすみけるを、あはれがりて、兼盛が詠みておこせたりける。

　をちこちのひと目まれなる山里に家居せむとはおもひきや君

と詠みてなむ遣せたりければ、返事もせで、よゝとぞ泣きける。女もいとらうある人なりけり。

○おなじ兼盛、陸奥國にて、閑院の三の御子の女にありける人、黒塚といふ所にすみけり。その女どもにおこせたりける。

　みちのくの安達の原のくろ塚に鬼こもれりと聞くはまことか

といひたりけり。かくて「その女を得む」といひければ、親「まだいとわかくなむある、今さるべからむ折にを」と云ひければ、京にいくとて、山吹につけて、

うしろめたし―不安心
名取の御湯―陸前國名取郡なる溫泉
とりのみゆけば―鳥のみ行けばにて名取の御湯をかくしてよめり
などすなどりの穴々―同じく名取の御湯をよみこめり

花ざかり過ぎもやするとかはづ鳴く井手の山吹うしろめたしも

といひけり。かくて名取の御湯といふ事を、恒忠君の妻詠みたりけるといふなむ、この黑塚の主人なりける。

おほ空の雲の通路見てしがなとりのみゆけばあとはかもなし

となむ詠みたりけるを、兼盛大君おなじ所を、

鹽釜の浦には海人や絶えにけむなどすなどりのみゆるときなき

となむよみける。さてこの心がけし女、他男して京へ上りたりければ、聞きて、兼盛「上りものし給ふなるを、告げ給はせで」と云ひたりければ、「井手の山吹うしろめたし」といへりける文を、「これなむ陸奥國の土產」とて、おこせたりければ、男、

年を經てぬれわたりつる衣手を今日のなみだに朽ちやしぬらむ

といへりけり。

○世の中を倦じて、筑紫へ下りける人、女の許におこせたりける。

うさ―宇佐、憂さ
五條の御―山陰中納言の姪
河原院―六條鴨川の畔にあり、源融の作りて宇多に奉れるもの
さう〳〵し―寂寥なり
ふち―淵、藤
御曹子―御局、官女

忘るやと出でて來しかどいづくにもうさは離れぬ物にざりける

○五條の御といふ人ありけり。男の許に我が像を繪に書きて、女の燃えたる像を書きて、烟をいと多く熏らせて、かくなむ書きたりける。

君を思ひなま〳〵し身を燒く時はけぶり多かるものにざりける

○亭子院と、御息所たち數多、御曹子して住み給ふ事、年比ありて、河原院のいとおもしろく作られたりけるに、京極の御息所、一所の御曹子をのみして渡らせ給ひにけり。春の事なりけり。とまり給へる御曹子ども、いと思の外にさう〳〵しき事をおもほしけり。殿上人など通ひ參りて、藤の花のいとおもしろきを、「これが盛をだに御覽ぜで」などいひて見ありくに、文をなむ結びつけたりける。あけて見れば、

世の中の淺き瀨にのみなり行けばきのふのふぢの花とこそみれ

とありければ、人々見て限なくめで哀がりけれど、誰が御曹子のし給へるともえ知らざりけり。男ども云ひける。



浄藏―僧の名、三善清行の第八子

うらみ―恨、裏見

らうたし―愛らし

いちはやく

藤の花色のあさくも見ゆるかな移ろひにけるなごりなるべし

○のうさんの君といひける人、浄藏とはいと二なう思ひかはす中なりけり。限なく契りて、思ふ事をもいひかはしけり。のうさんの君、

思ふてふ心はことにありけるをむかしの人になにをいひけむ

といひ遣せたりければ、浄藏大德のかへし。

ゆくすゑの宿世を知らぬ心には君にかぎりの身とぞいひける

○故右京大夫、人の女を忍びて得たりけるを、親聞きつけて、のゝしりておはせざりければ、佗びて歸りにけり。さて朝に詠みてやりける。

さもこそは峯の嵐は荒からめなびきし枝をうらみてぞ來し

○平仲、にくからず思ふ若き女を、妻の許に率て來て置きたりけり。にくげなる事どもを云ひて、妻遂に逐ひ出しけり。この妻に隨ふにやありけむ、らうたしと思ひながら得留めず。いちはやく云ひければ、近くだにえ寄らで、四尺の屏風に寄りかゝりて、立て

いひければ―本妻の性急に罵りしかば

とばかり―暫時

南院の五郎―是忠親王の五子今扶王

承香殿―醍醐の母后胤子此の殿に居たり

うちとかくるは―簾を内外に懸くるに内裏といへるはの意を兼ぬ

りて云ひけり、「世の中の思の外にあること、異世界にものし給ふとも、忘れて消息し給へ。おのれもさなむ思ふ」といひけり。この女つゝみに物など入れて、車取りに遣りて待つほどなり。いとあはれと思ひけり。さて女いにけり。とばかりありておこせたりける。

わすらるなわすれやしぬる春がすみ今朝立ちながら契りつること

○南院の五郎、三河の守にてありける。承香殿にありける伊豫の御を懸想じけり。來むと云ひければ、御息所の御許に、「内裏へなむ參る」といひ遣せたりければ、

玉すだれうちとかくるはいとゞしくかげを見せじと思ふなりけり

といへりけり。又、

歎きのみ茂きみやまのほとゝぎす木がくれ居ても音をのみぞ鳴く

などいひけり。かくて來たりけるを、「今はかへりね」とやらひければ、

死ねとてやとりもあへずばやらはるるいといき難き心地こそすれ

なげき—歎、木
やらひ—追ひ
いき難き—往き、生き
いなおほせ鳥—鶺鴒なりといふ
こぼれたる家—壞れたる
枇杷殿—左大臣仲平

返し、をかしかりけれどえ聞かず。又雪の降る夜來たりけるを、物は云ひて「夜更けぬ。歸り給ひね」といひければ、歸りける程に、戸を鎖してあざけりければ、

我はさは雪ふる空に消えねとや立ちかへれどもあけぬ板戸は

となむ云ひてゐたりける。かく歌も詠みあはれに云ひゐたれば、いかゞせましと思ひて、のぞきて見れば、顔こそ猶いとにくげなりしか、となむ語りしとか。

○とし子、千兼を待ちける夜、來ざりければ、

小夜更けていなおほせ鳥の鳴きけるを君が叩くと思ひけるかな

○又とし子、雨の降りける夜千兼を待ちけり。雨にやさはりけむ、來ざりけり。こぼれたる家にて、いたく漏りけり。「雨のいたく降りしかば、え參らずなりにき。さる所に、いかで物し給ひつる」といへりければ、とし子、

君を思ひひまなき宿とおもへども今宵の雨は漏らぬ間ぞなき

○枇杷殿より、とし子が家に柏木のありけるを、折りにたまへりけり。折らせて書きつけ

ならしば―楢柴、馴らしの序

めとりぐくり―紋染

いを―魚

奉りける。

我がやどをいつかは君がならしばのならし顔には折りにおこせる

御かへし、

かしは木に葉守の神のましけるを知らでぞ折りしたたりなさるな

○忠文が、陸奥の將軍になりて下りける時、それが息子なりける人を、監の命婦忍びてあひ語らひけり。餞別に、めとりぐくりの狩衣、袿、幣などやりたりける。このえたる男、

よひよひに戀しさまさるかり衣こころづくしのものにぞありける

とよみたりければ、女めでて泣きけり。

○同じ人に、監の命婦、楊梅を遣りたりければ、

みちのくの安達の山もろともに越えばわかれのかなしからじを

となむいひける。さて堤なる家に住みける。さて鮎をなむ取りて遣りける。

賀茂川の瀬にふす鮎のいを取りて寝でこそあかせゆめに見えつや

かくてこの男、陸奥國へ下りける使につけて、哀なる文ども遣せけるを、道にて病してなむ死にけると聞きて、女いと哀となむ思ひける。かく聞きて後、篠塚驛といふ所より、使につけて、哀なる事どもを書きたる文をなむ持て來たりける。いとかなしくて、「これは何時のぞ」と問ひければ、使の久しくなりてもて來たるになむありける。女、

篠塚のうまやうまやと待ちわびし君は空しくなりぞしにける

と詠みてなむ泣きける。童にて殿上して、大七といひけるを、冠して、藏人所におりて、金の使かけて、親の供に往くになむありける。

○故式部卿宮うせ給ひける時は、二月の晦日、花の盛になむありける。堤中納言の詠み給ひける。

咲きにほひ風まつほどの山ざくら人の世よりは久しかりけり

三條右大臣の御かへし、

春春の花は散るとも咲きぬべしまた逢ひがたき人の世ぞ憂き

篠塚の驛—三河寶飫郡篠東鄕あり其處歟
うまや〳〵—驛驛、今や今や
冠—元服
金の使—陸奥の貢金使
三條右大臣—藤原定方

○同じ宮おはしましける時、亭子院に住み給ひけり。この宮の御許に、兼盛參りけり。召し出でて、物ら宣ひなどしけり。亡せ給ひて後、かの院を見るにいとあはれなり。池のいとおもしろきに、哀なりければ詠みける。

池はなほむかしながらの鏡にてかげ見しきみがなきぞかなしき

○人の國の守にて下りける馬の餞別を、堤中納言して待ち給ひけるに、暮るゝまで來ざりければ、云ひ遣り給ひける。

別るべきこともあるものを終日に待つとてさへも歎きつるかな

とありければ、まどひ來にけり。

○おなじ中納言、かの殿の寢殿の前に、少し遠く立てりける櫻を、近く掘り植ゑ給ひけるが、枯れざまに見えければ、

宿近くうつして植ゑしかひもなくまちどほにのみ見ゆる花かな

○同じ中納言、藏人にてありける人の、加賀の守にて下りけるに、わかれ惜みける夜、

ゆきのまにまに—行、雪
喜種—源長猷の子清和天皇の孫
院—亭子院
八月十五夜—觀月の御遊
竹取がの歌—赫奕姬の昇天は八月十五夜竹取

中納言、

君が行く越の白山知らねどもゆきのまにまにあとはたづねむ

となむ詠み給ひける。

○桂の皇女の御許に、喜種が來たりけるを、母御息所聞きつけ給ひて、門を鎖せ給ひければ、夜一夜立ち煩ひてかへるとて、「かく聞え給へ」とて、門の間よりいひ入れける。

こよひこそ涙の川にゐる千鳥なきてかへるときみは知らずや

これも同じ皇女に、おなじ男、

永き夜をあかしの浦に燒く鹽のけぶりは空に立ちやのぼらむ

かくて忍びて逢ひ給ひける程に、院に八月十五夜せられけるに、「參り給へ」とありければ、參り給ふに、院にては逢ふまじければ、「せめて今宵はな參り給ひそ」と留めけり。されどめしなりければ、得留まらでいそぎ參り給ひければ、喜種、

竹取がよよに泣きつつ留めけむ君はきみにとこよひしも行く

の翁の悲泣して留めし事かの物語に見ゆ
朝拜―正月元日天皇大極殿に出御百官の賀を受け給ふ儀
威儀の命婦―威儀を整へて近侍する女官
南院の君だち―是忠親王の御子等
故后の宮―穩子
故權中納言―敦忠

○監の命婦、朝拜の威儀の命婦にて出でたりけるを、彈正の親王見給ひて、俄に惑ひ懸想し給ひけり。御文ありける御返事に、

うちつけに惑ふこころと聞くからに慰めやすくおもほゆるかな

王の御歌はいかゞありけむ、忘れにけり。また同じ親王に、おなじ女、

こりずまの浦にかづかむ浮海松は浪さわがしくありこそはせめ

○宇多院の花おもしろかりける比、南院の君達、これかれ集りて歌よみなどしけり。右京大夫宗于

來て見れど心もゆかずふるさとはむかしながらの花は散れども

他人のもありけらし。

○季繩少將の女右近、故后宮に候ひけるころ、故權中納言の君おはしける。頼めたまふ事などありけるを、宮に參る事絕えて、里にありけるに、更に訪ひ給はざりけり。内裏邊の人來たりけるに、「いかにぞ參り給ふや」と問ひければ、「常に候ひ給ふ」といひけれ

栗隈の山—山城久世郡

かりに—假に、狩に

忍びて通ひ給ふ人—謙德公ならんといふ

頭—先藏人頭

蔀—檐にありて日光を遮ぎる戸

ば、御文奉りける。

　忘じれと頼めし人はありと聞くいひし言の葉いづちいにけむ

となむありける。

○同女の許に、更に音もせで、雉子をなむ遣せ給へりける。返事に、

　栗隈の山に朝立つきじよりもかりにはあはじと思ひしものを

○同女、内裏の曹子にすみける時、忍びて通ひ給ふ人ありけり。頭なりければ、殿上に常にありけり。雨の降る夜、曹子の蔀のつらに立ちより給へりけるも知らで、雨の漏りければ、筵を引きかへすとて、

　思ふ人雨と降りくるものならば我がもる床はかへさざらまし

となむうち云ひければ、哀と聞き給ひて、ふと這ひ入り給ひにけり。

○同女、男の忘れじと、萬の事をかけて誓ひけれど、忘れにける後にいひやりける。

　忘らるる身をば思はずちかひてし人の命の惜しくもあるかな

かへしはえ聞かず。

○おなじ右近、桃園宰相君なむ、すみ給ふなど云ひのゝしりけれど、虚言なりければ、かの君に詠みて奉りける。

よし思へ海士のひろはぬうつせ貝空しき名をば立つべしや君

となむありける。

○正月の朔日、大納言殿に兼盛參りたりけるに、物など宣はせて、すゞろに「歌よめ」と宣ひければ、ふと詠みたりける。

今日よりは荻の燒原かき分けて若菜つまむとたれをさそはむ

とよみたりければ、二なくめで給ひて、御かへし、

片岡にわらび萠えずは尋ねつつこころやりにや若菜つままし

となむよみ給ふ。

○但馬國に通ひける、兵庫頭なりける男の、かの國なりける女をおきて、京へ上りけれ

萬の事をかけて―あらゆる神佛をひきて

桃園宰相―源保光

うつせ貝―空貝、空しきの序

大納言殿―顯忠

すゞろに―不意に

兵庫頭―衛府に屬し兵器を掌る寮の長官



むろ—牟婁、室
ふすま—衾、臥間
修理の君—葛原直行の女

ば、雪の降りけるに云ひ遣せたりける。

　山里に我をとどめてわかれ路のゆきのまにまに深くなるらむ

と云ひたりければ、

　やまざとに通ふこころも絶えぬべし行くもとまるも心細さに

となむ返したりける。

○おなじ男、紀伊國に下るに、寒しとて、衣をとりに遣せたりければ、女、

　紀のくにのむろの郡に行く人は風のさむさもおもひ知られじ

かへし、男

　紀の國の牟婁の郡に行きながら君とふすまのなきぞかなしき

○修理の君に、右馬頭すみける時、方の塞がりければ、「方違にまかるとて、え參りこぬ」

といへりければ、

　これならぬことをも多く違ふれば恨みむ方もなきぞわびしき

かくて、右馬頭行かずなりにける比、詠みて遣せたりける。

いかでなほ網代の氷魚にこととはむ何によりてか我を問はぬと

といへりければ、かへし、

網代より外には氷魚のよるものか知らずはうちの人に問へかし

○又おなじ女に通ひける時、つとめて詠みたりける。

明けぬとていそぎもぞする逢坂の霧立ちぬともひとに聞かすな

男はじめごろよみたりける。

いかにして我は消えなむ白露のかへりてのちのものはおもはじ

かへし、

垣ほなる君があさがほ見てしがなかへりてのちはものやおもふと

おなじ女に、氣近く物など云ひて、歸りて後に詠みてやりける。

心をし君にとどめて來にしかばもの思ふことは我にやあるらむ

網代ー冬宇治田上邊にかけて氷魚の寄り來るを捕る
うちー宇治、内
つとめてー翌朝
消えなむ白露のー白露の如く消えなむ

故兵部卿宮―元良親王
呉竹の―梁の孝王の修竹園の故事によりて親王の意を添ふ
ひとよ二よ―一節二節―一夜二夜
祭の使―賀茂祭の近衞の中少將などの勤むる役
ゆゝし―忌はし

修理がかへし、

たましひはをかしき事もなかりけり萬のものは骸にぞありける

○同じ女に、故兵部卿宮御消息などし給ひけり。「おはしまさむ」と宣ひければ聞えける。

高くともなににかはせむ呉竹のひとよふたよのあだのふしをば

○三條右大臣、中將にいますがりける時、祭の使にさされて、出で立ち給ひけり。通ひ給ひける女の、絶えて久しくなりにけるに、「かゝる事なむ出で立つ。扇持たるべかりけるを、騷しうてなむ忘れにける。一つ賜へ」と云ひ遣り給へりけり。よしある女なりければ、よくて遣せてむと思ひ給ひけるに、色などもいと淸らなる扇の、香などもいとかうばしうて遣せたり。引き返したる裏の、端の方に書きたりける。

ゆゆしとて忌むとも今はかひもあらじ憂きをば是に思ひよせてむ

とあるを見て、いと哀と思して、かへし、

ゆゆしとて忌みける物を我が爲になしといはぬは誰がつらきなる

左大臣―小野宮實頼

そへに―勿論

齋宮の親王―雅子内親王延喜帝の皇女

御占に―齋宮は卜定するものにてその卜に合ひたまひし也

かひ―效、

○故權中納言、左大臣の君をよばひ給ふ、年の十二月の晦日に、

物思ふと月日のゆくも知らぬ間に今年も今日にはてぬとか聞く

となむありける。又かくなむ。

いかにしてかくおもふてふことをだに人傳ならで君にかたらむ

かくいひ〱て、遂に逢ひにけるあしたに、

今日そへに暮れざらめやはと思へども堪へぬは人の心なりけり

○これも同中納言、齋宮の皇女を年ごろよばひ奉り給ひて、今日明日あひなむとしける程に、伊勢齋宮の御占に合ひ給ひにけり。いふかひなく口惜しと、男思ひ給ひけり。さてよみて奉り給ひける。

伊勢の海ちひろの濱にひろふとも今はかひなくおもほゆるかな

となむありける。

○故中務宮の北方亡せ給ひて後、小き君達を引き具して、三條の右大臣殿にすみ給

貝
中務の宮—代明親王
おとうと—左兵衛督—藤原師尹
もとの宮—宮の内殿
すもり—卵のかへらずして巣にのこるもの
御息所—善子
式部卿の宮—敦實親王
齋宮—柔子内親王敦實の妹

ひけり。御忌など過しては、遂に一人は過し給ふまじかりければ、かの北方の御おとうと九の君をやがて得給はむと思しけるを、何かはさもと親兄弟も思したりけるに、いかゞありけむ、左兵衛督君、侍従に物し給ひける比、其御文持て來となむ聞き給ひける。扨心づきなしとや思しけむ、もとの宮になむ渡り給ひにける。其時に、御息所の御許より、

なき人の巣守にだにもなるべきに今はとかへる今日の悲しさ

宮の御かへし、

巣守にと思ふ心はとゞむれどかひあるべくもなしとこそ聞け

となむありける。

○おなじ右大臣の御息所、帝おはしまさずなりて後、式部卿宮なむすみ奉り給ひけるを、いかゞありけむ、おはしまさゞりける比、齋宮の御許より、御文奉り給へりけるに、御息所、宮のおはしまさぬ事、など聞え給ひて、奥に、

白山にふりにし雪のあと絶えていまはこしぢの人もかよはず

御返しあれど云々—後人の傍注歟

左大臣—師尹の兄實頼

うらやましくも—浦な兼ね

太政大臣—貞信公忠平

御はて—四十九日

色聴され—禁色の衣な

となむありける。御かへしあれど、本になしとあり。

かくて九の君、侍従の君におはせ奉り給ひてけり。同じ比御息所を、宮おはしまさずなりにければ、左大臣の右衛門督におはしける比、御文奉り給ひけり。かの君聟どられ給ひぬ、と聞き給ひて、大臣、御息所に、

浪の打つ方も知らねどわたつ海のうらやましくも思ほゆるかな

○太政大臣の北方うせ給ひて、御はての月になりて、御わざの事急がせ給ふころ、月のおもしろかりけるに、端に出でゐ給ひて、物のいと哀におぼされければ、

隠れにし月はめぐりてきにしかど影にも人は見えずぞありける

○おなじ太政大臣、左大臣の御母、菅原君かくれたまひにける。御服はて給ひにける比亭子の帝、内裏に御消息きこえ給ひて、色聴され給ひける。さりければ、大臣いとゞ清らに蘇芳襲など著給ひて、后宮にまゐり給ひて、院の御消息のいと嬉しく侍りて、かく色聴され侍ることなど聞え給ふ。さて詠み給ひける。

著ることを勅許されぬぐをのみ—喪服を脱ぐ事をのみ

ぬぐをのみ悲しと思ひしなき人のかたみの色は又もありけり

とてなむ泣き給ひける。その程は中辨になむ物し給ひける。

○亭子の帝の御供に、太政大臣、大井に仕うまつり給へるに、紅葉小倉山に、いろ〳〵いと面白かりけるを、限なくめで給ひて、行幸もあらむに、いと興ある所になむありける。必ず奏してせさせ奉らむなど申し給ひて、ついでに、

小倉山みねのもみぢ葉心あらば今ひとたびのみゆき待たなむ

となむありける。かくて歸り給ひて奏じ給ひければ、いと興ある事なりとて、大井の行幸といふ事はじめ給ひける。

○大井に季縄少將すみける比、帝宣ひける、「花おもしろくなりなば、必ず御覽ぜん」とありけるを、おぼし忘れておはしまさざりければ、少將、

散りぬればくやしきものを大井川きしの山吹今日さかりなり

とありければ、いたう哀がり給ひて、急ぎおはしましてなむ御覽じける。



おこたりて―快癒して
むづかしう―不快に
心もとなく―氣懸りにて
あさまし―驚嘆すべし

○おなじ少將、病にいといたう煩ひて、少しおこたりて、內裏に參りたりけり。近江守公忠君、掃部助にて藏人なりける比なりけり。その掃部助に逢ひて云ひけるやう、亂心地はまだおこたりはてねど、いとむづかしう、心もとなく侍ればなむ參りつる。後は知らねど、かくまで侍る事。まかり出でて、明後日ばかり參り來む、よきに奏し給へなど云ひ置きて罷出ぬ。三日ばかりありて、少將の許より、文をなむおこせたりけるを見れば、

悔しくぞ後に逢はむと契りける今日をかぎりといはましものを

とのみ書きたり。いとあさましくて、涙をこぼして使に問ふ。「いかゞ物し給ふ」と問へば、使も「いと弱くなり給ひにたり」といひて泣くを、聞くに「更にも聞えず、みづから只今參りて」と云ひて、里に車とりにやりて待つほどいと心もとなし。近衞御門に出で立ちて、待ちつけて乘りて馳せゆく。五條にぞ少將の家あるに、往きつきて見れば、いといみじく騷ののしりて門鎖しつ。死ぬるなりけり。消息いひ入るれど何のかひなし。

上の條―前條の事實
そのかみ―その當時
來む―歸り來む
故后の宮―溫子皇后
御達―女房達
おもひ―思、緋
掻練―表裏紅の打ちたる物

いみじう悲しくて、泣く〳〵歸りにけり。かくでありけることを、上の條奏しければ、帝も限なく哀がり給ひける。

○土佐守にありける酒井人眞といひける人、病してよわくなりて、鳥羽なりける家に行くとて詠みける。

　行く人はそのかみ來むといふものを心ぼそしや今日の別れは

○平仲が色好みけるさかりに市に行きけり。中比はよき人々いちに行きてなむ、色好むわざはしける。それに故后宮の御達、市に出でける日なむありける。平仲色好みかゝりて、二なう懸想じけり。後に文をなむ遣せたりける。女ども「車なりし人は多かりしを、誰にある文にか」となむ云ひやりける。さりければ男の許より、

　百敷のたもとのかずは見しかどもわきておもひの色ぞ戀しき

といへりける、武藏守の女になむありける。それなむいと濃き掻練着たりける。それなと思ふなりけり。さればその武藏なむ、後は返事はしていひつきにける。かたち清げ

よばひ―いどみ
下待ちけれど―下に來ずの詞を含ませたり
あり〱て―今まで多くの懸想人にも靡かずありきたりて
ことわざ―他に夫を有つこと

に髪長くなどして、よき若人になむありける。いといたう人々懸想じけれど、思ひあがりて男などもせでなむありける。されど切によばひければ逢ひにけり。この朝文をも遣せず、夜まで音もせず。心うしと思ひ明して、又の日待てど文も遣せず。その夜下待ちけれど、朝に、つかふ人など、いとあだにものし給ふと聞きし人を、あり〱てかく逢ひ奉り給ひて、みづからこそ暇もさはり給ふ事ありども、御文をだに奉り給はぬ、心憂き事などこれかれ云ふ。心地にも思ひゐたる事を人も云ひければ、心憂く悔しと思ひて泣きけり。その夜もしやと思ひて待てど又來ず。又の日も文も遣せず、すべて音もせで、五六日になりぬ。この女、音をのみ泣きて物も食はず、使ふ人など大方は「な思しそ、かくてのみ止み給ふべき御身にもあらず。人には知らせでやみ給ひて、ことわざをもし給ひてむ」と云ひけり。物もいはでこもり居て、つかふ人にも見えで、いと長かりける髪をかい切りて、手づから尼になりにけり。つかふ人集りて泣きけれど、いふかひもなし。「いと心憂き身なれば、死なむと思ふにも死なれず。かくだになりて、行をだに

かしがましく―やかましく

司長官―其の頃平仲は左兵衛尉なれば左兵衛督の事なるべし

おひ起し―強ひて起して

類して―連れて

尉の君―平仲

せむ。かしがましくかくな人々いひ騒ぎそ」となむいひける。かゝりけるやうは、平仲その逢ひける翌朝、人おこせむと思ひけるに、司長官、俄に物へいますとて、よりいまして、寄り臥したりけるを、おひ起して、「今まで寝たりける」とて、逍遥しに遠き所へ率ていまして、酒飲みのゝしりてかへしたまはず、辛うじて歸るまゝに、亭子の帝の御供に、大井に率ておはしましぬ。其所に又二夜候ふに、いみじう醉ひにけり。夜更けて歸り給ふに、この女の許いかむとするに、方の塞がりければ、大方みな違ふ方へ、院の人々類していにけり。この女、いかに覺束なく怪しと思ふらむと戀しきに、今日だに日も疾く暮れなむ、行きて有様もみづからいはむ、かつ文を遣らむと醉ひ覺めて思ひけるに、人なむ來てうち叩く「誰そ」と問へば、猶「尉の君に物聞えむ」といふ。さしのぞきて見ればこの家の女なり。胸潰れて「此方來」と云ひて、文を取りて見れば、いと香しき紙に、切なる髪を少し掻いわがねて包みたり。いと怪しうおぼえて、書いたる事を見れば、

くれぬ―くらみぬ
下種―賤者
なでふ―如何なれば
そのかみ―その時
塗籠―壁にて圍みたる室、奥にあり調度など入れ置く所

あまの川そらなるものと聞きしかど我が目の前の涙なりけり

と書きたり。尼になりたるなるべし、と見るに目もくれぬ。心肝(こゝろぎも)をまどはして、この使に問へば、「早う御髪(みぐし)おろし給ひてき。かゝれば御達(ごだち)も、昨日今日いみじう泣き惑ひ給ふ。下種(げす)の心地(こゝち)にも、いと胸痛(むねいた)くなむ。さばかりに侍りし御髪(みぐし)を」といひて泣く時に、男の心地いといみじ。なでふかゝる色好(すき)歩行(ありき)をして、かくわびしき目を見るらむ、と思へどかひなし。なくなく返事(かへりごと)書く。

世をわぶる涙ながれてはやくとも天の川にはさやはなるべき

いとあさましきに、え物も聞えず、「みづから只今參りて」となむ云ひたりける。かくて即ち來にけり。そのかみ女は塗籠(ぬりごめ)に入りにけり。事のあるやう、さばかりを、使ふ人々に云ひて泣く事かぎりなし。「物をだに聞えむ。御聲をだにし給へ」といひけれど、更に答(いらへ)をだにせず。「かゝるさはりをば知らで、なほ只(たゞ)いとほしさに、いふとや思ひけむ」とてなむ、男は世にいみじきことにしける。



さばかり―それだけ
滋幹―大納言藤原國經の子
てへ―といへ
猶しもはたあらざりけ
事實無根にも非ざりし也
うたてあり―甚しくなれり

○滋幹少將に、女、

こひしさに死ぬる命を思ひ出でて問ふ人あらばなしとこたへよ

少將、かへし、

からにだに我きたりてへ露の身の消えばともにと契り置きてき

○中興の近江介が女、物の怪に煩ひて、淨藏大德を驗者にしける程に、人とかくいひけり。猶しもはたあらざりけり。忍びてあり經て後、人の物いひなどもうたてあり。猶世に經じなど思ひ云ひてうせにけり。鞍馬といふ所に籠りて、いみじう行ひ居り。さすがにいと戀しう覺えけり。京を思ひやりつゝ、萬の事いと哀におぼえて行ひけり。泣く〳〵うち伏して、傍を見れば、文なむ見えける。何ぞの文ぞと思ひて取りて見れば、この我が思ふ人の文なり。書けることは、

墨染のくらまの山に入る人はたどるたどるもかへり來ななむ

と書けり。いとあやしく誰して遣せつらむ、と思ひ居り。持て來べき便もおぼえず、い

惑ひ來にけり—京へ也
かしづきて—愛育して
親も見ず—見捨てし也
兵部卿の宮—元良親王

と怪しかりければ、又一人惑ひ來にけり。かくて又山に入りにけり。さておこせたりける。

かへし、

からくして思ひ忘るゝ戀しさをうたて鳴きつるうぐひすのこゑ

さてもきみわすれけりかし鶯の鳴くをりのみやおもひ出づべき

となむいへりける。又淨藏大德、

我がためにつらき人をば置きながらなにの罪なき世をや怨みむ

ともいひけり。この女は二なくかしづきて、皇子たち上達部よばひ給へど、帝に奉らむとておはせざりければ、この事出で來ければ、親も見ずなりにけり。

○故兵部卿宮、この女のかゝること、まだしかりける時、よばひ給ひけり。親王、

荻の葉のそよぐことにぞうらみつるかぜにうつりてつらき心を

これも同じ宮、

あさくこそひとは見るらめ關川(せきかは)の絶ゆる心はあらじとぞおもふ

かへし。

せき川の岩間をくぐる水あさみ絶えぬべくのみ見ゆるこころを

かくて、この女出でて物聞えなどすれど、逢(あ)はでのみありければ、親王(みこ)おはしましたりけるに、月のいと明(あか)かりければ、詠み給ひける。

夜な夜なにいづと見しかど儚(はかな)くて入りにし月といひてやみなむ

と宣ひけり。かくて扇を落し給へりけるを、取りて見れば、知らぬ女の手にてかく書けり。

忘らるる身はわれからのあやまちになしてだにこそ君をうらみめ

と書けりけるを見て、その傍(かたはら)に書きつけて奉りける。

ゆゆしくも思ほゆるかな人ごとに疎(うと)まれにける世にこそありけれ

となむ、又この女、

ときは―常磐、時常磐山は山城
ふる―經る降る
あめの下―雨、天
尚侍―貴子保明太子の御息所、後重明親王の北の方となる

わすらるゝときはの山のねをぞなく秋野の蟲のこゑにみだれて

かへし、

なくなれどおぼつかなくぞ思ほゆる聲聞くことの今はなければ

又同じ宮、

雲井にて世をふるころは五月雨のあめの下にぞ生けるかひなき

かへし、

降ればこそ聲も雲井に聞えけめいとゞはるけき心地のみして

同じ宮に、こと女、

逢ふことの願ふばかりになりぬればたゞに歸しし時ぞこひしき

○南院の今君といふは、右京大夫宗于君の女なり。それ太政大臣の尚侍君の御かたに候ひけり。それを兵衛君、あや君と聞えける時、曹子にしば〳〵おはしけり。おはし絶えにければ、床夏の枯れたるにつけて、かくなむ。

かりそめに君がふしみし床夏の根も枯れにしをいかで咲きけむ

となむありける。

○同じ女、巨城が牛を借りて、又後に借りたりければ、「奉りし牛は死にき」と云ひたりける、返事に、

我が乘りしことをうしとや消えにけむ草にかかれるつゆの命は

○同じ女、人に、

おほ空はくもらずながら神無月としの經るにもそでは濡れけり

○大膳大夫公平の女ども、縣井戸といふ所に住みけり。おほい子は、后宮に少將の御といひて候ひけり。三にあたりけるは、備前守信明、まだ若男なりける時になむ、初の男にしたりける。住まざりければ、詠みて遣りける。

この世にはかくてもやみぬ別路の淵瀨をたれに問ひてわたらむ

となむありける。

かりそめに—俗言のちよと

巨城—仁明一世の源氏歟

公平の女—橘氏、後撰の作者

縣井戸—一條の北東洞院の西角

おほい子—長女

信明—源公忠の男

○おなじ女、後に兵衛尉應忠に逢ひて、詠みて遣せたりける。風吹き雨降りける日のことになむ。

こち風はけふ日暮しに吹くめれど雨もよにはたよにもあらじな

とよみけり。

○兵衛尉離れて後、臨時祭の舞人にさされて行きけり。この女ども、物見に出でたりけり。さてかへりて詠みてやりける。

昔きてなれしをすれる衣手をあなめづらしとよそに見るかな

かくて兵衛尉、山吹につけておこせたりける。

もろともに井出の里こそひしけれひとりをりうき山吹のはな

となむ。かへしは知らず。かくてこれは、女通ひける時に、

大空もただならぬかな神無月我のみしたにしぐるとおもへば

これも同じ人、

別路の淵瀬ー佛說にいふ冥途の川、三途の川

こち風ー東風、此方をかけたり

雨もよに云云ー今夜はよも來らじと人待つ女の情を表せり

なれしなすれるー尉も舞人も皆摺の袍着る故に皆相馴れし時の事な



ど思ひ出されし意を添へていふ
ひぢ―濡れ
少貳の乳母―村上天皇の御乳母
桂の皇女―季子内親王
閑院のおほい君―源宗于の女

　　逢ふことのなみの下草水がくれてしづ心なく音こそなかるれ

○桂の皇女、七夕の比、忍びて逢ひ給へりけり。さて遣り給へりける。

　　袖をしもかさざりしかど七夕のあかぬ別れにひぢにけるかな

○右大臣の、頭におはしける時に、少貳の乳母の許に詠みて給ひける。

　　秋の夜を待てとたのめし言の葉に今もかかれる露のはかなさ

となむ。

○公平の女、死ぬとて、

　　秋も來ず露も置かねど言の葉は我がためにこそ色かはりけれ

○桂の皇女、よしたねに、

　　ながけくも賴みけるかな世の中をそでに涙のかかる身をもて

○閑院のおほい君、

　　露しげみ草のたもとを枕にてきみまつむしの音をのみぞなく

むかしより思ふこゝろはありそ海の濱のまさごは數も知られず

○同じ女に、陸奥國の守にて死にし藤原眞樹が、詠みて遣せたりける。病いと重くしておこたりける比なり。「いかで對面給はらむ」とて、

からくして惜みとめたる命もて逢ふことをさへやまむとやする

といへりければ、おほい君、かへし、

諸共にいざとはいはで死出の山などかはひとり越えむとはせし

といひたりけり。さて來たりける夜もえ逢ふまじき事やありけむ、え逢はざりければ歸りにけり。さて朝に、男の許より云ひ遣せたりける。

あかつきはゆふつけ鳥のわび聲におとらぬ音をぞ鳴きて歸りし

おほい君、かへし、

あかつきの寢覺のみみに聞きしかど鳥よりほかの聲はせざりき

○太政大臣は、大臣になり給ひて年比おはするに、枇杷大臣は、えなり給はでありわた

ありそ—荒磯、有

眞樹—乙麿の男

やまむ—病まむ歇まむ

おほい君—大君、長姊

ゆふつけ鳥—鷄、木綿付けて神祭に用ふるよりの名

太政大臣—忠平

枇杷大臣—仲平、忠平の兄

齋宮―柔子なり
三條の右の大殿の女御―定方の女善子女御
としぎり―年齡の約、果樹の年によりてならぬ事
左の大臣の中納言―小野宮左大臣實頼の中納言なりし時

りけるを、つひに大臣になり給ひける御悦に、太政大臣、梅を折りてかざし給ひて、

遅く疾くつひに咲きける梅の花たが植ゑおきし種にかあるらむ

とありけり。その日の事どもを、歌など書きて、齋宮に參り給ふとて、三條右大殿の女御、やがてこれに書きつけ給ひける。

いかでかくとしぎりもせぬ種もがなあれゆく庭の陰とたのまむ

とありけり。その御返し、齋宮よりありけり。忘れにけり。かくて願ひ給ひけるかひありて、左大臣の中納言、渡り住み給ひければ、種皆ひろごり給ひて、陰多くなりにけり。さりける時に、齋宮より、

花ざかり春は見に來む年ぎりもせずといふ種は生ひぬとか聞く

○實任少貳といひける人のむすめの男、

笛たけのひとよも君と寢ぬときは千種のこゑに音こそなかるれ

といへりければ、女かへし、

蔭多く—子孫繁昌
笛竹の—ひとよの序
ことばのふき—口笛、詞のいひなしの意を兼ぬ
こちく—胡竹、此方來
増基君—後撰の作者増基法師と同人歟
はし殿—山谷にかけし橋などの如くに造れる屋

千千の音はことばのふきか笛竹のこちくの聲も聞え來なくに

○とし子が志賀に詣でたりけるに、増基君といふ法師ありけり。それは比叡にすむ、院の殿上もする法師になむありける。それこのとし子の詣でたる日、志賀にまうであひにけり。はし殿に局をしてゐて、萬の事をいひかはしけり。今はとし子歸りなむとしけり。それに増基の許より、

逢ひ見ても別るる事のなかりせばかつがつ物は思はざらまし

かへし、

いかなればかつがつ物を思ふらむ名殘もなくぞわれは悲しき

となむありける。詞もいと多くなむありける。

○同じ増基君、遣れる人の許は知らず、かう詠めりけり。

草の葉にかかれるつゆの身なればや心動くになみだ落つらむ

○本院の北方、まだ帥大納言の妻にていますがりける折に、平仲が詠みて聞えける。

本院の北の方—時平妻　帥の大納言—國經、時平の伯父、時平その妻を奪へり　我が君實云—我が妻として行末を頼まんと思ふが如何　のゝしり—評判高し　泉の大將—定國　故左の大臣—時平　ゆくりもな

春の野にみどりにはへるさねかづら我が君實とたのむいかにぞ

といへりける。その後左大臣の北方にて、のゝしり給ひける時、詠みて遣せたりける。

ゆくすゑの宿世も知らず我がむかし契りしことはおもほゆや君

となむいへりける。その返し、それより前々も、歌は多かりけれどえ聞かず。

○泉大將、故左大臣に參で給へりけり。ほかにて酒などまゐり、醉ひて夜いたく更けて、ゆくりもなくものし給へり。大臣驚き給ひて、「何處にものし給へる便にかあらむ」など聞え給ひて、御格子あけ騷ぐに、壬生忠岑御供にあり、御階の下に松ともしながら、ひざまづきて御消息申す。

「かささぎの渡せる橋の霜の上を夜半に踏み分けことさらにこそ

となむ宣ふ」とまうす。主人の大臣、いと哀にをかしと思して、その夜一夜、御酒まゐり遊び給ひて、大將にものかづけ、忠岑も祿賜はりなどしけり。

○この忠岑が女ありと聞きて、或人なむ得むといひけるを、いと善き事なりといひけり。



くー不慮に
松ー松明
かさゝぎの云々ー天の川上の橋、家持の歌を本としてよめり
たのめ給ひー約束し
結びどきー嫁期
檜垣の御ー名高き筑紫の遊女
勞ありー世馴れて
野大貳ー太宰大貳小野

男の許より「かのたのめ給ひし事、このごろの程にとなむ思ふ」といへりける返事に、

我が宿のひともとすすきうら若み結びどきにはまだしかりけり

となむ詠みたりける。誠にまだいと小さき女になむありける。

○筑紫にありける檜垣の御といひけるは、いと勞あり、をかしくて世を經けるものになむありける。年月かくてあり渡りけるを、純友が騒に逢ひて、家も燒けほろび、物具もみな捕られはてゝ、いといみじうなりにけり。かゝりとも知らで、野大貳追討使にくだりたまひて、それが家のありし邊を尋ねて、「檜垣の御と云ひけむ人に、いかで逢はむ。何處にか住むらむ」と宣へば、「この邊になむ住み侍りし」など、供なる人もいひけり。「あはれかゝるさわぎに、いかになりにけむ。尋ねてしがな」と宣ひける程に、頭白き嫗の水汲めるなむ、前より怪しきやうなる家に入りける。ある人ありて、「これなむ檜垣の御」と云ひけり。いみじうあはれがり給ひて呼ばすれど、恥ぢて來でかくなむいへりける。

ぬばたまの我が黒髪はしら川のみづはくむまでなりにけるかな

好古
みづはぐむ―老人の齒脫して更に小齒の生ずること、水汲むを懸く

そこ―底、其許

人をまつ云云―檜垣歌集に見えた

と詠みたりければ、あはれがりて、著たりける袙一襲脫ぎてなむ遣りける。

○又同じ人、大貳の館にて、秋の紅葉を詠ませければ、

鹿の音はいくらばかりの紅ぞふり出づるからに山の染むらむ

この檜垣の御、歌なむ詠むといひて、すき者ども集りて、「詠み難かるべき末をつけさせむ」とて、かくいひけり。

わたつ海の中にぞ立てるさを鹿は

とて、末をつけさするに、

秋のやまべやそこに見ゆらむ

とぞつけたりける。

○筑紫なりける女、京に男を遣りてよみける。

人を待つ宿はくらくぞなりにける契りし月のうちに見えねば

となむいへりける。

○これも筑紫なりける女、

　秋風のこころやつらき花すすき吹き來る方をまづそむくらむ

○先帝の御時、四月の朔日の日、鶯の鳴かぬを詠ませ給ひける。公忠、

　春はただきのふばかりを鶯のかぎれるごとも鳴かぬ今日かな

となむ詠みたりける。

○同じ帝の御時、躬恒を召して、月のいとおもしろき夜、御遊などありて、「月を弓張といふは何の意ぞ、そのよし仕うまつれ」と仰せ給ひければ、御階の下に候ひて仕うまつりける。

　照る月を弓はりとしもいふ事は山邊をさしていればなりけり

祿に大袿かづきて、又、

　白雲のこのかたにしもおりゐるは天つ風こそ吹きて來つらし

○同じ帝、月のおもしろき夜、密に御息所たちの御曹子どもを、見ありかせ給ひけり。

り。

契りし月の云々—いつ歸り來むと約せし月。天上の月をも兼ねたり

先帝—醍醐天皇

弓張—漢に八九日の月を上弦と爲し廿三四日を下弦と爲す

いれば—入、射

このかた—此方と此肩とを兼ねた

り纒頭を賜はる時は肩にかけて拜すればなり
濃き―紅色の
髪を振り覆ひて―顏をかくして

御供に公忠候ひけり。それにある御曹子より、濃き袿一襲著たる女の、いと淸げなる出で來て、いみじう泣きけり。公忠を召して見せ給ひければ、髮を振り覆ひていみじう泣く。「などてなくぞ」といへど、答もせず。帝いみじう怪しがり給ひけり。公忠、

思ふらむ心のうちは知らねどもなくを見るこそかなしかりけれ

と詠めりければ、いと二なくめで給ひけり。

ものか、いみじう—驚嘆し下に余意を含めて書き捨てたる筆法
三條右大臣—定方
堤中納言—兼輔

大和物語　下之巻

○先帝の御時に、ある御曹子にきたなげなき童ありけり。帝御覽じて、密に召してけり。これを人にも知らせ給はで、時々召しけり。さて宣はせける、

　飽かでのみ經ればなるべし逢はぬ夜もあふ夜も人を哀とぞ思ふ

と宣はせけるを、童の心地にも、限なく哀におほえければ、忍びあへで、友だちに「さなむ宣ひし」と語りければ、この主なる御息所、聞きて追ひ出で給ひけるものか。いみじう。

○三條右大臣の女、堤中納言に逢ひはじめ給ひける間は、内藏助にて、内裏の殿上をなむし給ひける。女は逢はむの心やなかりけむ、心もゆかずなむいますがりける。男も宮づかへし給ひければ、え常にもいまさざりけるころ、女、

　薫物のくゆる心はありしかどひとりは絶えて寢られざりけり

くゆる—ふすぶる、悔ゆる

つれ〴〵—退屈

故兵部卿宮—元良親王

かりにのみ—狩に、かりそめに

しか山—志賀、鹿

かへしは、上手なればよかりけめど、え聞かねば書かず。

○又男、「日比さわがしくてなむえ參らぬ、かく急ぎ罷りありく中にも、え參り來ぬことをなむ、いかにと限なく思ひ給ふる」とありければ、女、

騒ぐなるうちにも物はおもふなり我がつれづれを何にたとへむ

となむありける。

○志賀の山越の道に、岩江といふ所に、故兵部卿宮、家をいとをかしう造り給ひて、時々おはしましけり。いと忍びておはしまして、志賀に詣づる女どもを見給ふ時もありけり。大方もいとおもしろう、家もいとをかしうなむありける。とし子、志賀に詣でける序に、この家に來て廻りつゝ見て、哀がりめでなどして書きつけたりける。

かりにのみ來る君待つとふり出でて鳴くしか山は秋ぞかなしき

となむ。

○小藥師久曾といひける人、ある人をよばひて遣せたりける。



かくれぬ―隠沼、水草などに蔽はれたる沼
水隠に云々―此男丈短き故にいへり
先帝―醍醐天皇
承香殿の御息所―帝の御母
あくた川―芥、厭く

隠れ沼の底の下草みがくれて知られぬこひはくるしかりけり

かへし、女、

水隠にかくるばかりのした草は長からじともおもほゆるかな

この小薬師といひける人は、丈なむいと短かりける。

○先帝の御時に、承香殿の御曹子に、中納言君といふ人候ひけり。それを故兵部卿宮若男にて、一宮と聞えて色好み給ひけるころ、承香殿は、いと近き程になむありける。らうあり、をかしき人々あり、と聞き給ひて、物など宣ひかはしけり。さりけるころほひ、この中納言君に、忍びて寝給ひそめてけり。時々おはしまして後、この宮をさ〳〵訪ひ給はざりけり。さるころ、女の許より奉りける。

人をとくあくた川てふ津の國の名には違はぬ君にぞありける

かくて物も食はで、泣く〳〵病になりて戀ひ奉りける。かの承香殿の前の松に、雪の降りかゝりたりけるを折りて、かくなむ聞え奉りける。

ゆめ—決して
昇大納言—河原左大臣源融の男
大殿籠—御寢
さながら—其の儘
人なみ—人無き故に。
しきたへの—敷栲・床枕などにか

来ぬ人をまつの葉にふる白雪の消えこそかへれ逢はぬ思ひに

とてなむ、「ゆめこの雪おとすな」と、使にいひてなむ奉りける。

○故兵部卿宮、昇大納言の女にすみ給ひけるを、例の御座所にはあらで、廂に御座敷きて、大殿籠などして歸り給ひて、程久しうおはしまさざりけり。かくて宣へりける、「かの廂に敷かれたりしものは、さながらありや、取りたてやし給ひてし」と宣へりければ、御返事に、

敷きかへずありしながらに草枕塵のみぞゐるはらふひとなみ

とありければ、御返しに、

草まくらちりはらひには唐ころも袂ゆたかにたつを待てかし

とありければ、又、

唐衣たつを待つ間のほどこそは我がしきたへの塵もつもらめ

となむありければ、おはしまして、又「宇治へ狩しになむ往く」と宣ひける。御かへし

かゝ枕詞なれどもこゝには寢具の事

よしいゑ—よしうゑを誤寫せしならむといふ、橘良殖延喜十九年參議となる

ひとの國がちに—地方官などにて他國に有りがちなり

外の便—別方面よりの書信

に、

御狩するくりこま山のしかよりもひとり寢る夜ぞわびしかりける

○よしいゑといひける宰相の兄弟、大和掾といひてありけり。それが本妻の許に、筑紫より女を率て來てすゑたりけり。本妻も心よく語ひ居たりけり。かくてこの男は、此處彼處ひとの國がちにのみありきければ、二人のみなむゐたりける。この筑紫の妻、忍びて男したりけり。それを人のとかく云ひければ、詠みたりける。

夜半に出でて月だに見ずば逢ふ事を知らず顏にもいはましものを

となむ。かゝるわざをすれど、本妻いと心よき人なれば、男にもいはでのみなむあり渡りけれども、外の便よりかく男すなり、と聞きて、この男思ひたりけれど、心にも入れで、たゞさるものにて置きたりけり。さてこの男、女他人にもの云ふ、と聞きて、「その人と我といづれをか思ふ」と問ひければ、女、

はなすすき君がかたにぞなびくめるおもはぬ山のかぜは吹けども

猶男せじ云云ー女の心に悔いて再び害夫に逢はじと思ふ也

ありならひー居り馴れ

となむいひける。よばふ男もありけり。世中こゝろうし。猶男せじ、などいひけるものなむ、この男をやう〳〵思ひやつきけむ、この男の返事などして遣りて、この本妻の許に、文をなむひき結びて遣せたりける。見れば、かく書けり。

身をうしとおもふ心のこりねばや人をあはれと思ひそむらむ

となむ、こりずまに詠みたりける。かくて心の隔もなく哀なれば、いとあはれと思ふ程に、男は心かはりにければ、ありしごともあらねば、かの筑紫に、親兄弟などありければ往きけるを、男も心變りければ、留めでなむやりける。本妻なむ諸共にありならひにければ、かくていく事をいと悲しと思ひける。山崎に諸共に往きてなむ、船に乘せなどしける。男も來たりけり。この後妻前妻、一日一夜萬の事を云ひ語ひて、翌朝船に乘りぬ。今は男、本妻は、歸りなむとて車に乘りぬ。これもかれもいと悲しと思ふほどに、船に乘り給ひぬる人の文をなむ持てきたる。かくのみなむありける。

ふたり來し道とも見えぬ浪の上を思ひかけでも歸すめるかな

おほい子—長姉

らう〳〵し—勞々の字音、巧者なり

おとうと—妹

よしづきてをかしく—人がらの由めき趣ありて。

といへりければ、男も本妻も、いといたう哀がり泣きけり。漕ぎ出でて往ぬれば、え返事もせず、車は船の行くを見て得往かず、船に乗りたる人は車を見るとて、面をさし出でて漕ぎ行けば、遠くなるまゝに、顔はいと小くなるまで見遣せければ、いと悲しかりけり。

○故御息所の御姉、おほい子に當り給ひけるなむ、いとらう〳〵しく、歌よみ給ふ事も、おとうとたち、御息所よりも勝りてなむいますがりけり。若き時に、女親はうせ給ひにけり。繼母の手にいますがりければ、心に物の叶はぬ時もありけり。さて詠み給ひける。

ありはてぬ命まつ間の程ばかり憂きことしげく歎かずもがな

となむよみ給ひける。梅の花を折りて、また、

かかる香の秋もかはらず匂ひせば春戀してふながめせましや

とよみ給へりける。いとよしづきて、をかしくいますがりければ、よばふ人もいと多かりけれど、返事もせざりけり。「女といふもの、遂にかくて終て給ふべきにもあらず。時

時は返事し給へ」と、親も繼母もいひければ、責められて、かくなむいひ遣りける。

　思へどもかひなかるべみ忍ぶればつれなきともや人の見るらむ

とばかり云ひやりて、物もいはざりけり。かく云ひける心ばへは、親など男あはせむといひけれど、一生に男せでやみなむといふ事を、世と共にいひける。さいひけるも著く、男もせで二十九にてなむ、亡せ給ひにける。

○昔在中將の御息子、在次君といふが妻なる人なむありける。女は山蔭中納言の御姪にて、五條の御となむ云ひける。かの在次君の妹の、伊勢守の妻にて、いますがりけるが許に往きて、守の召人にてありけるを、この妻の兄の在次君は、忍びてすむになむありける。我のみと思ふに、この男の兄弟なむ、又あひたる氣色なりける。さりければ女の許に、[illegible]

　忘れなむと思ふ心の悲しさはうきも憂からぬものにぞありける

となむ詠みたりける。今は皆ふるごとになりにたる事なり。

べみ―べきにより

在中將―在原業平

在次君―業平の次男滋春

召人―妾

すむ―通

この男の兄弟―在次君の兄弟には棟梁師尚等

あり
けにや—故にや
小總驛—相模
泣きつめ—泣きとほし
みのわびしさ—身の佗しさ、箕輪
かりそめ—暫時
ゆきかひ—往復路、甲斐路

○この在次君、在中將の東に往きたるけにやあらむ、この子どもも、他國がよひをなむ時々しける。心あるものにて、他國の哀に心細き所にては、歌詠みて書きつけなどなむしける。小總驛といふ所は、海邊になむありける。それに詠みて書きつけたりける。

わたつ海と人や見るらむ逢ふことの涙をふさに泣きつめつれば

又箕輪の里といふ驛にて、

いつはとは別かねど絶えて秋の夜ぞ身の佗しさは知り勝りける

と詠みて書きつけたりけり。かくて他國ありき〳〵て、甲斐國に到りて住みける程に、病して死ぬとて、詠みたりける。

かりそめのゆきかひ路とぞ思ひしを今はかぎりの門出なりけり

とよみてなむ死にける。この在次君の一所に具して知りたりける人、三河國より上るとて、この驛どもに宿りて、この歌どもを見て、手は見知りたりければ、見つけていと哀と思ひけり。

川尻―攝津淀川尻
白―大江玉淵の女
すなはち―卽時に
あはとこそ見れ―彼はと遙に見る
かづけ物―纏頭
鳥飼の院―攝津

○亭子の帝、河尻におはしましにけり。遊女に白といふものありけり。召しに遣したりければ、參りてさぶらふ。上達部、殿上人、皇子達の數多候ひ給ひければ、下に遠くさぶらふ。「かう遙に候ふよし、歌仕うまつれ」と仰せられければ、卽ち詠みて奉りける。

濱千鳥飛び行くかぎりありければ雲立つ山をあはとこそ見れ

と詠みたりければ、いとかしこくめで給ひて、かづけ物賜ふ。

いのちだに心にかなふものならば何かわかれの悲しからまし

といふ歌も、この白が詠みたる歌なりけり。

○亭子の帝、鳥飼の院におはしましにけり。例のごと御遊あり。この邊の遊女ども數多參りて候ふ中に、「聲おもしろく、よしあるものは侍りや」と問はせ給ふに、遊女ばらの申すやう、「大江玉淵が女といふものなむ、珍らしう參りて侍る」と申しければ、見させ給ふに、さまかたちも淸げなりければ、あはれがり給ひて、うへに召し上げ給ふ。「そもそも實か」など問はせ給ふに、鳥飼といふ題を、人々に詠ませ給ひにけり。仰せ給ふやう、

淺みどりかひあるー鳥飼を隱しよめり
しほたれー深く感歎し
上下ー上臈も下臈も
南院の七郎君ー是忠親王の七男源清平の事歟
佗しー辛し

「玉淵はいと勞ありて、歌などよくよみき。この鳥飼といふ題を、よく仕うまつりたらむにしたがひて、實の子とは思ほさむ」と仰せ給ひけり。承りて、すなはち、

淺みどりかひある春に逢ひぬれば霞ならねど立ちのぼりけり

と詠む時に、帝のよしり哀がり給ひて、御しほたれ給ふ。人々もよく醉ひたる程にて、醉泣いと二なくす。帝、御袿一襲、袴たまふ。「ありとある上達部、皇子達、四位五位、これに物ぬぎて取らせざらむものは、座より立ちね」と宣ひければ、片端より上下みなかづけたれば、かづき餘りて、二間ばかり積みてぞ置きたりける。かくて歸り給ふとて、南院の七郎君といふ人ありけり、それなむこの遊女の住む邊に、家造りて住むと聞しめして、それになむ宣ひあづけらる。「かれが申さむ事院に奏せよ。院より賜はせむものも、かの七郎君許遣さん。すべてかれに佗しき目な見せそ」と仰せられければ、常になむ訪ひかへりみける。

○昔、津の國に住む女ありけり。それをよばふ男、二人なむありける。一人は、その國に



しわびぬ―處置に苦めり
いとほし―氣の毒なり
つら―畔
平帳―日被ひの天幕
をさなき者―己の娘

住む男、姓は菟原になむありける。今一人は、和泉國の人になむありける。姓は血沼となむいひける。かくてその男ども、年齢、顔容貌、人の程、たゞ同じばかりになむありける。志の優らむにこそはあはめ、と思ふに、志の程只同じやうなり。暮るれば諸共に來あひぬ。物遣すれば、只同じやうにおこす。いづれ優れりといふべくもあらず。女思ひ煩ひぬ。この人の志の疎ならば、いづれにも逢ふまじけれど、此も彼も月日を經て、家の門に立ちて、萬に志を見えければ、しわびぬ。此よりも彼よりも、同じやうに遣する物ども、取りも入れねど、いろ〳〵に持ちて立てり。親ありて、「かく見苦しく年月を經て、人のなげきを徒に負ふもいとほし。ひとり〳〵に逢ひなば、今一人が思ひは絶えなむ」といふに、女「こゝにもさ思ふに、人の志の同じやうなるになむ思ひ煩ひぬる。さらばいかゞすべき」といふに、そのかみ生田川のつらに、平張をうちて居にけり。かかれば、そのよばひ人どもを呼びに遣りて、親のいふやう、「誰も御志の同じやうなれば、このをさなきものなむ思ひ煩ひにて侍る。今日いかにまれ、この事を定めてむ。或は遠

いたづき―勞苦し

當時―其の時

はふり―葬

き所よりいまする人あり。或は此處ながらそのいたつき限なし。此も彼も、いとほしきわざなり」といふ時に、いとかしこく喜びあへり。「申さむと思う給ふるやうは、この川に浮きて侍る水鳥を射給へ。それを射當て給へらむ人に奉らむ」といふ時に、「いとよき事なり」といひて射る程に、一人は頭の方を射つ。今一人は尾の方を射つ。そのかみ何れといふべくもあらぬに、女思ひわづらひて、

住みわびぬわが身なげてむ津の國の生田の川は名のみなりけり

と詠みて、この平張は川に臨みてしたりければ、つぶりと落ち入りぬ。親あわて騷ぎののしる程に、このよばふ男二人、やがて同じ所に落ち入りぬ。一人は足をとらへ、今一人は手をとらへて死にけり。そのかみ親いみじく騷ぎて、取り上げて泣きのゝしりてははふりす。男どもの親も來にけり。この女の塚の傍に、また塚ども作りて掘り埋む。時に津の國の男の親いふやう、「同じ國の男をこそ同じ所にはせめ。他國の人のいかでかこの國の土をば犯すべき」といひて妨ぐる時に、和泉の方の親、和泉國の土を船に運びて、

故后の宮—温子
伊勢御息所の下、一本「男の心にて」の五字あり
女一の宮—拘子内親王 寛平第五皇女、母温子
兵衛の命婦—藤原高經の女
つかの間—暫時の間
絲所の別當

此處にもて來てなむ逢に埋みてける。されば女の墓をば中にて、左右になむ男の塚ども今もあなる。かゝる事どもの昔ありけるを、繪にみな書きて、故后宮に人の奉りければ、これがうへを、みな人々、この人に代りて詠みける。

伊勢の御息所、男の心にて、

影とのみ水のしたにて逢ひ見れば魂なき骸はかひなかりけり

女になり給ひて、女一の宮、

かぎりなく深く沈める我が魂は浮きたる人に見えむものかは

また、宮、

何處にか魂を求めむわたつ海のここかしことも思ほえなくに

兵衛命婦、

束の間ももろ共にとぞ契りける逢ふとは人に見えぬものから

絲所の別當、

—春澄善縄の女治子、綵所は采女町の北にあり縫殿の別所

かたみ—難み、籠

女—女になりての意

みぎは—身汀

かぎりて—墓の周圍を結びめぐらして、

勝ちまけもなくてやはてむ君により思ひくらぶの山は越ゆとも

生きたりし折の女になりて、

逢ふ事のかたみに植うるなよ竹のたちわづらふと聞くぞ悲しき

また、人、

身をなげて逢はむと人に契らねどうき身は水にかげをならべつ

又、一人の男になりて、

同じ江に住むはうれしきなかなれどなど我とのみ契らざりけむ

かへし、女、

うかりける我が水底をおほ方はかかるちぎりのなからましかば

又、一人の男になりて、

われとのみ契らずながら同じ江にすむは嬉しきみぎはとぞ思ふ

さてこの男は、呉竹の節ながきを切りて、かぎりて、狩衣、袴、烏帽子、帯などを入れ

まみれ—濡れ汚れ
わびにて—困じて
御徳に—御恩惠により
むくつけし—恐し

て、弓、胡籙、太刀などを入れてぞ埋みける。今一人は、おろかなる親にやありけむ、さもせずぞありける。かの塚の名をば、處女塚とぞいひける。ある旅人、この塚のもとに宿りたりけるに、人のいさかひする音のしければ、怪しとは思ひて見せけれど、「さる事もなし」といひければ、怪しと思ふ〳〵眠りたるに、血にまみれたる男、前に來て跪きて、「われ敵にせめられてわびにて侍り。御太刀暫貸し給はらむ。妬き者の報し侍らむ」といふに、恐しと思へど貸してけり。覺めて夢にやあらむと思へど、太刀は誠にとらせて遣りてけり。とばかり聞けば、いみじう前の如諍ふなり。暫ありて初の男來て、「いみじう喜びて、御徳に年比妬き者うち殺し侍りぬ。今よりは長き御守護となり侍るべき」とて、この事の初より語る。いとむくつけしと思へど、珍しき事なれば、問ひ聞く程に、夜も明けにければ人もなし。朝に見れば、塚のもとに血などなむ流れたりける。太刀にも血つきてなむありける。いとうとましく覺ゆる事なれど、人の云ひけるまゝなり。

○津の國の難波の邊に、家して住む人ありけり。あひ知りて年比ありけり。女も男も、い

と下種にはあらざりけれど、年比わたらひなどもいとわろくなりて、家も毀れ、使ふ人などもある所に行きつゝ、只二人棲み渡る程に、さすがに下種にもあらねば、人に雇はれ使はれもせず、いと侘しかりけるまゝに、思ひわびて二人云ひけるやう、「猶いとかう侘しうてはえあらじ」。男は「かくはかなくていますかめるを見捨てては、いづちもいづちもえ行くまじ」。女も「男を捨てては、何方かいかむ」とのみ云ひ渡りけるを、男「己はとてもかくても經なむ、女のかく若き程に、かくてあるなむいといとほしき。京に上りて宮仕をもせよ。よろしきやうにもならば、我をもとぶらへ。己も人の如もならば、必ず尋ねとぶらはむ」など、泣く〳〵いひ契りて、使の人にいひつきて、女は京に來にけり。さしはへ何處ともなくて來れば、このつきて來し人の許にゐて、いと哀と思ひやりけり。前に荻薄いと多かる所になむありける。風など吹きけるに、かの津の國を思ひやりて、いかであらむなど悲しくてよみける。

ひとりしていかにせましと侘びつればそよとも前の荻ぞこたふる

わたらひ―活計

いとほしき―氣の毒なり

さしはへ―目ざして

そよ―風聲に然りの意を兼ぬ

さすらへ—流涙す
宮たてたり—宮仕に出でたりの意歟
心ともえやらず—態々の使は遣り得ず
うたて—一本なし
我が男—後の夫
念じつゝ—堪へ忍びて

となむ獨語ちける。さてとかう女さすらへて、或人のやごとなき所に宮たてたり。さて宮仕しありく程に、裝束きよげにし、むつかしき事などもなくてありければ、いと淸げに顏容貌もなりにけり。かゝれど、かの津の國を片時も忘れず、いと哀と思ひやりけり。便の人に文つけて遣りたりければ、「さいふ人も聞えず」など、いとはかなく云ひつゝ來けり。我が睦しう知れる人もなかりければ、心ともえやらず、いと覺束なく如何あらむとのみ思ひやりけり。かゝる程に、この宮仕へする所の北方うせ給ひて、此彼ある人を召し使ひ給ひなどする中に、この人を思ひ給ひけり。思ひつきて妻になりにけり。思ふ事もなくめでたげにてゐたるに、只人知れず思ふ事一つなむありける。いかにしてあらむ、惡しうてやあらむ善くてやあらむ、我が在所もえ知らざらむ。人を遣りてたづねさせむとすれど、うたて、我が男聞きてうたてあるさまにもこそあれ、と念じつゝあり渡るに、猶いと哀に覺ゆれば、男に云ひけるやう「津の國といふ所のいとをかしげなるに、いかで難波に祓しがてら罷らむ」と云ひければ、「いとよき事、我も諸共に」といひけれ

ふりはへ—わざ〳〵

促してむ—急がせ立てん

ば、「其許にはな物し給ひそ。おのれ獨罷らむ」といひて、出で立ちていにけり。難波に祓して歸りなむとする時に、「この邊に見るべき事なむある」とて、「今少しとやれかくやれ」といひつゝ、この車を遣らせつゝ、家のありしわたりを見るに、屋もなし人もなし何方へいにけむと悲しう思ひけり。かゝる心ばへにてふりはへ來たれど、我が睦じき從者もなし。かゝれば尋ねさすべきかたもなし。いと哀なれば、車を立てゝ眺むるに、供の人は「日暮れぬべし、とく御車促してむ」といふに「暫」といふ程に、蘆荷ひたる男の、乞兒のやうなる姿なる、この車の前よりいきけり。これが顏を見るに、その人といふべくもあらず、いみじきさまなれど、我が男に似たり。これを見てよく見まほしさに、「この蘆持ちたる男呼ばせよ、蘆買はむ」といはせけり。さりければ、用なきもの買ひ給ふとは思ひけれど、主の宣ふことなれば、呼びて買はす。「車のもと近く荷ひ寄せさせよ、見む」など云ひて、この男をよく見るにそれなりけり。いと哀に、「かゝる物荷ひて世に經る人、いかならむ」と云ひて泣きければ、供の人は、なほおほかたの世を哀がる



すゞろ―むやみ
下簾―車の簾の内に懸くる帷
まもれば―見つむれば
いらなく―ひどく
打ちひかせ―打擲し引きずり
幼き者―初心者
あしかり―蘆刈、惡しかり

となむ思ひける。かくて「この蘆の男に物など食はせよ、物いと多く蘆の價に取らせよ」といひければ、「すゞろなるものに、何か物多く賜はむ」など、ある人々いひければ、強ひてもえいひにくくて、いかで物を取らせむ、と思ふ間に、下簾の間のあきたるより、この男まもれば我が妻に似たり。怪さに、心ををさめて見るに、顏も聲もそれなりけり。と思ふに、思ひあはせて、我がさまのいといらなくなりにけるを思ひはかるに、いとはしたなくて、蘆もうち捨てて走り逃げにけり。暫しと云はせければ、人の家に逃げ入りて、竈の後方に屈まり居りけり。この車より、「猶この男尋ね率て來」といひければ、供の人手を分ちて覓め騒けり。人、「そこなる家になむ侍る」といへば、この男に「かく仰事ありて召すなり。何の打ち引かせ給ふべきにもあらず、物をこそ賜はせむとすれ。幼き者なり」といふ時に、硯を乞ひて文を書く。それに、

君なくてあしかりけりと思ふにもいとゞ難波の浦ぞ住みうき

とかきて、封じて、「これを御車に奉れ」といひければ、怪しとおもひて持て來て奉る。

車に著たりける―車中にて著居たる

あしからじ云々―拾遺集に見えたる返歌、後人の加筆歟

いとわろくなり―家社の貧しくなりしなり

ことわざ―他の男

あけて見るに、悲しきこと物に似ず、よゝとぞ泣きける。さて返しは如何したりけむ、知らず。車に著たりける衣脱ぎて、包みて文など書き具してやりける。さてなむかへりける。後はいかゞなりにけむ、知らず。

あしからじとてこそ人の別れけめ何かなにはの浦はすみうき

○昔、大和國葛城郡に住む男女ありけり。この女、顔容貌いと淸らなり。年比思ひかはしてすむに、この女、いとわろくなりにければ、思ひ煩ひて、限りなく思ひながら妻をまうけてけり。この今の妻は、富みたる女になむありける。殊に思はねど、往けばいみじういたはり、身の裝束いと淸らにせさせけり。かくにぎはゝしき所に慣ひて來れば、この女いとわろげにて居て、かく外にありけれど、更に妬げにも見えずなどあれば、いと哀と思ひけり。心地にも限りなく妬く心憂く思ふを、忍ぶるになむありける。留まりなむと思ふ夜も、猶「往ね」といひければ、わがかくありきするを、妬まで他事するにやあらむ、さるわざせずば恨むる事もありなむなど、心のうちに思ひけり。さて出でて往く

前栽—庭前の植込

しらなみ—白波、盗賊

たぎり—沸騰し

ふてつ—捨てつ

つれなき—無情なる

と見えて、前栽の中に隠れて、男や来ると見れば、端に出で居て、月のいといみじうおもしろきに、頭かい梳りなどして居り。夜更くるまで寝ず、いといたううち歎きて眺めければ、人待つなめり、と見るに、使ふ人の前なりけるに云ひける。

風吹けば沖つしらなみたつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ

と詠みければ、我がうへを思ふなりけり。と思ふに、いと悲しうなりぬ。この今の妻の家は、立田山越えてゆく道になむありける。かくて猶見居りければ、この女うち泣きて臥して、鋺に水を入れて、胸になむすゑたりける。あやし、如何にするにかあらむとてなほ見る。さればこの水、熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。又水を入る。見るにいと悲しくて、走り出でて、「いかなる心地し給へば、かくはし給ふぞ」と云ひて、かきいだきてなむねにける。かくて外へも更に往かで、つと居にけり。かくて月日多く經て思ひやるやう、つれなき顔なれど、女のおもふ事いといみじき事なりけるを、かく往かぬを、いかに思ふらむ、と思ひ出でて、ありし女の許往きたりけり。久しくいかざりつれば、

かいまめば—垣間見ば偷に窺ひ見ること

面櫛—髪を上げて額に櫛さすこと

賤しき體

平城の帝—奈良に都し給ひし頃の帝にて誰とも定かならず

釆女—少領已上の女の形容端正なるものを奉らしめ陪膳その他御側

つゝましくて立てりけり。さてかいまめば、我にはよくて見えしかど、いと怪しきさまなる衣を著て、大櫛を面櫛にさしかけて居り。手づから飯盛り居りけり。いといみじと思ひて、來にけるまゝに往かずなりにけり。この男は王なりけり。

◎昔、平城帝につかうまつる釆女ありけり。顏容貌いみじう淸らにて、人々よばひ、殿上人などもよばひけれど、逢はざりけり。その逢はぬ心は、帝を限なくめでたきものになむ思ひ奉りける。帝召してけり。さて後又も召さざりければかぎりなく心憂し、と思ひけり。夜晝心にかゝりて覺え給ひつゝ、戀しく侘しう覺え給ひけり。帝は召ししかど、事ともおぼさず。さすがに常には見え奉る。なほ世に經まじき心地しければ、夜密に出でて、猿澤池に身を投げてけり。かく投げつとも、帝は得しろし召さざりけるを、事のついでありて、人の奏しければ聞し召してけり。いといたう哀がり給ひて、池の邊におほ行幸したまひて、人々に歌詠ませ給ふ。柿本人丸、

わきも子がねくたれ髪を猿澤の池のたまもと見るぞかなしき

の御用を勤めしむる者事とも思さずー此の女の事を何にも思し召さずはや御心附なかりしなり
猿澤の池ー奈良
ねくたれ髪ー寢亂れ髮
玉藻に比してありし面影を慕ふ
御手鷹ー帝の御手づから据ゑさせ給ふ鷹
預り仕うま

とよめる時に、帝、

猿澤の池もつらしなわぎも子が玉藻かづかばみづぞひなまし

とよみ給ひけり。さてこの池に墓せさせ給ひてなむ、歸らせおはしましけるとなむ。

○同じ帝、立田川の紅葉いとおもしろきを御覽じける日、人丸、

立田川もみぢ葉ながるかみなびの三室の山にしぐれふるらし

みかど、

立田川もみぢみだれてながるめり渡らばにしき中や絶えなむ

とぞあそばしたりけり。

○同じ帝狩いとかしこく好み給ひけり。陸奥國岩手郡より奉れる御鷹、世になくかしこかりければ、二なう覺して御手鷹にし給ひけり。名をば岩手となむつけ給へりける。それを、かの道に心ありて、預り仕うまつり給ひける大納言に預け給へりける。夜晝これをあづかりて、取り養ひ給ふ程に、いかがし給ひけむ、そらし給ひてけり。心肝を惑はして

つり—御鷹の役にて奉仕せし
そらし—逃がし…
怠々し—等閑なり
いはでおもふぞ云々—古今六帖に「心には下行く水のわきかへりいはでおもふぞいふにまされる」

覓むるに更にえ見出でず。山々に人をやりつゝ覓めさすれど更になし。自らも深き山に入りて、惑ひありき給へどかひもなし。この事を奏せで暫もあるべけれど、二日三日にあげず御覽ぜぬ日なし。いかゞせむとて内裏に參りて、御鷹の失せたる由を奏したまふ時に、帝ものも宣はせず、聞こし召しつけぬにやあらむ、とてまた奏し給ふに、面をのみまもらせ給ひて、物も宣はず、怠々しと思したるなるけり。と我にもあらぬ心地して、畏まりていますがりて、「この御鷹の覓むるに侍らぬこと、いかさまにかし侍らむ。などか仰事もし給はぬ」と奏し給ふ時に、帝、

いはで思ふぞいふにまされる

と宣ひけり。かくのみ宣はせて、こと〴〵も宣はざりけり。御心にいといふかひなく、惜しく思さるゝになむありける。これをなむ世の中の人、もとをばとかくつけたる。元はかくのみなむありける。

○平城帝位におはしましける時、嵯峨帝の坊におはしまして、詠みてたてまつれ給ひけ

もと―上の句
坊―東公に
障泥―下鞍の下より鐙の内に垂れて馬の兩脇を覆ふ具
誰が御祓―ゆふ付鳥の枕詞、鷄を御祓の料に神社に奉る事あればなり

る。

皆人のその香にめづるふぢばかま君がみためと手折りつるけふ

帝、御かへし、

折る人のこころにかなふ藤ばかまうべ色ことににほひたりけり

○大和國なりける人の女、いと清らにてありけるを、京より來たりける男の、かいまみて見けるに、いとをかしげなりければ、偸みてかき抱きて、馬にうち乘せて逃げて往にけり。いとあさましうおそろしう思ひけり。日暮れて立田山にやどりぬ。草の中に泥障を解き敷きて臥せり。女恐しと思ふこと限なし。佗しと思ひて、男のものいへど、答もせで泣きければ、男、

誰が御祓ゆふつけ鳥かからころも立田の山にをりはへて鳴く

女、かへし、

立田川岩根をさして行く水のゆくへも知らぬわがごとやなく



内舍人—公卿の子の元服以前殿上の事を習はん爲に奉仕する職

ゆくりなく—不意に

ありし—元の

と詠みて死にけり。いとあさましうてなむ、男いだきもちて泣きける。

○昔、大納言の女、いと美しうて持ち給ひたりけるを、帝に奉らむとてかしづき給ひけるを、殿に仕うまつりける内舍人にてありける人、いかでか見けむ、此女を見てけり。顏容貌いと美しげなるを見て、萬の事おぼえず心にかゝりて、夜晝いとわびしく病になりておぼえければ、「切に聞えさすべき事なむある」と云ひ渡りければ、「あやし、何事ぞ」といひて出でたりけるを、さる心設して、ゆくりもなくかき抱きて、馬に乘せて、陸奧國へ、夜ともいはず晝ともいはず逃げて往にけり。安積郡安積山といふ所に庵を造りてこの女をすゑて、里に出でつゝ、物など求めて來つゝくはせて、年月を經てありへけり。この男いぬれば、たゞ一人物も食はで山の中に居たれば、かぎりなく佗しかりけり。かかる程に孕みにけり。この男ものもとめに出でにけるまゝに、三四日來ざりければ、待ち佗びて立ち出でて、山の井にいきて影を見れば、我がありしかたちにもあらず、怪しきやうになりにけり。鏡もなければ、顏のなりたらむやうも知らでありけるに、俄に見

山の井の｜山間の清水の淺く湛ふるものなれば淺くの序とす
さがなく｜不良
ふたへ｜腰の屈み折れたるさま
所狹がり｜邪魔物にす
捨てたうびよ｜捨て給へ

れば、いと恐しげなりけるを、いと恥かしと思ひけり。さて詠みたりける。

安積山かげさへ見ゆる山の井の淺くは人をおもふものかは

と詠みて、木に書きつけて、庵にきて死にけり。男、物などもとめて持て來て、死にて伏せりければ、いとあさましと思ひけり。山の井なりける歌を見て、歸り來てこれを思ひしに、傍に臥せりて死けり。世の故事になむありける。

○信濃國更級といふ所に男棲みけり。わかき時に親は死にければ、伯母なむ親の如くに、若くよりあひ添ひてあるに、この妻の心いと心憂き事多くて、この姑の老い屈まりて居たるを常に憎みつゝ、男にもこの伯母の御心のさがなく惡しき事を云ひ聞かせければ、昔の如くにもあらず、疎なる事おほく、この伯母のためになり行きけり。この伯母いといたう老いて、ふたへにてゐたり。これを猶この嫁所狹がりて、今迄死なぬ事と思ひて、よからぬ事をいひつゝ「もていまして、深き山に捨てたうびよ」とのみ責めければ、責められ侘びて、さしてむと思ふなり。月のいと明き夜、「をうなどもいざ給へ、寺に尊き業

がり—許に
させて—爲させて

すなる。見せ奉らむ」と云ひければ、限なく喜びて負はれにけり。高き山の麓に棲みければ、その山にはるばると入りて、高き山の嶺の下り來べくもあらぬに、置きて逃げて來ぬ。「やゝ」といへど、答もせで家に來て思ひ居るに、いひ腹立てけるをり、腹立ちてかくしつれど、年比親の如く養ひつゝあひ添ひにければ、いと悲しく覺えけり。この山のかみより、月もいと限なく明くて出でたるを眺めて、夜一夜寢もねられず悲しくおほえければ、かく詠みたりける。

我がこころなぐさめかねつさらしなや姨捨山に照る月を見て

と詠みてなむ、またいきて迎へ持て來にける。それより後なむ、姨捨山といひける。慰めがたしとは、これが由になむありける。

○下野國に男女棲みわたりけり。年比すみける程に、男妻をまうけて、心變りはてゝ、この家にありける物どもを、今の妻のがりかき拂ひ持て運びいく。心憂しと思へど猶させて見けり。塵ばかりの物も殘さず皆持ていぬ。只殘りたるものは、馬槽のみなむあり

馬槽—馬の糧を入るゝ器
きんぢ—なんぢ
かきふるひ—かきさらつて
しかながら—そつくり
あからめもせで—わきめも振らず
猶もあらず—そのまゝ本の住所にもおかず

ける。それをこの男の從者、眞楫といひける童を使ひけるして、この槽をさへ取りに遣せたり。この童に女の云ひける、「きんぢも今は此處に見えじかし」などいひければ、「などてか候はざらむ。ぬしおはせずとも候ひなむ」など云ひ立てり。女「ぬしに消息聞えば申してむや。文は世に見給はじ。只詞にて申せよ」といひければ、「いとよく申し候はむ」と云ひければ、かくいひける。

「船もいぬまかぢも見えじ今日よりはうき世の中をいかで渡らむ

と申せ」と云ひければ、男にいひければ、物かきふるひ往にし男なむ、しかながら運び返して、もとの如くあからめもせで添ひ居にける。

○大和國に男女ありけり。年月かぎりなく思ひて棲み渡りけるを、いかゞしけむ女を得てけり。猶もあらずこの家に率て來て、壁を隔てて棲みて、我が方には更に寄りこず。いと憂しと思へど、更にいひも嫉まず、秋の夜の永きに、目を覺して聞けば、鹿なむ鳴きける。物もいはで聞きけり。壁を隔てたる男「聞き給ふや、西こそ」と云ひければ、「何事



と答へければ、「この鹿の鳴くは聞き給ふや」といひければ、「さ聞き侍り」と答へけり。男、「さてそれをいかが聞き給ふ」と云ひければ、女ふといひける。

我もしかなきてぞ人に戀ひられし今こそよそに聲をのみ聞け

と詠みたりければ、限なくめでて、この今の妻をば送りて、もとのごとなむ棲みわたりける。

○染殿の内侍といふいますがりけり。それを能有大臣と申しけるなむ、時々すみ給ひける。物をよくし給ひければ、御衣どもをなむあづけさせ給ひけるに、綾どもを多く遣はしたりければ、「雲鳥の紋の綾をや染むべき」と聞えたりしを、ともかくも宣はせねば、「得なむ仕うまつらぬ。さだめ承はらむ」と申し奉りければ、大臣御返事に、

雲鳥のあやの色をもおもほえずひとをあひ見で年の經ぬれば

となむ宣へりける。

○同じ内侍に、在中將すみける時、中將の許によみてやりける。

我方―前妻
西こそ―前妻、西の間にあり
しか―然鹿兩意
染殿内侍―西三條右大臣良相の女
能有大臣―文徳天皇の皇子の源姓を賜り臣下となれる人
あひ見で―逢藍の兩意
在中將―業平

秋萩をいろどる風の吹きぬれば人のこころもうたがはれける

とありければ、かへし、

秋の野をいろどる風は吹きぬともこころは枯じ草葉ならねば

となむいへりける。かくてすまずなりて後、中將の許より、衣をなほしに遣せたりける、「それに洗濯などする人なくて、いとわびしくなむある。なほ必ずして給へ」となむありければ、内侍、「御心もてある事にこそあなれ。

大幣となりぬる人のかなしきはよるせともなく鹿ぞなくなる」

となむ云ひ遣りたりける。中將、

流るとも何とか見みむ手に取りてひきけむ人ぞ幣と知るらむ

となむいひける。

○在中將、二條后宮、まだ帝にも仕うまつり給はで、平人におはしましけるよに、よばひ奉りける時、鹿尾菜といふ物おこせて、かくなむ、

御心もて云云—御心がらにて末とぐる女のなきなり

大幣—榊に木綿つけたるものにて祓する時人人の取るものなれば引く事あまた—

の意に喩ふ
二條の后の宮—藤原高子清和帝の皇后
ひじきもの—鹿尾菜、引敷物
大原野—乙訓郡にあり藤氏の氏神の社
かづけ—下賜
忘草—萱草

思ひあらば葎の宿に寢もしなむひじきものには袖をしつつも

となむ宣へりける。返しを人なむ忘れにける。さて后宮、東宮の女御と聞えて、大原野に詣で給ひけり。御供に上達部、殿上人、いと多く仕うまつりけり。在中將も仕うまつれり。御車のあたり、生暗き折に立てりけり。御社にて、大方の人々祿賜はりて後なりけり。御車の後より奉れる、御單衣の御衣をかづけさせ給へりけり。在中將賜はる儘に、

大原やをしほの山も今日こそは神代のこともおもひ出づらめ

と忍びやかにいひけり。昔をおぼし出でて、をかしとおぼしけり。

○また在中將内裏にさぶらふに、御息所の御かたより、忘草をなむ、「これは何とかいふ」とて賜へりければ、中將、

忘草おふる野邊とは見るらめどこはしのぶなり後もたのまむ

となむありける。おなじ草をしのぶ草、わすれ草といへば、それによりてなむ詠みたりける。

飾粽—色々の糸もて飾れる粽、粽は五月五日の食品

水尾帝—清和天皇

○在中將に、后宮より菊召しければ、奉りけるついでに、

植ゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

と書いつけて奉りける。

○在中將の許に、人の飾粽をおこせたるかへしに、かく云ひやりける。

あやめかり君は沼にぞ惑ひけるわれは野に出でてかるぞわびしき

とて、雉子をなむやりける。

○水尾帝の御時、左大辨の女、辨御息所とていますがりけるを、帝御髮おろし給ひて後に、一人いますがりけるを、在中將忍びて通ひけり。中將、病いと重くして煩ひけるを、本妻どももあり、これはいと忍びてある事なれば、え往きもとぶらひ給はず、忍び忍びになむ訪ひける事日々にありけり。さるに訪はぬ日なむありける。病もいとおもりて、その日になりにけり。中將の許より、

つれづれといとど心のわびしきに今日は訪はずてくらしてむとや

物語にて—世間に傳はる話說
更に見えず—一向訪ひ來ず

とて遣せたり。「弱くなりにたり」とて、いといたく泣きさわぎて、返事などもせむとする程に、死にけりと聞きて、いといみじがりけり。死なむとする事、今々となりて詠みたりける。

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを

と詠みてなむ絶えはてにける。

○在中將物見に出でて、女のよしある車のもとに立ちぬ。下簾の間より、この女の顔いとよく見てけり。物など云ひかはしけり。此も彼もかへりて、明日に詠みて遣りける。

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなく今日や詠め暮さむ

とあれば、女かへし、

見もみずも誰と知りてか戀ひらるる覺束なみの今日のながめや

とぞいへりける。これらは物語にて、世にある事どもなり。

○男、女の衣を借り著て、今の妻の許いきて更に見えず。「この衣を皆著破りて返しおこ

す」とて、それに雉、雁、鴨を加へておこす。他國に、いたづらに見えける物どもなりけり。さりける時に、女かくいひやりける。

いなやきじ人にならせるかり衣わが身にふればうきかもぞつく

○深草帝とまうしける御時、良少將といふ人いみじき時にてありけり。いと好色になむありける。忍びて時々あひける女、同じ内裏にありけり。今宵必ず逢はむと契りたる夜ありけり。女いたう化粧して待つに、音もせず、目をさまして、夜や更けぬらむと思ふ程に、時まうす音のしければ、聞くに、丑三と申しけるを聞きて、男の許にふといひ遣りける。

人心うしみつ今はたのまじよ

といひやりたりけるに、驚きて、

夢に見ゆやとねぞ過ぎにける

とぞつけて遣りける。暫と思ひてうち休みける程に、寢過ぎたるになむありける。かく

いなやき云云―雉子雁、鴨の三物を隱してよみ込みたり

深草帝―仁明天皇

良少將―良岑宗貞

時まうす音　中にて近衞の官人夜行して時を奏する聲

ねぞ過ぎにける―寢に子の刻を兼ぬ

よろしく思ひけるには云々―普通に愛せし二人には遁世の意を打明け語りしなり

限なく思ひて―深く思ひて

ともかくもなれ云々―本妻の意中

て世にも勞あるものに仕うまつる、帝限なく思されてある程に、この帝うせたまふ。御葬の夜、御供に皆人仕うまつりける中に、其夜よりこの良少將うせにけり。友達、妻もいかならむ、とて、暫は此處彼處覓むれども、音耳にも聞えず。法師にやなりにけむ、身をや投げてけむ。法師になりたらば、さてなむあるとも聞えなむ。猶身を投げたるなるべし。と思ふに、世の中にもいみじう哀がり、妻子どもは更にもいはず、夜晝精進潔齋をして、世間の神佛に願をたて惑へど、音にも聞えず。妻は三人なむありけるを、よろしく思ひけるには、「猶世に經じとなむ思ふ」と、二人にはいひける。限なく思ひて、子どもなどある妻には、塵ばかりもさる氣色も見せざりけり。この事をかけてもいはば、女もいみじと思ふべし。我もえかくなるまじき心地のしければ、寄りだに來で俄になむ失せにける。ともかくもなれ。かくなむ思ふともいはざりける事の、いみじき事を思ひて泣きいられて、初瀬の御寺にこの妻詣でにけり。この少將は、法師になりて、蓑一つを打ち著て、世間世界を行ひありきて、初瀬の御寺に行ふ程になむありける。ある局ちか

その道成し給へ—成道成佛せさせ給へ

え聞かず—消息を知らず

御はてに—一週忌

うゐて行へば、この女導師に云ふやう、「この人かくなくなりにたるを、生きて世に在るものならば、いま一度逢ひ見せ給へ、身をなげ死にたるものならば、その道成し給へ、さてなむ死にをるとも、この人のあらむやうを、夢にても現にても聞き見せ給へ」といひて、我が裝束上下、帶太刀までみな誦經にしけり。みづからも申しもやらず泣きけり。初は何人の詣でたるならむ、と聞き居たるに、我が上をかく申しつゝ、我が裝束などかく誦經にするを見るに、心も肝もなく、悲しきこと物に似ず、走りや出でなましと千度おもひけれど、思ひかへし〳〵ゐて、夜一夜泣き明して朝に見れば、蓑も何も涙のかゝりたる所は、血の涙にてなむありける。「いみじう泣けば、血の涙といふものは、ある物になむありける」とぞいひける。「その折なむ、走りも出でぬべき心地せし」とぞ後に云ひける。かゝれど猶え聞かず。御はてになりて御服ぬぎに、萬の殿上人河原に出でたるに、童の異樣なるなむ、柏葉に書きたる文をもて來たる。取りて見れば、

皆人は花のころもになりぬめり苔のたもとよかわきだにせよ

いづら—何方

五條の后—仁明天皇の皇后順子

ゆくりもなく—不慮に

かしこき御蔭に云々—帝に近習し馴れ仕へまつりしをいふ

とあり。見れば、この頁少將の手に見なしつ。「いづら」といひて、持て來し人を世界に覓むれどなし。法師になりたるべしとは、これにてなむ皆人知りにける。されど何地にかあらむといふ事、さらにえ知らず。かくて世の中にありといふ事を聞し召して五條后宮より、內舍人を御使にて山々たづねさせ給ひける。此處にありと聞きていけばうせぬ。彼處にありと聞きて尋ぬれば又うせぬ。えあはず辛うじて、隱れたる所にゆくりもなくいにけり。え隱れあへで逢ひにけり。「宮より御使になむ參り來つる」とて、「仰事には、かう帝もおはしまさず、睦じく覺し召しゝ人をかたみと思ふべきに、かく世に失せかくれ給ひにければ、いとなむかなしき。などか山林に行ひ給ふとも、こゝにだに消息し給はぬ。御里とありし所にも、音もし給はざなれば、いと哀になむ泣き侘ぶなる。いかなる御心にて、かうは物し給ふらむと聞えよ、とてなむ仰せられつる。此處彼處尋ね奉りてなむ、參り來つる」といふ。少將大德うち泣きて、「仰事畏まりて承りぬ。帝崩れ給ひてかしこき御蔭にならひて、おはしまさぬ世に、暫もあり經べき心地もし侍らざり

童の侍ること―里にのこしゝ妻子の事

いらなく―はげしく

しかば、かゝる山の末にも籠り侍りて、死なむを期にてと思う給ふるを、未なむかく怪しき事は生き廻らひ侍る。いともかしこく訪はせ給へる事、童の侍ることは、更に忘れはべる時もはべらず」とて、

「かぎりなき雲井のよそに別るとも人をこころにおくらさむやは

となむ申しつる、と啓し給へ」と云ひける。この大德の顏容貌姿を見るに、悲しきこと物に似ず。その人にもあらず、影の如くになりて、只養をのみなむ著たりける。少將にてありし時のさまの、いと淸げなりしを思ひ出でて、淚も留まらざりけり。悲しとても、片時人のゐるべくもあらぬ山の奥なりければ、泣く〳〵「さらば」と云ひて歸り來て、この大德尋ね出でて、ありつるよしを上の條啓せさせけり。后宮もいといたう泣きたまふ。さぶらふ人々もいらなくなむ泣き哀がりける。宮の御かへりも、人々の消息も、いひつけて又遣れりければ、ありし所にも又なくなりにけり。

○小野小町といふ人、正月に淸水に詣でにけり。行などして聞くに、怪しう尊き法師の

つれなきやうにて―知らぬかほにて

いかゞいふとて―何といふか試みむとて

ひと寺―寺中悉く

左近將監―後出家して素性法師

聲にて、讀經し陀羅尼讀む。この小野小町怪しがりて、つれなきやうにて、人を遣りて見せければ、「蓑一つ著たる法師の、腰に火打笥など結ひつけたるなむゐたる」と云ひけり。かくて猶聞くに、聲いと尊くめでたう聞ゆれば、たゞなる人にはよもあらじ。もし少將大德にやあらむ、と思ひけり。いかゞいふとて、「この御寺になむはべる。いと寒きに、御衣ひとつ貸し給へ」とて、

いはのうへの旅寢をすればいと寒し苔のころもを我にかさなむ

といひやりたりける返事に、

世をそむく苔の衣はたゞひとへ貸さねばうとしいざふたりねむ

といひたるに、更に少將なりけり、と思ひて、たゞにも語らひし中なりければ、逢ひて物もいはむ、と思ひていきければ、搔い消つやうに失せにけり。ひと寺覓めさすれど、更に逃げて失せにけり。かくて失せにける大德なむ、僧正までなりて、花山といふ寺にすみ給ひける。俗にいますがりける時の子どもありけり。太郎は左近將監にて、殿上し

たぶさ—手首
三世—過去現在未來
すげなく—無情に
人のわざ—人の佛事
山—比叡山
頸—襟

てありける。かく世にいますがりと聞く時だにとて、母もやりければ、いきたりければ「法師の子は法師なるぞよき」とて、これも法師になしてけり。かくてなむ、

　折りつればたぶさにけがるたてながら三世の佛に花たてまつる

といふも、僧正の御歌になむありける。この子を推し寫し給びける大徳は、心にもあらでなりたりければ、親にも似ず、京にも通ひてなむしありきける。この大徳の親族なりける人の女の、内裏に奉らむとてかしづきけるを、密にかたらひてけり。親聞きつけて、男をもすけなくいみじういひて、この大德を寄せずなりにければ、山に坊してゐて、言の通ひもえせざりけり。いと久しうありて、この騒がれし女の兄どもなどなん、人のわざしに山に登りたりける。この大徳のすむ所に來て、物語などしてうち休みたりけるに、衣の頸にかきつけける。

　白雲のやどる嶺にぞおくれぬるおもひのほかにある世なりけり

と書きたりけるを、この兄の兵衛尉は、え知らで京へいぬ。妹見つけてあはれとや思

ゆめ―決して
持たせて―この男の從者に也
女どもあるがいふやう―以下闕文にや一本には「その行

ひけむ。これは僧都になりて、京極僧都といひてなむ、いますがりける。

○昔内舍人なりける人、大三輪の御幣使に大和國に下りけり。井手といふ邊に、淸げなる人の家より、女ども童いで來て、このいく人を見る。きたなげなき女、いとをかしげなる子を抱きて、門のもとに立てり。この兒の顏のいとをかしげなりければ、目を留めて、「その子此方率て來」といひければ、この女寄り來たり。近くて見るに、いとをかしげなりければ、「ゆめ他夫し給ふな。我にあひ給へ。大になり給はむ程に參り來む」と云ひて、「これを記念にし給へ」とて、帶を解きて取らせけり。さて子のしたりける帶を解き取りて、持たりける文に引きゆひて、持たせていぬ。この子年六七ばかりにありけり。この男色好なりける人なれば、いふになむありける。これをこの子は忘れず思ひもたりけり。男は早う忘れにけり。かくて七八年ばかりありて、また同じ使に差されて、大和へいくとて、井手のわたりにやどりて、居て見れば、前に井なむありける。それに水汲む女どもあるが、いふやう。

方もとほらぬとたふひとくちいひいすゑないひひさしつ」とあり
伊衡—藤原敏行の三男
風—風邪
いさゝめに—かりそめに
野分過しゝ—秋の暴風すら無事に過し君なるものな
今の左大臣—忠平

○伊衡宰相、中將にものし給ひける時、故兵部卿宮の別當し給ひければ、常に參りなれて、御達も語らひ給ひけり。その君、内裏より罷出給ひけるまゝに、風になむおひ給ひて煩ひ給ひける。訪問に藥の酒肴など調じて、兵衛命婦なむやり給ひける。その返事に「いと嬉しく訪ひ給へる、あさましう、かゝる病もつくものになむありける」とて、

青柳のいとならねども春かぜの吹けばかたよる我が身なりけり

とあれば、兵衛命婦、かへし、

いささめに吹く風にやはなびくべき野分過しし君にやはあらぬ

○今の左大臣、少將にものし給ひける時に、式部卿宮に常に參り給ひけり。かの宮に、やまとといふ人候ひけるを、物など宣ひければ、いとわりなく色好む人にて、女いとをかしうめでたし、と思ひけり。されど常にあふ事かたかりけり。やまと、

人知れぬ心のうちにもゆる火はけぶりも立たでくゆりこそすれ

と云ひやりければ、かへし、

式部卿の宮—敦慶親王
わりなく—むやみに
おもひ—思ひ、火
渡る—通行す
いさ—否不知の意
切に—さし迫りて

富士の嶺の絶えぬおもひもあるものをくゆるは辛き心なりけりとありけり。かくて久しう參り給はざりける比、女いといたう待ち佗びにけり。いかなる心地しければか、さるわざはしけむ、人にも知らせで、車に乘りて內裏に參りにけり。左衞門の陣に車を立てて、渡る人を呼び寄せて、「いかで少將君に物聞えむ」といひければ、「怪しきことかな。誰と聞ゆる人のかゝる事はし給ふぞ」などいひすさびて入りぬ。また渡れば同じ事いへば、「いさ殿上などにやおはしますらむ。いかでか聞えむ」など云ひて入りぬる人もあり。袍衣きたる者の入りけるを、强ひて呼びければ、怪しと思ひて來たりけり。「少將君やおはします」と問ひけり。「おはします」といひければ、「いと切に聞えさすべき事ありて、殿より人なむ參りたる、と聞え給へ」とありければ、「いと易きことなり。そもそもかく聞え次ぎたらむ人をば忘れ給ふまじや。いと哀に夜更けて、人少にてものし給ふかな」と云ひて、入りていと久しかりければ、無期に待ち立てりける。辛うじて、これもいひつがでや出でぬらむ、いか樣にせむと思ふ程になむ、出で來たり

廣幡中納言―源庶明
たばかり―相談し
物のおほゆれば―書きさして止めたる也
又無下に云云―一向に

ける。さていふやう、「御前に御遊などし給へるを、辛うじてなむ聞えつれば、誰がものし給ふならむ、いと怪しき事、たしかに問ひ奉りて來となむ宣ひつる」といへば、「眞實には下つ方よりなり。みづから聞えむ事を聞え給へ」と云ひければ、「さなむ申す」と聞えければ、さにやあらむと思ふに、いと怪しうもをかしうも覺え給ひけり。暫といはせて立ち出でて、廣幡中納言の侍從にものし給ひける時、「かゝることなむあるを、かいゞすべき」とたばかり給ひけり。さて左衛門の陣に、宿直所なりける屛風壁など持ていきて其處になむ下い給ひける。「いかでかくは」と宣ひければ、「何かはいとおさましう、物のおほゆれば」。

○亭子の帝、石山につねに詣で給ひけり。國司、民疲れ國亡びぬべしとなむ佗ぶる、と聞し召して、「こと國々の御莊などに、仰せて」と宣へりければ、持て運びて、御まうけを仕うまつりて詣で給ひけり。近江守、いかに聞し召したるにやあらむ、と歎き恐れて、また無下にさて過し奉りてむや、とて歸らせ給ふ。打出の濱に、尋常ならずめでたき假屋



知らず顔にて御通し申すべきに非ずとて
黒主―大友氏近江の人滋賀郡の大領たりし時の事ならむ
さゞら波―小波
良岑の宗貞―僧正遍昭
土やぐら―土にて塗りたる倉
薄色の衣―たて紫横白糸
濃き―紅色の

どもを造りて、菊花のいとおもしろきを植ゑて、御まうけ仕うまつれりけり。國守は怖ぢおそれて、外にかくれをりて、只黒主をなむ居ゑ置きたりける。おはしまし過ぐる程に、殿上人「黒主は、などてさては候ふぞ」と問ひけり。院も御車おさへさせ給ひて、「何しに此處にはあるぞ」と問はせ給ひければ、人々問ひけるに申しける、

　さざら浪間もなく岸を洗ふめりなぎさきよくは君とまれとか

と詠めりければ、これにめで給ひてなむ、とまりて、人々に物賜ひて歸らせ給ひける

●良岑宗貞少將、ものへ行く道に、五條邊にて雨いたう降りければ、荒れたる門に立ち隱れて見いるれば、五間ばかりなる檜皮屋の下に、土やぐらなどあれど、殊に人など見えず、歩み入りて見れば、階の間に梅いとをかしう咲きたり。鶯も鳴く。人ありとも見えぬ御簾のうちより、薄色の衣、濃き衣の上に著て、丈だちいとよき程なる人の、髮丈ばかりならむ、と見ゆるなるが、

　よもぎ生ひて荒れたる宿を鶯の人來と鳴くやたれとか待たむ

物しき―恥づべき

なか〳〵―却つて濡れ給はむを

やをら―そろりと

とひとりごつ。少將、

來たれどもいひしなれねば鶯の君に告げよとをしへてぞ鳴く

と聲をかしうていへば、女驚きて、人もなしと思ひつるに、ものしきさまを見えぬる事と思ひて、物も云はずなりぬ。男緣に昇りて居ぬ。「などかもの宣はぬ、雨の理なくはべりつれば、やむまではかくてなむ」といへば、「大路よりはまさりて、此處はなか〳〵」と答へけり。時は正月十日の程なりけり。簾の內より褥さし出でたり。引き寄せて居ぬ。簾も緣は蝙蝠に食はれて所々なし。內のしつらひ見いるれば、昔覺えて疊などよかりけれど、口惜しくなりにけり。日もやう〳〵暮れぬれば、やをらすべり入りて、この人を奥にも入れず。女くやしと思へど、制すべきやうもなくて、いふかひなし。雨は夜一夜降りあかして、又の翌朝ぞ少し空晴れたる。男は女の入らむとするを、「只かくて」とて入れず、日も高うなれば、この女の親、少將に饗應すべき方のなかりければ、小舍人童ばかりとゞめたるに、堅鹽肴にして酒を飲ませて、少將には、廣き庭に生ひたる菜を

まめなるもの―實なる物、實用の品々

仕うまつりし君―仁明天皇

うつぶしぞめ―五倍子は内の空なるものなればいひ黑く

摘みて、蒸物といふ物にして、茶碗に盛りて、箸には梅の花の盛なるを折りて、その花瓣に、女の手にてかく書けり。

君がため衣の裾を濡らしつつ春の野に出でて摘める若菜ぞ

男これを見るに、いと哀に覺えて引き寄せてくふ。女わりなう恥しと思ひて臥したり。少將起きて、小舍人童を走らせて、則ち車にて、まめなるものさま〴〵に持て來たり。「むかへに人のあれば、今又も參り來む」とて出でぬ。それより後、絶えず自らも來訪ひけり。萬の物くへども、なほ五條にてありしもの、珍らしうめでたかりき、と思ひ出でける。年月を經て仕うまつりし君に、少將おくれ奉りて、かはらむ世を見じと思ひて、法師になりにけり。もとの人の許に袈裟洗ひにやるとて、

霜雪のふるやがしたに獨寢のうつぶしぞめの麻のけさなり

となむありける。

染むるに用ふるもの、俯臥の意を懸く

兄末—兄弟の誤歟

たい〱し—怠慢

なめし—無禮なり

聞えない—聞えなし

抄云

又或本に世の常の外なりしこと加はれり。そのてにをはなどいさゝかおぼつかなき所などもあれど、たぐへる本を見侍らねば、改めきこえむよしもなし。さすがに捨て難き事どもなればことに左に書き連ね侍る。

○今は昔、二人して一人の女をよばひけり。先立ちてよばひける男、官まさりて、その時の帝ちかう仕うまつりけり。後よりよばひける今一人の男は、その同じ帝の母后の御兄末にて、官後れたりけり。それをいかゞ思ひけむ、後よりよばひける男に、かの女は逢ひにけり。さりければ、この初より云ひける男は、宿世の深くありけると思ひけり。かくて萬によろしからず、たい〱しき事を、物の折ごとに、帝のなめしと思し召しぬべき事を、作り出でつゝ聞えないける間に、この男は宮仕いと苦しうして、只逍遙をして、歩行を好みければ、衞府官にて、宮仕をもせずといふ事いで來て、そのありける官をぞ取り給ひてける。さりければ、男、世の中を憂しと思ひてぞ、籠りゐて思ひける。

かなしく―愛する

なまいどみて―生挑―競ひ合ふ樣にて

うきたつたの山―譌脱あるべし

かくとしもなし―同じく譌脱ある

人の命といふもの、幾世しもあるべきものにあらず、思ふ時は、はかなき官も何にかはあるべき。かゝる浮世にはまじらず、一向に山深くはなれて、行にや就きなむ、と思ひければ、近くをだに放たず、父母のかなしくする人なりければ、萬のうきもつらきもこれにぞさはりける。時しも秋にしもありければ、物のいとあはれに覺えて、夕暮にかゝる獨言をぞ云ひたりける。

「浮世には門鎖せりとも見えなくになど我が宿のいでがてにする」

と云ひてひがみ居りける間に、なまいどみて時々物などいひける人の許より、蔦の紅葉のおもしろきを折りて、やがてその葉に、「これを何とか見る」とて書き遣せける。

うきたつたの山の露のもみぢ葉は物おもふ秋の袖にぞありける

といひやりけれど、返しもせずなりにければ、かくとしもなし。かゝる事どもを聞き哀がりて、この男の友だちども、集りて來て慰めければ、酒飮ませなどして、聊遊のけぢかきぞしける。夜になりければ、この男、かゝる歌をぞ詠みたりける。

身のうみの思ひなぎさは今宵かな浦に立つ浪うちわすれつつ

とぞ詠みたりける。かゝりければ、これをあはれがりてぞ、あはれに明しける。これも返しなし。さて又の夜の月をかしかりければ、簀子にゐて、大空を眺めてゐたりける程に、夜の更けゆけば、風いと涼しう吹きつゝ、苦しきまで覺えければ、物のゆゑ知る友だちの許に、「これのみぞかねて月見るらむ」とて、かゝる歌を詠みて遣しける。

なげきつつ空なる月をながむればなみだぞ天の川とながるる

さりける程に、いと深からぬ事なりければ、もとの官になりにけり。この友だちどもは、躬恒、友則がほどなりけり。

○同じ男、知れる人の許に常に通ふに、いとにくさげなる女のあるを、女は成人になれば、こよなくなだらかになるなれど、この女を憂しと笑ひけれど、見るたびにやう〳〵好くなりもて行く。殊の外に生まさりして見えければ、

沼水に君はあらねどかかるものみるまみるまにおひ增りけり

べし

簀子―緣

いと深からぬ―罪の也

なだらか―無難

みるま〳〵―みぬま〳〵の誤ならむといふ

たゞすの森—鴨の河合、糺すのいひ懸

いだすを見て—下に「本の男」の三字脱する

蔀—目除、障子やうのもの

なほも過ぎで—只は通らずして

女、このかへし、

かかるものみるまみるまぞうとまるる心あさまの沼に生ふれば

と返したりける。この男に女のいへりける。

いつはりをただすの森のゆふたすきかけてを誓へわれを思はば

女の思ふ男をして、たしかにいだすを見て、

あらはれることあらがふな櫻ばな春はかぎりと散るを見えつつ

かへし、

色に出でゐたに見ゆともさくら花風の吹かずば散らじとぞ思ふ

〇西の京五條わたりに、築地處々崩れて、草生ひ茂りて、さすがに所々蔀數多さゝげ渡したる所あり。簾の下に、女どもなど數多見えければ、この男なほも過ぎで、供なる童して、「などかく荒れたるぞ」と云ひければ、「誰がかくは宣ふぞ」と云ひければ、「大路行く人」といひけるに、崩より女ども數多出でて、かく云ひかけたりける。

人の秋にーー人に厭かれたる意をかく

いひ入れてーーいひ含めて

すかすーーだます

人の秋にはさへ荒れて道もなくよもぎ茂れる宿とやは見ぬ

といへりければ、童の口にいひ入れて、

誰が秋にあひてあれたる宿ならむわれだに庭のくさは生さじ

さて時々通ひけれど、いかなる人のすかすならむ、とつゝましかりければ、人にもそこともいはで通ふ程に、みな人ものへいにけり。只一人ありて、「もし人問はば、これを奉れ」とて、文書きて出しける。

我が宿はならのみやこぞ男山こゆばかりにはあらはさで訪へ

とありければ、この男いたく口惜しがりて、その家に置きたるものに、物などくれて問ひけれど、ふつと云はで只「奈良へ」とぞいひける。尋ねむかたなし。さるほどに思ひ忘れにけるに、この男の親、初瀬に參りける供にありて、實さる事ありきかし。こゝやそならむかし、こやそれならむなど思ふ程に、供なる男どもなどに語らひなどしけり。さてかの初瀬に詣でて、三條より歸りけるに、飛鳥本といふ所に、相知れる法師も俗も

日はしたになりぬ―日暮近くなれり

おのがうちいひて―おのがどちいひての誤歟

蛛手に―いろいろに

楢―奈良―

たまほこ―たまさかの誤歟

數多出で來て、「けふ日はしたになりぬ、奈良坂のあなたには、人の宿り給ふべき家も候はず、此處に泊らせ給へ」といひて、門竝に、家二つを一つに造り合せたる、をかしげなるにぞ留めける。さりければとゞまりにけり。饗應など人々しければ、物など食ひて、騷しき程しづまり、程なく夕暮にはなりてけり。さりければ、戸の下に佇み出でて見るに、この南の家の北なる家にて、楢の木といふものをぞ二樹三樹植ゑたりける。「怪しく他木をも植ゑで」などいひて、さしのぞきたりけるに、清げなる蔀どもあけ渡して、女ども數多居り。あやしなどおのがうちいひて、供なりける人を呼び寄せて、「この人はこの南に宿れるか」と問ひけり。築地のくづれより見し人は、いかに忘れざりけるにか、若し男などに具して來たるにやなど、蛛手に思ひ亂るゝ程に、

悔しくも楢ぞとだにもいひてけるたまほこにだに來てもとはねば

といひけり。この「庭さへ荒れて」といひし人の手なりけり。京さへなま戀しき旅のほどなりければ、硯こひ出でて、

楢の木以下五行纂註に「秋成が本に都人村井古巌が本にあるとて、上の續きを書き加へたり」とあるによりて附載せり

楢の木のならふ程とは数へねど名にやおふとて宿はかりつる

といひたりければ、「あなうちつけの事や」とて、かくぞ云ひ出したりける。

門過ぎてはつせ川までわたる瀬も我がためとや君はこたへむ

その夜とまりつ。翌朝、男

朝まだき立つ空もなししら波のかへるかへるも歸りきぬべし

大和物語（終）

落窪物語

巻之一

裳著せ―裳は女子の腰より下に著る衣にて、成人すれば始めて裳を著する祝儀あり

わかんどほり―二世以下の王孫

放出―母屋より建て出したる屋

今は昔、中納言なる人の、女數多もたまへるおはしき。大君、中の君には聟どりして、西の對、東の對に、花々として住ませ奉り給ふ。三四の君にも、裳著せ奉り給はむとて、かしづきぞし給ふ。また時々通ひ給うけるわかんどほり腹の君とて、母もなき御女おはす。北方心やいかゞおはしけむ、仕うまつる御達の數にだに思さず、寢殿の放出の、又一間なる落窪なる所の、二間なるになむ住ませ給うける。君達ともいはず、御方とはましていはせ給ふべくもあらず。名をつけむとすれば、さすがに、大殿のおぼさむ心あるべし、と愼み給うて、「落窪君といへ」と宣へば、人々もさいふ。大殿も、乳兒よりらうたくやおぼしつかずなりにけむ。まして北方の御まゝにて、はかなき事多かり。はかぐ\しき人

らうたく—愛らしく
後見—世話人
うさのみ云云—憂さに字佐、心盡しに筑紫を懸けたり
箏の琴—十三絃の琴
嫡妻腹—今の妻の腹

もなく、乳母もなかりけり。たゞ母のおはしける時より、使ひつけたる童のざれたる女ぞ、後見とつけて仕ひ給うける。あはれに思ひかはして、片時はなれず。さればこの君の容は、かくかしづき給ふ御女などにも劣るまじけれど、出で交らふ事もなくて、あるものとも知る人なし。やう〳〵物思ひ知るまゝに、世の中のあはれに、心憂き事のみ思されければ、かくのみぞうち歎く。

　日にそへてうさのみまさる世の中に心づくしの身をいかにせむ

といひて、いたう物思ひ知りたるさまにて、大方の心ざま敏くて、琴なども習はす人あらば、いとよくしつべけれど誰かは教へむ、母君の、六つ七つばかりにておはしけるに、習はし置い給うけるまゝに、箏の琴を、世にをかしく彈き給ひければ、嫡妻腹の三郎君、十ばかりなるに、箏心に入りたりとて、「これに習はせ」と北方の宣へば、時々教ふ。つく〴〵と暇のあるまゝに、物縫ふ事を習ひけるが、いとをかしげにひねり縫ひ給うければ、「いとよかめり。ことなる面貌なき人は、物實やかに習ひたるぞよき」とて、二

あなづり―侮り

なか〳〵―却つて

人の聟の裝束、いさゝかなる暇なく、かきあひ縫はせ給へば、しばしこそ物いそがしかりしか、夜も寢もねず。いさゝかおそき時は、「かばかりの事をだに、物憂げにしたまふは、何を役にせむとてならむ」と責め給へば、うち泣きて、いかで猶消えうせぬるわざもがな、となげく。三の君に御裳著せ奉り給ひて、やがて藏人少將に婚せ奉り給うて、いたはり給ふ事かぎりなし。落窪君、まして暇なく、苦しきことまさる。若くめでたき人は、多くかやうの實事する人や少かりけむ、あなづりやすくていと侘しければ、うち泣きて縫ふまゝに、

世の中にいかであらじと思へどもかなはぬものは憂身なりけり

後見といふは、髮長くをかしげなれば、三の君の方に、只召しに召し出づ。後見、いと本意なく、悲しと思ひて、「我が君に仕うまつらむと思ひてこそ、親しき人のむかふるにもまからざりつれ。何の由にか、他君どりはし奉らむ」と泣けば、君、「何か、同じ所にすまむかぎりは、同じ事と見てむ。衣などの見苦しかりつるに、なか〳〵嬉しとなむ見

さいなむ―叱り懲らす
ざれたる―色好みなる
あたらもの―可惜もの
わかうどほり―わかんどほり

る」と宣ふ。げにいたはり給ふ事めでたければ、哀に心細げにておはするを、守らへ慣ひて、いと心苦しければ、常にいり居れば、さいなむ事かぎりなし。「落窪君の、これをさへ呼びこめ給ふ事」と腹立たれ給へば、心のどかに物語もせず、後見といふ名便なしとて、安濃とつけ給ひき。かゝる程に、藏人少將の御方なるに、帶刀とて、いとざれたるもの、この安濃に文かよはして、年へて後、いみじう思ひてすむ。互に隔てなくものがたりしける序に、この若君の御事をかたりて、北方の御心のあやしうて、哀にてすませ奉りたまふ事、さるは御心ばへ、みかたちのおはしますやう語る。うち泣きつゝ、いかで思ふやうなる人にぬすませ奉らむ、と明暮あたらものにいひ思ふ。この帶刀が女親は、左大將と聞えける御むすこ、左近少將にておはしけるをなむ養ひ奉りける。まだ妻もおはさで、よき人の女など、人に語らせて問ひ聞き給ふ。帶刀、落窪君のうへを語り聞えければ、少將耳とどまりて、靜なる一間に細にかたらせて、「あはれ、いかに思ふらむ。さるはわかうどほりばらなりかし。我にかれ密におはせよ」と宣へば、「只今

曹司―局

母君云々―死したる實母を慕ひていふ

わびし―辛し

露―いさゝか

立ちかへり―冥土よりなり

は世にもおぼしかけ給はじ。今かくなむとものし侍らむ」と申せば、「入れに入れよかし。はなれてはた住むなれば」と宣へば、帯刀、安濃にかくなむと語れば、「只今はさやうの事、かけても思したゞぬ中に、いみじき色好と聞き奉りしものを」と、もてはなれて答ふるを、帯刀怨むれば、「よし、今御氣色見む」といふ。この御方のつゞきなる廂二間、曹司にて得たりければ、おなじやうなる所は辱しとて、落窪一間をしつらひてなむ臥しける。八月朔日ごろなるべし。君一人臥して寝もねられぬまゝに、「母君、我を迎へ給へ、いとわびし」といひつゝ、

我に露あはれをかけば立ち歸りともにを消えよ憂はなれなむ

心なぐさめに、いとかひなし。つとめて、物語のついでに、「これがかく申すは、いかゞはし侍らむ。かくてのみは、いかゞはしはてさせ給はむ」といふに、いらへもせず、いひ煩ひてゐたる程に、三の君の御手水まゐれとて、召さるれば立ちぬ。心の中には、とありともかくありとも、よき事はありなむや。女親のおはせぬに、幸なき身と知りてい

いとはるけげなり—容易にらちあくまじ

あなかま—制止の語

かへり—返事

かで死なむと思ふ心深し。尼になりても、殿のうち離るまじければ、只消えうせなむわざもがな、と思ほす。帯刀、大將殿に參りたれば、「いかにぞ、かの事は」「いひ侍りしかば、云々なむ申す。まことにいとはるけげなり。かやうのすぢは、親ある人は、それこそともかくも急げ。大殿も北方に取り籠められて、よもし給はじ」といへば、「さればこそ入れに入れよとはいへ。聟どらるゝも、いとはしたなき心地すべし。らうたう猶思へば、こゝに迎へてむ。さらずば、あなかまとてもやみなむかし」と宣へば、「そのほどい御さだめ、よく承りてなむ仕うまつるべかなり」と申せば、少將、「見てこそ定むべかなれ。暗にはいかでかは。まめやかに猶たばかれ、世にふとは忘れじ」と宣へば、帯刀、「ふとはあぢきなき文字なり」と申せば、君うち笑ひ給うて、「長くといはむとしつるを、いひ違へられぬるぞや」などうち笑ひ給うて、「これを」とて御文賜へば、しぶしぶにとりて、「安濃に御文」とて引き出でたれば、「あな見苦し。何しにぞとよ。よしない事は聞えで」といへば、猶御返りせさせ給へかし。世に惡き事にはあらじ」といへば、

うへ―大殿の北の方即ち落窪の實の繼母
つゝみ―憚り
ひとりごち―獨語
いで―發語の詞
なり―形
かゝりて―物によりかかりて
やんごとなき子―貴き子、今妻腹をいふ

取りて參りて、「かの聞え侍りし御文」とて奉れば、「何しに。上も聞き給ひては、よしと宣ひてむや」と宣へば、「さてあらぬ時は、よくやは聞え給へる。上の御心になつゝみ給ひそ」といへど、答へもし給はず。安濃、御文を紙燭さして見れば、只かくのみぞある。

君ありと聞くに心をつくばねのみねど戀しきなげきをぞする

「をかしの御手や」とひとりごち居たれど、かひなげなる御けしきなれば、おし卷きて、御櫛の筥に入れて立ちぬ。帶刀、「いかにぞ御覽じつや」、「いで、まだ答をだにせさせ給はざりつれば、置きて立ちぬ」といへば、「いでや、かくておはしますよりはよからむ、我等が爲にも、思ふやうにて」といへば、「いでや、御心のたのもしげにおはせば、などかはさも」といふ。つとめて、おとゞ、殿におはしけるに、落窪をさしのぞきて見給へば、なりのいとあしくて、さすがに髮のいとうつくしげにて、かゝりて居たるを、あはれとや見給ひけむ、「みなりいとあし。あはれとは見奉れど、まづやんごとなき子どもの事をする程に、え心知らぬなり。よかるべき事あらば、心とものし給へ。かくてのみい

いとほしー可憐

はふらかしー取り失ひ

表の袴ー禮服の袴

綾のはり綿ー綿に糊をひき染模樣をつけたるもの、衣の上にひきかけて著用す

萎えたるー

ますがいとほしや」と宣へど、恥しうて物も申されず。歸り給うて北方に、「落窪をさし覗きたりつれば、いと賴みずくなげなる、白き袷一つをこそ著て居たりつれ。子どもの古衣やある。著せ給へ。夜いかに寒からむ」と宣へば、北方、常に著せ奉れど、はふらかし給ふにや、あくばかりもえ著つき給はぬ」と申し給へば、「あなうたての事や、親に疾くおくれて、心もはかぐ\しからずぞあらむかし」と答へ給ふ。聟の少將君の、表袴ぬはせにおこせ給ふとて、「之はいつよりもよく縫はれよ。祿に衣著せ奉らむ」と宣へるを聞くに、いみじき事限なし。いと疾く淸げに縫ひ出で給へれば、北方よしと思ひて、己が著たる綾のはり綿の、萎えたるを著せ給へば、風はたゞはやになる儘に、いかにせましと思ふに、少し嬉しと思ふぞ、心地の屈し過ぎたるにや。此聟の君は、惡き事をもかしがましくいひ、よき事をば揭焉に譽むる心ざまなれば、「この裝束どもいとよし。よく縫ひおほせたり」と譽むれば、御達、北方に申せば「あなかま、落窪君に聞かすな。心驕せむものぞ。かやうの者は、屈せさせ置くぞよき。それを幸にて、人にも用ゐ

著古してくたくたになりたる
掲焉に―きは立て
ふみ―踏み文
はかなき―かりそめの

られむものぞ」と宣へば、御達、「いといみじげにも宣ふかな、あたら君を」と、忍びていふもありかし。かくて少将いひそめ給うてければ、また御文薄にさしてあり。

　穂に出でていふかひあらば花すすきそよとも風にうち靡かなむ

御かへりなし。時雨いたうする日、

　さも聞き奉りし程よりは、物思し知らざりける、

とて、

　雲間なきしぐれの秋は人戀ふるこころのうちもかきくらしけり

御かへりもなし。又、

　天の川雲のかけはしいかにしてふみ見るばかりわたしつづけむ

日々にあらねど、絶えず云ひ渡り給へど、絶えて御返りなし。「いみじう物つゝましきうちに、かやうの文もまだ見知らざりければ、いかにいふとも知らぬにやあらむ。物思ひ知りげに聞くを、などかは、はかなきかへり事をだに絶えてなき」と帯刀に宣へば、「知

いなび―ことわる

いかでと―何卒然るべき隙もあれかしと

ます田の池―大和にあり、つらさの増す意を懸く

頓の事―急用にて

おぞし―愚鈍なり

御方々―大

らず。北方の、いみじく心の悪くて、我がゆるさざらむ事露ばかりもしいでば、いみじからむ、と明暮おぼいたるに、恐ぢ愼みたまへる、となむ聞き侍る」と申せば、「我を索に」といひ渡り給へば、わが君の御言を、いなびがたくやありけむ、いかでと見ありく、十日ばかり音づれ給はで、思ひ出でて宣へり。

日比は、

かき絶えてやみやしなましつらさのみいとどます田の池の水ぐき

思うたまへ忍びつれど、さてもえあるまじかりければ、人知れず、人わろく、

とあれば帶刀、「このたびだに御かへり聞え給へ。しか〴〵なむ宣ひて。心に入れぬぞとさいなむ」といへば、安濃「又いふらむやうも知らず」とて、いと難げに思したるものを」とて、参りて見奉れど、中の君の御夫の右中辨、頓の事にて出で給ふ。袍衣縫ひ給ふほどにて御かへりなし。少將、實にいひ知らぬにやあらむ、と思へど、いと心深き御心も聞きしみにければ、さる心ばへやふさはしかりけむ、帶刀をおぞしと責め給へ

君中君三の君など
御願はたし―報賽
嫗―老女
かぞへ―人數
けがれ―月事
かひすみて―かは助辭ひそみてなり

ど、御方々すみ給うて、いと騷しき程なれば、さるべき折もなくて、思ひありく程に、此殿、古き御願はたしに、石山に詣で給ふに、御供にしたひ聞ゆるまゝに、率ておはすれば、嫗さへ、留らむ事を恥と思ひて詣づるに、落窪君かぞへの中にだにも入らざれば、辨の御方、「落窪君率ておはせ、一人留り給はむがいとほしき事」と申し給へば、「さてそれがいつありきしたる。旅にては縫物やあらむとする。猶ありかせそめじ。内に籠めて置きたらむぞよき」とて、思ひかけでやみ給ひぬ。安濃は、三の君の御方人にて、いと似なく装束かせて、率ておはするに、おのが君の只一人おはするに、いみじく思ひて、「俄にけがれ侍りぬ」と申して留れば、「よにさもあらじ。かの落窪君の一人おはするを、思ひていふなめり」と腹立てば、「いと理なき事にて侍るなり。侍へとあらば參らむ。かくをかしき事、見じと思ふ人ありなむや。嫗だにしたひゆく道にこそあめれ」といへば、實にさや思ひけむ、はした童のあるに、さうぞかせて、とどめ給ひ、のゝじりて出で給ひぬれば、かひすみて、心細げなれど、我が君とうち語らひ居る程に、帶刀が許より、

御方—落窪の君　女御殿の云云—帶刀が替て安濃に語りし也　惟成—帶刀の實名　いたう—巧に　おろし—下され　こゆびさして—小指食はへて　かた—圖　ゑみせじ—繪見せじ、

御ともに參り給はずと聞くはまことか。さらば參らむ。

といひたれば、

御方のなやましげにおはして、とまらせ給ひぬれば、何しにかは行かむ。いとつれづれなるをなむ、慰めつべくばおはせ。ありと宣ひし繪必ず持ておはせ、

といひたるは、「女御殿の御方にこそいみじく多く候ふべけれ。君おはし通はば見給ひてむ」といへるなりけり。帶刀、やがて、此文を少將君に見せ奉れば、「これや惟成が妻の手。いたうこそ書きけれ。よき折にこそありけれ。行きてたばかれ」と宣ふ。「繪一卷おろし給はらむ」と申せば、君、「かのいひけむやうならむ折こそ見せめ」と宣へば、「さも侍りぬべき折にこそは侍るめれ」と申す。うち笑ひ給うて、御かたにおはして、しろき色紙にこゆびさして、口すほめたるかたを書きたまひて、

召し侍れば、

つれなきをうしと思へる人はよしゑみせじとこそ思ひがほなれ

笑みせじ
餌袋—鷹の餌を入る袋にて、菓子などを入れて持ち歩くにも用ひたり
君—落窪の君
繪や聞えつる—繪見せ給へといへるか
往ぬ—安濃が
案内—様子
さう／＼し—淋し
燒米—米を

をさな。

ど書い給へれば、出づとて、親に「をかしき様ならむくだもの、一餌袋して置い給へ。いま只今とりに奉らむ」といひおきて往ぬ。安濃呼び出でたれば、「いづら繪は」といへば、「こは。この御文見せ奉り給へ」。「いで空言にこそあらめ」といへど取りていぬ。君いと徒然なる折にて見給ひて、「繪や聞えつる」と宣へば、「帯刀がもとに、しか／＼云ひつるを、御覧じつけけるにはべるめり」といへば、「うたて、心なしと見えられたるやうにこそ。人に知られぬ人は、無心なることそよけれ」とて、物憂氣におもほしたり。帯刀呼べば往ぬ。物語して「誰々かとまり給へる」と、さりげなくて案内問ふ。「いとさう／＼しや。嫗どもの御許に、くだもの取りにやらむ」とて、「何もあらむ物賜へ」といひにやりたれば、餌袋二つして、をかしきさまにして入れたり。今一つの大きやかなるには、さまざまのくだもの、色々の餅、薄き濃き入れて、紙隔てて燒米入れて、「こゝにてだにあやしく、あわたゞしき口つきなれば、旅にてさへいかに見給ふらむ。はづかしう、この燒米

抄りたるもの

露―あこぎが使ふ童の名

さかしら―賢ぶりたる所置

は、露といふらむ人にものし給へ」といへり。さうぐ〵しげなる氣色を見て、いかで、はかなき志を見せむ、と思ひてしたるなりけり。女見て「いで怪し、米くだものやけしからず。そこにし給へるにこそ」と怨ずれば、帶刀打ち笑ひて、「知らず。まろはかやうに見ぐるしげにしてむや。嫗どもの御さかしらなめり。露、これ取り隱してよ」とてやりつ。二人ふして、互に君の御心ばへどもを語る。今宵雨降れば、よもおはせじとて、打ちたゆみて臥したり。女君、人なき折にて琴いとをかしう、なつかしう彈き、臥し給へり。帶刀をかしと聞きて、「かゝるわざし給へるは」といへば、「さかし。故上の六歳におはせし時より、教へ給へるぞ」といふ程に、少將いと忍びておはしにけり。人を入れ給ひて、「聞ゆべき事ありてなむ。帶刀出で給へ」といはすれば、帶刀心得て、おはしにけりと思ひて、心あわたゞしくて、「只今對面す」とて、出でていぬれば、安濃御前に參りぬ。少將、「いかに、かゝる雨に來たるを、徒に歸すな」と宣へば、帶刀、「まづ御消息を賜はせで、音なくてもおはしましにけるかな。人の御心も知らず、いとかたき事に侍る」と

な直だちそ—眞面目がるな

しとゝ—したゝかに

物忌の姫君—此頃行はれたる物語の女主人公の名なるべし

簀子—緣

掻練—表裏とも紅の打物なる衣

袙—婦人の身肌に近く著る衣

側みて—横向きて

申せば、少將、「いといたくな直だちそ」とて、しとゝ打ち給へば、「さばれ下りさせ給へ」とて、諸共に入り給ふ。御車は「まだ暗きに來」とて、かへしやりつ。我が曹司の遣戸口にしばしゐて、あるべき事きこゆ。人ずくななる折なれば、心やすしとて、「まづかいまみをせさせよ」と宣へば、「しばし。心おとりもぞせさせ給はむ、物忌の姫君のやうならば」と聞ゆれば、「笠も取りあへで、袖をかづきてかへるばかり」と笑ひ給ふ。格子のはざまに入れ奉りて、留守の宿直人や見つくる、とおのれもしばし簀子に居る。君の見給へば、消えぬべく火ともしたり。几帳屛風だになければ、よく見ゆ。むかひ居たるは、安濃なめりと見ゆる。容體頭つきをかしげにて、白き衣、うへにさゝやかなる掻練の袙きたり。そひ臥したる人あり。君なるべし。しろき衣の萎えたると見ゆるを著て、掻練のはり綿なるべし、腰より下に引きかけて、側みてあれば、顔は見えず。頭つき髪のかゝりば、いとをかしげなりと見る程に、火消えぬ。口惜と思へど、遂にはと思しなす。「あな暗のわざや。人ありといひつるを、早いね」といふ聲も、いといみじくあてはかなり。「人に

逢ひにまかりぬるうちに、御前に侍はむ。大かたに人なければ、恐しくおはしまさむものぞ」といへば、「猶やは。おそろしさは、目馴れたれば」といふ。君いで給へれば「いかゞ。御送つかうまつるべき御笠は」と申せば、「妻を思へば、いたくかたびく」と笑ひたまふ。心のうちには、衣どもぞ萎えためる。恥しと思はむものぞ、とおもほしけれど、「はやその人呼び出でて寢よ」と宣へば、曹司に行きて呼ばすれど、「今宵はおまへに侍ふ。早う侍にまれおはしね」といへば、「只今人のいひつる事聞えむ。只あからさまに出で給へ」と聞えさすれば、「何事ぞとよ。かしがましや」とて、遣戸押しあけて出でたれば、帶刀とらへて、「雨降る夜なめり、一人な寢そ、といひつれば、いざ給へ」といへば、女笑ひて、「そよ、ことなかり」といへど、強ひてゐて行きて臥しぬ。物もいはで、寢入りたるさまをつくりて臥せり。女君なほ寢入られねば、琴を臥しながらまさぐりつゝ、

なべて世の憂くなる時は身かくさむいはほの中のすみかもとめて

といひて、とみに寢入るまじければ、また人はなかりつと思ひて、格子を木の端にて、

かゝりば—さがりたる程らひ
あてはか—上品
侍—従者の詰所
あからさまに—ちよと
雨降る夜なめり云々—客人が斯く我に告げたりと戯れ云へる也
いざ給へ—さあ來れ
まさぐり—弄び

入りぬる――少將が

とらへながら――落窪の君を

いとよう放ちて、押しあげて入りぬるに、いとおそろしくて起きあがる程に、ふとより て捕へ給ふ。安濃、格子をあげらるゝ音を聞きて、いかならむと驚き惑ひて起くれば、帶刀さらに起さず。「こはなぞ。御格子の鳴りつるを、なぞと見む」といへば、「犬ならむ。鼠ならむぞ。な驚き給ひそ」といへば、「なでふ事ぞ。しだるやうのあればいふか」とい へば、「何わざかせむ。寢なむ」と抱きて臥したれば、「あな侘し、おなうたて」と、いと ほしくて腹立てど、動きもせず、抱き籠められてかひもなし。少將、とらへながら、裝束 ときて臥し給ひぬ。女、おそろしう侘しくて、わなゝき給ひて泣く。少將、「いと心憂く 思したるに、世の中のあはれなる事も聞えむ。岩ほの中もとめて奉らむとてこそ」と宣 へば、誰ならむと思ふよりも、衣どものいと侘しう、袴のいとわろびれ過ぎたるを思ふ に、只今も死ぬるものにもが、と泣くさまいといみじげなる氣色なれば、煩しく覺えて、 物もいはで臥したり。安濃が臥したる所も近ければ、泣いたまふ聲もほのかに聞ゆれば、 さればよと思ひて、惑ひ起くるをも、更におこさねば、「我君をいかにしなし奉りて、か

かなぐりて―手荒く引き除けて

あひおぼさざりける人―相思はざりける人と

安濃が帯刀を怨むなり

くはするぞや。あやしとは思ひつ。いと愛敬なかりける心もたりけるものかな」とて、腹立ちかなぐりて起くれば、帯刀笑ふ。「事こまかに知らぬ事も、たゞおふせに負せ給ふこそよからめ。うへにこの時盗人入らむやは。男にこそおはすらめ。今はまゐりたまうても、かひあらじ」といへば、「いで、猶つれなく物ないひそ。誰とだにいへ。いといみじきわざかな。いかにおもほし惑ふらむ」とて泣けば、「あな童氣や」と笑ふ。妬き事添ひて「あひ思さざりける人に見えける事」と、いとつらしと思ひたれば、心苦しうて、「誠に、少將君なむ、もののたまはむとておはしたりつるを、いかならむ事ならむ。あなかま。とてもかくても、御宿世ぞあらむ」といふを、「いとよくけしきをだに知らねど、君は心合せたりとおほさむが佗しき事。何しに今宵こゝに來つらむ」と怨むれば、「知らぬけしきをだに見給はずやある。腹立ち怨み給ひそ」と腹だたせもあへず、たはむれしたり。

男君、「いとかうしもおほえたるはいかなるにか。人數にはあらねど、いとかうまでは、歎い給ふ程にはあらずおほゆる。度々の御文見つとだに宣はざりしに、便なきことと見

しとど――じとじと、甚しく濡るゝこと

世づかぬ――世馴れぬ、即ち男女の交を知らぬ

なほざり――よい加減

てき。聞えでもあらばや、と思ひしかども、聞えそめ奉りて後、いと哀におぼえ給ひしかば、かうにくまれ奉るべき宿世のあるなりけり、と思ひ給へらるれば、憂きもうからずのみなむ」と、かい抱きて臥し給へれば、女死ぬべき心地し給ふ。單衣はなく、袴一つ著て、所々あらはに身につきたるを思ふに、いといみじとは愚なり。泪よりも汗にしとどなり。男君も、その氣色をふと見給ひて、いとほしう哀におもほす。よろづ多く宣へど、御答あるべくもおぼえず。恥しさに、安濃をいとつらしと思ふ。辛うじて明けにけり。鳥の鳴く聲すれば、男君、

「君がかくなきあかすだに悲しきにいとうらめしき鳥の聲かな

いらへ時々はし給へ。御聲聞かずば、いとゞ世づかぬ心地すべし」と宣へば、辛うじて、あるにもあらずいらふ。

人ごころ憂きには鳥にたぐへつつなくより外の聲はきこえじ

といふ聲、いとらうたければ、少將君、なほざりに思ししを、まめやかに思ひ給ふべ

いはけなき—幼氣なる

脱ぎすべして—脱ぎ去りて

帶刀のも君のも—文なり

し。「御車ゐて參りたり」といふを聞きて、帶刀、安濃に、「まゐりて申し給へ」といへば、「夜べはまゐらで、今朝まゐらむ、實にまろが知りたる事とこそ思さめ。腹ぎたなく、人にうとませ奉らす事」と怨ずる、いはけなきものから、をかしければ、うち笑ひて、「君疎み給はば、まろ思はむかし」といひて、格子のはざまによりて、聲づくれば、少將起き給ふに、女のきぬを引き著せ給ふに、單衣もなくて、いとつめたければ、單衣を脱ぎすべしておき出で給ふ。女、いと恥しき事かぎりなし。安濃、あいなくいとほしけれど、さてもはいり居たらねば、參りて見るに、まだ臥し給へり。いかでいひ出でむ。と思ふ程に、帶刀のも、君のもあり。帶刀のには、

夜ひと夜、知らぬ事により、うちひき給ひつるこそ、いと理なかりつれ。御爲に少しにても、疎ならむ時は參らじ。まいていかなる目見せ給はむ。かねて恐ろしき御心ばせかな。御前にもいかに、よくもあらざりけるものかな、とおほし宣はすらむ、と思う給ふれば、御文侍るめる。御かへり聞え出でたまへ。この世の中はさるべき

はかなく―それと取りとめたる事もなく

答もせず云云―落窪の君の男に逢へるを恥ぢ給へる様なり

うしろめたき―後までも心を勞すべき

いといみじげなる袴―すぐれてきたなき袴

故上―なき母上

にや。なにかおもほす。

といへり。持て參りて、「こゝに御文侍るめり。昨夜はいとあやしく、思ひかけずして臥し侍りし程に、はかなく明け侍りにけり。聞えさすとも、あらがふとぞ推しはからせ給ふらむ、と推しはかるは、理なれど、この氣色をだに見て侍らば」と、よろづ誓ひゐたれど、答へもせず、起きもあがり給はねば、「猶知りて侍り、と思ほすにこそはべるめれ。心うく、許多の年比つかうまつり侍りて、かくうしろめたき事はし侍りなむや。一人おはしまさむを思う給へて、をかしき御供にも、まゐり侍らずなりにしかひなく、かゝる理を聞かせたまはず、かひなき御氣色ならば、侍はむもいといとほしう侍り。いづちもいづちもまからなむ」とて、うち歎けば、君いといとほしうて、「そこに知りたらむとも思はず。いとあさましう、思ひもかけぬ事なれば、いと心憂く思ふ中に、いといみじげなる袴のありさまにて見えぬるこそ、いといはむ方なく侘しけれ。故上おはせませしかば、何事につけても、かく憂目見せましやは」とて、いみじう泣き給へば、「實に理にはべ

異やうならむ—落預自身をいふ

おとなしう—老成らしく

れど、いみじき繼母といへど、北方のみ、心のいみじうあさましき由は、さき／＼も聞かせ給へれば、さこそは思すらめ。只御心だに頼み奉りぬべくば、いかにうれしからむ」。「それこそまして。かく異樣ならむ人を見て、心とまりて思ふ人はありなむや。物の聞えあらば、北方いかに宣はむ。我がいはざらむ人の事をだにしたらば、こゝにも置いたらじと宣ひしものを」と、いみじと思ひ給へれば、「されば、なか／＼思ひはなれ奉りたらむがよからむ。かくていはれ御坐しまさば、いつの世に、もしよくもならせ給はむ。かくても世におはしまさじ。かくて籠めすゑ奉り給ひて、つかへ奉り給はむの心、いと深くてあらせ聞え給ふにはあらずや」と、いとおとな／＼しう云ひゐたり。「御返事は」と問へば、たり(詞落ちたるべし)「早う御文も御覧ぜよ。今は思しなげくともかひあらじ」とて、御文ひろげて奉れば、うつぶしながら見給へば、只かくのみぞある。

　いかなれやむかし思ひし程よりは今の間思ふことのまさるは

とありけれど、「いと心地あし」とて、御返事なし。安識、返事書く。

あいなく―無愛
さながら―そのまゝ
ものし―厭はし
さゝがに―蜘蛛

いでや、心づきなく、こは何事ぞ、昨夜の心は、かぎりなくあいなく、こゝろづきなく、腹ぎたなしと見てしかば、今ゆくさきも、いと頼もしげなくなむ。御前にはいとなやましげにて、まだ起きさせ給はざめれば、御文もさながらなむ。いとこそ心苦しけれ、御けしきを見れば。

といへり。少將君に、かくなむと聞ゆれば、我をいとものし、と思はむやは。只かの衣どもを、いといみじと思ひたりつる名殘ならむ、と思す。晝間に又御文かき給ふ。

などか、いまだにいとわりなげなる御氣色のいとほしさは、ふたりだに、

こひしくも思ほゆるかなさゝがにのいととけずのみ見ゆるけしきに

ことわりな。

とあり。帶刀が文、

こたみだに御かへりなくば、便なかりなむ。今は只あひおほせかし。御心はいと長げになむ見奉り宣はする。

「こたみは」—今度は返事し給へ
かづきて—かぶりて
まめやかに—眞實
おまし所—御座所

といへり。安濃、「こたみは」といへど、いかに思ひ出で給ふらむ、と思ふに恥しう、つつましう侘しくて、返事書くべくもおぼえねば、たゞ衣を引きかづきて臥したり。聞えわづらひて、安濃返事かく。

御文御覽じつれど、まめやかに苦しげなる御氣色にてなむ。御返事も、さていと長げにはなどか、いつの程にかは、みじかきも見え給はむ。まだたのもしげなくとも、うしろやすく宣ふらむ。

と書きてやりつ。帶刀見せ奉りたれば、「いみじくざれて、物よくいふべきものかな。むげに恥じと思ひたりつるに、氣の上りたらむ」と、ほゝゑみて宣ふ。さて安濃、只一人していひ合すべき人もなければ、心一つを千々になして、立ち居つゝ、おまし所の塵はらひそよぐりて、屛風、几帳なければ、しつらひなさむ方もなし。いと理なけれど、君は物も覺えで臥したまへるを、おましなほさむ、と引きおこし奉れば、面おかみて實に苦しげなるまで、御目も泣きはれ給へり、いとほしう哀にて、「御髪搔きくだしたま へ」

調度—道具
おはしぬらむ—少將來り給はん
とのゐもの—夜具
たきもの—薫香
ゆめばかり—少許

と、おとな〳〵しくつくろへど、「心地あし」とて只臥しに臥しぬ。この君は、いさゝかよき御調度持たまへりける。母君の御物なりけり。鏡なむまめやかに美しげなりける。これをだに持給へらざらましかば、と思ひて、かきぬぐひて枕上に置く。かく大人になり、童になり、獨いそがしき心地す。「いまはおはしぬらむ」とて、「忝くとも、まだいたう身にもなれ侍らず。いとほしう、昨夜をだに、さて見え奉り給ひけむを」とて、おのが袴のふたゝびばかり著て、いと淸げなる、とのゐもの一つをもたりけるを、いとしのびて奉るとて、「いと馴れ〳〵しう侍れど、まだ見知る人の侍らばこそあらめ。いかゞはせむ」といへば、かつは恥しけれど、今宵さへ同じやうにて見えむ事を、限なく思ひつるに、哀にて著給ひつ。「たきものは、この御裳著に賜はせたりしを、ゆめばかり包み置きて侍り」とて、いとかうばしうたきにほはす。三尺の御几帳、一つはいるべかめる。いかゞせむ、誰にからまし。御宿直ものも薄きを、思ひまはして、姨の殿ばら宮づかへしけるが、今は和泉守の妻にてゐたりける許に、文遣る。

方違—方角の悪きを避けて他の處にゆくこと

君—少將の君

つゝましからず—遠慮

とみなる事にてとゞめ侍らむ。恥しき人の方違に、曹司にものし給ふべきに、几帳ひとつ、さてはとのゐものに、人の乞ふ物すら便なきはえいだし侍らじ、と思ひ侍りてなむ。さるべきや侍る。賜はせてむや。をり〳〵はあやしき事なれど、とみにてなむ。

とはしり書きて、やりたれば、

音づれ給はぬをこそ、いと心うく思ひ給ふれば、何も〳〵。猶のたまはむ、と宣へれば、よろづとどめつ。いとあやしけれど、おのが著むとてしたりつるなり。さはしものし給ふらむ。几帳奉る。

とて、紫苑色のはり綿までおこせたり。いと嬉しき事かぎりなし。取り出でて見せ奉る。几帳の紐とりおろす程に、君おはしたれたば、入れ奉りつ。女、臥したるがうたて覺ゆれば、起くれば、「苦しう思し給はむに、何か起きさせ給ふ」とて、臥し給ひぬ。今宵は袴もいとかうばし。衣も單衣もあれば、例の人ごこちし給ひて、男もつゝましからず臥し

なく……
御厨司―御膳所
ひきぼし―海藻
としみ―精進落ち

給ひぬ。今宵は時々御答し給ふ。世になくあるまじうおぼえ給ひて、萬に語らひ給ふほどに、夜も明けぬ。「御車ゐて參りたり」と申せば、今雨やめて。しばし待て」とて、臥し給へれば、安濃、御手水、粥、いかで參らむ、と思ひて、御厨司にや語らはまし、と思へど、大方にもおはしまさねば、御粥もよにせじ、と思へど、いきて語らふ。「帶刀の友達なむ、昨夜物いはむとて來たりしを、雨にとまりて、まだかへらぬに、粥食せむと思ふをなむ無くて、土器少し賜へ。さてはひきぼしなどや殘りたる。少し賜へ」といへば「あないとほし。心いそぎをかしうし給ふが、いとほしさ、歸らせ給はむ料に、今少しあらむ」といへば、「かへり給はむには、御としみをぞしたまはむ」とて、けしきよろしと見て、傍なる瓶子をあけて、たゞとりに取るを、「少しは殘し給へ」といへば、さま〴〵といひて、紙にとり分けて、炭取に入れて、引き隱して持て行きて、露に、「御粥いと淸くして持てこ」とて、をかしげなる御臺もとめありく。御手水まゐらむ、と求めありけど、御方には、いづくの匜盥かあらむ。「三の御方のを取りもて來て、御前にまゐらむ」

わりなく—甚しく

便なし—窮乏なり

やをら—靜に

三日の夜—婚嫁後の三夜に餅を供する事吉の儀式なり

とて、頭かいくだしなどして居たり。女君、わりなく苦しと思ひて臥し給へり。安濃、いと清げに假粧して、帯ゆるらかにかけてまゐる。背面、髪たけに三尺ばかり餘りて、いとをかしげなり、と帯刀も見送る。「この御格子は、まゐらでやあらむずる」と獨言して参るを、少將君も、いとゆかしうて、「いと暗し、あげよと宣ふなり」と宣へば、物ふみ立ててあげつ。男君おき給ひて、御裝束し給ひて、「車はありや」と問ひ給ふ。「御門に侍る」とまうせば、出で給ひなむとするに、いと清げにて御粥まゐりたり。御手水とり具してまゐりたり。あやしう、便なしと聞きし程よりは、とおぼす。女君は、いとあやしう、如何で、と思ひ給へり。雨少しよろしうなれば、人さわがしうあらねば、やをら出で給ひなむとす。女君の御方を見給へば、まめやかにいと美しげなれば、いと限なくおもほし増りて、いとあはれと思す。粥など少し参りて臥し給ひぬ。夜さりは三日の夜なれば、いかさまにせむ。こよひ餅いかでまゐるわざもがな、と思ふに、又いふべきかたもなければ、和泉殿へ文かく。

たゞ今―文の詞か、さば今少し詞ありしが落ちしにやといふ

いとうれしう、聞えさせたりしものを、賜はせたりしなむ、悦び聞えさする。又あやしとは思さるべけれど、こよひ餅なむ、いとあやしき様にてよう侍る。取りぐすべきくだものなど侍りぬべくは、少し賜はせよ。客人なむ、しばしと思ひ侍りしを、四十五日の方違ふるになむ侍りける。さればこの物どもは、しばし侍るべきを、いかが。盥匜の清げならむを、しばし賜らむ。取りあつめて、いとかたはらいたけれど、頼み聞えさするまゝに。

とてやりつ。少將の御許より。

たゞ今

　よそにては猶我が戀をますかがみそへる影とはいかでならまし

とあれば、今日なむ御返し。

　身をさらぬかげと見えてはます鏡はかなくうつることぞかなしき

いとをかしげに書きたれば、いとをかしげに見給へるけしきも、志あり顔なり。安濃が

かしづき—奉仕する
受領—國守
德—富たのしげに
侍り—侍りはありの謙ならむ
しひ米—しろい米か

許には、和泉の家より、

昔の人の御かはりには、あはれに思ひ聞えて、女子も侍らねば、むすめにし奉らむ、身一つはいとやすらかに打ちかしづきてすゑ奉らむと思ひて、前々も御迎すれども、渡り給はぬこそ怨み聞ゆれ。物どもはいとよかなり。いかにもく使ひ給へ。盥匜奉る。あな異やう、宮仕する人は、かやうの物必ずもたらぬはなきが、今までは賴まざりつる身に、なきはいと見ぐるしきを、いとあやしき事。奉らむ餅は、いと安き事、いま只今して奉らむ。物具、餅などめすは、御聟どりし給ひて、三日の設し給ふか。まめやかにいかで對面もがな。いと戀しくなむ。何事も猶宜へ。時の受領は、世に德あるものといへば、只今そのほどなれば仕うまつらむ。

といとたのもしげに侍り。見るにいと嬉し、君に見せ奉れば、「餅は何の料に乞ひつるぞ」と宜へば、うちゑみて、「猶あるやうありてなむ」と聞ゆ。臺のいとをかしげなる盥匜いと淸げなり。大きなる餌袋に、しひ米入れて、紙を隔て、くだもの、乾物包みて、い

乾物―乾魚

世の常なり―嬉しといふもおろかなり

程なく云々―通ひ初めて程なく行かぬ夜のあるは氣の毒也

さかし―然り

とくはしくしてなむ、おこせたりける。今宵はをかしき樣にて、餅を參らむ、と思ひて取りて、萬にくだもの栗などかきつくろひ居たり。日やう〳〵暮るゝ程に、少しやみたる雨、降る事限なし。餅や得ざらむと思ふ程に、男、大笠さゝせて朴の櫃におこせたり。嬉しき事ものに似ず。見れば、いつの間にしたるにかあらむ、草餅二種ちひさやかにをかしうて、さま〴〵なり。文には、

俄に宣へりつれば、急ぎて。思ふさまにやあらざらむ。志くちをし。

といへり。雨いたう降るとて急げば、酒ばかり飲ます。返事は、すべて聞えさすれば、世の常なり、と悅びやりつ。爲ぞしつとて嬉し。物の蓋に少し入れて、君にまゐる。暗うなるまゝに、雨いとあやにくに、頭さし出づべくもあらず。少將、帯刀に語らひ給ふ。「くちをしう、かしこにはえ行くまじかめり。この雨よ」と宣へば、「程なくいとほしくぞ侍らむかし。さ侍れど、あやにくなる雨はいかゞはせむ。心のおこたりならばこそおらめ。さる御文をだに物せさせ給へ」とて、氣色いと苦しげなり。「さかし」とて書い

ふる—經る、降る

給ふ。

いつしか參り來むとしつる程に、かうわりなかめればなむ。心の罪にあらねど、疎におもほすな。

とて、帶刀も、

只今參らむ。君おはしまさむとしつる程に、かゝる雨なればくちをし、と歎かせ給ふ。

といへり。かゝれば、いみじうくちをし、と思ひて、帶刀が返事に、

いでや、降るともといふ事もあるを、いとゞしき御心ざまにこそあめれ。更に聞えさすべきにもあらず。御みづからは、何の心地のよきにか來むとだにあるぞ。かゝるあやまちし出でて、かゝるやうありや。さても世の人は、今宵來ざらむよ。

と書けり。君の御返りには、たゞ、

世にふるをうき身とおもふ我が袖の濡れはじめけるよひの雨かな

戌の時—夜の八時

くねり—すねる

降りぞまさる—伊勢物語の歌「かず〳〵に思ひ思はずとひがたみ身をしる雨は降りぞまされる」

かてうげに—かでふげにの誤にて、丈夫氣なむといふ

とあり。もて參りたるほど、戌の時も過ぎぬべし。燈の下にて見給ひて、君もいとあはれとおもほしたり。帶刀が許なる文を見給ひて、いみじうくねりためるは、實に今宵は三日の夜なりけるを、物のはじめにあしう思ふらむ、いといとほし。雨はいやまさりにまされば、思ひ佗びて、頰杖をつきて、暫よりゐ給へり。帶刀、わりなしと思へり。うち歎きて立てば、少將「しばしゐたれ、いかにぞや、いきやせむとする」。「かちよりまかりて、いひ慰め侍らむ」と申せば、「さらば我も行かむ」とのたまふ。嬉しと思ひて、「いとよう侍るなり」と申せば、「大笠一つまうけよ。衣ぬぎて來む」とて入り給ひぬ。帶刀、笠もとめにありく。安濃、かく出で立ち給ふも知らで、いといみじと歎く。かゝるまゝに、「愛敬なの雨や」と腹立てば、君はづかしけれど、「などかくはいふぞ」と宣へば、「猶よろしう降れかし。折にくゝも侍るかな」といへば、「降りぞ勝れる」と、忍びやかにいはれて、いかに思ふらむ、と恥しうてそひ臥し給へり。男君は、たゞ白き御衣一重を著給ひて、いとかてうげに引きつれて、帶刀と只二人いで給ひて、大笠を二人さして、門を

つゝやみ―眞闇

よろぼひ―足本定まらぬをいふ

小路ぎりに―小路を横切り行くに此方より縦に行き合ひたる也

うちはやりたる―氣早なる

密に開けさせ給ひて、いと忍びやかに出で給ひぬ。つゝやみにてわぶ〳〵道の惡しきをよろぼひおはする程に、前追ひて、數多火ともさせて、小路ぎりに辻にさしおひぬ。いと狹き小路なれば、え歩みかくれず、片側みて笠を垂れかけて行けば、雜色等、「このまかる者ども、暫歸りとまれ。かばかり雨もよに、夜中に只二人行くは氣色あり。捕へよ」といへば、わびしくして、暫あゆみとまりて立てれば、火をうちふりて人々、「足どもいと白し。盗人にはあらぬなめり」といへば、「眞人の小盗人は、足白くこそ侍らめ」と、いき過ぐるまゝに、「かく立てるはなぞ。ゐ侍れ」とて、笠をほと〳〵と打てば、屎のいと多かる上に屈まりゐぬ。又うちはやりたる人、「強ひてこの笠をさしかくして、顔をかくすはなぞ」とて、ゆき過ぐる儘に、大笠を引きかたぶけて、笠につきて、屎の上にゐたるを、火を打ちふきて見て、「奴袴きたりけり。身貧しき人の、思ふ妻のがりいくにこそ」など、口々にいひて、おはしぬれば、起ちて、「衛門督のおはするなめり。我を嫌疑の者と思ひて、捕ふると思ひつるにこそ死にたりつれ。我を足しろき盗人とつけた

りつるこそ、をかしかりつれ」など、只二人語らひて笑ひ給ふ。「あはれ、これよりかへりなむ。屎つきたり。いと臭くて往きたらば、なかなかうとまれなむ」と宣へば、帶刀笑ふ笑ふ、「かかる雨に、かくておはしましたらば、御志を思さむ人は、麝香の香にも嗅ぎなし奉りてむ、殿はいと遠くなり侍りぬ。行先はいと近し。猶おはしまさなむ」といへば、かばかり志深きさまにて、おり立ちて、いたづらにやなさむ、と思しておはしぬ。門辛うじてあけさせて、入り給ひぬ。帶刀が曹司にて、まづ水とて御足すまさす。また帶刀も洗ひて、「曉には疾く起きよ。まだ暗からむにかへらむ。とまりてあるべきにもあらず。いと異やうなる姿なるべし」と宣ひて、格子しのびやかに叩い給ふ。女君、今宵來ぬをつらし、と思ふにはあらで、大方聞え出でば、いかに北方のたまはむ。世の中のすべて憂きこと思ひみだれて、うち歎きて臥し給へり。安濃、思ひ設けたるかひなげに思ひて、御前により臥したれば、ふと起きて、「など、御格子のなる」とて寄りたれば、「あけよ」と宣ふ聲に驚きて、引きあげたれば、入りおはしたるさま、しぼるばかりなり。

勘當—御叱り

くゝりを脛にあげて—指貫のくくりを膝で高く結び上げて

徒歩よりおはしたるなめりと思ふに、めでたくあはれなる事二つなくて、「いかでかくは濡れさせ給へるぞ」と聞ゆれば、「惟成が勘當重し、と侘びつるが苦しさに、くゝりを脛にあげて來つるに、倒れて土つきたり」とて、脱ぎ給へば、女君の御衣をとりて、著せ奉りて、「ほし侍らむ」と聞ゆれば、脱ぎ給ひつ。女君の臥し給へる所により給ひて、「かくばかり哀にて來たりとて、ふとかい抱き給はゞこそあらめ」とて、かいさぐり給ふに、袖のすこし濡れたるを、男君、來ざりつるを思ひけるもあはれにて、

何事を思へるさまの袖ならむ

と宣へば、女君、

身をしる雨のしづくなるべし

と宣へば、「今宵は身を知るならば、いとかばかりにこそ」とて、臥し給ひぬ。安濃、この餅を筥のふたに、をかしう取りなして參りて、「これいかで」と聞ゆれば、君いとねぶたしとて起き給はねば、「なほこよひ御覽ぜよ」と聞ゆれば、「なにぞ」とて、頭もたげて見

まさなく―けしからず
參れ―食ひ給へ
實法に―律義に
しとゞに―びつしよりと濡れて
おふけなき―分に過ぎたる

上げたまへば、餅ををかしうしたれば、少將、誰かくをかしうしたらむ。かくて待ちけると思ふに、ざれてをかしければ、「餅にこそあめれ。食ふやうありとか。いかゞする」と宣へば、安濃、「まだやは知らせ給はぬ」と申せば「いかゞ一人あるには、食ふわざかは」と宣へば、安濃聞きて「三つとこそは」と申せば「まさなくぞあなる。女はいくつ」と宣へば「それは御心にこそ」とて笑ふ。「これ參れ」と、女君に宣へど、恥ぢて參らず。いと實法に三つ食ひて、「藏人少將も、かくやくひし」と宣へば、「さこそは」といひゐたり。夜更けぬれば寢給ひぬ。帶刀許いきたれば、まだしとゞに搔屈りてゐたり。「笠はなくやありつらむ。かう濡れたるは」といへば、忍びて道の程の事いひて笑ふ。「かばかりの御志は、今も昔もあらじ。類なしと思ひ聞え給はぬにや」といへば、「少し宜しかなれど、猶あかぬ」。「これを少し宜しきとは、女はおふけなきこそにくけれ。いみじくつらき御心のつゞくとも、三十度ばかりは、今宵にゆるし聞え給ひてむ」などいへば、例のおのが方ざまに、物いふなどいひて寢ぬ。「まめやかに、今宵おはせざらましかば、いみじ

程もなき所―狹き所

のゝしりて―喧しく騷ぎ立てゝ

あはせ―飯の菜

からまし」などいひて寢ぬ。夜さへ更けぬれば、いと夙く明け過ぎぬ。「いかでかいでむとする。人しづかなりや」などいひふし給へるほどに、安濃、いといとほしきわざかな。石山よりも、今日はかへりおはしぬらむ。人もこそふと來れ、と思ふも靜心なくて、御粥、御手水など思ふに、いそぎありければ、帶刀、「などかく靜心なくはありき給ふ」といへば、「いかゞは、ほどもなき所に、人をすゑ奉りたれば、人やふと來るとて、さわぎありくぞかし」といらふ。「車取にやれ。やをらふと出でなむ」と宣ふ程に、石山の人、ののしりて歸りおはしぬ。不用なりとて、出で給はずなりぬ。

女、かく隱れなき所に人もこそ來れ、いかにせむと胸つぶれて、いとおそろし。安濃も、いとあわたゞしく思ゆ。御だいあはせ、いと清げにて、粥まゐりたり。御手水まゐるり。いそぎありくが、心もとなければ、今人ひとりもがな、と思ふ。いととく車より下り給ふや遲きと北方、「安濃」と呼びのゝしり給へば、隔の障子をあけて出づれば、閉すべき人もおぼえず。格子のはざま隔てに參りたれば、「下向したる人は、苦しければう

くさはひ―種々
心にくゝ―ゆかしく
まがり―曲物の食器
さばれ云々―少將の詞

ち休むに、この比やすみつらむ。おるゝ所に來ぬはなぞ。すべて人の身人ばかり腹立たしく、よしなき物はなし。いかで、これ返してむ」と宣へば、心地には、いと嬉しき事と思ひながら、「きたなきもの、打ち散し侍りつる程なり」と聞ゆれば、「早う御手水まゐれ」と宣へば、立ちてありく空もなし。御膳も出できにければ、御厨司所に來て、「あが君あが君」といひて、かの白き米多くに代へて、御臺まゐりぬ。物のくさはひ見ならひたれば、少將君、便なしとのみ聞きしに、いと心にくくおぼす。女君、いかならむとおぼす。男君もをさ〳〵參らず。女君はたおきゐ給はねば、御まがりして、帶刀にいと淸げにして食はせたれば、いふやう、「許多の日比さむらひつれど、かくおろしなどや見えつる。なほ我が君のおはします氣なりけり」といへば、「嬉しき御心見えむとする餞別」といへば、「あな恐しの事や」とて、誰も〳〵笑ふ。かうて午時まで、ふた所臥い給へる程に、例はさしものぞき給はぬ北方、中隔の障子をあけ給ふに、かたければ、「これあけよ」と宣ふに、安濃も君も、いかにせむと侘び給へば、「さばれあけたまへ。几帳あけ給

物忌―凶祥惡しき夢見などありし時門を閉ぢて愼み居ること

ことごとし―誇大なり

ひらゝか―扁平

およすけ―老人めきて

へらば、物引きかづきて臥いたらむ」と宣へば、さしもこそのぞき給へと、わりなけれど、やるべきかたもなければ、几帳ながらに押し寄せて、女君ゐ給へり。北方、「などおそくはあけつるぞ」と問ひ給へば、「今日明日御物忌に侍り」と答ふれば、「あなことごとし。なでふ、我が家などなき所にて、物忌や侍る」と宣へば、「あが君猶あけよ」とて、開けさすれば、あらゝかに押しあけて入りまして、ついゐて見れば、例ならず清げにしつらひて、几帳たて、君もいとをかしげに取りつくろひて、大方の香もいとかうばしければ、怪しくなりて、「など、こゝのさまも、御さまも、例ならぬ。もし我なかりつるうちに、事やありつる」と宣へば、顔うちあかめて、「何事か侍らむ」といらへ給ふ。少將いかゞあるとゆかしうて、几帳のほころびより、臥しながら見給へば、白き綾の掻練など、よからねど重ね著て、面ひらゝかにて、北方と見えたり。口つき愛敬づきて、少しにほひたる氣つきたり。清げなりけり。たゞ眉の程にぞ、およすけ、あしけさも少し出で居たりと見る。「參りたるやうは、今日こゝに買ひたる鏡のをかしげなるに、此御筥の

心ゆきたる―滿足したる

前々の御聟取―北の方腹の大君中君などの

盒器―食器の蓋あるもの

入りぬべく見えし。暫給へと聞えむとてなむ、かうは來なり」と宣へば、「いとかう心安くものし給へば、いとよくなむ。さは給へ」とて引きよせ奉り給へり。うち俯して我が持たまへる入れ給へり。實に入りたれば、「かしこきものをも買ひてけるかな。この筥のやうに、今の世の蒔繪こそ更にかくせね」とて、かき撫で給へば、安濃、いとにくしと見て、「この御鏡の筥もなくてや」といへば、「今また求めて奉らむ」とて立ち給ふ。いと心ゆきたるさまにて、「かの几帳はいづこのぞ。いと淸げなり。例に似ぬものもあり。猶けしきづきたり」と宣へば、女君、いかに聞えむと恥し。「なくてあしければ、取りにやり侍りつ」と聞ゆ。猶けしきをうたがはしく思ひ給ひぬる。後に安濃、「まめやかにをかしくこそ侍れ。奉り給はむ事こそなからめ。もたまへる御調度を、かくのみに取らせ給へるよ。前々の御聟どりにしかへて、只しばしと、屛風よりはじめて取り給ひて、只我が物の具のやうにて、立て散しておはします。御盒器をだに、聞えとりたまひてき。今殿にも出でまうで來なむ。この御方の物は、たゞ見るまゝに、御かた〴〵の物にのみな

實にと聞き給ふ―少將君が

こよなければ―あまりにわろければ

りはてぬ。かく心ひろくおはしませども、人の御志やは見ゆる」と腹立ちゐたれば、女君をかしくて、「さばれ、いづれも〳〵用はてなば、賜びてむ」といらふれば、實にと聞き給ふ。几帳おしやりて出で、女君引き入れて、「まだ若うものし給ひけるは、女どもは、これにや似たる」と宣へば、「さもあらず。皆をかしげになむおはし給ふめる。怪しう見苦しうも見え給へるかな。聞きつけて、いかゞ宣はむ」といふ。少しうちとけたるを見るまゝに、いとをかしげなれば、猶あらじにて、思ひやみなましかばと思ふ。鏡の筥の代、このあこ君といふ童して遣せたり。黒漆の箱の九寸ばかりなるが、深さは三寸ばかりにて、古めきまどひて、處々兀げたるを、「これ黒けれど、漆つきて、いと清きなり」と宣へれば、をかしと笑ひて、御鏡入れて見るに、こよなければ、「あな見ぐるし、なかなか入れで持たせ給へ。いとうたてげに侍り」と聞ゆれば、「さばれ、ないひそ。賜はりぬ。實にいとよう侍り」とて、使やりつ。少將見給ひて、「かゝる古代の物を見出で給ひつらむ、老い給へるものは、さる姿にて、世に物もかしこし」と笑ひ給ふ。明けぬれば

つとめて―翌早朝

さがなさ―不直

昔は物を―拾遺集、中納言敦忠「あひ見ての後の心にくらぶれば昔は物を思はざりけり」

出で給ひぬ。女君起き給ひて、「いかにしてかく恥かくす事はしつるぞ。几帳こそいと嬉しけれ」と宣ふ。安濃、「しぞして侍りし」など聞ゆ。幼き心地にて、思ひよらぬ事し出でけり、と哀にらうたくて、實に後見とつきしかひあり、と思ふ。帶刀が語りし事どもを語りて、「いとあはれにて、御心ながくば、妬く思ひおとしたる世に、いかに嬉しからむ」といふ。その夜は、少將内裏に參りて、えおはせず。つとめて御文あり。

よべは内裏に參りてなむ、え參り來ずなりにし。いかに、安濃、惟成が勘當し侍りけむ、と思ひやりしもをかしうこそ。さがなさは、誰がを習ひたるにか、と思ふにも怖しうなむ。今宵は、「昔は物を」となむ。

さらでこそそのいにしへも過ぎにしを一夜經にけることぞ悲しき

つゝましき事のみ多く思されためる世は、はなれ給ふべしや。心やすき所もとめてむ。

と細やかに聞え給へり。「御かへりとく。はや持て參らむ」と、帶刀が聞ゆ。御文を見て

いさかはれ―諍はれ

門させりとも―古今集平貞文「うき世には門させりとも見えなくになどかわが身のいでがてにする」

藏人少將―三の君の夫

安濃わらふ。「語り申してけり、といふべき人のなきまゝにこそ、いさかはれ侍れ」といふ。

よべは、まだきしぐるゝ

ひとすぢに思ふ心はなかりけりいとど憂身のわくかたもなき

誠にうき世は、門させりともいふやうに出でがたくなむ。安濃は、罪あらむ人はおぢ給ひぬべし。

とあるを、持て出づる程に、藏人少將、まづ召すといふめれば、え置きあへで、懷にさし入れて參りたり。御鬢まゐらせたまはむとてなりけり。御うしろをまゐる、とて君もうつぶしに、我もうつぶしたる程に、懷なる文の落ちぬるも知らず。少將見つけ給ひて、ふと取り給ひつ。御鬢かき終てて入り給ふに、いとをかしければ、三の君に、「これ見給へ。惟成がおとしたりつるぞ」とて奉りたまふ。「手こそいとをかしけれ」と宣ふ。「落窪君の手にこそ」と宣ふ。少將、「とは誰をかいふ。あやしの人の名や」「さいふ人あ

御泔の調度—髪を洗ふ道具

みーこゝの誤なるべし

ほれて—茫然として

しめやぎ—ふさぎ

末の松山—古今集「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波も越えなむ」

り。物縫ふ人ぞ」とてやみぬ。三の君は文を取り給ひて、あやしと思ひ居給へり。帯刀、御泔の調度などとり置きて、立つとてかいさぐるに、なし。心さわぎて起ちるふるひ、紐ときてもとむれど、絶えてなければ、いかになりぬらむ、と思ひて、顔あかめて居たり。みよりほかにありかねば、落つとも爰にこそあらめとて、御座をまづ上げてふるへども、いづこにかあらむ、人や取りつらむ、いかなる事出で來む、と思ひなげきて、頬杖をつきてほれて居たるを、少將出づとて、見給うて、「など、惟成がいたうしめやぎたる。物や失ひたる」とて笑ひ給ふに、この君のとりかくし給ふなめり、と思ふに、死ぬる心地す。いと理なげなる氣色にて、「いかで賜はり侍らむ」と申せば、「我は知らず。姫君こそ末の松山とこそいひつめれ」とて出で給ひぬ。いはむ方なくて、あの君と思はむ事恥しけれど、いかゞはせむとて、安濃が許にいきて、「ありつる御かへり、みづから參らむに、もて參らむとて、出づる程に、しか召して、御鬢かゝせ給へる程に、かうして取られ奉りぬ。いといみじうこそ」と、我にもあらぬけしきにていへば、安濃、「いとい

いとゞしく—甚しく
すむ—通ふ
人なくては云々—使ふ人なくては不都合なり
惑はむものぞ—此所脫文あるべし
氣色を見る—安濫か

みじき事かな。いかなるのゝしり出で來むとすらむ。いとゞしく、この御方のけしきあり、と疑ひたまふものを、いかにさわがれ給はむとすらむ」と二人汗になりていとほしがる。三の君、この文を、北方に、しか〴〵してありつるとて、見せ奉り給へば、「さればよ、氣色ありと見つ。誰ならむ。帶刀がすむにやあらむ、そがもたりつらむは。迎へむと云ひたるにこそあめれ、出でがたしといひつるは。男あはせじとしつるものを、いと口惜きわざかな。男出で來なば、かうては世にあらじ。迎へてむ。人なくては大事なり。よき我兒達の、つかひ人と見置きたりつるものを、いかなる盜人の、かゝるわざはし出でつらむ。まだきにいはば、かくし惑はむものぞ」此文も出ださせで、氣色を見るに、人も云ひさわがねば、あやしう思ふ。女君には、「御文はかう〳〵し侍りにけり。おもて恥しきやうなれど、侍りつるやうに、御文かゝせ給ひて、賜はらむ」といへば、君、いと佗しと思ひ給へりとは、おろかなり。北方も見給ひつらむ、と思ふに、心地もいと佗しうて、又もえ聞ゆまじ、と歎き給ふ事かぎりなし。帶刀もいとほしうて、少將

おほとのごもりぬ—御寢なりぬ

經營—周旋

こゞし—小兒らし

臨時祭—十一月下の酉の日行はる賀茂祭

君の御前にも參らず、籠りゐたり。暮れぬればおはしぬ。「御返は、など賜はざりつる」と宣へば、「北方のおはしつる程に」と宣ひて、おほとのごもりぬ。程なく明けぬれば、出で給ふに、明け過ぎて、人騒しければ、え出で給はで、かへり入りて臥し給ひぬ。安濃、例の御臺經營しありく。少將、君、靜に臥したまひて、物語し給ふ。「四の君は、いくら大きさにかなり給ひぬる」と宣へば、「十三四のほどにて、をかしげなり」といへば、「誠にやあらむ、まろに婚せむ、と中納言宣ふなるとぞ。乳母なる人こそ、殿なる人を知りて、御文もてきて、北方もいかでとなむ宣ふとて、乳母なる人こそ俄にせめしか。かゝると聞え給へといはむに、いかゞ思す」と宣へば、「心うしとこそ思はめ」と宣ふ。こゞしければ、らうたしと思ひて、「こゝはいみじう、參り來るも人氣なき心地するを、わたし奉らむ所に、おはしなむや」と宣へば、「御心にこそは」と宣へば、「さらばや」と宣ひて臥し給へり。ほどは十一月廿三日なり。三の君の夫の藏人少將、俄に臨時祭の舞人にさゝれ給ひければ、北方てまどひし給ふ。安濃、論なう御縫物もて來なむものぞ、と

論なう—無論

そり出でて—それ出して

化粧はやり—化粧に身な入る

胸つぶるゝもしろく、うへの袴たちて、「これたゞ今縫はせ給へ。御縫物出で来なむとなむ、聞え給ふ」といふ。君は几帳の内に臥し給へれば、安濃ぞ答ふる。「いかなるにか、昨夜より悩ませ給うて、うちやすませ給へり。今起きさせ給はむ時に、聞えさせむ」といへば、使かへりぬ。女君、縫はむとて起きたまふ。「まろ一人は、いかでつく〴〵と臥いたらむ」とて、おこし奉り給はず。北方、「いかに縫ひ給ひつや」と問ひ給へば、「さもあらず。まだ大殿ごもりだり、と安濃が申しつるは」といへば、北方「なぞのおほとのごもりぞ。物いひ知らずなありそ。我等と一つ口になぞいふは、聞きにくし。あなわか〳〵しき晝寝や。しか身の程しらぬこそ、いと心憂けれ」とて、うちあざ笑ひ給ふ。下襲たちて持ていましたれば、驚きて几帳の外に出でぬ。見れば、うへの袴も縫はで置きたり。氣色あしうなりて、「手をだにふれざりけるは、今は出できぬらむ、とこそ思ひつれ、あやしうおのがいふ事こそ侮られたれ。この比御心そり出でて、化粧はやりたりとは見ゆや」と宣ふに、女いと佗しう、いかに聞えむ、と我にもあらぬ心地して、「悩しう侍りつ

空うけがひ—受合ひて實行せぬこと

しら〲し—馬鹿々々し

落ちて—頭髪の脱けてゐるだけ—すわり

物折る—袴などの折目つく

れば、暫ためらひてとて。これは只今いで來なむものを」とて、引き寄すれば、「おどろき馬のやうに手なふれたまひそ。人だねの絶えたるぞかし、空うけがひなる人にのみいふは。この下襲も、只今縫ひ給はずば、こゝにもなおはしそ」とて、腹立ちて、投げかけて立ち給ふ。少將の直衣の、後の方より出でたるを、ふと見つけて、「いで、この直衣はいづこのぞ」と立ちとゞまりて宣へば、安濃、いと侘しと思ひて、「人の縫はせに奉り給へる」と申せば、「まづ外の物をし給ひて、こゝのをおろかに思ひ給へる、專かくておはするにかひなし。あな、しら〲しの世や」と、うちむつかりて行く背姿、子多くうみたるに落ちて、僅に十すぢばかりにて、ゐだけなり。かたうちふくれて、いとをこがまし、と少將つく〲とかいま見ふしたり。女、あるにもあらで物折る。少將、衣の裾をとらへて、「まづおはせ」とひきせむれば、笑ひて入りぬ。「憎し。な縫ひ給ひそ。今少し腹だてて惑はし給へ。このことばはなぞ。としごろはかうや聞えつる。いかで堪へたまへる」と宣へば、女、「山梨にてこそは」といらふ。暗うなりぬれば、格子おろさせて、燈臺に

山梨にこそは―六帖「世の中をうしといひてもいづこにか身をばかくさん山梨の花」

大殿こそ―このこそは人を呼びかくる時の辭

今一つ下にこそのありしが脱ちしならむ

いさ―否知らず

さいなみ―呵責

火ともさせて、いかで縫ひ果てむとおもふ程に、北方、縫ふや、と密にいましにけり。見給へば、縫物はうち散らして、火は燈して人もなし。入り臥しにけりと思ふに、大きに腹だちて、「大殿こそ。この落窪君の心、愛敬なく見わづらひぬれ。これいまして宣へ。かくばかり急ぐものを、いづこなりし几帳にやあらむ、持ち知らぬもの設けて、つい立てて入り臥し〳〵することよ」と宣へば、大殿、「近くおはして宣へ」と宣へば、いらへ遠くなりぬれば、のこりの詞は聞えず。少將、落窪君とは聞かざりければ、「何の名ぞ。落窪は」といへば、女、いみじう恥しくて、「いさ」といらふ。「人の名にいかにつけたるぞ。論なう屈したる人の名ならむ。きら〳〵しからぬ人の名なり。北方さいなみだちたちにたり。さがなくぞおはしますべき」と、いひふし給ひけり。うへのきぬ裁ちておこせたり。又おそくもぞ縫ふとて、萬の事大殿に聞えて、「行きてのたまへ〳〵」と責められて、おはして、遣戸を引きあけ給ふより、宣ふやう、「いなや、此落窪君の、あなたに宣ふ事にしたがはず、あしかんなるはなぞ。親なかめれば、いかでよろしう思はれにし

いなや云々
―父大殿の詞

がな、とこそ思はめ。かばかり急ぐに、他の物を縫ひて、こゝの物に手觸れざらむや。何の心ぞ。夜のうちに縫ひたてずば、子とも見じ」と宣へば、女答もせで、つぶ〳〵と泣き給ひぬ。大殿、然いひかけてかへり給ひぬ。人の聞くに耻しく、耻の限いはれつる名を我と聞かれぬる事よ、と思ふに、只今死ぬるものにもがな、と縫物は暫おしやりて、火の暗き方に向きて、いみじう泣けば、少將、哀に理にて、いかに、實に耻しと思ふらむと、我もうち泣きて「暫入りて臥し給へ」とて、責て引き入れ給うて、萬にいひ慰め給ふ。落窪君とは、この人の名なりけり。我がいひつる事、いかに耻しと思ふらむ、といとほし。繼母こそあらめ。中納言さへにくく云ひつるかな。いといみじう思ひたるにこそあらめ。いかでよくて見てしがな、と心のうちに思ほす。北方、多くの物どもをえ縫ひ出でじ、と思ひて、少納言とて、かたちある人の淸げなる、「いきて諸共に縫へ」とて、おこせたれば、來て、「いづこをか縫ひ侍らむ。などかおほとのごもりにけるは。さばかりおそからむものぞ、と聞え給ふものを」といへば、「心地のあしければなむ。その縫ひさ

したるは、おまへ縫ひ給へ」といへば、取り寄せて縫ひて、「猶よろしくば起きさせ給へ。ここのひだおぼえ侍らず」といへば、「今しばし。教へて縫はせむ」とて、辛うじて起きて、膝行出でたり。少將見れば、少納言、火影にいと清げなり。よきものこそありけれ、と見給ふ。女君を見おこせたれば、いといたう泣き、つやめきたるを見て、あはれとや思ひけむ。いふやう、「聞えさすれば、言よきやうに侍り。さりとて聞えさせねば、さる心ばへありとだに知らせたまはじ、と口惜しさになむ。え去らずさむらひはべる御かたよりも、この年比、御心ばへも見參らするに、仕うまつらまほしう侍れど、世の中の、うたて煩しう侍れば、つゝましうてなむ、人知れぬ宮仕も、え仕うまつらぬ」と聞ゆれば、女君、「さるべき人も、ことに眞心なるけしきも見えぬに、嬉しくも思ひ給うけるかな」と、いらへ給へば、少納言、「實にこそあやしうは侍れ。うへのあやしうおはせむは、例の事。御兄弟の君達さへ、みづから聞え給はざめるこそ、いと心づきなけれ。あたら御樣を、かくてつくづくとおはしますこそあいなけれ。四の君、また御聟取し給はむとて、

ひだ—襞
今しばし—下に待てな略す
さるべき人—親族などを指す
うへ—北の方

なり出で—立身し
ときめかし—寵遇し
念じ—堪へ忍び
客人—四君の婿をいふ

設け給ふめり。北方の御心にまかせて、屈伸し給ふ。「めでたさや。誰をか取りたまふ」と宣へば、左大將殿の左近少將とか、容貌はいと淸げにおはするが、內裏に、只今なり出で給ひなむ、と人々譽む。帝もときめかしおほす。御妻はなし。いとよき人の御聟なり。いかで、このわたりにもがなと思ふ、と大殿も常に宣ふとて、北方、いそぎにいそぎ給うて、四の君の御乳母子、かの殿なりける人を知りたりけるを、よろこび給うて、囁きさわぎ給ひて、文やらせ給ふめり」といへば、をかしくて、「さて」といひて、いとようほゝゑみたる眉口つき、燈の明きにはえて、匂ひたるものから、恥しげなり。「少將君は、いかゞいふ」と君宣へば、「知らず。よかなりとや宣ふらむ。人知れず急ぎ給ふ」といふに、少將、そらごとと答へまほしけれど、念じかへして臥し給へり。少納言、「客人のまた添ひ給はば、御前の御身ぞ、いと苦しげにおはしますべかめる。よきこともあらば、爲させ給ふべし」といへば、「なでふかゝる見苦き人が、さる事や思ひかくる」といへば、「いで、あなけしからずや。などかくは仰せらるゝ。このかしづかれ給ふ御方々は

はなち―除きて

なか〳〵」と云ひさして、「誠に此世の中に、恥しきものと思し給へる辨少將君、世の人は交野少將と申すめるを、その殿に、かの男君の御方に、少將と申すは、少納言がいとこに侍り。殿の局に、常にまかり侍りしかば、かの人も、この殿の人と知りて、心づかひし給へりき。御貌のなまめかしさは、實に類あらじ、とこそ見侍りしが、御女多かりと聞きしはいかゞとて、大君よりはじめて、くはしく問ひ聞えたまひしかば、かたはしづつ聞え侍りしに、御前の御うへを申し侍りしかばなむ、いといたう哀がり聞え給うて、我がいと思ふ樣におはすなるを、必ず御文つたへてむや、と宣ひしかば、かくいと數多おはしますうちにも、御母君などおはしまさねば、心細げに思して、かゝるすぢの事、おぼしかけず」と申し侍りしかば、「その御母おはせぬこそは、いと心ぐるしく哀まさらめ。わが本意には、いと花やかならざらむ女の、物思ひ知りたらむが、かたちをかしげならむこそ、唐土新羅まで求めむと思ふ。こゝにおはする。御息所をはなち奉りては、父母おはする人やおはする。さて心にまかせでおはすらむよりは、私ものにて、我

頓の事—急の事

あへづらひ—手傳

かぎりぞ—交野の少將

が所に住ませ奉らむ、など、いとこまやかになむ、夜更くるまで宣はせしか。參りて後も、かの事はいかに。御文や奉るべき、と宣はせたりしかど、折あしくて、今御覧ぜさせむと申す」といへども、答もし給はずなりぬる程に、曹司より人たづねに來て、「頓の事聞えむ」といへば、出でたり。人おはして、「出でたまへ。聞ゆべき事なむある」といへば、「しばし待て、御消息聞えさせむ」とて入りぬ。「御あへづらひ仕うまつり侍らむ、と思ひ給ふるを、頓の事とて、人まうで來たれば、聞えさする事ののこりも、まだ多かり。艶にをかしうて侍りし。まめやかに聞えさせ侍らむ。うへにかく下りぬとな聞えさせ給ひそ。驚きさいなまむものぞ。さりぬべくばまうのぼらむ」とて下りぬ。少將、几帳おしやりて、「をかしく物淸げにいひつる人かな。容貌も淸げなりと見つる程に、交野少將を、かたちよしと譽め聞かせ奉りつるにこそ。見まうくなりぬれ。さも答へ給はで、こなたを見おこせ給ひて、心もとなげに、口づくろひし給へるかな。はべらざらましかば、かひある御答もあらまし。文だに持て來そめなば、かぎりぞ。かれはいと怪しき人

より此方に文もて來ばそれに思ひかへてわれとの緣は限りにし給はんとなり
物しげに—妬ましげに
ひかへむ—引張らむ
物士—上手

の癖にて、文一くだりやりつるが、はづるゝやうなければ、人の妻、帝の御妃ももちたるぞかし。さていたづらになりたるやうなるぞかし。そがうちに、私ものと聞ゆなれば、いと覺ことにおはするは」と、いとあいなく、ものしげに思して宣へば、女いとあやしと思して、物も宣はず。「など物は宣はぬ。をかしう思ひたまへる事を、ものしう聞ゆるが、いらへにくゝ思さるゝか。都の內に、女といふかぎりは、交野少將、めで惑はぬなきこそ、うらやましけれ」と宣へば、女君、「その數ならねばにやあらむ」と、忍びやかに宣へば、少將、「このすぢは、いとやんごとなければ、中宮ばかりには、なり給ひなむをや」と宣へど、をさをさも知らぬ事なれば、答へず。物縫ひ給へる手つき、いと白うをかしげなり。安濃は、少納言ありと思ひて、帶刀が心地あしうしたれば、しばしと思ひて入りにけり。下襲縫ひ出でて、袍衣折らむとて、「いかで、安濃起さむ」と宣へば、少將、「ひかへむ」と宣ふ。女君、「見ぐるしからむ」と宣へど、几帳を戸の方に立てて、起きゐて、「猶ひかへさせ給へ、いみじき物士ぞ、まろは」とて、對ひて折らせ給ふ。いと

つきなげ—不似合
心しらひ—心づかひ
側の方—横の方
袿—裝束の下方に著る衣
いたはる—大切にあつかふ

つきなげなるものから、心しらひの用意過ぎて、いとさかしらなり。女笑う〳〵折る。「四の君の事は、實にこそありけれ」と宣へば、「おほんゆるされあるを、知らず顔なりや」と宣へば、「物ぐるほし。交野少將の、私物まうけむ時は、若おほやけ〳〵しくて取られむ」と笑ふ。「夜いたう更けぬ。大殿籠し給ひね」とせむれば、「今少しなめり。早う寢給ひね。縫ひはてむ」といへば、「ひとり起き居給はば」とて、寢給ひぬ。北方、「縫はで寢やしぬらむ」とて、後めたうて、ねしづまりたる比に、例のかいまみの穴よりのぞけば、少納言はなし。こなたに几帳立てたれど、側の方より見入るれば、女、こなたの方に後を向きて、もたる物を折る。對ひてひかへたる男あり。なまねむたかりつる目も覺めて、驚きて見れば、白き袿のいと清げなる、搔練のいと艶やかなる一重、山吹なる、また衣のあるは、女の裳著たるやうに、腰よりしもに引きかけたり。燈あかき影に、いと見まほしう清げに、愛敬づきをかしげなり。又なく思ひいたはる、藏人少將よりもまさりて、いと清げなれば、心まどひぬ。男したる氣色は見れど、よろしきものにやあら

おぼろけ―尋常

そこ―足下

あふぎ―扇子などにて

もて出でや云々―表向に聟入などもあらむか

む、とこそ思ひつれ。更にこれは、たゞものにはあらず。かくばかりそひゐて、女々しく諸共にするは、おぼろけの志にはあらじ。いといみじきわざかな。よくなりて、我しだいには、かなふまじきなめり、と思ふに、縫物のこともおぼえず、ねたうて、なほ惜し立てれば、「知らぬわざして、まろも困じにたり。そこも眠げにおもほしためり。なほ縫ひさして臥し給うて、北方、例の腹立てさせ給へ」といへば、「腹だち給ふを見るがいと苦しきなり」とて、なほ縫ふに、あやにくがりて、火をあふぎ消ちつ。女君、「いとわりなきわざかな。取りも置かで」と、いとくるしがれば、「たゞ几帳にかけ給へ」とて手づからたゝみかけて、搔いいだきて臥しぬ。北方聞きはてて、いと妬しと思ふ。例の腹立てよといひつるは、さきざき我が腹立つを聞きたるにやあらむ。語りたるにやあらむいと妬し、とつくづくと臥して思ふに、ゆく方なければ、猶大殿にや申してまし、と思へど、かたちはよし。さきざき直衣など見るに、よき人ならば、もて出でやし給はむと、危くて、なほ帯刀に逢ひたるといひなしてむ。はなち居ゑたれば、かゝるぞ。部屋

となり
たばかる—計畫す
たはしき—好色がましき
からみまはさせて—付き纏はせて

に籠めてむ、いかでか腹だたせよとはいはすべき、といと妬きまゝに、思ひたばかる。籠めたらむ程に、男は思ひ忘れなむ。わが叔父なるが、こゝに曹司して、典藥助にて、身貧しきが、六十ばかりなる、さすがにたはしきに、からみまはさせて置きたらむ、と夜一夜おもひ明すも知らで、少將、いとあはれにうち語らひて、明けぬれば出で給ひぬ。やがていそぎ縫ひかけつる程に、北方起きて、縫ひさすと見しを、まだしくば、恥ぢあたふばかり、いみじくのゝしらむ、と思して、「縫ひ物たまへ。出で來ぬらむ」といはせ給へれば、いと美しげにし重ねて出したれば、本意なき心地して、口惜しく、「いかに出で來にけむ」とてやみぬ。少將の許より御文あり。

いかにぞ、夜べのぬひさし物は、腹まだたち出ずや。いと聞かまほしくてこそ。さて笛忘れて來にけり。取りて賜へ。只今うちの御あそびに參るなり。

とあり。實にいとかうばしき笛あり。つゝみてやる。

腹はけしからず。人もこそ聞け。かうな思し出でそ。いとようゐみてなむあめる。

すなはち―即時

やさしく―恥がましく

正身―主の女即ち落窪の君

名だたし―外聞わろし

笛たてまつる。これをさへ忘れ給うければ、

　これも猶あだにぞ見ゆる笛竹の手なるるふしを忘ると思へば

とあれば、少將いとほしと思ひて、

　あだなりと思ひけるかな笛竹の千代も根たえむふしもあらじを

となむありける。この少將出でぬるすなはち、北方、大殿に申したまふ。「さる事はおりなむやと思ふもしろく、この落窪君の、やさしくいみじきことし出でたりけるがいみじさ。さすがに、さしはなれたる人ならば、ともかくもすべきに、いとこそかたはなれ」と宣へば、大殿驚きまどひて、「何事ぞ」と問ひ給へば、「この藏人少將の方なる帶刀といふは、此日比、安濃にすむと聞き思ひつるは、はやう正身に立ちかゝりにけり。文の返事を、痴れたる者にて、懷に入れて持たりけるを、此少將君の前に落したりければ、見つけ給ひて、委しき心つきたる君にて、誰がぞと帶刀に責問ひ給うければ、隱さで、しかじかと申しければ、いと清げなる御聟とり給うてけるかな。あな名だたし、人の見聞

しをり—折檻し
面ぶせ—不名譽

かむもいといみじ。これな棲ませたまひそと、いと恥しげに宣ひける」と、くはしく申し給うてければ、老い給へるほどよりは、爪彈をいとちから〲しくし給ひて、「いといふがひなき事をもしたるかな。かくて居れば、皆人は子の數と知りたるに、六位といへど、藏人にだにあらず、地の帶刀の、歳は二十ばかり、長は一寸ばかりなる、かゝる事はし出づべしや。さるべき受領あらば、知らず顔にて、くれてやらむとしつるものを」北方、「そがいと口惜しき事。おのが思ふやうは、あまねく人の知らぬさきに、部屋にこめて守らせむ。女思ひたれば出であひなむず。さて程過ぎて、ともかうもし給へ」と申し給へば、「いとよかなり。只今追ひもていきて、この北の部屋に籠めてよ。物なくれそ。しをりころしてよ」と、老いほけて物の覺えぬまゝに宣へば、北方、いと嬉しと思ひて、衣高らかに引き上げて、落窪にいまして、つい居給ひて、「いふがひなきわざをなむし給ひたる、子どもの面ぶせにとて、大殿のいみじう腹立ち給うて、こなたにな住ませそ。疾く籠め置きたれ、我守らむ。只今追ひもて來となむ宣へる。いざ給へ」といふに、女、

あさましう―案外に
汐さき―事の爲しがかり
わきばみ―わきばさみの略、いたはり育つる
なよゝか―しなやか

あさましう、佗しう悲しうて、たゞ泣きに泣かれて、いかに聞き給ひたるにかあらむ、といみじとはおろかなり。安濃惑ひ出でて、「いかなる事をか聞しめしたるぞ。更にしあやまちせさせ給へる事、おはしまさざめるものを」と申せば、「いで、この汐さきを手なさゝへぞ。いかにしたりつる事にかあらむ、我にはかくしへだてたまへど、大殿の狹くより聞きて宣ふぞ。すべて、いとあしきも知らぬ主もたりて、わきばみ思ふ君に、まさらせむと思ひつる。こゝなわらは、家の内になありそ。いざ給へ。おとゞの宣ふ事あり」とて、衣の肩を引きたてゝ立ち給へば、安濃泣く事いみじ。君はた、さらに我にもあらず。物も散しながら、迯ぐるもの摘むるやうに、袖をとらへ、前におし立てておはす、紫苑色の綾のなよゝかなる、白き、又かの少將の脱ぎおきし綾の單衣著て、髪は此比しもつくろひければ、いと美しげにて、長に五寸ばかりあまりて、ゆらめき行く背姿、いといみじくをかしげなり。安濃見送りて、いかになし奉り給はむとするにかあらむ、と思ふに、目眩る心地して、足ずりして泣かるゝ心地を思ひしづめて、うちちら

ばくりと―ぼつくりと
女の心にも云々―北の方の行爲が也
なから―半
さくじり―出過ぎ者

したる物ども取りしたゝむ。君は我にもあらず、大殿の前にひき出で來て、ばくりとついすゑられて、「我みづからいかずば、今過しうかりけむ」と宣へば、「はや籠め給へ。我は見じ」と宣へば、又引き立てて籠め給ふ。女の心にもあらず、ものし給ひけるかな。恐しかりける氣色に、なからは死にけむ、樞戸の廂二間ある部屋の、酢酒魚など、正なくしたる部屋の、たゞ疊一枚、口のもとにうち敷きて、「我が心を心とするものは、かゝるめ見るぞ」とて、いと荒らかに押し入れて、手づからついさして、鎖強くさして去ぬ。君、萬に物の香くさく、にほひたるが侘しければ、いとあさましきには、涙も出でやみにたり。などかく罪し給ふ事ぞ。その事とも聞かず、おぼつかなくあやし。安濃をだにいかで逢はむ、と思へど見えず。いと憂かりけり、と身をおもひて、泣く〳〵うつぶしふしたり。北方、落窪におはして、「いづら、櫛の筥のありつるは、安濃といふさくじり居りて、早う取り隱してけり」と宣ふもしるく、「こゝにとり置きてはべる」といへば、さすがには乞ひ取らず。「こなたは、我があけざらむ限はあくな」とて、さしかためてお

人間—人の居らぬ時
勘事—叱責
まほに—十分に
男心—男を設くる心

はしぬ。爲つと思ひて、いつしか典藥助にかたらむ、と思ひて、人間を待つ。安濃閉し出されて、いみじく悲しければ、などや出でやいなまし、と思へど、君のなりはて給はむ容體も見むとて、いかなるさまにておはすらむ、とゆかしければ、三の君の御許に「偏にうち賴み奉る。いともあさましく、知り侍らぬ事により、さいなみて、退出ねと宣へれば、宮仕をしさし侍りぬる事、といと悲しくなむ。いかで、なほ今一度だに見奉り侍りなむ。なほ上によきさまに聞えさせ給うて、この度の勘事ゆるさせ給へ。小さくてこそ仕うまつりしか、今は別れ異になり行きて侍れば、この落窪君の御事、まほに知り侍らず。いと侘しくなむ。あはれに召し仕ひ、つかうまつり侍りぬる御手を、まかで侍りなば」など、言よく契りて、密に賴み奉りたれば、三の君、實と思ひて、あはれにて、母北方に、「安濃をさへ何しにさいなむ。つかひつけてはべれば、なきはいとあしかりなむ」と宣へば、「怪しく相思ひ奉りたる童なめり。盜人がましき童にて、此奴がよくなさむとて、したるにこそあめれ。落窪は、世に心とはせむとおもはじ。男心は見えざ

えふとも云云—急には得呼ばず
御臺—御食事

りつ」と宣へば、三の君、「なほ此度は許し給へ。らうたくわびおこせて侍りつ」と申し給へば、「ともかくも御心まで。つかひよしとはしもな宣ひそ。いと痴がまし」と、心ゆかず宣へば、さすがに煩しくて、えふともよばで、「しばし念ぜよ。今よく申す」と宣へり。安濃、思へど〳〵つきもせず。部屋にこもり給へる君、たゞ物もおぼえ給はず。安濃、はた思ひよらぬ事なく歎く。御臺をだにまゐらで、籠め奉りつる嗚呼の奴はよもまゐらじ。さばかりらうたげなりつる御さまを、引き出で奉りつる程の氣色、思ひ出づるに、いみじうかなし。我が身ただ今、人とひとしくてもがな。むくいせむと思ふも胸はしる。君や夜さりおはせむとすらむ。いかに思さむずらむ。ふとしもなくなりたらむ人をいはむやうに、ゆゝしう悲うて、泣き入らるれば、仕ふ人も安からず見る。女君はほどふるまゝに、物くさき部屋に臥して、死なば、少將にまた物いはずなりなむ事、長くのみいひ契りしものを、といと悲しく、夜べ物ひかへたりしのみ思ひ出でられて、いとあはれ、さればいかなる罪をつくりて、かゝる目見るらむ。繼母の憎むは、例の事に人

まばゆく―氣恥しく

やをら―靜に

かけづり―走りまはる

も語る類ありて聞く。大殿の御心をさへかゝる事を、いといみじう思ふ。かの少將聞きて、いとまばゆく、いかに女君の思すらむ、とてもかくても、我故にかゝる事を見たまふ事、とかぎりなく歎く。「人間によりて、かくなむとも聞えよ」とて、「いつしかと參りたるをり、あさましとは世の常に、夢のやうなる事どもを承るに、物もおぼえでなむ。いかなる心地し給ふらむ、と思ひやり聞ゆるも、思すらむにもまさりてなむ。對面にいかでかあらむとする」と、いと佗しく宣へり。安濃、長衣どもを脫ぎおきて、袴ひき上げて、下廂より廻りていく。人も寢靜まりにければ、「やゝ」と密に倚りて部屋のうち叩く。音もし給はず。「大殿ごもりにけるか。安濃に侍る」といふ。ほのかに聞ゆれば、君やをらよりて、「いかに來たるぞ」と泣く〳〵、「いみじうこそあれ。いかなる事にて、かくはし給ふにかあらむ」ともいひやらせ給はで、泣き給へば、安濃泣く〳〵、「今朝よりこの部屋のあたりを、かけづり侍れど、えなむ侍はざりつるは、いみじくも侍りつるものかな。云々の事、いひ出でたるなり」と申せば、いとゞ泣きまさり給ふ。「少將君おはした

聞ゆればー申し上ぐれば

り。かくなむと聞かせ給うて、たゞなきに泣き給ふ。かう〱なむ侍りつる」と申せば、いとゞあはれと思して「更にものも思えぬ程にて、え聞えず。對面は、

消えかへりあるにもあらぬ我が身にて君をまた見むこと難きかな

と聞えよ。いみじう臭きものども、ならび居たる、いみじうみだりがはしく、苦しうてなむ。生きたれば、かゝる目も見るなりけり」とて、泣きたまふとは世の常なりけり。安濃が心地も、たゞ思ひやるべし。人や驚かむ、と密に歸りぬ。聞ゆれば、少將いと悲しく思ひまさりて、いといたう泣かるれば、直衣の袖を顏に押あててゐ給へれば、安濃、いみじと思ふ。しばしためらひて、「なほ今一度聞えよ。あが君や、更にえ消えぬものになむ。

逢ふ事のかたくなりぬと聞くよひは明日を待つべき心地こそせね

かうはおもひ聞えじ」と宣へば、又まゐる道に、心にもあらず、物の鳴りければ、北方ふと驚きて、「この部屋の方に、物の足音のするはなぞ」といへば、安濃、なく〱、「疾く

え聞きあへず—安濃が

便なければ—都合あしければ

いかゞは—下にいとほしからざらむな略せり

まかりなむ」と申せば、女君、「こゝにも、

みじかしと人のこころをうたがひし我が心こそまづは絶えけれ」

と宣ふも、え聞きあへず。「しか〴〵驚きて宣へれば、萬もえ承らずなりぬ」といへば、少將、たゞ今もはひ入りて、北方を、うちも殺さばや、と思ふ。誰も歎きあかして、明けぬれば出で給ふとて、「率て出で奉らむ折を告げよ。いかに苦しう思すらむ」と、おろかならず云ひおきて、出で給ひぬ。帶刀、かくまばゆきことを、大殿も聞き給ふらむに、こゝにあらむ事も便なければ、御車の後に乘りていぬ。安濃、いかで物まゐらむ、いかに御心地あしからむ、と思ひまはして、強飯をさりげなくかまへて、いかでと思へど、せむかたなければ、この語らふ小き子に、「かの君のかくておはしますをば、いかゞおほす。いとほしうは思さずや」といへば、「いかゞは」といふ。「さらば人に氣色見せで、この御文奉るわざしたまへ」といへば、「いで」とて取りて、あやにくに、かの部屋にいきて、「これあけむ〳〵、いかで〳〵」といへば、北方、いみじくさいなみて、「何しにあく

こぼめかしてーごとごと音させて
弟子ー季子
かなしうしー愛し
おそばへてー押して
さしとらせてー文を渡して

べきぞ」と宣へば、「沓をこれにおきて。取らむ」とのゝしりて、うちこほめかしてのゝしれば、大殿、弟子にてかなしうし給へば、「驕りありかむ、と思ふにこそあらめ。早くあけさせ給へ」と宣へど、いみじく宣ひて、「今しばしありて、開けむ序に」と宣ふに、おそばへて、「あれおしこほちてむ」と、腹立ちのゝしれば、大殿手づからいまして、あけて入れ給へれば、沓も取らで、いづらとて、ついかゞまりて、さしとらせて、「おやし。なかりける」とて出でぬれば、「まさにさかしき事せむや」とて、はしり打ち給ふ。かの文を、間より火の光のあたりたりたるより見れば、これは安濃が、よろづのこと書きて、はかなきさまにして、おこせたるなりけり。されど物食はむとも覺えで置きつ。北方、物ぬひにより、命は殺さじと思ひて、典薬助を日々に呼びて、「かう〳〵なむ、しか〳〵の事あれば、籠めおきたるを、さる心思ひ給へ」と語らひ給へば、いとも〳〵嬉しくいみじ、と思ひて、口は耳根まで、ゑみまげてゐたり。「夜さり、この落窪のゐたる部屋へおはせ」など、契りたのめ給ふに、人來れば去りぬ。安濃が許に、少將の御文あり。

さうじみ—本人

かたはら痛く—氣の毒

御かへし—安濃の

いかに、その部屋はおくや、といみじくなむ。猶便宜あらば告げられよ。さりぬべくば、かならず〳〵奉り給うて、御返りあらばなぐさむべき。いとあはれなることを思ふに。

とあり。さうじみには、おろかならず、いみじき事を書き給うて、

いと心ぼそげなりし御消息を、思ひ出づるに、いとわりなくなむ。

命だにあらばとたのむ逢ふことを絶えぬといふぞいとこころうき

我が君、心づよくおぼしなぐさめよ。もろともにだにこめられなむ。

と書き給へり。帯刀も、

この事を思ふに、心地もいとあやしくてなむ、臥してはべる。いかにおもほすらむ、とかたはら痛くいとほしきに、法師にもなりぬべく。

など書きておこせたり。御かへし。

かしこまりてなむ。いかでか御覽ぜさせ侍らむ。戸はいまだおき侍らず。更にいと

かたくなむ。いかにし侍らむ、御文もいかでか御覽ぜさせ侍らむとすらむ。御返り

これよりも聞えさせ侍らむ。

と聞ゆ。帶刀が許にも、おなじ樣にいみじき事をなむいへりける。二の巻にぞ、ことごともあんべかめる。

二の巻にぞ云々—他は第二巻に譲らむとなり

落窪物語　卷之二

安濃、いかでこの御文奉らむ、と握り持ちて思ひありくに、更に部屋の戸あかず、佗しと思ふ。少將と帶刀とは、たゞ偸み出でむとたばかりをし給ふ。我故にかゝる目をも見るぞ、と思ふに、いとゞ哀れにて、いかでこれ偸み出でて後に、北方に心惑はすばかり、ねたき目見せむ、と思ふ。ほと／＼しうねく、心ふかくなむおはしける。かのかたらひせし少納言、交野少將の文もて來たるに、かく籠りたれば、あさましう、口惜しう哀にて、安濃と、「いかに思すらむ。などかゝる世ならむ」と、うちかたらひて、忍びて泣く。日の暮るゝまゝに、いかで奉らむ、と思ふ。少將の笛袋縫はするに、取りふれむ人のなきまゝに、とみに手もふれぬ程に、持てわづらひて、北方、部屋の遣戸をあけて、入りおはして、「これ只今縫ひ給へ」といへば、「心地なむいと惡き」とて、臥したれば、「これ縫ひ給はずば、下部屋に籠め奉らむ。かやうの事を申さむとて、こゝには置き奉りつるに

たばかり——計略
ほと／＼——殆
しうねく——執念深く
かやうの事——縫物の事

あれ―吾
ゆめ〳〵―決して

こそあれ」といへば、實にさもしてむと侘しくて、あれにもあらず苦しけれど、起きあがりて縫ふ。安濃、部屋の戸あきたりと見て、例の三郎君呼びて、「いとうれしく宣ひしかばなむ。これ北方の見給はざらむ間に奉り給へ。ゆめ〳〵氣色見え奉り給ふな」といへば、「よかなり」とて取りつ。いきてかたはらにゐて、笛取りて見など遊びゐて、衣の下にさし入れつ　いかで見むと思ふに、袋縫ひはてて、見せに持ていきたる程に、辛うじて見て、あはれと思ふ事かぎりなし。硯筆もなかりければ、あるまゝに針のさきしてかく書きたり。

人しれず思ふこころもいはでさはつゆとはかなく消えぬべきかな

と思ひ給ふるこそ。

とて持たり。北方いまして、「ありつる袋はいとよく縫ひたり。遣戸あけたりとて、大殿さいなむ」とて、引き立てて鎖さゝむとすれば、「いかで、あなたに侍りし筥取りて、と安濃に告げ侍らむ」といへば、閉てさして、「あの櫛笥得むとあめり」と宣へば、惑ひも

心げさう―心に戀慕の情を浮ぶるなり
むくつけく―恐しく
つれなくも―心強くも
うけがひ―承引

て來て、さし入るゝ手に入れたれば、引き隱して立ちぬ。「辛うじて、御笛の袋縫はせ奉り給ふとて、あけ給へる程になむ」といふ。少將、いとゞ哀と思へること限なし。暮れぬれば、典藥助、いつしかと心げさうしありきて、安濃がゐたる所によりて、いと心づきなげに笑みて、「安濃は、今は翁を思ひ給はむずらむ」などいへば、安濃、「いとむくつけく思ひて、「などかさあるべき」といへば、「落窪君をおのれに賜へれば、この御方の人にはあらずや」といふに、驚き惑ひて、ゆゝしく思ふに、涙もつゝみあへず出づれど、つれなくもてなさで、「男君おはせずて、徒然なりつるに、たのもしの御事や。さても大殿のゆるし聞え給ふか、北方の宣ふか」といへば、「大殿君もめぐみ給ふ。あが北方はまして」と、いと嬉しと思へり。安濃、萬の事よりも、いかさまにせむ。いかで、かくとだに告げ奉らむ、と思ふに、靜心もなくて、「さていつか」といへば、「今宵ぞかし」といふ。「今日は御忌日なるものを、何かうけがひあらむ」といへば、「されど人持たまへるなれば、あやふし、疾くなむ」といひて立ちぬ。安濃、侘しき事かぎりなし。北方、

物のつみ―食物のつかへ

さわたれば―さは接頭語、渡れば也

殿の御臺參る程に、這ひよりてうち叩く。「誰そ」といへば、「かう〳〵の事侍り。さる用意せさせ給ひて。御忌日となむ申しつる。いみじくこそあれ。いかゞせさせ給はむ」とも云ひやらで立ちぬ。女君、聞くに胸つぶれて、更にせむかたなし。さき〴〵思ひつる事、物にもあらずおぼえて、侘しきに逃げかくるべき方はなし。いかで只今死なむ、と思ひ入るに、胸痛ければおさへて、うつぶし伏して泣くこといみじ。燈などともしてければ、大殿は、夕まどひし給うて、臥し給ひぬ。北方は、かの典藥のすけの事により起きまして、部屋の戶引き開けて見たまふに、うつぶしふして、いみじう泣き、いといたくやむ。「などかくは宣ふぞ」といへば、「胸のいたく侍れば」と、息の下にいふ。「あないとほし、物のつみかとも、典藥のぬし醫師なり、かいさぐらせ給へ」といふに、類なくにくし。「何か、風にこそはべらめ。醫師入るべき心地しはべらず」といへば、「さりとも、胸はいと恐ろしきものを」といふ程に、典藥さわたれば、「こちいませ」と呼び給へば、ふと寄りたり。「こゝに胸惱み給ふめり。物のつみかとも、かいさぐり、藥などもまゐらせ

給へ」とて、やがて預けて立ちぬれば、「醫師なり。御病もふとやめ奉りて、今宵よりは、一向に頼み給へ」とて、胸かいさぐりて、手觸るれば、女おどろ〳〵しう泣きまどへど、いひ制すべき人もなし。こしらへかねて、せめて佗しきまゝに思ひて、泣く〳〵、「いとたのもしき事なれど、只今更に物なむおほえぬ」と答ふれば、「さや、などてか思すらむ。いまは御代に翁こそ病まめ」とて、抱へて居り。北方は、典藥ありとおもひ憑みて、例のやうに鎖などもさしかためで寢にけり。安濃、典藥入りぬらむ、と惑ひ來て見るに、戸細目にあけたり。胸つぶるゝものから嬉しくて、引きあけて入りたれば、典藥かゝまり居り。入りにけり、と人心地もなくて、「今日は御忌日と申しつるものを、心憂くも入らせ給ひにけるかな」といへば、「何か、ちか〳〵しくあらばこそあらめ。御胸まじなへと、上の預け奉り給ひつるなり」とて、まだ裝束も解かで居り。君はいとゞいたう惱み給ふにそへて、泣き給ふこと限なし。安濃とりわきて、などしもかく物をいみじく思してかゝるは、如何なるべきにか、と思ひて、心細くかなし。「御燒石あてさせ給はむや」

こしらへ—賺し

ちか〳〵しく云々—女君に接近せばあしからむが

燒石—溫石

おもひ—思ひ、火

と聞ゆれば、「よかなり」と宣へば、安濃、典薬に、「ぬしをこそ今は頼み聞えめ。御焼石もとめて奉り給へ。」皆人も寝靜まりて、安濃がいはむに、よも取らせじ。これにてこそ、志のありなし見えはじめ給はめ」といへば、典薬うち笑ひて、「さななり。殘の齢少くとも、一筋にたのみ給はばつかうまつらむ。石山をもと思へば、まして焼石はいとやすじ。おもひにさし焼きてむ」といへば、「同じくは疾く」とせめられて、いかゞはせむ。「さは入りたちたるやうなれど、いとやすし。志情を見えむ」とて石求めむとて立ちぬ。安濃、「この年比いみじく侍りつる事の中に、侘しくもいみじくも侍るかな。いかゞせさせ給はむずる。何の罪にてかゝる目見給ふらむ。扨も何の身にならむとて、かゝるわざをし給ふらむ」といへば、君、「更になむ物も覺えぬ。今まで死なぬ事の心憂きと、心地はいとあし。この翁の近づき來るになむ、いと侘しき。その遣戸かけ籠めて、な入れそ」と宣へば、「さては腹だちなむ、猶こめさせおはしませ。頼む方のあらばこそ、今宵は閉て籠めて、明日はその人にいはむとも思ひ侍らめ。少將君、歎きまどひ給へども、い

はしたなげに―無情げに
誰も〱―落涙も安濃も
程なく寢入りて云々―翁の樣
けはひ―樣子

かでかは。只今あたりにだにおはしよらむ事難くなむ。御心のうちにも、佛神を念ぜさせ給へ」といへば、君、實に賴む方なく、同胞とても相思ひたる事なく、はしたなげにのみあれば、その人といふべき事も覺えず。いみじう悲しくて、たゞ賴む事とては、涙と安濃とのみぞ、心にかなひたるものにて、「更にこゝに今宵はあれ」とて、誰も〱泣く程に、翁、燒石裹みもて來たるを、女君侘て、手づから取る心地、恐しう侘しく覺ゆ。翁、裝束ときてかきよすれば、女、「あが君かくなし給ひそ。いみじく痛き程は、起きておさへたるなむ、少しをさまる心地する。後をおほさば、今宵はたゞに臥し給へれ」といふ。いとわびしくて、いたう惱む。安濃、「今宵ばかりにてこそあれ。御忌日なれば、なほたゞ臥し給へれ」といへば、さもある事とや思ひけむ、「さらばこれに倚りかゝり給へ」とて、前によりふせば、わびしく、おしかゝりて泣き居たり。安濃もいとにくけれど、嬉しき翁の德に、御あたりに今宵まゐりたる事と思ふ。程なく寢入りてくつれ臥せり。女君、少將君のけはひ思ひ合せられて、いとどあいなくにくし。安濃、いかにして出で

驚く—目覺むる

さかし—然り

さして—鎖して

なむのたばかりをす。翁のうち驚く時は、いとゞいたく苦しがり惱み給へば、「あないとほし。翁のさぶらふ夜しも、かうなやみ給ふが、わびしき」とては、また寢入りぬ。明けぬればいとうれし、と誰も〳〵思ふ。翁をつきおどろかして、「いとあかくなりぬ。出で給ひね。しばしは人に知らせじ。長く思ひ給はば、宣はむ事にしたがひ給へ」といへば、「さかし、我もさ思ふ」とて、寢ぶたかりければ、目くそ閉ぢあひたる、拂ひあけて、腰うちかゞまりて出でていぬ。安濃遣戸ひきたてゝ、こゝにおはしけりと見え奉らじ、と思ひて、急ぎて曹司にいきたれば、帶刀が文あり。見れば、

辛うじて參りたりしかど、御門さして更にあけざりしかば、佗びしくてなむ、歸りまうで來にしや。おろかにぞ思すらむ。少將君の思したる氣色を見侍るに、心のいとまなくなむ。これは御文なり。いかで、よさりだに參らむ。

といへり。御文奉らむ。よき間なり、と急ぎいきて見れば、北方、部屋さし給ふ。あな口惜しと思ひて歸る道に、典藥行き逢ひて、文くれたるを取りて、はしりかへりて、北

まめやかに―眞實に

ゆゝし―甚しく厭はし

方に、「こゝに典藥のぬしの文あり。いかで奉らむ」といへば、北方うちゑみて、「心地問ひ給へるか、いとよし。まめやかに相思ひたるぞよき」とてさしかためし戸口を引きあけたれば、いとをかしうて、少將君の文、取りそへてさし入れたり。少將君の文見給へば、

いかゞ、日の重なるまゝに、いみじくなむ。

君がうへ思ひやりつつ歎くとはぬるる袖こそまづは知りけれ

いかゞすべき世にかあらむ。

とあり。女いとあはれと思ふ事かぎりなし。

おぼしやるだにさなむある。

なけばとてひまなく落つる涙川うき身ながらもあるぞ悲しき

と書きて、翁の文見む事のゆゝしうて、「安濃に返事せよ」と書きつけてさし出したれば、ふと取りて立ちぬ。安濃、翁の文を見れば、

いとも〱いとほしく、夜一夜惱ませ給ひける事をなむ、翁の物のあしき心地し侍る。あが君あが君、夜さりだに嬉き目見せ給へ。御あたりにだに近く侍はば、命延びて、心地も若くなり侍るべし。あが君〱。

老木ぞと人は見るともいかでなほ花咲きいでてきみにみなれむ

なほ〱な憎み給ひそ。

といへり。安濃、いとあへなしと思ふ〱書く。

いとなやましうせさせ給ひて、御みづからはえ聞え給はず。

枯れはてて今はかぎりの老木にはいつかうれしき花は咲くべき

とかきて、腹立ちやせむ、と恐しければ、思ゆるまゝに取らせたれば、翁うちゑみて取りつ。帯刀の返事かく。

夜べはこゝにも、いふ方なき事を、聞えてだに慰めばや、と思ひ聞えしに、かひなくてなむ、御文からうじてなむ。いといみじき事ども出できて、たいめになむ。

内ざし—内部より鎖すこと

胸うちつぶれて—胸をどきつかせて

大殿油—御燈燭

とてやりつ。北方、典藥に預けつ、と思ひて、ありしやうにも、遣戸さしかためさせねば、安濃うれしと思ふ。暮れゆくまゝに、いかにせむと思ひわぶ。内ざしにさしこもらむ、と思ひて、よろづに明くまじきやうにかまふ。翁、安濃に、「いかにぞ御心地は」といへば、「いみじくなむ惱み給ふ」といへば、「いかにおはせむずらむ」と我がもの顏にうち歎くを、愛敬なしと見る。明日の臨時祭、三の君に見せ奉らむ、藏人の少將のわたり給ふをと、北方は念じ居るを、安濃聞きて、いと嬉しきひまあるべかなり、と胸うちつぶれて思ふ。今宵だにのがれ給ひなば、と思ひて、遣戸の後さすべき物求めて、腋にはさみてありく。大殿油參れなど、いふ紛れに這ひよりて、遣戸の方の樋に添へて、え探らすまじくさして去りぬ。内なる君は、いかにせむ、と思ひて大きなる杉唐櫃のありけるを後を舁きて、遣戸口に置きて、とかうして抑へ、戰き居て、「これあけさせ給ふな」と願を立つ。北方、鑰を典藥に取らせて、「人の寢靜まりたる時に入り給へ」とて、寢給ひぬ。皆人々靜まりぬる折に、典藥、鑰を取りて來てさしたる戸あく。いかならむ

ひろゝぐ—踏みはだかる

つめて—鎖し詰めて

こぼめき—腹の鳴音

さがな—惡し

ひりかけして—糞を撒り懸けて

と胸つぶる。鎖あけて遣戸あくるに、いとかたければ、立ち居ひろゝぐ程に、安濃聞きて、すこし遠がくれて見立てるに、障子もさぐれど、さしたる程をさぐりあてず、「あやしあやし。内にさしたるか、翁をかく苦しめ給ふにこそありけれ。人も皆許し給へる御身なれば、えのがれたまはじものを」といへど、誰かはいらへむ。うち叩き押し引けど、内外につめてければ、動ぎだにせず。今や〱と、夜更くるまで板のうへにゐて、冬の夜なれば、身もすくむ心地す。そのころ腹そこなひたるうへに、衣いと薄し。板の冷えのぼりて、腹ごほ〱と鳴れば、翁、「あなさがな、冷えこそ過ぎにけれ」といふに、しひてごほめきて、びち〱と鳴る。こは如何になるにかあらむ、とうたがはし。かいさぐりて、出でやするとて、尻をかゝへて、惑ひ出づる心地に、鎖をばついさして、鑰をば取りていぬ。安濃、鑰おかずなりぬるよ、とあいなくにくゝ思へど、明かずなりぬるを、かぎりなく嬉しく思ふ。かくて遣戸のもとによりて、「ひりかけしていぬれば、よもまうで來じ、おほとのごもりね。曹司に帯刀まうで來れるを、君の御返事も、聞え侍ら

御臺―御食膳

れんぜで―こらへ兼ねて

答せむ―しかへしせん

心もとなく―待遠しく

む」といひかけて、下におりぬ。帯刀、「など今まではおり給はぬぞ。世の中いかゞあるとも、まだ出し奉らずや。いみじくこそおぼつかなけれ。君のおぼしなげく事、いみじくなむ。夜など密に偸みいで奉りぬべしや。その事あんないして來と宣はせつる」といへば、「更にいとこそいみじき。日に一度なむ御臺まゐりにあけ給ふ。かくてかまふるやうは、北方の御をぢにて、いみじき翁のあるになむ、婚せ奉らむとて、今宵も部屋に入れとて、鑰を取らせ給へれど、内外にしかぐ\かためたれば、立ち居ひゞろぎてあけつるに、冷えて、かうぐ\していぬ。君は此事を聞き給ひしより、御胸をなむ、いみじくやみ給ひし」と泣きつゝいふ。帯刀、いみじき事にあはせて、ひりかけの程を、えねんぜで笑ふ。「いつしか偸み出で奉りて、この北方の答せむとなむ、君は宣ふ」といへば、「明日祭見に出で給ひぬべかめり。その間におはしませ」といへば、帯刀、「いとうれしき間にもあるかな。いつしか夜も明けなむ」と、心もとなくいひあかす。翁は袴にいと多くしかけてければ、けさうの心地も忘れて、先とかくかれ洗ひし程に、うつぶしふし

こゝには―今までの御殿には
われや―北の方自身
ざゝとして―さゞめきて

にけり。明けぬれば、帯刀いそぎ参りぬ。少將、「いかゞいひつる」と宣へば、「しかぐなむ安濃がいひし」と申すに、典藥助の事を、あさましねたし、實にいかに侘しからむ、と思ひやるもいと哀なり。「こゝには暫住まじ。二條殿に住まむ。いきて格子上げさせよ清めせよ」とて、帯刀を遣しつ。胸うち騷ぎて、嬉しき事限なし。安濃、人知れず心地さわぎて、せむやうをかまへありく。午の時ばかりに、車二つ、三四の君、我やなど乘り給ひて、出で給ふさわぎにあはせて、北方、典藥がもとに鑰乞ひにやりて、「危し。我なきほどに人もあくる」とて、鑰もちて乘り給ひぬる事を、いみじくにくし、と安濃おもふ。大殿も聟出し立てて、ゆかしがりて出で給ひぬ。皆のゝしりて、ざゝとして出でたまふ。卽ち、安濃、告げに奔せやりたれば、少將こゝちたがひて、例の乘り給ふ車にはあらぬに、朽葉の下簾かけて、男ども多くておはしぬ。帯刀、馬にて先だちておこせ給へり。中納言殿には、聟の御供、大殿、北方の御供、人々三方に、男どもわかち參りて、人もなし。御門にしばし立ちて、帯刀かくれより入りて、「御車あり。いづこにかよせむ」

うちだて―戸の閂等の木
らうたげ―愛らしげ

といへば、「たゞこの北面に寄せよ」といふ。牽き入れてよするを、からうじて、この男ひとり出で来て、「何ぞの御車ぞ。皆出で給ひぬる所には」と、とがむれば、「あらず、御達の参り給ふぞ」といひて、たゞよせに寄す。御達のとまりたりけるも、皆下におりてなき程なり。安濃、「はやうおり給へ」といへば、少将、おりはしり給ふ。部屋には鎖さしたり。これにぞ籠りける、と見るに、胸つぶれていみじ。這ひ寄りて捻り見給ふに、更に動かねば、帯刀を喚び入れ給うて、うちだてを、二人してうち放ちて、遣戸を引き放ちつれば、帯刀は出でぬ。いともらうたげにて居たるを、哀れにて、かき抱きて、車に乗せ給ひぬ。「安濃も乗れ」と宣ふに、かの典薬が近々しくやありけむ、と北方思ひ給はむ、妬ういみじうて、かの遣せたりし文、二度ながらおしまきて、ふと見つくべくおきて、御櫛の筥ひきさげて乗りぬれば、をかしげにて、飛ぶやうにして出で給ひぬ。誰も誰もいと嬉し。門だにひき出でたれば、男どももいと多くて、二條殿におはしぬ。人もなければ、いと心やすしとて、下し奉り給ひて臥し給ひぬ。日比の事ども、互に聞え給

あるじだちて―主人らしくして

むげに―一向に

おひうたむ―放逐せん

ひて、泣きみ笑ひみし給ふが、ひりかけの事をぞいみじく笑ひ給うける。「ふようなりける御懸想人かな。北方、いかにあさましと思ひ給はむ」と、うちとけていひ臥し給へり。帯刀、安濃と臥して、今は思ふ事なき由をいふ。暮れぬれば、御臺まゐりなどして、帯刀、あるじだちてし歩く。

かの殿には、物見てかへり給ひて、御車よりおり給ふまゝに見給へば、部屋の戸うち倒して、うちだてても打ち散らしければ、誰も〳〵驚き惑ひて見れば、部屋には人もなし。いとあさましく、こはいかにしつる事ぞ、と噪ぎみちてのゝしる。「この家には、むげに人もなかりつるか、かく寝る所まで入り立ちて、うちわり、引き放ちつらむを尤めざりつらむは」と、腹立ちて、「誰かとまりつらむ」と、尋ねのゝしるに、北方、いはむかたなき心地して、ねたくいみじき事かぎりなし。安濃を尋ね求むれど、いづちにかあらむ。落窪をあけて見給へば、ありと見し几帳、屏風、ひとつもなし。北方、「安濃といふ盗人の、かく人もなき折を見つけてしたるなり。やがて、おひうたむと思ひしものを使ひよ

まけぬる—安濃にしてやられたる
心肝もなく—確なる心もなく
網代車—糸又は竹の編みたるにて屋形なりたる車
出でさせ給ひし云々—大殿の出で給ふと直に
そこ—足下

し、と宣ひて、かく遂にまけぬる事よ。心肝もなく相思ひ奉らざりしものを、強ひてつかひ給ひて」と、三の君をいみじく申し給ふ。大殿、とまりたりける男、一人たづね出でて問ひ給へば、「更に知り侍らず。たゞいと清げなる網代車の、下簾かけたりし、出でさせたまひし卽ち、入りまうで來て、ふと出でまかりにし」と申す。「只それにこそあなれ。女えさは打ち破りて出でじ。男のしたるなめり。なにばかりの者なれば、かくわが家を白日に入り立ちて、かくして出でぬらむ」と妬がり惑ひ給へど、かひもなし。北方この置きたる文を見て、まだ寢ざりけり、と思ふに、妬さまさりて、典藥をよび居ゑ給ひて、「かう〳〵して逃げにけり。ぬしに預けしかひもなく、かくにがし給へる。ちか〳〵しくはものし給はざりけるか」と宣ひて、「置きたるそこの文どもを見れば」といへば典藥が答、「いと理なき仰なりや。その胸を病み給ひし夜は、いみじう惑ひて、御あたりにも寄せ給はず。安濃もつとそひて、御忌日なり。今宵過して、と正身も宣ひて、いみじく惑ひ給ひしかば、やをら、只よりふしにき。その後の夜せめおとさむとおもひて、

しうねく—執念深く
爲包みし物—衣にひりくろみし嚢
怠り—過誤
つたなかりける云々—辛抱しにくくなりて案外の不調法も起る也
嗚呼なるもの—愚物

まうで來てあくるに、内ざしにさして、更にあかぬを、板の上に夜中まで立ちゐ、あけ侍りし程に、風ひきて腹のごほ〲と申ししを、一二度は聞き過して、猶もしうねく開けむとし侍りし程に、みだりがはしき事の、出でまうで來にしかば、物もおぼえで、まづ退り出でて、爲包みし物を洗ひしほどに、夜は明けにけり。翁の怠ならず」と述べ申し居たるに、腹だちながら笑はれぬ。ましてほの聞く若き人は、死にかへり笑ふ。「いでや、よし〱、立ち給ひね。いといふがひなく妬し。他人にこそあづくべかりけれ」と宣まふに、典藥腹立ちて、「理なき事のたまふ。心にはいかで〱と思へど、老のつたなかりける事は、あやまちやすくて、ふとひりかけらるゝをいかゞせむ。翁なればこそ、あけむ〱とはせしか」と、腹立ちいひて立ちていけば、いとゞ人々わらひ死ぬべし。童なる子のいふやう、「すべて上のあしくし給へるぞ。何しに部屋にこめ給うて、かく嗚呼なるものにはあはせむとし給ひしぞ、いかに侘しくや思しけむ。御むすめども多く、まろらもゆくさき侍れば、いき逢ひ、相聞え觸るゝ事もこそあれ。いみじき事なりや」

およづけ―ませて
こゝ―落窪の君
のどかなる―ゆつくりせる

と、およづけ云へば、北方、「其奴はいづち行くとも、よくありなむや。行きあふとも、我等が子ども、いかゞせむ」といらへ給ふ。男子三人ぞもたまへりける。太郎は、越前守にて國に。二郎は法師。三郎ぞこの童なりける。かくいひさわげど、かひなければ皆臥しぬ。

二條殿には、おほとなぶらまゐりて、少將君臥し給うて、安濃に、「日ごろの事よく語れこゝには更に宣はず」とのたまへば、安濃、北方の心をありのまゝにいへば、君あさましかりける事かな、とおほし臥し給へり。「人ずくなにて、いとあじかめり。安濃、人もとめよ。殿なる人々にも聞えむと思へども、ゆかしげなき。安濃、大人になりね。いと心およづけためり」と、いひ〳〵臥したまへり。かくうれしく宣はせて、明けぬればいとのどかなる心地して、巳午の時まで臥し、晝方、殿に參り給ふとて、帶刀に「近く居たれ。只今來む」とて、出で給ひぬ。安濃、伯母の許へ文やる。

いそぐ事侍りてなむ、昨日今日聞えざりつる。今日明日の程に、清げならむ童、お

あからさまに―俗言のちよと
今やう―當世風
厨子―置戸棚

となゝ、もとめ出で給へ。そこにもよき童あらば、一二人かし給へ。あるやうは對面に聞えむ。あからさまにおはせよ。

といひやりつ。少將君、殿におはしたれば、かの中納言殿の、四の君の事いふ人出で來て、「もの承る。かの事一日も宣へりき。年かへらぬさきにしてむ、と思ふやうあり。御文聞えて、といみじくせめ侍り」といへば、殿の北方、「さかさまにもいふなるかな、强てかういふことを、聞きてよかし。人の爲にはしたなきやうなり。今まで一人ある、見ぐるし」と宣へば、少將、「さ思はば早うとりてよかし。文は今とくやらむ。今やうはことに、文通はしせでもしつなり」とて、笑みて立ち給ひぬ。我が御方におはして、常に使ひ給ふ調度ども、厨子などかしこにやり給ふ。御文、

今の間、いかに後めたうこそ。内に參りて、只今歸り出で侍りなむ。

唐衣きて見むことの嬉さをつゝまば袖ぞほころびぬべき

なか〳〵つゝまじとなむ今日のこゝちは。

心しらひ—注意
すさまじき—荒涼なる
おいらかに—おとなしやかに

とあり。御かへりごとには、

憂きことを歎きしほどに唐衣そでは朽ちにき何につつまむ

と聞え給へるを、哀と思す。帯刀、心しらひ仕うまつる事懇なり。和泉守の返事、
おほつかなさに、これより昨日聞えたりしかば、早うすさましきわざして、迯げ給ひにきとて、使をも殆うたれぬべかりけるを、辛うじてなむ迯げて来りしかば、いかならむと思ひたまへなげきつるに、嬉しくたひらかにものし給へる事。人は今案内して聞えむ。こゝにさむらふ、はか〴〵しき者なし。この守のいとこにて、ここにおはするこそ、さやうにものしつべけれ。

といへり。暮るれば君おはしたり。「かの四の君の事こそ、しか〴〵云ひつれ。われといひて、人もとめてあはせむ」と宣へば、女君「いとけしからず。否とおほさば、おいらかにこそし給はめ。本意なく、いかにいみじと思さむ」とのたまふ。少將「かの北方にいかでねたき目見せむ、と思へばなり」と宣へば、女、「これはや忘れ給ひね。かの君

まうけし―準備し
むつかりて―不平を鳴らして
取りてむ―婿に
つごもり―月末

や憎かりし」と宣へば、少將、「いと心弱くおはしけり。人の憎きふし、思し置くまじかりけり。いと心安し」と宣ひて、臥し給ひぬ。かの中納言殿には、「よかなりとなむ宣ふ」といひやりたれば、喜びて、「まうけしのゝしるにつけては、落窪といふもののあらば、うち預けて縫はせまし。いかによからまし。佛、これ生けらば來るやうにし給へ」。藏人少將君も、御衣どもわろしとて、出づと入ると、むつかりて著給はずなどある時は、侘しうて「物せむ人もがな」とて、此處彼處手を分ちてもとめ給ふ。「よかなりと宣ふ時に取りてむ。思ひもぞかへる」とて、大殿ゐたち急ぎ給ふ。十二月の朔日五日と定めたる程は、十一月のつごもりばかりより急ぎ給ふ。御聟の少將、「誰を取り給ふぞ」と問ひければ、「左大將殿の、左近少將殿とか宣へる」。「いとをかしき君ぞかし。うち語らひて出入せむに、いとよき事かな」と許しければ、北方、榮ありてうれしと思ふ。かの少將は、北方のいと妬くにくくて、いかでこれに侘しと思はせむ、と思ひしみにければ、心の中に思ひたばかるやうありてよかなり、といふなりけり。

○—闕字
男も女も—少將も落窪も
人も住み給はぬ云々—二條殿は今空家なれば暫らく落窪をおきたる也
人あまたもたる—妻妾な多く持つ

かくて二條殿には、十日ばかりになりぬれば、今參ども十餘人ばかり參りて、いと今めかしうをかし。和泉守のいとこなる、かう〳〵と聞きて、參らせて、○兵庫といふ。安濃は、大人になりて衞門といふ。小くをかしげなる若人にて、おもふ事なげにてしありく。男も女もたぐひなくおぼしたる、理ぞかし。少將君の母北方、「二條殿に人すゐたりと聞くはまことか。さらば中納言殿には、などよかなりとは宣ふか」少將、「御消息聞えてと思うたまへしかど、人も住み給はぬうちに、たゞ暫しと思ひ給うてなむ、といはせ給へば、中納言は中にもさいふと聞き侍りしかば。男は一人にてやは侍る。うち語らひて侍れかし」と笑ひ給へば、北方「いであなにく、人あまたもたるは、歎きおふなり。身も苦しげなり、な思し給ひそ。その居ゐたらむに思しつかば、さてやみ給ひね。今とむらひ聞えむ」とて、その後はをかしき物奉り給うて、聞えかはし給ふ。「この人よげにものし給ふめり。御文かきたまふ手つき、いとをかしかめり。誰が女ぞ、これにて定りまたひね。女子もたれば、人の覺さむ事も、いと苦しうなむ覺ゆる」と少將に申し給へ

御心も云々—北の方のなり

あさてなむ—婚禮日は

ば、ほゝゑみ給ひて、「これもよも忘れ侍らじ。又もゆかしう侍り」と申したまへば「いかでか。けしからず、更に思ひ聞ゆまじき御心なめり」と笑ひたまふ。御心なむいとよく、容貌もうつくしうおはしましける。かくて明後日なむ。さは知り給へりや、といとほしく思したれば、かくなむと申せば、「よかなり、まゐらむ」といらへ給うて、心のうちには、いとをかしと思しけるやう、北方の御をぢにて、世の中に、ひがみ痴れたるものに思はれて、治部卿なる、交らふ事もなき人の太郎、兵部少輔といふ人ありけり。少將おはして、「少輔はこゝにか」と宣へば、「曹司の方に侍らむ、人笑ふとて、え出立もし侍らず。君達御かへりみありて、これ交らひつけさせ給へ。おのれも知り侍りにき、笑ひたてられたる程だに過ぎぬれば、宮仕しつきぬるものなり」と申せば、少將「いかが、見はなし侍らむ」とて、曹司におはして見給へば、まだ臥し給へり。痴れがましうをかしうて、「やゝ、起き給へ。聞ゆべき事ありてなむまうでき」と宣へば、足手あはせて、いとよくのび〳〵して、辛うじて起き出で手洗ひゐたり。少將「など、かしこにも更に

あはする—結婚せしむる

いらゝきたる—怒りたる

本意なしとて—己の如き醜な取るは不本意なりとて

おはせぬ」と宣へば、少輔の答へ、「人のほゝと笑へば恥しうて」といへば、「うとき所ならばこそ恥かしからめ」とて、「君は、妻はなどて今まで持給へらぬぞ。鰥夫ぶししては、いと苦しきものを」と宣へば、少輔のいらへ、「あはする人のなきうちに、ひとり臥して侍るも、更に苦しくも侍らず」といへば、少將、「さは苦しからずとも、妻まうけでやみ給ひなむや」少輔、「あはする人や侍るとて、待ち侍るなり」。少將、「まろあはせ奉らむ、いとよき人あり」と宣へば、さすがに笑みたる顔色は、雪の白さにて、首いと長うて、顔つきたゞ駒のやうにて、鼻のいららぎたる事限なし。ひゝと嘶きて引き離れていぬべき顔したり。對ひゐたらむ人は、實に笑はでは、えあるまじ。「いと嬉しき事に侍るなり。誰がむすめぞ」といへば、「源中納言の四の君なり。まろに婚せむといへども、え思ひすつまじき人のはべれば、君にゆづり聞えむとおもひて、明後日となむ定めたる。用意したまへ」少輔のいらへ、「本意なしとて、笑ひもこそすれ」といへば、少將、笑ふがあるまじき事と思ひけるこそ、あはれにをかしけれど、つれなくて「よも笑はじ。宣はむ様

つれなくて—そ知らぬ顔して
女—四の君
まさりて—女を憐むより北方を憎む情の勝ちたる也
火桶—圓形なる火鉢
まさぐり—かきなで
おきひ—猛火

は、おのれなむ忍びて、この秋よりかよふを、少將とり給ふと聞きて、おのれに離れぬ人なれば、かう〳〵なり。いかでえ給ふぞ、と恨みしかば、いと理なり。さらば不用にこそは、かの親たち知り給はねば、まろならぬ人もとり給ひてむも嗚呼なり。此度あらはれ給ひね、と云ひしかばなむと答へ給へ。さらばなでふ事かいはむ。よも笑はじ。さておはし通ひなば、人もおぼえありて思ひなむ」といへば、「さなり」とうなづき居たり。「さらば明後日、夜うちふかしておはせ」と云ひ置きて出で給ひぬ。女いかに思はむと思へど、まさりて、憎しと思しおきてければなりけり。

二條殿におはしたれば、雪の降るを見出して、火桶に押しかゝりて、灰まさぐりてゐ給へる、いとをかしければ、對ひゐ給へるに、

はかなくて消えなましかばと思ふとも

と書くを、あはれに見給ひ、まことにとおぼして、男君、

いはでおきひに身はこがれまし。

その日―婚禮當日

ひんしれ人―不詳貧痴人か

さうぞきて―裝束して

そして―殊更にして

笑みまけて―十分に笑ひて

取りつるか

とてやがて男君、

　埋火のいきてうれしと思ふには我がふところにいだきてぞぬる

とて、かきいだきて臥し給ひぬ。女君、いとをかしき事なりとて、笑ひ給ふ。中納言殿には、その日になりて、しつらひ給ふ事かぎりなし。今日といへば、少將、兵部のもとへ、「かの聞えし事は今宵なり。戌の時ばかりにおはせよ」と宣へば、「こゝにもしか思ひ侍り」といへり。父にかう〳〵といへば、ひんしれ人は、便なからむとも思はで、「人にほめられ給ふ事は、よもあしからじ。早ういけ」とて、裝束の事急ぎ出し立てたりければ、うちさうぞきていきけり。人々さうぞきそして待つに、「おはしたり」といへば、入れ奉りつ。その夜は痴れも見えで、火のほのぐらきに、容態ほそやかにあてなりければ、御たちは、「人にほめられたまふ君ぞかし、と思ふに、うちつけにほそやかに、嫋きて入り給ひぬるかな」と云ひあへるを、聞き給ひて、北方ゑみまけて、「かしこくも取りつるかな。我は幸ありかし。思ふやうなる聟どもをとるかな。只今この君、大臣がね」と

な—聟に
大臣がね—大臣の候補者
がり—許に
文やり給ひつや—四君へ
たま〳〵なるの—この七字衍なるべし

て吹きちらし給へば、人々も實にと聞ゆ。女、かゝる痴者とも知らで臥し給ひにけり。

明けぬれば出でぬ。少將いかならむと思ひやられてをかしければ、女君に、「中納言殿には、よべ聟取し給ひにけり」。「誰ぞ」と宣へば、「まろがをぢにて、治部卿なる人の子、兵部少輔、容貌いとよく、鼻いとをかしげなるを、聟どり給へる」と宣へば、女君、「ことに人のとりわきてほめぬ所」とて、笑ひ給へば、「中に優れてをかしげなる所を聞ゆるぞかし。今見給ひてむ」とて、侍に出で給ひて、兵部少輔のがり文やり給ふ。

いかにぞ、文やり給ひつや。まだしくば、かう書きてやり給へ。いとをかしき事ぞ。

とて、書きてやり給ふ。

世の人の今日のけさには戀すとか聞きしにたがふ心地こそすれ

たま〳〵なるの。

と書きてやり給へれば、少輔、文やらむとて、詠み居る程に、かくて賜へれば、よき事と思ひて、いそぎ書きてやりつ。少將のかへりごとには、

とげて―返報を爲遂げて

かの殿―中納言の方

死ぬる心地する事―恥かしくて

おしはなち引きよせて―或は遠ざ

夜べはことなりにき。笑はずなりにしかば、うれしくなむ。委しくは對面に。文はまだしく侍りつる程に、よろこびながら、これをなむ遣しつる。

といへば、少將、いとほしく、女に恥見するぞなど思へども、とくいかでこれが報いせむ、と思ひし程に、とげて後に、引きかへてかへり見む、と思す事深くなりにけり。女君は、なほ思ひ侘びたる氣色、いとほしうて聞かせ給はず。心ひとつにをかしければ、帯刀に語りてなむ、わらひ給うければ、帯刀、「いと嬉しうせさせ給ひたり」とよろこぶ。かの殿には、御文待つほどに持て來たれば、いつしか取り入れて奉る。見給ふに、かゝれば、いみじう恥しうて、えうちも置き給はず、すくみたるやうにてゐ給へり。北方、「御手はいかゞある」とて、見給ふに、死ぬる心地する事、かの落窪といふ名きかれて、思ひしよりもまさる心地すべし。北方うち見て、あやしう、さき〳〵の聟どりの文見る中に、かゝれば、いかならむと胸つぶれぬ。大殿、おしはなち引きよせて見給へど、目うとくてえ見給はで、「色ごのみの、いとうすく書き給ひけるかな。これよみたまへ」とい

け或は近づけ
おぼえけるを―諳記し居たるを
たえぬは人の「けふそへに暮れざらめやと思ふにもたえぬは人の心なりけり」
親同胞…あらで―四の君の心
かづけて―贈物與へて

へば、ふと取りて藏人少將の、翌朝の文のおぼえけるをうち讀みて、「たえぬは人のとなむ書きたまへり」といへば大殿うち笑みて、「すきものなれば、いひ知りためり。はや御返事、をかしくし給へ」とて、立ち給ふを聞くに、四の君かたはらいたく、侘しく覺えてより臥しぬ。北方、三の君と、「いかに宣へるならむ」と歎けば、「女の御かたいみじく思ふとも、かういはむやは。猶おしなべて、今日は戀しといはむ事のふるめきたれば、樣かへてと思ひ給へるにや、心得ず、あやしくもあるかな」と宣ふを、北方、「さななり。色ごのみは、人のせぬやうをせむと思ふなるべし」といひて、「はや返事し給へ」と申し給へど、親同胞るたちて、かくあやしがり歎き給ふを聞くに、更に起きあがるべき心地もあらで、臥し給へれば、「我聞えむ」とて、北方の書き給ふ。

老の世にこひも爲知らぬ人はさぞ今日のけさをも思ひわかれじ

口惜しうてなむ、女は思ひ聞ゆる。

とて、使にものかづけて遣りつ。四の君は、起きあがらで臥しくらしつ。暮れぬれば、

物しく―厭はしく
ほれ〴〵しく云々―茫乎として遲鈍なれば
いそぎ給ふ―待ちうけに
いかめしう―大層に
雜色所―下司の詰所
ゆくりもなく―何の思慮もなく
白きもの―白粉
えねんぜず

いと疾くおはしぬ。北方、「さればよ。物しくおぼさましかば、おそくぞおはせまし。實にかう樣かへて、宣へるなりけり」とて、よろこびて入れ奉り給ひつ。四の君恥しけれど、いかゞはせむとて出で給ひにけり。物うち云ひたるけはひ、ほれ〴〵しくおくれたれば、女君、藏人少將などに聞きあはするに、あやしげなれば、我こそ戀ひざらめとは云はまほしけれとおぼす。夜ふかく出でぬ。三日のまうけ、いといかめしうし給ふ。侍の入るべき所、雜色所など、さま〴〵に物する爲などして待ちたまふ。御聟の少將まで出で給ひて、いそぎ給ふ。只今の御代のおぼえ、たぐひなき君なれば、もてはやさむとて、大殿も出でゐて待ち給ふに、まづ此方へとよばすれば、ゆくりもなくのぼりて居ぬ。燈のいと明きに見れば、首よりはじめていと細くちひさくて、おもては白きものつけ、化粧したるやうにて白う、鼻をいらゝかし、さし仰ぎて居たるを、人々あさましうて守るに、この兵部少輔に見なしては、えねんぜず、ほゝと笑ふ中にも、藏人少將は、はな〴〵と物笑ひする人にて、笑ひたまふ事かぎりなし。「おもしろの駒なりけりや」

ー堪へられず
かくれー物陰
ほれてーぼけて
いとほしがりー氣の毒がり
無期にー何時迄も

と、扇を叩きて笑ひて立ちぬ。殿上にても、物より殊に、「おもしろの駒、はなれて來たり」とて笑ふなりけり。かくれに居て、「こはいかなる事ぞ」ともいひやらず笑ふ。大殿はあきれてえ物も云はれず。人のはかりけるなめり、とおぼすに、たゞ腹立ちにはらだたれ給へど、いと人多く見るとおぼししづめて、「こはいかで、かくおぼえなくものし給ふぞ。いとあやしく」と宣へば、かの少將の敎へしまゝに、ほれていひ居たれば、いひがひなしとて、盃もさゝで入り給ひぬ。供の人々は、かく笑はるゝも知らで、居ゐたる所どもにつきて、食ひのゝしりて座に居竝みたり。人一人もなく立ちぬれば、少輔はしたなくて例の方より入りぬ。北方聞きて、さらに物もおぼえずあきれ惑ふ。大殿は「老のうへに、いみじき恥見つるかな」と爪はじきをし入りてゐ給へり。四の君は、几帳の内にすゑたりけるに、ふと入り來て臥しにければ、え迯げず。御達はいとほしがりあへり。媒したる人とても、仇敵にもあらず、四の君の乳母なれば、いふべき方なし。誰も誰も歎きあかすに、四日よりはとまると云ひし、と思ひて無期にふせり。藏人少將君、

ひがものー曲物
その御方ー四の君の
心づきなくー厭はしく
おいらかにーおとなしく
所あらはしー露見、婚

「世に人こそ多かれ。かゝるおもしろの駒をば、いかで牽きよせ給ひしぞ、いといふがひなかりける事かな。かゝるものと出で入りせむこそ、わびしけれ。殿上の駒と名づけて、頭もえさし出でぬ痴者の、いかでより來にけむ。そこたちの見計りてし給へるならむ」と、笑ひ嘲哢し給へば、三の君、更に知らぬ由をいひて、いとほしがり歎き給ふ。かゝる僻者なれば、世づかぬ文は、書い出したるなりけり、と人知れず思ひて、いみじくいとほし。北方の心地ただ思ひやるべし。巳午の時まで手も洗はせず、粥もくはせで、ありとある限、其御方にとて、多かりし人々も、誰かその痴者に遣れむとて、出でこず。つくづくと臥したるに、四の君見るに、顔の見ぐるしう、鼻の穴よりは人通りぬべく、吹きいらゝけて臥したるは心づきなく、愛敬なくなりて、やをら物するやうにて起きて出でたるを、北方待ちうけて、宣ふことかぎりなし。「おいらかに初より、かう〳〵したりと云はましかば、忍びてもあらましを、所あらはしをさへして、かくのゝしりて、我も人も、ゆゝしき耻をみる事、誰が媒してしはじめしぞ。云へ」と責むれば、四の君、淺

嫁後の披露
あらがふ—言爭ふ

ましういみじうなりて、たゞ泣きに泣く。我かゝるものあらむとも知らぬに、つき〴〵しく云ひければ、あらがふ方なし。藏人少將いかに思ひ給ふらむ。女の身は、心憂きものにこそありけれ、と思ひて泣けどいふがひなし。少輔、いつとなく臥したりければ、大殿、「いとほし。かれに手洗はせよ。物くれよ。かゝる者に捨てられぬといはむは、又類もなくいみじかるべし。宿世やさしもありけむ。今は泣きのゝしるとも、事のきよまらばこそあらめ」と宣へば、北方、「あたらあが子を、何のよしにてか、さるものにくれては見む」と惑ひ給へば、「あしき事な宣ひそ。かゝるものに捨てられぬといはむは、いかがいみじかるべき」北方、「來ずならむ時や、さも思はむ。只今は、さもせまほしくぞある」と宣へば、ひつじの時まで、人も目見入れねば、少輔苦しうて出でていにけり。ようさり來たるに、四の君、泣きて更に出で給はねば、大殿腹たち給うて、「かく覺え給はむ者をば、何しにかは忍びてよび寄せ給ひし。人の知りたるからに、とかくいふは、親兄弟ふたかたに、恥見せ給はむとや」と添ひゐて責め給へば、いみじう侘しながら、泣

とりはなち―少輔との中な
つゝみて―遠慮して
つはり―懷妊の兆
年かへらば―新年にならば
もとよりも云々―藏人少將のもとより三の君な深くは思はざりしなり
捨てむ―三の君な

く泣く出でぬ。少輔、泣き給ふをあやしとおぼしけれど、物も云はで臥しぬ。かく女もわびしと思ひわび、北方もとりはなちてむ、と惑ひ給へど、大殿のかく宣ふにつゝみて、出で給ふ夜、出で給はぬ夜ありけるに、宿世心うかりける事は、いつしかつはり給へば、いかで子うませむと思ふ。少將の子は出でこで、此痴者の廣ごることとのたまふを、四の君ことわりにて、いかで死なむとおもふ。藏人少將思ひしらしるく、殿上の公達、「面白の駒はいかに。この比年かへらば、御乘にて白馬に出し給へ。君とあれと、いづれか思ひ增したる」とて笑ふに、塵もつかじと思ふ心に、いと苦しと覺ゆ。元來も、いと思ふ樣には覺えざりしかど、いみじういたはらるゝに、かゝりてありつるを、これにことづけて捨てむ、と思ひなりて、やう〳〵來ぬ夜のみ多かれば、三の君ものおぼす。

二條殿には、日々にあらまほしくなりまさる。男君の、もてかしづき給ふ事かぎりなし。「人はいくらも參らせ給へ。女房多かる所なむ心にくく、花やかにも聞ゆる」とて、此彼につけつゝ、ひきひきに參れば、二十餘人ばかりさぶらふ。男君も女君も、御心ざまの

まゐりまかで—女房達の

衞門—もとの安濃

答す—し返す

內—御所

德ある—富裕なる

おきつる—差圖する

北方の—少將の父左大臣の妻

どやかに、よくおはすれば、つかうまつりよく、まゐりまかで、裝束かへつゝ、今めかしきことおほかり。衞門を第一の者にし給へり。帶刀、おもしろの駒の事を妻に語りければ、した心には、いみじう妬かりし答すばかりの身にもがな、と思ひしるしにもやと、嬉しけれど、「あないとほしや。北方、如何におぼすらむ、さいなまるゝ人、多からむかし」といふ。かくてつごもりになりぬ。大將殿より、「少將君の御裝束、今は疾くし給へ。こゝには內の御事に、暇なくなむ」とて、よき帛、糸、綾、茜、蘇枋、紅藍など、多く奉り給へれば、もとよりよくし給へりける事なれば、いそがせ給ふ。さて、少將君につき奉りて馬允になりたる田舍の人の德ある、絹五十まゐらせたれば、人々にさまぐ\たまはす。衞門とりくばりしおきつるにも、目やすく見ゆ。この二條殿は、北方の御殿なり。むすめ二所、大君は女御、太郎はこの少將、二郎は侍從にて、あそびをのみし給ふ。三郎は童にてなむ、殿上し給ふ。乳兒におはしけるより、この少將を、世になくかなしうし奉りたまふに、人に譽められ、帝もよき人に思しめしたれば、まし

かの御事―少將の事
雜色―ド人
いとようし給ふ―裁縫を
司召―官人の役替
かの北方―中納言の
ちやう―懲し責めし
かれ―離れ
すぢかひ云云―落窪の

ていかならむ事をし給ふとも宣ふまじ。かの御事になれば大臣笑みまけ給へれば、殿に仕うまつる人、雜色、牛飼まで、この少將殿になびき奉らぬはなし。かくて年かへりて、朔日の御さうぞく、色よりはじめて、いと淸らにし出で給へれば、いとよしとおぼして、著てありき給ふ。御母北方見給ひて、「あなうつくし。いとようし給ふ人にこそものし給ひけれ。内の御方などの、御大事あらむには、聞えつべかめり。針目などの、いとおもふやうにあり」と譽め給ふ。司召に中將になり給ひぬ。三位し給うて、おぼえまさり給ふべし。三の君の藏人少將、かの中の君を聞え給ふを、「いとよき人ぞ。たゞ人とおぼさば、これを取り給へ。見るやうあり」と、常に申し給ふ。かの北方、これをいみじう寶に思ひて、これが事につけて、我が妻をちやうぜしぞかし、と思ふに、いと捨てさせまほしきぞかし。中將かくいふを、見る樣ぞあらむとて、とき〴〵返りいはせさせ給ふに、中將たのみをかけて、三の君を、たゞかれにかれゆく。よしと褒めし裝束もすぢかひ、あやしげにし出づれば、いとゞかこつけて腹立ちて、しかけたる衣ども著で、「こは何

君の縫ひし時はよかりしも三の君の縫ふは筋もゆがみて
おもておこし―家の面目
あくがる―浮かる

わざしたるぞ。いとよく縫ひし人は、何處いにしぞ」と腹立てば、三の君、「男につきていにしぞ」といらへ給へば、「なぞの男につくべきぞ。たゞにぞ出でにけむ。こゝに宜しき者ありなむや」と宣へば、三の君、「されど異なる事なき人も、なかるべきにこそあめれ。御心を見れば」といへば、「さはべり。おもしろの駒はべるなり。世にめでたき人も參りけり、と心にくくおもふ」など、まれ〳〵來ては、ねたましかけていぬれば、いみじう妬み歎けどかひなし。北方、落窪なきをねたういみじう、いかで此奴がためにまどはしにけむ、と惑ひ給ふ。われは幸ありよき聟取るといひしかひなく、おもておこしに思ひし君は、たゞあくがれにあくがる。よき事とていそぎしたるは、世の笑はれぐさなれば、病人になりぬべくなげく。正月の晦日に、よき日ありけるに、物詣する人ぞよかなるとて、三四の君、北方車ひとつして、忍びて淸水にまうづ。折しもこそあれ、三位中將殿の北方、男君もまうで給ふに、中納言殿の車は、疾くまうで給ひければ前だち行く。しのびたりとて、御前もなくかいすゝみたり。中將殿は、男女のおはしければ、

御前―前驅
むつがる―腹立つ
ほの聞えて―薄々聞えて
手礫―小石
うてかし―礫な

御前いとおほくて前おひちらして、いと猛にてまうで給ふ。さきなる車は、尻ばやにこされて、人々わびにたり。松明のすきかげに、人のあまた乗りたるにやあらむ、牛くるしげにて、えのぼらねば、後の車どもせかれて、とゞまりがちなれば、雜色どもむつがる。中將殿人を喚びて、「誰が車ぞ」と問はすれば、「中納言殿の北方、忍びてまうで給へる」といふに、嬉しくまうで逢ひにけり、と下心にはをかしく思して、「男ども車疾くやれといへ。さるまじうは、傍にひきやらせよ」とのたまへば、御前の人々、「牛弱げに侍れば、えさきにのぼり侍らじ。かたはらに引きやりて、この御車を過せ」といへば、中將、「牛弱くば、おもしろの駒にかけ給へ」と宣ふ聲、いと愛敬づきてよしあり。車にほのきこえて、「おなわびし、誰ならむ」とわび惑ふ。猶さきに立ててやれば、中納言殿の人々、「えひきやらぬ、なぞ」とて、手礫を擲くれば、中納言殿の人々腹立ちて、「事といへば、大將殿腹のやうに。中納言殿の御車ぞ、はやううてかし」といふに、この御供の雜色ども、「中納言殿にも恐る人あらむや」とて、手礫を雨の降るやうに、車になげかけて、か

無德―無益

これが―中將が

手をもみ―手をすり

橋殿―清水にあり橋かけたる如くに造れる家

たやうに集りて押しやりつ。中將殿の御車どもはさきだてつ。御前よりはじめて、人いと多くて、うちあふべくもあらねば、片輪を堀におしつめられて、物もいはであり。「なかなか無德なるわざかな」と應したる男どもいふ。乘りたる北方をはじめて、ねたがりまどひて、「誰がまうで給ふぞ」と問へば、「左大將殿の三位中將殿のまうで給ふなり。只今の第一の人にて、あしくいらへ給ふな」と云ふを聞きて、北方、「何の仇にてとにかくに恥を見せ給ふらむ。此兵部少輔がことも、これがしたるぞかし。おいらかに否といはましかば、さても已みなまし。よそ人も、かく敵のやうなる人こそありけれ。何者ならむ」とて、北方手をもみ給ふ。いと深き堀にて頓にえ引き上げで、とかくもてさわぐ程に、輪少し折れぬ。いみじき事かなとて、になひあげて、繩もとめて來て結ひなどして、「かへらむやは」とて、やう〳〵のぼる。中將殿の御車どもは、橋殿にひき立てて無期に立ちたまへるに、やゝ久しうありて、辛うじてよろぼひ來ぬ。「いとたけかりつる輪、折れにけりや」とて、又わらふ。よき日にて、橋殿に隙もなければ、かくれのかたより下

たけかりつる—堅固なりし

さば—さらば、以下北の方の詞

かれが—北方か

かしづき—世話しいたはり

ふたぎて—

りむ、と思ひて過ぎて行く。中將、帶刀を喚びて、「この車の居り所見て告げよ。そこにゐむ」と宣へば、走りいきて見れば、知りたる法師を喚びて、「いと狹くまうづるを、この三位中將とかいふものの詣であひて、しか〴〵して、車の輪折れて、今まで侍りつる。局ありや。狹く下りなむ。いとくるし」といへば、「いと不便なる事かな。更に御堂の間なむ、かねて仰せられ侍りしかば、取り置きてはべる。かの中將殿も、何處にかさむらひ給はむずらむ。論なうえせものに、局襲ひしがれむかし。あはれ、いと不便なる夜なめりかし」といへば、「さは、とく下りなむ。人なき局とて、取られなむ」とていそけば、男ひとり、「御局見おかむ」とて、行くしりにたちて、帶刀見おきて走りかへりて、「かう〳〵なむ申しつる。かれがいかぬ前に」とて、おろす御几帳さして、男君はなれ給はず、かしづき給ふ事かぎりなし。中納言殿の北方、中將殿の下りぬさきにとて、みな歩みのぼる程に、これはた儀式殊に、そよ〳〵はら〳〵と沓すりて、帶刀前に立ちて、道なる人々はらふ。車の人々さわぎ立ちあゆめば、道をふたぎて更にやらねば、はした

塞ぎて

誰も〳〵―中納言方の人々

あらはなり

云々―顯著なりと中將方の人の制する詞

うはの空―

あてもなしに

おこなひ―執行所

させ給へ―局と

なくて、しばしかいむれて立ちたるを見て、「あとおひなる御物詣なめりや。常にさきだちたまはむとのみおぼえためれども、後れ給ふは」とのみ笑へば、誰も〳〵いとねたし、と思ふ。とみにもえ歩みよらず、辛うじて局に歩み行きぬ。法師童子一人ありけるは、かの局あるじのおはする、と思ひて出でていぬ。みな入り給うて、中將、帶刀を喚びて、「かの人々笑はせよ」と囁き給ふをも知らで、我が局と賴みて來て、入らむとするに、「あらはなり。中將殿おはします」といふに、あきれて立てれば、人々わらふ。「いとあやしや。たしかに案內せさせてこそ、おりさせ給はまし。かくうはの空に御局あるまじかめるものを、いといとほしき事かな。仁王堂のおこなひせさせ給へ。それにぞ所ひろかなる」と、そら知らず顏して、帶刀、我と知られむは、いとはしくて、若うはやれる者に、物をはやして云はせて笑ふに、はしたなき事かぎりなし。歸らむにもはしたに、わびしといふは愚なり。暫立てるに、人さわがしく突い倒しつべくありきちがへば、わびしく、歩みかへる心地も、只思ひやるべし。勢まさりたらば、いさかひかへしてもいぬべし、

たゞに思はむ人云々—尋常一樣の恨などにてはかくまではせじ
大德—僧
よろしき人—通常の人
一の人—一座の宣旨を掌る者、攝政關白
音もせぬ君—何も言ひ得ぬ人

いとせむ方なし。足を空に車にかへり乘りて、妬ういみじう思ふ事かぎりなし。「猶たゞに思はむ人、かくはせじ。大臣をやあしと思ふらむ、いかなる事にあたり給ふらむ」と集りてなげく中に、四の君おもしろの駒いはれて、いといみじと思ふ。大德よびて、「かうかうしてとられぬ。いみじき恥にこそあれ。又局ありぬべしや」といへば、大德、「更に今はいづこのかあらむ。入りゐたるをだに、殿ばらの君達は、推しゐさせ給ふに、遲くおりさせ給へるが、さしてあしきなり。いかゞせむ、御車ながら明させ給ふべきなり。よろしき人ならばこそ、もしやといひ侍らめ。只今の一の人、太政大臣も、此君におへば音もせぬ君ぞや。御妹、かぎりなくときめきたまふを持給へり。我がおぼえばかりを思すらむ人、うち合ふべくもあらず」などいひていぬれば、かひなし。おりなむと思ひて、六人まで乘りたりければ、いと狹くて身動もせず、苦しき事、落窪の部屋に籠り給うたりしにもまさるべし。幸うじて明けぬ。この愛敬なしの出でぬさきにとて、歸りなむと急ぎ給へど、御車の輪ゆふ程に、中將殿は御車に乘りたまひぬ。例の便なかめれば

愛敬なし―中將殿

まだし―未だ懲りず

又や見給はむ―又辛き目を見るならむ

中納言殿の御車、後れむとて立てれば、中將殿、後にも思ひあはせよ。むげにしるしなくば、かひなしとや思しけむ。小舍人童を喚びて、「かの車の柄の方によりて、懲りぬやといひて來」とのたまへば、たゞよりに寄りて、かくいへは、「誰が宣ふぞ」といふに、「只かの御車より」といふに、「さればよ。なほ思ふ事ありてするにこそありけれ」と囁き怪しがりて、北方の「まだし」と云ひ出したりければ、わらはかくなむと申せば、「さがなもの、ねたう答へたなり。かくておはすとも知らじかし」と笑ひ給うて、「まだしにせぬ御身なれば、またや見給はむ」といはせたれば、北方、「いらへなせそ、めざまし」と制せられて、せさせ給はねば、かへり給ひぬ。女君いと心憂く、「けしからずはおはせし、と大殿後に聞き給はむ事もあり。かくな宣ひそ」と制し給ひけれど、「これには、大殿や乘り給へる」と宣へば、「君達おはすれば、おなじ事」と宣ふを、「今うちかへし仕うまつらむに、御心はゆきなむ。思ひおきしこと違へじ」と宣ふ。北方かへり給うて、中納言に申し給ふ。「この大將殿の中將は、大殿をやあしくし給ふ」とあれば、「さもあらず。

答せむ—復讐せん
老いしれて—老耄して
いられ死ぬ—憤死する
手がらみ—手を組む
・

内裏にても用意ありてこそ見ゆれ」と宣ふ。「怪しきことかな。しか〳〵こそありつれ。又なう、妬くいみじき事こそなかりつれ。出づとていひ遣せたりつる消息よ。いかで、これに答せむ」ともだえ給へば、中納言、「我は老いしれて、おぼえもなくなり行く。かの君は、只今大臣になりぬべき勢なれば、いと答しがたし。さべうこそあらめ、名だたしう、わが妻子どもとて、さる恥を見笑はれけむ事よ」とて、爪はじきをして又歎き給ふ。かゝる程に六月になりぬ。中將せめていひ唆かして、藏人少將を、中の君にあはせ給へば、中納言殿に聞えて、いられ死ぬるばかり思ふ。かくせむとて、我をば賺しおきしにこそありけれとて、「いかで窮鬼にも入りにしかな」とて、手がらみをし宣ふ。二條殿には、思ひかしづき給ふをいかに思すらむ、と思ひやりていとほしがる。三日の夜の御裝束をば、ものよくし給ふとて、この殿になむ奉り給うければ、女君、いそぎ染めさせ、裁ち縫ひし給ふにも、むかし思ひ出でられて哀なれば、

　着る人のかはらぬ身には唐衣たちはなれにし折ぞわすれぬ

おほいどの—大臣殿
恐しき人—中の君の事を卑下していふ
ゆめ—決して
もとの人—三の君
おぼえ—氣受
ものせで—消息もせずに

とぞ、いはれ給うける。いと清げに縫ひ重ねて、奉らせたまへば、おほい殿の北方、かぎりなく悦び給ひ、中將もいと思ふやうにしつ、と思ひ給ふ。さて少將にあひて、「いと恐しき人もたまへり、と怖ぢ聞え給ひしかど、間近くて、聞えかたらはむの本意ありてなむ、しひてそゝのかし聞えたるを、理なくとも、ゆめもとの人とひとつに思すな」と聞え給へば、少將、「あなゆゝし、よし聞え給へ。文をだにものし侍りてむや、御用意ありと承りしよりなむ、限なく賴み聞えし」と宣うて、實にかへりみし給ふべくもあらず。おぼえも女君も、こよなくまさりたれば、何しにかは通はむ。かゝるまゝに、北方いられ惑ひて、物もやすく食はでなむ歎きける。中將殿に、よき若人ども參り集りたる、いたはり給ふと聞きて、かの中納言殿の少納言、かく落窪君とも知らで、辨の君がひきにて參りたり。女君見給ふに、少納言なれば、あはれにをかしうて、衞門を出して、「他人かとこそ思ひつれ。むかしは更に忘れずながら、つゝましき事のみ多くて、えかくなむとものもせで、おぼつかなく思ひつるに、いと嬉しくもあるかな、早うこなたにも

扇さしかくし―扇にて顔な

れび―老成し

汗衫―少女の上着

こよなく―此の上なく

のし給へ」といはせたれば、少納言あさましくなりて、扇さしかくしたりつるも打ち置きて、ゐざり出づる心地もたがひて、「いかなることとぞ。誰が宣ふぞ」といへば、「只かくて侍ふにおぼし出でよ。その世には、落窪の御かたと聞えしよ、わたくしにも、いとこそうれしけれ。むかし見奉りし人は、一人もなくて、かはりたる心地のし侍りつるに」といへば、少納言、「いで、あなうれしや。我が君のおはしますにこそありけれ。世にわすれず、戀しくのみおぼえさせ給へるに、佛の導き給へるにこそありけれ」と、喜びながら御前に參りたり。見るに、かの部屋に居給へりし程、まづ思ひ出でらる。君はまづねびまさりて、いとめでたうてゐ給へれば、いみじく幸おはしける、とおぼゆ。そよそよとさうぞき、汗衫著たる人、いと若う清げなる、十條人ばかり物語して、いとなまめかしげなり。「いと狹く御前ゆるされ給ふ人、いかならむ。我等こそさもなかりしか」とうらやみあへれば、「さかし、こはさるべき人ぞかし」と、笑ひ給ふさまも、いとをかしげなり。かゝれば、父母の起居かしづき給ひし御姉妹どもには、こよなくまさり給へる

ぞかし、と人の聞く程は、嬉しきよしをいひて、人たちぬるほどに、少納言、中納言殿の物語をくはしくす。かの典薬が答へし事かたれば、衛門もいみじく笑ふ。「北方、このたびの御聟取の恥がましき事」と腹立ち給ふ。宿世にやおはしけむ、いつしかといふやうに孕み給へれば、心地よげに見え給ひし北方も、思ひまつはれてなむおはすめる」。「四の君の御人は、あやしき事かな。これには、いみじう譽め給ふめるものを、鼻こそ、中にをかしげにておはす、とこそいはるめれ」と宣へば、少納言「嘲弄し聞えさせたまへるなり。御鼻なむ、中に優れて見苦しうおはする。鼻のうち仰ぎいらゝぎて、穴の大きなることは、左右に對たて、寢殿も造りつべく」などいへば、「いといみじき事かな。實に、いかにいみじうおぼえ給ふらむ」など語らひ給ふほどに、中將君、内裏よりいたう醉ひてまかでたまへり。いとあからかに清げにておはして。「御遊に召されて、此彼にしひられつるに、いとこそ苦しかりつれ。笛つかうまつりて、御衣かづき侍る」とてもておはしたり。禁色のいみじくかうばしきを、「君にかづけ奉らむ」とて、女君にうちかづ

思ひまつはれて—思煩ひて
御人—御聟
對—對の屋とて寢殿の兩側に建つるもの
かづき—賜はる

かのわたり―北方の實家

うしろめたなし―懸念なり

わざとの人…あらず―歴々の人の女にもあらず隨つて妻

け給へば、「何の祿ならむ」とわらひ給ふ。少納言を見つけて、「こはかの邊にて見えし人にはあらずや」て「さなめり」。「いかで參りつるぞ。交野少將の、艶になまめかしかりしことの殘り、いかで聞き侍るらむ」と宣へば、少納言、云ひしこと忘れて、何事ならむ。怪し、と思ひて、かしこまり居たり。「いと苦し。臥いたらむ」とて、御帳の内に、二所ながら入り給ひぬ。少納言、めでたく淸げにおはしける君かな。いみじく思ひきこえ給へるにこそあめれ。幸ある人は、めでたきものなりけり、と思ひゐたりける。

さる程に、右大臣にておはしける人の御ひとり女、「うちに奉らむと思へど、我がなからむ世など、うしろめたし。この三位中將、交らひの程などに試るに、ものたのもしげありて、人の後見しつべき心あり。これに婚せむ。わざとの人のむすめにはあらず、はかばかしき妻どもなかめり。年比かくおもひて、心とゞめて見るに、思ふやうなる人なり。只今なりもて出でなむ」と宣ひて、しりたる便ありて、男君の御乳母の許に、「かう〳〵なむ思ふ」といはせ給へれば、御乳母、「かくなむ侍る。いとやんごとなく、よき事にこ

立ちての妻にもあらじと落窪の君を見くびりて
この御妻―落窪君
この殿―右大臣
あるよりも―もとよりある物よりも
心の中には―落窪の

そ侍るめれ」といへば、中將、「一人侍るほどならましかば、いとかしこき仰事ならましを、今はかくて通ふ所あるやうに、ほのめかし給へ」とて、立ち給ひぬれば、御乳母思ふやう、この御妻は、父母もなき樣にて。たゞ君にのみこそかより給うためれば、はなやかにかしづかれ給はば、よからむかし、と思ひて、君の宣ふやうにはいはで、「いと嬉しき事なり。今よき日して、御文も取りて奉らむ」など云ひ遣りたりければ、この殿にはよしと思して、急ぎといそし。四月にぞ取らむ、とおぼして、御調度、あるよりもいかめしうしかへて、若き人もとめ、經營し給ふ。「君は右大臣殿の聟になり給へるなり。この殿には知り給へりや」といへば、衛門、あさましと思ひて、「まださるけしきも聞えず、たしかなる事か」といへば、「まことにこの四月にとて、急ぎ給ふものを」と告ぐる人のありければ、女君に、「かう〱こそ侍るなれ。さはしろしめしたるにや」と申せば、まことにやあらむ、と淺ましく思ひながら、「まださる事ものたまはず。誰がいふぞ」と宣へば、「かの殿なる人のたしかに知る便ありて、月をさへ申して侍る」といへば、心の

月—婚禮の
さやうなる人—右大臣の如き人
おしたちて—強く
さりげ—さる趣
濱木綿—濱おもと幾重の序

中には、この母北方の、強ひて宣ふにやあらむ。さやうなる人の、おしたちて宣はば、聞かではあらじ、と人知れずおぼして、心つきぬれどつれなくて、宣ひやすると待てど、かけても云ひ出で給はず。女、心うしとおもへるけしきや、なほ少し見えけむ。中將、「おぼする事やある。みけしきにこそさりげなれ。まろは世の人の樣に、思ふぞや、死ぬや、戀しやなども聞えず、只いかでもの思はせ奉らじとなむ、はじめより思へど、かゝる御けしきの、このほど見ゆるは、いと苦しく心うしとやおぼさむとて、初もさいみじかりし雨に、わりなくて參りしを、足じろの盜人とは興ぜられしぞかし。ほと〳〵おろかなりし。猶のたまへ」と宣へば、女、「何事をか思はむ」。「いさ、されど御氣色いとくるし。思ひこそへだて給へれ」と宣へば、女、

へだてける人のこころをみ熊野の浦の濱木綿いくへなるらむ

男君、「あなこゝろう。さればよな。猶おぼす事ありけり。

み熊野に生ふる濱木綿かさねなでひとへに君をわれぞ思へる

物しき―氣障りなる
とむらふ―訪ぬる
みけしき―御氣分
ことごころ―他心
立ちかへり―おし返し

心ならでや、物しき事も聞き給はむ。なほ宣へ」と聞え給へり。たしかならぬ事にもこそあれ、と思うて、物もいはでやみぬ。明けぬれば、帯刀に衛門がいふ、「しかじかの事あるべかなるを、心うくもいはぬにこそ。遂にかくれあるべき事かは」といへば、「更にさること聞かず」といふ。「されど外の人さへ聞きて、人々の許に、いとほしがりとむらふものを、知らぬやうはありなむや」といへば、「怪しき事かな。君の御けしき今みむ」といふ。中將殿に參りて見れば、春の庭を見出しておはす。いとおもしろき梅のありけるを折りて、「これ見給へ。尋常になむ似ぬ。みけしきもこれになぐさみ給へ」と宣へば、女君、たゞかく聞え給ふ。

うきふしに逢ひ見ることはなけれども人のこころの花は猶うし

とてなむ、花につけて返し給へれば、中將いとあはれに、をかしとおぼす。猶我ことごころありと聞きたるにや、と苦しうて、立ちかへり、「さればよ、おもほし疑ふ事こそありけれ。更に罪なしとなむ、只今は思う給ふるを、まろが心のほどは猶見給へ」とて、

うきみ—身、實

殿—父大將殿

なまねび給ひそ—取次ぐな

いとさいふばかりなる云々—汝の

「うきことに色はかはらず梅の花ちるばかりなるあらしなりけり

と推しはかり給へ」と宣へれば、女君、

「さそふなる風に散りなば梅の花われやうきみになりはてぬべき

とのみぞ、あはれに」とあるを、いかなる事を聞きたるにかあらむ、と思ひ給へるほどに、御乳母出で來ていふやう、「かの右大臣の事は、宣ひしやうにものし侍りしに、わざとやんごとなき妻にものし給はざなり。時々通ひてものし給へかし。殿に聞えて、四月となむ思ふ、と急がせ給ふなり。さる心し給へ」と聞ゆれば、いと恥しげに笑みて、「なでふ、男のいなと思ふ事を、強ひてするやうかはある。世の人にも似ず、よき身にもあらねば、さ宣ふ人もあらじ。かゝる事なまねび給ひそ。かたはなり。わざとの妻にもあらざなりとは、いかで知りたまふ。いとさいふばかりなる人にもあらぬを」と宣へば、乳母、「あなわりな。こともしかとおぼし立ちて、急ぎ給ふものをば。よし御覽ぜよ、やんごとなき人の、強ひて宣はむ事を、いかゞせさせ給はむ、何かは、君達は花やかに御妻

言の如く卑しむべき人にも非ず
中の劣―姉妹中の劣者
うちはめ―押籠られ
そこ―其方乳母をさす
人はなちげにも云々―人言もて二人の間をさく事かなはぬ様なり

方のさしそひて、もてかしづき給ふこそ今めかしけれ。おもほす人ありとても、それをばさるものにて、御文など奉りたまへ。かの君も思ふ時は、上達部の女にはあなれど、落窪君とつけられて、中の劣にて、うちはめられてありけるものを、かくたぐひなく思しかしづくこそ怪しけれ。人は、かたへは父母ゐたちてかしづかるゝこそ、心にくけれ」といふ。中將面うち赤めて、「ふるめかしき心なればにやあらむ、今めかしく好もしき事もほしからず、おぼえもほしからず、父母具したらむをともおぼえず、落窪にもあれ、あがりくぼにもあれ、わすれじと思ふをいかゞはせむ。人のいはむはことわり、そこにさへかく宣ふこそ心憂けれ。只御爲に志なきに思すとも、今かれも仕うまつるやうありなむ」とて、いとたのもしげなる御氣色にて立ち給ふめるを、帶刀つく〴〵と聞きて、爪はじきをはた〳〵として、「なでふかゝる事申し給ふ。君と申しながらも、恥しげにおはすとは見奉らずや。只今の御中は、人はなちげにもあらぬものを。かの宣へるやうに、志たがはず、花やかなる方にやり奉りて、御徳見むとおぼしたるが。あな心う。少しよ

おどろ〲しう—大層らしく

かたへは云云—汝が斯くいふは一は汝の妻の關係あればならん

ろしき人の、さる心持たるやはある。なふで御名だての落葉ぞ。老い僻み給ひけり。之をかの御あたりに聞き給ひて、いかゞおほすべき。今よりかゝる事のたまふな。君のおほしたる事、いと恥しくいとほし。この御妻のいたはり、かうや得まほしくおはする。さらずとも惟成等が侍らば、御身ひとつは仕うまつりてむものを。かやうの心もたる人は、いと罪ふかゝなり。また聞え給はば、惟成法師になりなむ、といといとほし。猶人の思ふ中さくるは、大事にはあらずや」といへば、乳母、「答もせさせずいひなすかな。誰かは、只今さり給へ捨て給へと聞ゆる」。「いで、さにはあらすや。めあはせ奉り給ふは」。「いで、あなかしがまし。取りはてても様あしからむか。などかおどろ〲しうはいふべからむ。かたへは妻を思ふなめり」と、いとほしながら、口ふたけにいへば、帯刀笑ひて、「よし〲、猶申しそゝのかさむ、と思し召したり。たゞ惟成法師になり侍りなむ。御罪いといとほし。親の御うへをば、いかで知らざらむ」とて、剃刀腕にはさみもたり「また言ひ出で給はむをり、ふとかきそらむ」とて立てば、乳母、一人子なりければ、か

くいふをいといみじと思ひて、「口からいと忌々しき事をも聞くかな。挾みたらむ剃刀、打ちや折らむ、と試みよ」といへば、帶刀みそかに笑ふ。君は更に動じ給ふべきにもあらず、我が子のかくいふと思ひて、不用なるよし、聞え奉らむと思ふ。中將君は、女君の例のやうならず思ひたるは、この事聞きたるなめり、とおぼしぬ。二條におはして、「御心のゆかぬ罪、聞きあきらめつるこそうれしけれ」。女君、「何事ぞ」。「右大臣のことなりけりな」と宣へば、女君、「虚言」とて、ほゝゑみてゐ給へれば、「物ぐるほし。みかどの御むすめ賜ふとも、よも得侍らじ。はじめも聞えしを、たゞつらしと思はれ聞えじとなむ思へば、女の思ふ事は、又人まうくるをこそ歎くなれ、と聞きしかば、そのすぢは絶えにたり。人々とかう聞ゆとも、よもあらじとおぼせ」と宣へば、「さ思はむもしたくづれたるにや」といへば「思ひ聞ゆと聞えばこそ、あやしとも宣はめ。只つらき目を見せ奉らじ」、と聞ゆれば、「志のあるかは」など聞え給ふ。帶刀、衞門に逢ひて、「更にな思ひ疑ひたまひそ。この世には、御心憂かるべきにあらず」といふ。御乳母いとほしくいは

不用なるよし—少將承引せねば此媒無益なりと

又人まうくる—外に女を置く

したくづれたるにや—六帖に「あだ人は下くづれたる岸なれや思ふといへど頼まれずして」

うへ―少將の母北の方
心ちなやましうて―懷妊して

れて、又もうち出でず。かの殿にも、かく思しかよふ所ありけりと聞えて、おぼし絶えにけり。かく思ふやうにのどやかに、思ひかはして住み給ふほどに、孕み給ひにければ、ましておろかならず。

四月、大將殿の北方、宮たち、棧敷にて物見たまふに、中將君に、「二條に物見せ聞え給へ。わかく物し給ふ人は、物見まほしくし給ふものを、おのれも今まで對面せぬ心もとなきに、かゝるついでにとなむ思ふ」と聞え給へば、中將いと嬉しと思ひ給ふけしきにて、「いかなるにか侍らむ。人のやうにものゆかしくも侍らざめり。今そゝのかして參らせむ」と聞えたまうて二條におはして、「うへはかくなむ宣ふぞかし」と聞え給へば、「心地のなやましうて、あやしげになりたるも思ひ知られて、物見に出でたらば、我見えたらむに、いとわりなからむ」とて、物うげなれば、中將「たれか見む。うへ、なかの君こそは。それまろが見奉るも同じ事」とて、しひてそゝのかし聞えたまふ。北方の御文にも、

一佛淨土—彌陀の淨土
對の御方—落窪の方
うへ—北方

猶わたり給へ。をかしき見物も、今は諸共にとなむ思ひ給ふる。

と聞えたまへり。見給ふにつけても、かの石山まうでの折、ひとりえり捨て給ひしも、思ひ出でられて心うし。一條の大路に、檜皮の棧敷いといかめしうて、御前に砂子しかせ、前栽うゑさせ、ひさしう住み給ふべきやうにしつらひ給ふ。曉にわたり給ひぬ。衛門、少納言、一佛淨土に生れたるにやあらむと覺ゆ。この君にいさゝか心寄せあらむ人をば、ねたきものに云ひのゝしりしを、見ならひたるに、對の御方の人とて、いたはり用意し給ふさま、いとめでたしと思ふ。乳母のおとゞ、さこそいひしか、出で來て、心しらひつかうまつりて、「いづれか惟成があるじの君」と、問ひありきて、若き人々に笑はる。女君は、「何かうと〱しく思ひ聞えむ。思ふべき中は、睦じくなりぬるのみなむ、後もうしろやすく、心やすき」とて、うへや中の君など、おはする所に入れ奉り給ふ。見給ふに、我が御むすめ、姫君にも劣らず、をかしげにて見ゆ。紅の綾のうちあはせ一襲、二藍の織物の袿、羅の濃き二藍の小袿著給うて、恥しと思う給へるけしき、いと

いはけなく―幼稚にて
しつらひて―取り繕ひ席を設けて
ゆかり―縁者

をかしうにほへり。姫君は、實にたゞの人ならず、あてにけだかくて、十二ばかりにおはしませば、まだいとわかう、いはけなくをかしげなり。中の君は、若き御心にをかしとおぼして、細やかに語らひ聞え給ふ。物見はてぬれば、御車よせて歸り給ふ。中將君、やがて二條にとおほせど、北方、「さわがしうて、思ふこと聞えずなりぬ。いざたまへ、一二日も心のどかに語らひ聞えむ。中將の物さわがしきやうに聞ゆるはなぞ。おのが聞えむことに隨ひ給へ。中將はいとにくき心ある人ぞ。な思ひたまひそ」とて、笑ひて添ひ給うて居給へり。御車よせたれば、くちには宮、中の君、しりには嫁君と我と乗り給ふ。つぎ〳〵に皆乗りたまうて、中將殿皆乗り給ひて、引きつゞきて大將殿におはしぬ。寢殿の西の方を俄にしつらひて、おろし奉り給ひつ。御達のゐどころには、中將の住み給ひし西の對のつまをしたり。いみじくいたはり給ふ。大將殿も、いみじく思ふ子の御ゆかりなれば、御達にいたるまでもいたはり騒ぎ給ふ。四五日おはして、「いとなやましきほど過して、のどやかに参らむ」とて歸り給ひぬ。まして對面し給ひて後は、哀なる

たとしへなく―譬へむ方なく

ちやうぜじ―苦懲らさじ

中納言―落窪の父

産養―産後に於ける三夜七夜などの饗應

ものに聞え給へり。かくて、たとしへなく思ひかしづききこえ給ふ君の御心を、今はと見給ひてければ、中將君にきこえ給ふ。「今はいかで殿に知られ奉らむ。老い給へれば、夜中曉の事も知らぬを、見奉らでや止みなむ、と心細くてなむ」と聞え給へば、中將殿も、「さは思すべけれども、猶暫念じて、な知られ奉り給ひそ。知られて後は、いとほしくて、え北方ちやうぜじ。今少しちやうぜむと思ふ心あり。又まろも、今少し人らしくなりて、中納言は、よにとみには死に給はじ」とのみ云ひ渡り給ふに、つゝみてのみ過し給ふに、はかなくて年かへりて、正月十三日、いとたひらかに男子産み給へれば、いと嬉しと思して、若き人のかぎりしてうしろめたしとて、男君の御乳母むかへ給うて、「上などのし給はむやうに、よろづ仕うまつれ」とあづけ奉り給ふ。御湯殿などしゐたり。女君のうちとけ給へるを見て、うべなりけり、男君のあだわざし給はぬは、と思ふ。御産養、我も〳〵とし給へれば、委しく書かず、思ひやるべし。只銀をのみ、よろづにしたりける。遊びのゝしる。かくめでたきまゝに、衛門、いかで北方に知らせばや、と思

かけながら—大將を兼ねながら

吹く風につけて—何につけて

產み給へれば—落窪が

ふ。御乳母は、少納言、子產みあはせたりければ、爲させ給ふ。これを寵しがり、かしづきものにし給ふ。司召に引き超え中納言になり給ひぬ。藏人少將、中將になり給ひぬ。大將殿は、かけながら大臣になり給ひぬ。左大臣の宣ふ。「かく子のうまれたるに、祖父、父よろこびをする、かしこき子なり」と申し給ふ。今はましておぼえはことに、花やぎまさり給ふ。衞門督さへかけ給ひつ。中將は、宰相になり給ひぬ。中納言は、かく少將なりあがり給ふにつけても、三の君、北方は、などかなど、名殘ありてだに、時々涙ぐましきを、いみじう妬がれど、かひあるべくもあらず。衞門督は、我が身の時になり給ふまゝに、中納言殿を、吹く風につけて侮り嘲じ給ふ事しも多かれど、同じ事のやうなれば書かず。又の年の秋、また男君、うつくしう產み給へれば、左大臣の北方、「御產屋ぞ、うつくしうも、いそがしう取りつゞき給へるかな。こたみは、こゝにあづかり奉らむ」とて、御乳母具して迎へ奉り給ふ。帶刀は、左衞門尉にて藏人す。かく思ふやうにて、めでたくおはすれど、中納言殿に知られ給はぬことを、飽かずおぼす。中納言殿は、

をさ〱—大概

庄—庄園私領

さう〲し—寂寥なり

老いぼけ給へるうへに、物思のみをして、をさ〱出でまじらひ給ふこともなく、つくづくと入り居給へり。落窪君の傳へえ給へる家、三條なる所にて、いとをかしかりける。「落窪君になむ取らせたりけるを、今は世になくなりにたれば、我こそ領ぜめ」とのたまへば、北方も、「さらなる事。世に生きたりとも、さばかりの家、領ずばかりにはあらざらまし。よきあこ達、我等が住まむにいと廣うよし」といひて、二年出でくる庄の物を盡して、築土より始めて、新しく築き廻して、古木ひとつまじらず、これを大事にて作らせ給ふ。かくて「今年の賀茂祭、いとをかしからむ」といへば、衞門督殿、「さう〲しきに、御達に物見せむ」とて、かねてより御車あたらしく調じ、人々の裝束ども賜びて、「よろしうせよ」と宣ひて、いそぎて、その日になりて、一條の大路に打杭うたせ給へれば、今はといへど、誰ばかりかは取らむ、と思してのどかに出で給ふ。車五輛ばかり、大人二十人、ふたつは、童子四人、下仕四人乘りたり。男君具し給へれば、前驅、四位五位いと多かり。弟の侍從なりしは、今は少將、童子におはせしは兵衞佐、諸共に

檳榔毛—屋形の簷を檳榔の葉の編みたるにてふける車

眞人—汝

かうはうす—強放す或は曰く斯うはすにてうの一字衍か

見むと聞えたまうければ、皆おはしたりける車どもさへそはりたれば、二十あまりひきつゞきて、皆次第どもに立ちにけりと見おはするに、我が杭したる所の向に、ふるめかしき檳榔毛の一つ、網代一つ立てり。御車ども立つるに、男君の交らひも、うとき人にはあらで、「したしう立てあはせて、見わたしの北南に立てよ」と宣へば、「この向なる車、少しひきやらせよ。御車たてさせむ」といふに、しふねがりて聞かぬに、「誰が車ぞ」と問はせたまふに、「源中納言殿」と申せば、君、「中納言にもあれ、大納言にてもあれ、かばかり多かる所に、いかで、この打杭ありと見ながらは立てつるぞ。少しひきやらせよ」と宣はすれば、雑色どもよりて車に手をかくれば、車の人出で來て、「など、この眞人達のかうする。いたうはやる雑色かな。かう蹴立つる我が殿も、中納言おはしますなり。一條の大路も、みな領じ給ふべきか。かうはうす」と笑ふ。「西東、齋院も恐ぢて、よぎ路しておはすべかなるは」と、口おしき男又いへば、「おなじものと、殿をひとつ口にな言ひそ」などいひて、えとみにひきやらねば、男君達の御車ども、まだえ立てず。君、御

と
おこなひて—計らひて
はつかに—僅に
もはら—専ら
又せむ—返報を也

前の人、左衛門藏人を召して、「かれおこなひて、少し遠くなせ」と宣へば、近くよりて、たゞひきにひきやらす。男どもすくなくて、えふと引きとゞめず。御前三四人ありけれど、「益なしこたびのいさかひしつべかめり。只今の大政太臣の尻は蹴るとも、この殿の牛飼に、手な觸れてむや」といひて、人の家の門に入りて立てりて、目をはつかに見出して見る。少しは樣おそろしきものに、世に思はれ給へれど、實の御心は、いとなつかしう、のどかになむおはしける。「いと無德なるわざかな。今はいかゞいらふべき」など定むるに、此典藥助といふ痴者の翁ありければ、「いかでか、心にまかせては引きやらせむ」といひて、歩み出でて、「今日の事は、もはら情なくはせらるまじ。打杭うちたる方に立てたらばこそ、さもし給はめ。向に立てたる車を、かくするは何ぞ。後の事思ひてせよ。又せむ」と痴者はいへば、衛門尉、典藥と見て、年ごろ此奴におはむとおもひしにうれしと思ふ。君もまた典藥と見給ひて、「惟成、それは如何にいはするぞ」と宣へば、こゝろえて、はやる雜色どもに目をくはすれば、走りよりて、「後の事思ひてせよ、と翁

塵ばかり―少しばかり

まな／＼と―まじめ顔に

君―督

轅―車下にありて輿と相連續するもの

のいふよ。殿をばいかにし奉らむぞ」とて、長扇をさしやりて、冠をはたとうちおとしつ。髻は塵ばかりにて、額ははげ入りてつや／＼と見ゆれば、物見る人にゆすりて笑はる。翁、袖をかづきて惑ひ入るに、さと寄りて一足づつ蹴る。「後の事いかでぞある／＼」と、心のかぎりはしつ。翁の「死ぬべかなり」と云へど責むれば、息音もせず。君、まなまなと虚制止をし給ふ。いといみじげにふみ伏せて、車にかけて引きやるに、男ども見懲りて、怖ぢわなゝきてえ車につかず。よそ人のやうにさすがに添ひて、他の小路にひきもて來て、道なかにうち捨て　いぬる時にぞ、辛うじて男どもより來て、轅もたげたる氣色いとあやしげなり。北方よりはじめて、乘りたる人、「物も見じ。歸りなむ」とて牛かけてうちはやめ、おひ惑ひて歸れば、いさかひしける程に、一の車の轅をふつふつと切りてければ、大路中にはたとひき墜しつ。下臈の物見むと戰きさわぎ笑ふ事、かぎりなし。車の男ども、足を空にて惑ひたふれて、ふともえかゝげず。「出で給ふまじきにやありけむ、かくいみじき恥の限を見る事」と、つまはじきをしつゝ惑ふ。乘りたる

横がみ—軸輪を持つもの

胴—車の胴

あら〳〵—危し

ねりつゝ—緩歩しつゝ

人の心地、たゞ思ひやるべし。皆泣きにけり。中にも北方、女どもは、口の方に乘せて、我は後の方に乘りたりければ、こよなき横がみより引き落しけるに、轅ばかり出でたりける。辛うじて這ひ乘りにけれど、腕つきそこなひて、おい〳〵と泣き給ふ。「いかなるものの報にかゝる目見るらむ」と泣き給へば、御女ども、「あなかま〳〵」と宣ふ。辛うじて、御前の人々たづね來て見るに、かゝれば、いみじと思ひて、「胴かきすゑよ」とおこなひ出でたるに、皆人々、「いと無德にある御車のぬしたちかな」とわらふ。いと恥しうて、さわやかにもいはぬに、面を見かはして立てり。辛うじて舁いすゑてやるに、北方、「あら〳〵」と惑ひ給へば、ねりつゝやる。辛うじて殿におはしたり。御車寄せたれば、北方人にかゝりて、たゞ時の間に泣き腫れており給ふを、「なぞ〳〵」と驚き給へば、かう〳〵、しかありつるよしを申す。中納言、いみじと思したる事限なし。「いみじき恥なり。我法師になりなむ」と宣へども、かつはいとほしうて、えなり給はず。世の中に、この事をいひ笑ひのゝしれば、左大臣聞き給ひて、「まことにや、しか〴〵はせし、女車

物し—不都合をなせり
女君云々—落窪の君の少し腹立ちたる樣也
君の人—衛門督の召使
しふねく—執念深く

を、心なくしたりといふなるは。その中に、かの二條のもののと聞えしは、いかに思ひてせしぞ」と宣へば、衛門督、「なさけなし、と人の云ふばかりの事もし侍らず。打杭立て侍りし所に、車立て侍りしを、男ども、所こそ多かれ、こゝにしもといひ侍りしを、やがて只いひにいひあがりて、車の轅をなむ切りてはべりける。さて人打ちけるは、それが無禮にいひ立てりしを、にくさに、冠をなむうちおとして、男ども引きふせ侍りし。おのづから少將兵衛佐も見侍りき。いと人ものしと云ふばかりの事し侍らざりき」と宣へば、「人の誹謗な負ひそ。さおもふやうあり」と宣ふ。女君は、いとほしがりて歎き給へば、衛門、「さばれ、いたくな思しそ。大臣のおはせばこそあらめ。典藥がうたれしは、かのしるしにや」といへば、女君、「いと胸きたなかりける。我が人にはあらで、君の人になりね。それこそかくものは、しふねく思ひいへ」と宣へば、「さば衛門、わが君には仕うまつらむ。衛門が思ふ限りの事をせさせ給へば、實に御前よりも、寶の君となむ思ひ奉る」といふ。あの北方は、いみじう病み苦しがる。御子ども集りて、願たて

賓の君―大切の人

などして息め奉りてけり。

故上―落窪の亡母
券―證文

落窪物語 巻之三

かゝる物思に添へて、三條いとめでたく造り立てて、「六月に渡りなむ。こゝにてかくいみじきめを見るは、こゝのあしきか、と試みむ」とて、御女ども引き具していそぎ給ふ。衞門聞きつけて、男君の臥し給へるほどに申す、「三條殿は、いとめでたく造り立てて、皆ひきゐて渡りたまふべかなり。故上のこゝ失はで住み給へ、故大宮のいとをかしうて住み給ひし所なれば、いと哀になむ覺ゆる、と返す〴〵聞え置き給へるものを、かく目にみす〳〵領じ給ふよ。いかで領じさせはてじ」といへば、男君、「券はありや」と宣へば、「いとたしかにて候ふ」。「さてはいと能くいひつべかなり。渡らむ日をたしかに案內して來」と宣へば、女君、「又いかなる事をか爲出し給はむ。衞門こそ、けしからずなりにたれ。只いひはやすやうに、いみじき御心をいふ」と恨み給へば、衞門、「何かけしからず侍らむ。道理なき事に侍らばこそあらめ」といへば、男君、「物な申しそ。こゝには

御爲云々—落窪は己に害を加ふる人を愛する故却て爲を思ふ我を攻撃すると也

こゝに—三條へ落窪を移らせん

我が心にて聞かせじ—我が口からはこの計畫を落窪に聞かせじ

一の人—第一番の人

心もおはせず。御ため惡き人は、いと哀なりとのたまへば、我が身さいなまるゝよし」とて笑ひ給ふ。衞門心得て、「いかゞは申すべき」とて立ちぬ。月たちぬれば、さりげなくて、衞門「いつか渡り給ふべき」と案内せさせければ、この月の十九日と聞きて、さなむと男君に申せば、「その日こゝに渡し奉らむ。さる心して、若き人々今少しもとめ設けよ。かの中納言の許に、よろしきものはありきや。それもとかくもいはで喚び取れ。後に妬がらせむ」と宣へば、衞門、「いとよく侍りなむ」といふ。かく宣ふをいと嬉しと思ふ心の著ければ、男君も、我が心にて聞かせじと思ひて、さゝめきありき給ふ。女君に申し給ふ、「人のいとよき所得させたるを、この十九日に渡らむ、人々の裝束し給へ。こゝも修理せさせむ。疾くわたりなむ。急ぎ給へ」とて、紅の絹、茜、染草ども出し給へれば、ひとへにかく構へ給ふことも知り給はで、いそがせ給ふ。衞門たよりをつくり出でて、かの中納言殿に、清げなりと見し人々よばす。うへの御方に、侍從君とていと清げなる、一の人におぼえたる、三の君の御方に、すけの君、大夫のおもと、下仕にまろやと

のゝしる——評判する
うけひて——承諾して
つゝましうて——恥かし

て、いと清げなる者の、よしありてと見おきしを、と構へかう構へ人を遣りつゝ、「かうかうして、只今の時の所なる、人々いたはり給ふ事かぎりなし」といはせたれば、若き者どもにて、己が君のしひ惑ひ給へるは、口惜しう思ひて、何方か往かましと思ひ急ぐ程に、かういとよげにいへば、只今の世にのゝしる殿ぞかし、など思ひてうけひきて、參らむと、急ぎつゝ里にいづ。落窪君とはゆめ知らず、又一所に參り集はむこともゆめ知らで、皆おの／＼隱しさゝめきなむしける。人々して、車つかはして、片端より迎へさせ給ふに、皆まゐる。いみじう人多かる殿にて、化粧したる事限なし。ひとつ所に參りぬ。同じ所におろしたれば、互に見つけて、いとをかしと思ひたりけるに、聞きしもしるく、清げなる若き人二十人ばかり、白張の單衣襲、二藍の裳、濃き袴著て、五六人、赤らかなる袴にて、綾の單衣襲引きかけたる、薄色の綾の裳、あやなど同じやうに裝束きつゝ、かいむれ／＼て出で來つ。人々の見るに、わびぬべし。女君は、暑氣に惱しうて見給はねば、男君、我見むとて出でおはす。いとつゝましうて、うつぶしつゝ見あひ

くてたしなみたる風情
けしうー惡しく
めでたきおぼえー寵遇

たり。いと濃き紅の御袴、白き生絹の御單衣、羅の直衣を著て出で居給へる樣、いみじうなまめかしう淸げにおはす。まづ、男君思ふ樣におはすめりと見あへり。殿ことごとにうち見給うて、「けしうはあらぬ者どもなめるよ。衞門が導なれば、足らはぬことありとも、云ふべきにあらず」とうち宣へば、「いとおぼえ强しや」と笑ひ給ふ。「足らはぬ事ありとは、御覽じ知らぬにこそは。姫君の御前に侍ひつる程に、え女どもを取繕ひて御覽ぜさせぬなり。かやうの事は語りてこそ」とて、出でくる人を見れば、安濃なり。「こはいかに、この殿には、かくめでたき覺えにて侍ひ給ひけるぞ」と驚きぬ。衞門、今しも見つくるやうにて、「怪しう、見奉りし心地するかな」といふに、「こゝにも同じ心に見奉るに、うれしうも」といふ。「年ごろは、對面なくてなりもてゆくも、哀に思ひ給へつるを」とて、昔物語などするほどに、又いと白う、美しげなる君の、三つばかりなるを肩にうちかけて、「衞門君參りたまへ」とて、出で來るを見れば、少納言なり。「怪しう昔心地して、哀なる御聲どもかな」とて、いひるたる事どもは書かじ。うるさし。互

政所—公家の家政を處理する所

知る—領有す

職事—事務者

に嬉しきよしなぞ云ひける。昔見し人々、用意ことなれば、たよりありて、よしと思ひあへり。かくて明日わたるべしとて、中納言殿には、御方々の物運び、簾かけしつらふ。人々の物さへはこぶと聞き給ひて、衞門督殿の家司なる、但馬守、下野守、政所別當なる衞門佐、雜色などのきら／＼しきを召して、「しか／＼ある所の、三條なる家領ずるを、渡らむと思ふほどに、源中納言、いかにする事にかあらむ、其處を領じて造ると聞きつるを、さりとも消息して、あるやう云ひてむ、と待ちて物もいはざりつるを、明日わたるとなむ聞く。まかりて、いかなる事ぞ、こゝに知るべき所を、音もせで渡るはいかなることぞ。暫な渡りそといへ、そこに物運びたらむも、な取らせそ。こゝにも翌日渡らむと思ふ。男ども、雜色所定て、只居に居よ」と宣へば、皆承りて急ぎていきぬ。實に見れば、造りざまいとあらまほしう、砂子敷かせ、簾かけさせなどす。いと猛にひきつれて來ぬ。人々驚きて、「いづこの人ぞ」と問へば、「衞門督殿の家司、職事どもなり。この殿は、殿のしろしめすべき所なるを、いかにして御消息をだにせで、わたりたまふべか

おこなひ—指揮し

出立—移轉の用意

御けしきたまはるべき—御意得べき

なるぞ。暫な渡しそと仰せらるれば」とて、入り立ちて、「こゝは雜色所ぞ」など定めて、「こゝもとはとかくせよ」など、おこなひて直さす。人々惘れ惑ひて、殿に走りて、「かうかうの事はべる。家司、職事ひきゐてまうで來て、さらに下種ども出入せさせ侍らず。殿も明日なむわたり給ふべきとて、雜色所、政所など定めて、所々しなほさせ侍るなり」など申すに、中納言殿、老心地にまどひ給ひぬ。「いといみじきことかな。かの家は、我が手に劵こそなけれども、我が子の家なり。我ならでは誰領ぜむ。その子世にありと聞き侍らばこそ、それがするならむとも思はめ。いかなる事にかあらむ。うちあひ諍ふべき事にもあらず。父大臣に申さむ」とて、出立もし給はず。しぬこゝちに、裝束もしあへず、急ぎ惑ひて、左大殿にまうで給うて、「殿に御けしき給はるべき事ありてなむ參りたる」と聞え給へば、大臣對面し給うて、「何事にか」と申し給へば、「年ごろ我が領じ侍る所、三條に侍るを、この月比つくろはせ侍りて、明日まかりわたらむとて、侍ども物はこばせ侍るほどに、衛門督殿の家司とまうす者まうで來て、殿のしろしめすべき所

こゝには—われよりは

こゝら—許多

ひとへに—一心に

しか—左樣

なり、いかで御消息もせでは渡るべき、殿も明日なむ渡せら給ふべきとて、まうで來居て、下人ども通はし侍らず、妨ぐる事の侍れば、驚きてなむ。この家は更に、外に人知るべからずとなむ思ひ侍る。いかなる事にか侍らむ。劵や候ふらむ」と、いたう歎きたるさまにて申し給へば、大臣、「更に知らぬ事なれば、ともかくも聞え申すべからず。のたまふやうにては、衞門督の無道なるやうなれど、さりともあるやう侍らむ。今かの衞門督にいひて、あるやう聞きてなむ、委しくは聞ゆべき。はじめより知らぬ事なれば、こゝにはいかゞ聞えむ」と、いとも更に心に入れぬ氣色にて答へ給へば、中納言、また聞ゆべき方なくて、いといたう歎きながら立ち給ひぬ。「殿に申しつれば、しかしかなむ宣ふ。いかなるべき事にか。こゝらの年比ひとへに造りて、人笑はれにやならむとすらむ」と歎き給ふとは世の常なり。衞門督、内裏より殿にまかで給へれば、「中納言のいまして、しかしかの事のたまへるは、まことか。いかなる事ぞ」と申し給へば、「しか、まことにはべり。こゝに年比わたり侍らむとて、さるべき所修理せさせ侍らむとて、人遣した

かしこに侍る人—二條殿にある人落窪の君
をこがまし—痴愚なり
御前—前驅
いだし車—供人の乘る車、
またつとめて—其翌朝

りしに、俄に、かの中納言渡らむとなむしはべる、と聞えつれば、怪しさに、まことかと聞かせに、男ども遣はして、案内せさせ侍るなり」と聞え給へば、「かの中納言は、我より外に領ずべき人なき家を、かくする事は、いと非道なる事、とこそ宣ふなりしか。そこにはいつより領じ給ふぞ。券やある。誰が取らせしぞ」と宣へば、「かしこに侍る人の家にはべり。母方の祖父なりける宮の家なりける、傳はりて侍るを、かの中納言は老けて、妻にのみ隨ひて、情なく、ものしき心のみ侍りしかば、にくさに、この家も取らせじとなむ。券いとたしかに侍り。券知らでつくりて、我より外に知るべき人あらじと侍るこそ、をこがましけれ」とのたまへば、「更にいふべきことにもあらざなり。早くその券見せ給へ。いとなげかしと思ひ給へり」と聞え給へば、「今見せ侍らむ」とて、二條におはして、あすの御前の人々召す。又いだし車は、人々にあてさせ給ふ。中納言一夜歎きあかして、またつとめて、太郎越前守を殿にまゐらす。「みづから參らむとするを、罷り歸りしまゝに、みだり心地あしくてなむ。御氣色たまはりし事は、いかゞ侍らむ」と

おだしう—安心に
かけても—努め

申し給へば、「衞門督に卽ちいひしかば、しか〳〵なむ云ふめりしを、まだ委しくは、おの督に逢ひて問へ。こゝには知らぬ事なれば定めがたくなむ。さやうに劵なくて領じ給ふが、をこなるやうになむ」と云ひ出し給へれば、衞門督殿に參りたれば、御直衣ばかり著給ひて、簾のもとに居給へれば、越前守はかしこまりてゐたり。女君も、御前なれば見出し給うて、あはれとおぼす。衞門、少納言、「いかなりしをり、おそろしと思ひて、御心あやまたじと思ひけむ」と笑ふ。越前守、「殿に參りて、御けしき賜はりつれば、しかじかなむ仰せられつる。劵は實にや候ふらむ、それを委しく承はり定めむ。又年比殿しろしめすと、かけても承はらましかば、かくまで誰も〳〵、仰せられ聞えさせましや。この家つくり侍る事、二年ばかりなり。その程までは音なく侍りて、かく妨げさせ給へるは、いと安からずなむ、歎き申し候ふ」と申せば、「年比は、劵のこゝにあれば、家といふものは、劵もたる人より外にしる人なき、と聞きしかば、おだしう思ひて、我が家とも名のらでありつるは。斯うし給ふ時こそ、かゝる事ありけりともいはめ。さてもさ

しめやかに
―徐に
まろと云々
―妨するは
我なりと

ても券持給へるか」と、いとなまめかしう答へて、いと白う美しげなる子の三つばかりなるを、膝に居ゑてうつくしがりゐ給へれば、大事と思ひて申すに、いと腹だたしく侘しけれど、思ひ靜めて、「この家の券うしなひ侍りて、尋ね申し侍れど、いまだ聞き出で侍らず、もしそれを人の賣りて侍るにやあらむ。只その疑のみ侍る。さてこの家、領ずべき人なむ侍らぬ」と申せば、「券を盗みて賣りたるを買ひたるにもあらず。道理にまかせて、おのれより外に領ずべき人なむなき、と覺ゆれば、さるやうこそあらめ、と思ひ止み給ひねかし。中納言には、今しめやかに券も自ら見せ奉らむ、と申し給へ」とて、御子かき抱きて入り給ひぬれば、越前守いふがひなくて、いたく歎きて立ちぬ。女君つくづくと聞き給ひて、「このわたらむとし給ふ所は、三條にこそありけれ。又まろと聞えしものを、年比造りて、渡らむとし給ふらむに、妨げたらむは、いかに思すらむ。親の歎き給ふらむは、罪いとおそろしく、仕うまつる人だにこそあれ、かくし給ふ事を妨げ給へば、歎かせ奉るが心憂き事。衞門がする事ぞ」と、いとほしと思したる氣色にて宣へば、

うつくしがり—愛し

「天の下の親にて、おのが家おし取らるゝ人やある。歎き給ふらむ罪は、後にもよく仕うまつり直し給へ。渡らじと思すとも、まろ、子達具してわたりなむ。かくいひ立ちてとどまりたらむは、いと嗚呼ならむ。かの家奉らむと思さば、しられ奉りて後に、奉り給へ」とのたまへば、いふがひなくて、又も聞え給はず。越前守はかへり來て、殿に申す、「更に今は、不用に取られ奉りぬるを、恥にてやみぬばかりなり。大事と思ひて申すに、事にもあらず思し召して、いと美しげなる子を膝にすゑてうつくしがりて、申すこと耳にも聞き入れ給はず。さてはかういひて入り給ひぬる。左大臣殿は、我は知らず。衛門督が劵もたる方こそ、強くはすなれ、と宣ふ。更にかひなし。などかは劵をば尋ね取り給はずなりにし。今宵渡り給はむとて出車の事、御供の人々の事など、整へ騷ぐめりつるをこ」などいへば、更に物も思えず、いみじと思ひ給へり。「落窪君の母の死ぬとて、かの子に取らせ置きしを、我も忘れて乞ひ取らざりし程に、かく亡せにたるぞ。何か、それが賣りたるを買うて、かくしたるぞ。いみじう人笑はれなる事かな。朝廷に奏すとも、

あひ給はず―あひたらずの誤かといふ

ほれて―茫然として

猛き事―詮とすること

いとほし―氣の毒なり

此殿の御世なれば、誰かは定めむとする。多くの物をつくして造りけるが、いみじき事、時にあひ給はず、物あしき人、いみじきものなりけり」と空をあふぎて、ほれて居給へり。衛門督殿には、渡り給はむとて、女房に裝束一具づつして賜へば、程なく今めかしう嬉しと思ひけり。中納言殿には、ものをだに運びかへしに、人やり給へど、「更に入れだに入れず」などいへば、北方、手をうちねたがる。「いかばかりの仇敵にて、衛門督あれば、我が身も、惑はすらむ」と惑ふ。越前守、「今はかひなし。物だに運び返さむ」と申せば、「早うそれは取られよ」と、鼻たからかに宣へど、人々更に入らねば、諍ふべき事にしあらねば、猛き事とは、集りて咀ふ。戌の時ばかりに渡り給ふ。車十輛して儀式めでたし。下りて見給へば、實に寢殿はみなしつらひたり。屏風几帳立て、みな疊しきたり。見給ふに、實にいかに思ふらむ、といとほしけれど、北方、妬しと思ひたればなりけり。女君は、大臣の思すらむ事を推しはかり給ふに、物の興もなく、いとほしき事を思ほす。男君は、「運びたらむもの失ふな。慥に返さむ」と宣ふ。かくめでたくのゝしるを、中納

渡りぬや―
左衛門の督が見せ給ふに
―人をやりて
わび―愁訴し
男君―左衛門督

言殿には、渡りぬやと見せ給ふに、「かう〳〵めでたくして、渡り給ひぬ」と語り申せば、今は力なしと、集りて歎くをも知らで、遊びのゝしる。衛門かくし給ふを、思ふ樣にめでたし、と男君を思ふ。翌朝、越前守「運び侍りし物ども、運び返し侍らむ」とて參りたれば、「一二日、こゝの物は、外へは持ていくまじ。今今日明日過して、取りに物せよ。いとたしかにありや」と宣ひて、ことに聞き入れねば、思ひ惑ふ事かぎりなし。三日が程遊びのゝしりて、いといまめかしうをかし。四日の翌朝、越前守まゐりて、「今日だに賜はらむ、人々の櫛の筥など樣の物籠めて、いとあしくなむ」とわび申せば、いとをかしがりて、みな目錄して返し給ふ。男君、「かの昔の古齋の鏡の筥は、ありや。これに添へて返し給へかし。北方、寶と思ひためりき」と宣へば、衛門興じ喜びて、「衛門が許に侍り」とて、取り出でたれば、見ざりし人々見て、「あないみじや」とて笑ふ。いとたゞならむよりはとて、「しるしばかりに、もの書きつけ給へ」と申し給へば、女君、「いでいさや、いとほしき序に、知られ奉らむこそ苦しき」と宣へば、「なほ〳〵」と申し給へば、

鏡のしきを押返して書き給ふ。

明暮はうきこと見えしますかがみさすがに影ぞ戀しかりける

と書き給へり。色紙一重に包みて、物の枝につけて、「越前守喚びて取らせよ」とて、衛門に取らせて、越前守よびて、「いかに怪しう思すらむ、と思へど、御消息もせで渡り給ふ、と聞きしかば、あやしうてなむ。このいとほしかりしかしこまりも、みづから聞え侍らむ。此券もたしかに御覽ぜさせ、聞ゆべき事も侍り。今日明日の程に、かならずたち寄らせ給へ、と大殿に聞えさせ給へ。そこたちも只今便なきやうに思ふらむ。遂にここにぞいひ語らはむ」とのたまふ。みけしきいとよし。越前守、あやしと思ふ。「大殿かならず立ちよらせ給へ。やがて御供に、そこにものし給へ」と宣へば、うけたまはりて歩み出づるに、衛門、妻戸のもとにて、「こゝに立ち寄り給へ」といはすれば、いとおぼえなく、怪しと思ひながら寄りたるに、袖口いと淸げに出して、「これ北方に奉らせ給へ。昔いとやんごとなきものに思したりしものなれば、今まで失はせ給はざりけるは。

かしこまり—謝辭

やがて御供に云々—大殿の供して足下も來れ

妻戸—開戸

安濃なりけり—越前守の心

ふるき都なば—古今集「いその上ふるき都の時鳥聲ばかりこそ昔なりけれ」

目ならぶ—目に見え竝ぶ、古今集

この御物どもの返り參るにつけて、思し出させ給ひてなむ」といへば、いとあやしと思ひて、「誰が御消息とかものし侍らむ」「只おのづから思ひ出で聞え給ひてむ。わたくしにも、聲ばかりは聞き知り給はずや」といふ。安濃なりけり。この殿にこそありけれ、と思ひて、「ふるき都をば、忘れ給ひけるなめれば、何かは知りけにも聞え侍らむ。まめやかには、此殿に參りて侍らむ時には、知る人に尋ね聞えむ」と云ふに、「さてもまだもさむらふは」とて、さし出でたり。少納言なり。怪しうも集りたるかな、と思ふに、又奥の方に、「目ならぶといふなれば、まろは驚かし聞えじ」といふ聲を聞けば、中の君のおもとなりし侍從君なり。越前守の思ひて、とき〳〵すみける。かくのみかしこの人の聲にていひかくれば、心地もあわてて、いかなる事ならむ、と怪しうてえ答へやらず。衛門「三郎君と聞えしは、今は何にてかおはすらむ。御冠やし給へる」「しか〳〵。此春なむ大夫といふめる」と答ふれば、「必ずまゐり給へ。對面に聞ゆべき事なむ積りて、と聞え給へ」といへば、「いとやすき事」とて、この包みたる物ゆかしうて、急ぎていぬ。道々

「花がたみめならぶ人のあまたあれば忘られぬらむ數ならぬ身は」
國にのみありて―越前守任地にのみ在りたる故に
はだかりぬ―呆れて目口を大きく開きしこと

かの殿のさま思ふに、いと怪しく、落窪君の、此御妻にてあるにやあらむ。安濃といひしが氣色、いとよげなり。又あつらへたるやうに、かしこの人の集りたるは、思ふに、よそ人のあらむよりはさりとも、といと嬉しきは、北方のちやうぜしさまも、國にのみありて知らぬなりけり。中納言殿に來て、大殿に、「かう〳〵なむ宣ひつる」とて、此包める物を、北方に奉れば、怪う覺え、何ぞとてひきあけて見るに、おのが筥なり。落窪君に取らせしにこそあめれ、と見るに、いかなる事ならむ、と思ふに、肝こゝろさわぐに、まして底に書けるものを見るに、むげに落窪君の手なれば、目も口もはだかりぬ。年比いみじき恥をのみ見せつるは、此奴のするなりけり、と思ふに、ねたういみじきこと二つなしとは世のつねなり。一殿の内、ゆすりみちてのゝしる。大殿、家取られて、いみじき仇敵と思ひし心地も、子のしたるなりけり、とおもふに、罪もなく、先々の恥もおもひ消えて、「子どもの中に幸ありけるものを、何しにおろかに思ひけむ。かの家はこの人の母の家にて理なりけり」と云ひゐます。かゝれば、北方妬くいみじくて、氣

はか〴〵しき—立派なる
それは云々—面白の駒の事はいふに足らず
この君—落窪君の

色我にもあらで、「かの所をこそさも領ぜめ。この年比つくりつる草木をもの入れて、それ運び取り給へ。家買ひたまふ價にこそわたし給はめ」といへば、越前守、「こはなでふ事さむらはむ。よそ人のやうにものし給ふかな。おのづからこの族に、はか〴〵しき人なくて、見つくる人ごとに、おもしろの駒は、いかに〳〵と笑はるゝがはしたなきに、同じ殿ばらといへど、只今のおぼえの類なき人にいふに得て、ねむごろになりぬるこそ、たのもしく嬉しけれ」といへば、三郎の大夫、「いでや、それはものゝ數にもあらず。此君のちやうじられし樣は、いといみじかりし」。越前守「いかに〳〵ちやうじ給ひし」と問へば、「いかばかりかうたてありし事」とて、片端よりつぶ〳〵と語りて、「いかに安濃などいひつらむ。見え奉らむにつけてこそ、恥しけれ」といへば、越前守、爪彈をして、「あないみじ。おのれは、國にのみ侍りて知らざりけり。淺ましきわざをこそし給ひけれ。この衛門督は、思ひおき給ひて、かく恥を見するやうにはし給ふなりけり。我等をいかに思ひ給ふらむ。すべて交らひもせずやあらまし」と恥ぢ惑へば、北方、「あなかしがま

我が夫取りたる―三の君の夫藏人少將は今左大臣の婿なり
すげなく―無情

じ。今は取り返すべき事にもあらず。な云ひそ。たゞ憎く覺えしまゝにせしぞかし」といふに、かひなし。「少納言、侍從なども、彼所にこそありけれ」といふを、御達聞きて、「我等、などて今まで參らで、しひたる世を見つらむ」とて、羨しういみじうて、「今だに參らむ。御心ははためでたかりしかば、寄せ給ひてむ」と若きものどもいふ。兄弟の君達、あさましと思ふ。中にも三の君は、我が夫取りたる人の類なれば、近うて聞え通はむを妬しとおもふ。四の君は、我を謀りてかう憂身になしたる人なれば、他人よりも、見むにつけていみじく心うかるべきを思ふ。かのいつしか孕みし子は、三つにてもたり。父にも似ず、いとをかしげなる姫君なりけり。我が身心うし。尼になりなむ、と思ひけれど、この乳兒の、いとかなしう覺えければ、絆にて、え思ひ離れでゐるなりけり。少輔は、いと憎き者に思ひしみて、すげなくのみもてなしければ、來煩ひてなむありける。中納言、つらき事は思ひやみて、我が身のおぼえなくしひ、人にも侮られつるを歎くに、おもだたしき事ありと、いと嬉しくて、まうでむと出で立ち給ふに、「今日は日暮れぬ。明

わが子ども
より云々ー
落窪の方が
いかに立ち
勝りたらむ
と妬まし

日」と宣ふに、北方、わが子どもよりも、有樣、いかに珍らかに見えむ、と胸いたし。三四の君、「かゝれば、淸水にて、懲りぬやといはせたりしにこそありけれ。かく遂には聞え給ふべかりけるものを、多くの恥を見せ給ひしかな。かいつらね人々出でにしは、さばこの君のよせ給ふなりけり。年ごろ便なげにてすゑ奉りしを、妬しと思ひしみたまへるなりけり」。北方、「そがいと胸いたう、かくさま〳〵に妬き答をせられぬる事を、いかでしてしがな」といへば、女ども、「さばれ、今はなおぼしそ。御婿ども多かり。直き御心つかひ給へ。典藥助をいみじく打せたりしは、思ひおきたるにこそありけれ、男君知りてぞし給ひけむ」と口々にいひあかしつ。翌朝、衛門督殿よりとて御文あり。中納言とりいれさせて見給へば、

昨日、越前守して聞えし御消息は、申されけむや。御いとまあらば、今日必ず立ちよらせ給へ。聞えさすべき事あり。

と聞え給へり。御かへりには、

越前守も—同行せよとありければ
母屋—寢殿
かしこまり—謝罪
歎かるゝ人—落窪
ものし—厭はし

昨日はしかものし侍りしかば、即ち參らむとせしを、日暮れてなむ、只今參らむ。

と聞え給へり。越前守もとありければ、御車の後にて來たり。「中納言參り給へり」と聞ゆれば、督殿、「これへ」と聞え給へれば入り給へり。南の母屋の廂にて對面し給へり。女君は、几帳の内にゐ給へり。「御前の人、北面へ」と宣へば、みないぬ。さし對ひて對面し給ひて、「この家のかしこまりも聞ゆべく侍るを、こゝに又人知れず歎かるゝ人も侍るめるを、かゝる序に聞えさせよとなむ。この領じ造らせ給ひけむ、偏に理なれども、券の狀を見侍れば、こゝにこそは、御前よりも、知りまさるべく侍れ、と思ひ給へしに、道の遠からぬほどに、御消息もなくてわたらせ給ふは、人數にも思されぬなめり、と見給へしに、などかさしも思ほしおとすべき、と心付てなむ、かく俄に渡り侍りつる。年比つくろひ御心入りたりけるに、かく妨げたるやうにて渡したる、いとものし。なほここは奉りてよかし、と歎き侍るめるに、同じくは、たしかに領ぜさせ給へ。券奉らむとてなむ、御消息聞え侍りつる」とのたまへば、中納言、「いとも畏き仰なり。年ごろ怪し

忠頼―中納言の名
便なし―頼むかひなし
おもてぶせ―不面目
こゝ―落涙
すなはち―最初

く亡せ侍りにし後に、世に人にも聞えはべらざりつれば、世になきなめり。忠頼、年若う侍らばこそ、行き廻りおひ見むとも思ひ侍らめ。老い衰へて、今日明日とも知らぬを、うち捨てて影形もなく聞えぬは、猶世にうせにけるなめり、と悲しう歎き侍りつるに、此家は、かれ侍らばこそ領じ侍らめ、今はいかゞせむ、こゝにしるべきにこそ侍れとて、いたう哀にて、前につくろひ侍りつる。督殿に侍ふらむ、とうけたまはらざりつ。いとめでたう、思ふやうにとは疎なるやうにこそ候ひけれ。今までかくなむとも知られ侍らざりけるは、忠頼を便なしと思ひ置きたるにや侍らむ。又おもてぶせなり。これが事知れじと思ひて侍るにやあらむ。二つの疑恥しく。劵何か賜らむ。又も参らせまほしくなむ。今まで死に侍らぬ事を、怪しと思ひ侍りつるは、この人の顔を見むとてなりけり。今なむあはれには侍る」とて、うちしほたれ給へば、督君、さすがにあはれにて、「こゝにはすなはちより、御夜中曉の事も知らでや、と歎き侍りしかど、道頼が思ふ心侍りて、暫と制し侍りしなり。その故は、西の方に住み侍りしより、時々忍びてまかり通ひ見侍

なめげ—無禮

およすげ—成長し

りしに、御氣色も、こと御子どもよりも、こよなく思しおとされたりき。又北方の御心ばへ憂くあさましく、使ひ給へる人よりも劣りに、さいなみしを見聞き侍りしかば、世にありと聞えまつるとも、善しと思さじ、少し人なみ〳〵になりて、仕うまつりぬべからむ程に、知られ奉れ」、と聞え侍りし。部屋に籠めて、典藥助に許させ給へりけるが、いと心憂く思う給へしかば、世になきさまに御覽ぜらるとも、何とも思さじ、と思う給へて、道頼が、つらしうしと思ひ置きつる事の、忘れ侍らねば、殿をば便なしとも思ひ聞えざりしかども、北方の情なくおぼえ侍りしかば、祭など見侍りしに、殿の御車といひ侍りしを、なめげなるさまに、男ども、かつはいかにと見知るさまにて、いとよくも御覽ぜさせずや、と覺え侍りしも、便なく思う給ふれど、明暮他御子どものやうに、見給ふ事の難げなりしを、まづ夜晝見奉らぬ事を申すめれば、人の親子の中は哀なりけりと見給ふれば、いかで仕うまつらむとなむ、思ひ給へなりにたるを、幼き人々も、およすげ增るめるを、見せ奉らでやなど思う給へてなむ」と片端よりつぶ〳〵と聞え給へば、

いとゆゝし
きーけしか
らぬ

ねびー年長
し

中納言いと恥しうて、この事どもを聞き給うて、思し置きたりける事と、限なくいとほしうて、え答はか〴〵しからず。「他子どもより、思ひおとす事も侍らざりしかど、母具したる者は、まづこれにと云ふまゝにまけられて、實にいとほしき事も侍りけむ、さればいと理なり。述べ聞えさすべき事も侍らず。典藥はいとゆゝしき事。さるものには、いかなるものか許し侍らむ。部屋に籠め侍りし事も、思ふやうならぬ事をしたり、と聞き侍りしかば、妬く口惜しくてなむ。何事よりも、若君達をまづ見奉らむ。いづら、今だに」と宣へば、男君、前に立てたる几帳おし遣りて、「こゝに候ふめり。出でて對面し給へ」と申し給へば、恥しけれどゐざり出で給へり。父大殿見給へば、いみじく淸げに、物々しくねびまさりて、白くきよげなる綾の單衣襲、二藍の織物の袿きて居給へり。見るに、これよりはよし、と思ひかしづきし女どもに優りたれば、かゝりけるものを、打ち籠めて置きたりしを、實にいかに思ひけむ、とはづかしうて、「つらきものに思ひおきて、今まで知られ給はざりける、對面しぬるは、限なくなむ心のびて、嬉しく」と宣

さ思ひ聞えぬ―つらきものと思ひ申さぬ
なかなかに―却つて
かたはらいたがり―氣の毒がり

へば、女君、「こゝには更にさ思ひ聞えぬを、この君の、さいなみし折おはしあひて聞き給うて、猶便なきものに思し置きたるなめりかし。暫な知られ給ひそ、とのみ侍るめるに、つゝみてなむ、心には更に知り侍らぬなめげさも、御覽ぜられつる事をなむ、いかゞと限なく思ひ給ひつる」と宣へば、「其折に、いみじき恥なり、何事に思しつめて、かくはし給ふならむ、と思ひしを、今日聞けば、君を疎に思ひ聞えたりしとて、勘當し給ふなりけり、と承り合すれば、なかなかにいとうれしくなむ」とて、うち笑ひ給へば、女君いとあはれと思して、「さてしもこそ畏けれ」と申し給ふほどに、督君いと美しげなる男君を抱きて、「くは御覽ぜよ。心なむいとうつくしく侍る。天が下に、北方も、え憎み給はじとなむ思う給へる」と宣へば、「そもけしからぬ事を」とかたはらいたがり給ふ。中納言は見るに、老心地にいと悲しうらうたう、只おぼえに覺えて、笑みまけて、「こちこち」と宣へば、さる翁におぢで、首にかゝりて抱かるれば、「實にや天が下の鬼心の人も、えにくみ奉らじ」とて、「いとゞ大きにおはするは、いくつぞ」「三つになむなり侍

御臺―膳部

ものせよ―饗應せよ

色なる人―色好み

知る人げなく云々―なじみ甲斐な

る」となむ、父君申し給へば、「まだやものし給ふ」「この弟は、殿になむ召されにし。また女子侍れど、今日はつゝしむ事はべり。後に御覧ぜさせむ」など申し給うて、御臺まゐり、御供の人々にも、わざとのまうけにはあらで、牛飼までにいと清げに饗し給ふ。男君、「衞門、少納言その越前守よび入れて、ものせよ」と宣へば、衞門、臺盤所の方に喚び入るゝにつけても、いと恥しけれども、我がしたる事かは、と思ひて入りぬ。三間ばかりあるに、疊清げに敷きて、整へたるやうに、劣らず見ゆる御達、二十人ばかり居竝みたり。御前にありけるが、「立て」と宣ひければ、來集ひたるがゐたるなりけり。越前守色なる人にて、いと興あり。嬉しと思ひて、目をくばりて見渡す。物もいはれず、知りたる人だに五六人ありけり。これもしかにこそありけれと見ゆ。衞門、殿の醉はし奉れと宣ふに、「青うて出で給はば便なし。若人達盃參り給へ」とて、かはる〳〵強ふるに醉ひ惑ひぬ。衞門たすけ給へ。知る人げなくてちやうじ給ふ」などいふ。逃げむとするに、いと若う清げなる人の、をかしういひて、圍みて逃ぐべくもあらず。わびてう

く困らす

腰ざし—巻きたる絹を賜はりて腰にさす故の名

ちご—幼兒

つぶしに倒れふしたり。中納言も督君も、御盃たび〳〵になりて、醉ひ給ひて、萬の物語をなむし給ふ。「今は身に堪へむ事は仕うまつらむ、となむ思ひ給ふるを、おほさむ事は、なほ宣はむなむ、嬉しかるべき」と申し給へば、中納言、いと嬉しと思ひたる事限なし。暮れぬれば、かへり給ふまゝに、大殿には衣箱一具に、片つ方には、直衣裝束、今片つ方には日の裝束一領入れて、世に名高き帶なむ添へたりける。越前守には、女の裝束一具に、綾の單衣襲そへてかづけ給ふ。中納言、醉ひて出で給ふとて、「世に今まで侍りつるが心うかりつるに、嬉しき契に」など宣ふ。御供の人多くもあらねば、五位に一かさね、六位に袴一具、雜色に腰ざしせさせ給ふ。よろしからぬ御中と見つるをいかならむと怪しく思ふ。歸り給うて、北方に、衞門督の宣へる事ども、かたはしより「典藥助には、まことにやあはせむとし給ひし。恥しげに宣へるに、面赫らむ心地してなむありつる。ちごの美しげなりつる事限りなし。人々の有樣、いみじき幸ありけるかな」と宣ふに、いと妬しとはおろかなるに、「いで、あな聞きにく。そのかみ、ものとやは

放ち—棄て
かゝぐり—掻き探りの約
まろや—女房の名
花を織りて云々—美装して
身のなり—懐妊し

思ひ給へりし、部屋に籠めよとは、己こそ行ひ給ひしか。我は知らじ、ともかくもせよ、と放ち給ひしかばこそ、典薬も何も、かゝぐりよりたりけめ。いま人のものめかし給ふに、我がせし事を、人のせむ様に宣ふは何ぞ。あまりはなやかなる事は長からず」といふ。越前守いみじう醉ひて、よりふしながら、いみじうめでたかりつる事を語りつゝ臥せり。「三十人の女房たちの中にこもりて、多くこそ強ひにたれ。三の君の御方のそれ、四の君の何の君、かのおもと、まろやさへなむ候ひつる。花を織りてさうぞきて、いとよしとなむ思ふ」といふを、三四の君は、一ところに臥して、聞きて、「世の中は哀なるものにこそありけれ。かの君の、落窪に住みて部屋に籠り給ひし時は、まろらに慢りて、人つかひ取られむとやは思ひし。父母の思さむ事、恥かしくもあるかな。なぞや、尼にやなりなまし」と三の君泣けば、四の君もうち泣きて、「そが恥かしき事。かく宿世も知り給はで、上のけんかくに思しかしづきしを、いかに人思ひ合せむ。まろ等、このごろ憂き事出で来にし折ぞ、尼になり侍りなむ、と思ひて侍りしを、いつしか身のなり侍

これ—此の子の

これなどか云々—券を何故置き忘れ給ひしか

りにしかば、えならで、これ出で來にし後より、はた、人の心なりけること、これ物のこゝろ知るまで見む、と思しなりて、今まで侍りつる事」と二人語らひうち泣きて、四の君、

人の上と昔は見しをあり經れば今はわが身のうき世なりけり

三の君、「げに」とて、

うきことの淵瀬にかはる世の中はあすかの川の心地こそすれ

といひ明し給へり。翌朝、贈物見給うて、「色より始めて翁の身には餘りたる。この帶は、いと名高き帶を、何しに賜はらむ。返し奉らむ」と宣ふ程に、「衞門督殿より御文」といへば、いそぎ取り入るゝ人おほかり。

昨日は、暮れゆく、惜しくも侍りしかな。急がせ給ひしかば、年ごろの御物語も、聞えさせずなりにし。今よりだに、時々たち寄らせ給はずば、心憂くなむ。これなどか忘れさせ給ひにし。猶はや渡らせ給ひね。さらずば、なほ便なきさまにおぼし

つゝましき事多くて―下に育てられざりし程にを省く

たらむと、かぎりなく思ひ給へ、なげくべくなむ。

とあり。四の君のもとに御文あり。

年比いと覺束なく思う給へつゝ、かくなむと聞えまほしながら、つゝましき事多くて。忘れやし給ふらむ。

忘れにしときはの山の岩つつじいはねど我にこひはまさらじ

と思ふにこそ。うへにも御方々にも今は對面に、と思ひ給ふれば嬉しくなむ、と聞え給へ。

とあり。同胞四人並居たる程に、取りかはしつゝ見給ひて、姉君達、「我が許にもものし給へかし」と、今は語らはまほしきぞいみじきや。落窪に居たりし程は、いかにと問ふ人もなかりしものを。大殿の御返、

やがて昨日はさむらはむと思ひしかど、方の塞がりて侍りしかばなむ。今よりはいと嬉しく、明暮も候ひぬべしと思う給へしも、命延びてなむ。さて賜はせたる券

杉のしるし
—古今集
「わが宿は
三輪の山本
戀しくばと
ぶらひ來ま
せ杉たてる
門」

只今の時の
所—當時の
權門

は、賜はるまじきよしは聞えはべりしを、尙かうせさせ給ふ、御勘當の深きなめり、と畏り思ひ給ふる。御帶も、かゝる翁の身には、闇の夜に侍るべければ、返し參らせむと思ひ給ふれど、御志の程過してとなむ候ひつる。

とあり。四の君の御返し、

年ごろは、杉のしるしもなきやうにて、尋ね聞えさすべき方なくなむ思う給へるに、いとも〳〵嬉しくてなむ。人もよしとは、心憂くも推しはからせ給ひけるかな。

うちすててわかれし人をそことだに知らで惑ひし戀はまされり

と聞え給へり。かくて後は、心しらひ仕うまつり給ふ事かぎりなし。大殿は、たとしへなきまで尋ねおはす。越前守大夫など、只今の時の所なれば、恥をすてて參りつかうまつる。女君は嬉しきものにおぼして、いかでとし給ふ中に、大夫をば御子のごとおぼしたり。「いかで今は、北方君達にも對面せむ。こなたにも渡り給へ。母君にはちひさくておくれ奉りし後、見なれ奉りし儘に、親となむ思ひ聞ゆる。いかで仕うまつらむと思ふ

若菜まゐる—賀に若菜の羹を調進せし事定例なり

八講—法華經八卷を朝夕二座づつ

に、この年ごろ思しや疎みたらむ、君達へも同じ心に聞え給へ」と宣ふを、越前守、「さなむ宣ふ。我をおぼしたる事ぞ限なき」と語れば、北方、いとゞ德つきにしかば、さも思ふらむ。我にもいみじくおぢたり。打ぜしを思ひおかば、此子どもをぞ便なく思はざらまし。男君のおぼし置きたるにこそありけれ。まこと彼の物縫ひし夜、ひかへたりけるは、この君なりけり、と思ひよわる事ありて、やう〳〵文通はしていひつく。かゝる程に、衛門督、女君と語らひ給ふ、「あはれ、中納言こそいたく老いにけれ。世の人は、老いたる親のためにする孝こそ、いと孝あれとおもふ。今年は七十なりや。六十なる歳、賀といひて、遊樂をして見せ給ひ、又若菜まゐるとて、年のはじめにする事、さては八講といひて、經佛かき、供養することこそはあめれ。さま〴〵珍しきやうにせむとては、いかなる事をかせむ。生きながら四十九日する人はあれど、子のするにては便なかるべし。これらが中に宣へ。せむと思さむ事、せさせ奉らむ」と申し給へば、女君、いと嬉しとおぼして、「樂は實におもしろく、をかしき事にこそあれど、後の世まで御身に

四日に讀誦する法會
坊―東宮
ゆかり――縁者
あわたゞし―多忙なり

益なし。四十九日は實に忌々しかるべし。八講なむこの世もいと尊く、後の爲にもめでたくあるべければ、して聞かせ奉らまほしき」と宣へば、男君「いとよく思したり。こゝにもさなむ思ひつる。さらば年の内にし給へよ。いとたのもしげなくなむ見え給ふ」とて、明くる日よりいそぎ給ふ。八月の程にせむとて、經書かせ、佛師よばせて、佛淸らなるべく、と男君女君、心に入れたまへり。國々に、絹、糸、白銀、黄金など召す。御心にこゝろもとなしとおぼすことなし。かゝる程に、俄に帝、御心地なやみ重くており給ひて、東宮位に卽かせ給ひぬ。この男君の御妹の女御の御腹の、一の宮になむおはしける。その御弟の二の宮、坊にゐさせ給ひぬ。御母の女御、后にたち給ひぬ。衞門督、大納言になり給ひぬ。中納言には三の君の御男、宰相には大納言の御弟の中將なり給ひぬ。すべてこの御ゆかりのよろこびし給へる、いとめでたく、この御代にのみなりはてぬ。大納言の御おぼえ、いみじかるまゝに、舅の中納言、いと面だたしく嬉しとおもへり。七月の内には、公のこといとあわたゞしく、暇なきうちにも、この御八講の事

たゆみ給はず。八月廿一日にとなむ定め給ひける。我が御殿にてしたまはむ、と思せど、繼母、君達、容易くわたらじ、とおほして、中納言殿にわたり給ふべし、となむ定め給ひて、中納言殿をいみじう修理せさせ、砂子敷かせ、新しく御簾疊など用意せさせ給ふ。中の君の御男の左少辨、越前守なども、皆この殿の家司かけたれば、やがてそれらを行事にさして行はせ給ふ。寢殿を拂ひしつらひて、大納言殿の御局は、北の廂かけたり。君達北方の御局には、塗籠の西の端をしたり。明日事はじめとて、夜さりわたし奉り給ふ。狹からむをとて、人々は留め給ひて、車六つ七つして渡り給ひぬ。この度ぞ、北方、君達にも對面ありける。濃き綾の袿、女郎花色の細長き給へり。色より始めてめでたければ、かの縫物の緣に、え給ひし衣の折を思ひ出づる人あるべし。主人の北方、三四の君、事のうちに昔物語し給ふ。むかし落窪といひし時も、寢へずをかしげなりと見しを、今は物々しく、北方とさへねびてけはひ殊に優れて、聞えし君達、著給へる物こよなく劣りて見ゆ。北方、いかゞはせむ、と思ひなりて、物語して、「まだ幼くて、お

かけ―兼ねさして―任命して
塗籠―土を厚く塗りこめたる殿内の一室
けはひ―容態

のが許に渡り給ひにしかば、我が子となむ思ひ聞えしを、おのが本性たち腹に侍りて、思ひやりなく物いふ事も侍るを、さやうにてや、もし物しきさまに御覽ぜられけむ、と限なくいとほしくなむ」といへば、君は、したには少しをかしく思ふ事あれど、「何か、更に物しき事やは侍りけむ、思ひおく事侍らず。只いかで思ふさまに、志を見え奉りしがな、と思ひ置く事とて、侍りしことなむ」と宣へば、北方、「嬉しくも侍るかな。よからぬものども多く侍るなれば、思ふさまにも侍らぬに、かくておはするをなむ、誰も誰も喜び申し侍るめる」と申し給ふ。明けぬれば、つとめてより、こと疾くはじめ給ふ。上達部いと多かり。まして四位五位、數しらず多かり。「年ごろしひ惑ひ給へる中納言は、いかでかく時の人を聟にてもたりけむ。幸人にこそありけれ」と云ひあざむ。聟の大納言は、まして二十あまりにていと淸げにて、物々しく出で入り、事行ひありき給へば、中納言、いと面だたしく嬉しくて、老心地に、涙をうち落して喜びゐたり。御弟の宰相、中將、三の君の男の中納言、いと淸げにさうぞきつゝ參り給へり。三の君、中納言を見

したー心中

上達部ー公卿位は四位官は參議以上

あざむー驚嘆す

るに、絶えたりし昔思ひ出でられていと悲しうて、目をつけて見れば、裝束より始めていと淸げにてゐたるを見るに、いと心憂くつらし。我が身の幸あらましかば、かくうち續きてありき給はましも、こよなき程ならで、いかによからまし、と思ふに、我が身の心うくて、人知れずうち泣きて、

思ひ出づやと見れば人はつれなくて心よわきは我が身なりけり

と人知れずいはる。事はじまりぬ。阿闍梨、律師など、いとやんごとなき人多くて、あはれに貴き經どもとて、經一部を一日に充てて、九部なむし始めたりける。無量壽經、阿彌陀經などそひたるなりけり。一日に佛一はしらを供養せむ、と始め給ひければ、合せて佛九體、經九部なむ書かせ給ひける。淸げなる事かぎりなし。四部には、いろいろの色紙に、いろいろの黃金白銀まぜて、書かせ給うて、軸には、いと黑うかうばしき沈をして、おき口の經箱に一部づつ入れたり。今五部は、紺の紙に黃金の泥して書きて、軸には水晶して、蒔繪の箱、蒔繪には、經の文のさるべき所々の心ばへをして、一部づ

し始め―書寫し始め
沈―沈香
おき口―へりとり

おぼろげ—尋常

五の巻—法華經の

とむらひ—訪問

女はかく云云—心かばりにわざとの謙辭か

つ入れたり。只この經佛見る、おぼろげの物は入らじ、と見えたり。朝座夕座の講師に鈍色の袷の衣どもかづけ給ふ。すべて心もとなき事なくし盡さむ、と思ひ給へり。日の經るまゝに、たふとさまされば、末ざまには、人々も上達部も參り來ぬ。五の巻の捧物の日は、よろしき人より始め、消息を聞え給へりければ、所いとせばげなり。捧物の事も充て給ひければ、袈裟や珠數やうの物は、多くもて集りたるに、取りて奉らむとする程に、左大殿の御文、大納言殿にあり。見給へば、

今日だにとむらひにものせむ、と思ひつれども、脚の氣おこりて、裝束する事の苦しければなむ。これはしるしばかり、捧げさせ給へとてなむ。

とあり。青き瑠璃の壺に黄金の橘入れて、青き袋に納れて五葉の枝につけたり。北方、女君の御許に御文あり。

急ぎ給ふ事ありとは承りしかど、宣ふ事もなかりしかば、もろ心なるさまも、人見給はずやありけむ。これは、女はかくまめやかなるものを引き出でける、と塵を

經營―設備
顯證―目立つ
結緣―佛道に緣を結ぶ

結ぶと聞えてはべるは、

とあり。唐の羅の、朽葉叢濃なる一かさねに、いと清らなる緋の糸を、女郎花につけ給へり。珠數の緒と思したるなるべし。御かへり聞えたまふ程に、中納言殿よりとて、中の君の御文あり。見給へば

いと貴き事思し立ちけるを、かくなむとも宣はざりけるは、喜ぶ功德入れさせ給はじとにや。心うくなむ。

とて、黃金して開けたる蓮の花を一枝造りて、少し靑く彩りなして、白銀を大きやかに、露になしたり。又中宮よりとて、宮の典侍御文もて參りたり。是は經營して、御使顯證ならぬ方にすゑて、越前守、大夫などいひし、この殿の御賜にて、左衞門佐になりたるなど、盃さし饗し給ふ。御文には、

今日はさわがしきやうに聞けば、何事もとゞめつ。これは結緣のために、

とあり。黃金の珠數菩提樹の緒なむ入れさせ給ひたりける。はらからも人も見るに、男

さゝげて―佛への捧物を

やい軸―一本へい軸とあるに從ふべしといふ、柄軸

なほびと―直人、尋常の人

方のやんごとなき人に、かく用ひて、我も〳〵とし給ふに、こよなき幸と見ゆ。中宮の御かへり、まづ聞え給ふ。

いとも〳〵かしこまりて承りぬ。今日の事は、只このおほせをなむ、みづからさゝげて、かしこまりて聞えさせ侍る。萬はこの事はてて、みづから參り侍りて、又

又かしこまりごと啓すべき。

と聞え給ふ。御使には綾の單衣襲、袴、朽葉の唐衣、羅のかさねの裳かづけ給ひつ。みな事はじまりて、上達部、君達、さゝげて巡り給ふ。白銀黄金の蓮の開けたるをなむ、人々多くしたりける。中納言のみなむ、白銀を筆のかたに造りて、やい軸に彩りなして、うすものに透し給へりける。袈裟などやうのものは、數も知らず、取り積みてなむ置きたりける。燒木には蘇枋をわりて、少し色黑めて、組して結ひたりける。日ごろの中に、今日なむいと猛に物入りたらむ、と見えける。やんごとなき上達部の、持ちて巡りたまふを、見る人々、いみじう、老の幸面目ありける人かな、と譽む。「なほ人はよからむ

としみ―精進落ち

女をこそ、神佛に申して持たらめ」といひあへり。かくて九日、いと〳〵いかめしうしはて給ふ。三の君、中納言を今日や〳〵と思ひ出で給ふに、さもあらで止みぬ。いみじう心うし、と思ひつる魂や、いきてそゝのかしけむ。事終てて出で給ふに、暫立ちどまりて、左衛門佐のあるをよび給ひて、「など疎くは見る」と宣へば、佐、「などてかむつまじからむ」と答ふれば、「昔は忘れにたるか。いかにぞ思はずや」と宣へば、「誰」と聞ゆれば、「誰をか我は聞えむ。三の君と聞えしよ」と宣へば、「知らず、侍りやすらむ」といらふれば、「かく聞えよ」。

いにしへにたがはぬ君が宿見れば戀しきこともかはらざりけり

とぞ世の中は」といひて出で給へば、佐、返事をだに聞かむとおほせかし、名殘なくもある御心かなと見る。いりて、「かう〳〵宣ひて、出で給ひぬ」と語れば、三の君、暫立ちどまりて給へかし、なか〳〵何しに音づれ給ひつらむ、といと心うしと思ひて、返しいふべきにしあらねば、さて止みぬ。大納言殿、御としみの事など、いといかめしうし

かしこき物―大切なる物
あが君―吾君、親愛の詞

て歸り給ひぬ。されば「今一日二日だにおはしませ」と申し給へど、「狹くて、幼き者ども、いと〳〵むつかしうて侍れば、今これら留めて、まゐで來む」とて、强ひて大納言殿わたし奉り給へば、大殿、「いと尊く、哀に侍りつる事をさるものにて、中宮、左大將殿より始め奉りて、かしこき御心ばへを見奉りつるに、命延びて、老の面目とは愚なり。翁の爲には、經佛一卷を供養し給はなむ、いみじきことに侍るべき。かく猛なる事をさせ給へる事」と泣くなくよろこべば、大納言も、女君は更にもいはず、かひありて嬉しとおぼす。「この翁の、いとかしこき物、と思ひ給へて、誰に傳へ置かむ、と年ごろ藏し置きて、中納言殿いまし通ひし時、もとめ給ひしかど、取り出でずなりにしは、あが君の御料にて、ものしおき給ひけるにこそありけれ。若君に奉らむ」とて、いとをかしげなる錦の袋に入れて奉り給へば、若君、しり顔にうち笑みて取り給ひつ。笛いと美しとおぼす。音もかしこし。さて殿へ夜ふけて渡り給ふ。大納言、「中納言のいみじく嬉し、と思ひ給へりしかな。何事を文して、見せ奉らむ」とのたまふ。かゝる程に、左大臣宣ふ

衞府司—近衞の武官

しきりたる——頻きたる

「老いもてゆくまゝに、衞府司堪へず。若うはなやかなる若男の職にてなむ堪へたる」とて、かけ給ひつる大將、大納言に讓り給ふ。御心にかなへりける世なりければ、誰かは妨げむ。いと花やぎまさり給ふ事かぎりなし。中納言いよ〱嬉しう喜び給ふ。いと大事にはあらねど、起き臥し惱み給ふを、大將殿の北方歎き給ひて、あはれに宣ひしを、今少し仕うまつらむと思ふに、今暫しだにおはせなむ、と念じ給ふ。今年なむ七十になり給ひける、と聞き給うて、大納言のおぼしける。ゆくさき遠く、又もしてむと覺ゆる人ならばこそ、長閑になども思はめ。人もしきりたるやうに思ふとも、七十の賀せむ。我せむと思ひし本意遂げむ。ちやうずべき限はあまたゝびしてき。嬉しと思ゆる事は、只一度にて止みなばいとかひなし。死にて後には、萬の事すれども、誰か見はやし、嬉しと思はむとする。此度ばかりの事、力の堪へむ限はせむ、と思ほし立ちて急ぎ給ふ。國々の守どもも、只みけしきのまゝに仕うまつり、いかで〱と思ひたれば、一つづつ物のたまへど、いとやすう、人々の御前の饗の事をなむあて給へりける。衞門尉は、か

かうむりを得て―叙爵して五位になること
もろ心―同心
かなしくし―愛し
一枚―一枚の下正月の二字を脱せしならむ

うむりを得て三河守になりにければ、衞門はたゞ七日がほどいとま申して、率てくだりけるに、女君、旅具、しろがねの鋺一具、裝束よりはじめて、いとくはしくなむしてくだし給ひける。そが許にも、「かう〳〵のいそぎをなむする。絹すこし」と召しにはしらせに遣したりければ、すなはち守は、男君の御許に百匹奉り。妻は、北方の御許に、茜に染めたる絹二十匹奉れり。舞すべき人の子どもの事など、召し仰せなどし給ふ。御調度つくし給ふ。黄金なむ多く入りける。父大殿、「などかくしきりて、猛なることはする」と宣はす。「さはあれど後の齢いくばくもあらじ。生ける時嬉しとおもほえさせよ。こゝなる子の事は、我せむ」と宣ひて、もろ心にいそぎ給ふ。大將殿をいみじくかなしくし給ふ、御心に入りたまふ事なればなりけり。十一月十一日になむし給ひける。此度わが殿に皆ひきつれて迎へ奉り給うてなむ。委しくはうるさければ書かず。例の人の、只いといかめしう猛なりけり。屏風の繪、こと〴〵どもいと多かれど書かず。しるしばかり、たゞ端の一枚、

三千とせに云々―西王母の桃は三千年に一度花咲き實のる

嬬屋―軒の端

あさぼらけかすみて見ゆる吉野山春や夜のまに越えて來つらむ

二月、櫻の散るを、あふぎて立てり。

さくら花散るてふことは今年よりわすれて匂へ千代のためしに

三月三日、桃の花咲きたるを、人折れり。

三千とせになるてふ桃の花ざかり折りてかざさむ君がたぐひに

四月

郭公待ちつるよひのしのび音はまどろまねどもおどろかれけり

五月、菖蒲ふく家に郭公鳴けり。

聲立てて今日しも鳴くはほととぎす菖蒲しるべき嬬屋なるらむ

六月、祓したり。

みそぎする川瀬の底のきよければ千年のかげをうつしてぞ見る

七月七日、七夕祭れる家あり。

所の衆―藏人所の衆

前栽ほり―前庭に植うべき草花を掘り取ること

旅人を云々―下句を脱す

よろづ代を云々―上句を脱す、十一月の歌なるべし

ふりはへて―わざ〳〵

雲もなくそら澄みわたる天の川いまやひこぼしふねわたすらむ

八月、嵯峨野に、所の衆ども前栽ほりに、

うちむれてほるに嵯峨野の女郎花露もこころを置かで引かれよ

九月、白菊多く咲きたる家を見る。

ときならぬ雪とや人のおもふらむまがきに咲けるしら菊のはな

十月、紅葉いとおもしろき中を行くに、散りかゝれば、あふぎて立てり。

旅人のここに手向くるぬさなれや

よろづ代を經て君につかへむ

十二月、山に雪いと高く降れる家に、女ながめてゐたり。

雪ふかくつもりてのちは山里にふりはへて來る人のなきかな

御杖の、

八十坂を越えよときれる杖なればつきてをのぼれくらゐ山にも

龍頭—船首に龍頭の飾を付したるもの、この處脱文あるべし
充て—まかせ

などなむありける。廣くおもしろき池の、鏡のやうなるに、龍頭樂人ども、船に乘りて遊び居たるは、いみじうおもしろし。殿上人は、居あまるまで多かり。左大殿おはしたり。かづけものなむ、數知らずありける。中宮よりも大袿十襲、さま〴〵に奉り給ふ。宮の御達、藏人も、みな物見むとて退出ぬ。中納言、忽に御心地もやみてめでたし。日一日あそびくらして、事はてて夜更けてまかで給ふに、物かづけ給はぬものなし。やんごとなきには、御贈物そへてし給へり。左大殿、中納言殿に、いとかしこき馬二つ、世に名だかき箏の琴二つ奉り給ふ。御前の人々に隨ひて物かづけ給ふ、腰佩せさせ給ふ。越前守に、「この事ばかりは、我が思ふやうにせよ」とて、充て給ひければ、いとめやすくしたり。二日三日ばかりとゞめ奉り給ひて、渡し奉りたまひける。女君かくし給ふ事をいとうれしと聞え給ふ。大將いとかひありておはす。

落窪物語　巻之四

修法—祈禱

沈みて—官途沈滞して

一人—一度の誤ならむ

員より外—定員外

かくて、やう／＼中納言重く悩み給へば、大将殿いとほしく思し歎きて、修法などあまたせさせ給へば、中納言、「何かは、今は思ふ事も侍らねば、命惜くも侍らず。煩しく、何かは祈せさせ給ふ」と申し給ふ。よわるやうになり給へば、「猶死ぬべきなめり。今暫しいきてあらばやと思ふは、我がとしごろ沈みて、きのふ今日の若人共に多く超えられてなりおとりつるなむ、恥に思ひける。我が君の、かばかりかへりみ給ふ御世に、命だにあらば、成りぬと思ひつるに、又かく死ぬれば、我が身の、大納言になるまじき報にてこそありけれ、とこれのみぞ飽ずおほゆる事。さては老のはて、死のはてのおもだたしさは、おのれに優る人世にあらじ」と宣ふを、大将聞き給うて、哀におぼゆる事かぎりなし。女君、「いかで大納言をがな。一人なし奉りて、飽かぬ事なしと思はせ奉らむ」とのたまふを、聞き給ひて、實にさせばやと思せど、員より外の大納言になさむ事はかた

氣―しろし
見せ―古者に
御佛―大將の事

し。人のはた取るべきにあらず。我のを讓らむの御心つきて、父大臣の御許に參で給ひて、「かくなむ思ひ給へるを、幼き者ども多く侍れど、それが德を見すべき行末あるべき事にもあらぬかはりには、この事をし侍らむ、と思ひ侍る。御氣色よろしう、定めさせ給へ」と申させ給ふ。「何か、さ思はむ事を、早う然るべきやうに奏し奉らせよ。大納言はなくとも、あしくはあらじ」と我が心なる世なれば、とおほして宣へば、限なく喜びたまうて、申し給うて、奏し奉らせ給ひて、中納言、大納言になりたまふ宣旨くだし給ひつ。これを聞きて、大納言、煩ふ心地に泣く〳〵喜び給ふさま、親にかくよろこばれ給ふに、功德ならむと見ゆ。よろこびに起きたちて、願たてさす。定業の命にても延べ給へ、と人にも願立てさする氣にや、少しおこたりて、おもひ強り、起き居て、內裏へ參るべき日見せ、とかくさすべき事、あておこなふとても、「我が子ども七人あれど、かく現世後生うれしきめ見せつるやありつる、かゝりける御佛を、少しにても疎なりけむは、我が身の不幸なるめ見むとてこそありけれ。子二三人聟とりたれど、今に我にかゝ

あまさへ—剩、その上

公—朝廷

大將殿の北の方—元の落窪の君

りてこそはありつめれ。あまさへ憂き恥の限こそ見せつれ。此殿は、塵ばかり仕うまつることもなけれど、御かへりみをかくこよなく見る。かへりては恥しき心地して、我死なば、かはりには、男子にまれ、女子にまれ、君に仕うまつれ」といとさかしういひゐます。かゝれば北方にくし、疾く死ねかし、と思ふ。その日になりて、いと淸げにさうぞきて、男君、女君、一ところにおはする程にて、拜み奉り給へば、いとかしこしと聞え給へば、「おのれは公もかしこくもおはしまさず、只あが君のみこそ嬉しくかたじけなく覺え給へ。此世に仕うまつらで死ぬとも、大かた守ともなり侍りて、など念じ侍る」と申し給ふ。それより退出給ひて、左大殿に參り給うて、また內裏に參り給ふ。人々に祿給ふ事も同じ樣にて、猛なる事もなければ書かず。大納言はその日より臥して、又おもく苦しうし給ふ。「今は塵ばかりも思ふ事なければ、死なむ命も惜しからず」といひ臥し給へり。いと弱くなり給ふと聞き給ひて、大將殿の北方わたり給へり。大殿、かたじけなく嬉し、と思ひ給へり。御むすめ五人集ひて、仕うまつりなげき給ふ。大殿、異御

處分—財産の處置分配

北の方—落窪の繼母

子どもつかうまつり給ふは、物ともおぼさず。大將殿の北方の添ひおはするを、嬉しといみじうめでたきものに思して、物もまゐり給ふ。湯漬をなむまゐり給ひける。たのもしげなくなりはて給ひて、「生ける時處分してむ。子どもの心見るに、同胞おもひせず。女どちのうちにも、うと〳〵しくあめれば、論なう怨事ども出で來なむ」とて、越前守を御前に喚びすゑて、所々の庄の劵、帶など取り出でて、選らせ給ふに、少しよろしきは、只大將殿の北方に奉り給うて、「他子ども、これを少しにてもうらやましと思ふべからず。同じやうに力入り、親に孝じたるだに、少し人々しきになむ。よろしき物取らする。いはんや許多の年ごろかへりみるを、恩にやと思へ」と、いとさかしう宣ふを、君達はことわりと思したり。「此家も、古りてこそあめれど、廣うよろしき所なり」とて、大將殿の北方に奉り給へば、北方聞きて泣きぬ。「宜ふ事どもは、さものたまひぬべけれど、又いかゞ羨み聞えざらむ。年ごろ若うより添ひ奉りて、六七十になるまで見奉り、たのみ奉りつる事、又なかりつる。子どもも七人もたり。などこの家を、おのれに賜はらざら

みつばよつ—大厦高樓、古今集「この殿はうべも富みけりさき草の三葉四葉に殿つくりして」

くろう—功勞歟

天が下に云云—いかに強くいふとも

む。子どもをこそ、我に孝ずることなかりきとて思しも捨てめ、世の人の親は、もはら幸なきをなむ、なからむ時いかにせむとは思ふなる。大將殿に於い奉りては、この家は得給はずとも、いとよくありなむ。男君もいとたのもしう、みつ葉よつ葉もまうけ給ひてむ。三條もさばかりに造りて奉りたり。いとよし。をのこにおきては、夫ある子どもは、はか〴〵しく家もたるもなかりき。よしそれは、云ひもて行けば、とてもかくてもありなむ。己が身、此二人の子どもは、こゝ立ちねとちやうぜられむ折は、いづこにかあらむとするぞ、大路に立てとや。いと道理なく物なのたまひそ」といひつゞけて泣けば、大殿、「子ども思ひ捨つるにはあらねど、麗しくこそはせめてなくとも、世に大路にも立て給はじ。年比のくろうには、子どもを見給へたりとも、仕うまつりてむ。越前守、我がかはり取りそへて仕うまつれ。三條の家はわが家かは。本よりかの御領なり。大將殿も見給ふに、少しはか〴〵しきもの、え奉らで死なば、いふがひなきものとおぼすべし。天が下に宣ふとも、こゝはえ奉らじ。今日明日とも知らぬ身を、な恨み給ひ

たまさかに　—世に稀にて

したゝめて　—大納言が

そ。物ないはせたまひそ。いと苦しき」と宣へば、北方、又うち出づれど、子ども集りていはせず。大將殿の北方、これを聞きて、いとほしく哀とおぼして、「北方のきこえたまふ事、いとことわりなり。こゝには只何もかもな給びそ。君達にあまねく奉らせ給へ。ましてこゝに、たれも〳〵住みつき給へるに、思はぬ方に侍らむ、いと見ぐるし。猶はや奉らせ給へ」と、責め申し給へば、大殿、「己はえ取らすまじ。己死にはべらむ時、ともかくも心とし給へ」とて、更に聞き給はず。よき帶たまさかにありけるなども、皆大將殿に奉り給ふ。越前守など、けに少しものしと思へど、親の御氣色得給ふ人の御有樣、いふべきにあらねば、うちも出でず。あるべき事どもよく認めて、大將殿の北方を、萬にうれしく、「御徳により、面目ある目を見侍りつる」と返す〴〵申し給ひて、「はかばかしからぬ女子どもの、いと數多侍りつる。よくかへりみ給へ」と申し給へば、「承りぬ。身の堪へむ限は、いかでか仕うまつらざらむ」と宣へば「いと嬉しき事」と宣ふ。「むすめども、此御言にしたがへ、君と思ひ奉れ」など、さかしく宣ふまゝに、いとよわく

いとをしむ云々—高齢なれば也

ゐたまうて—即位せられて

さう〳〵し—寂寥なり

みじかき—低き

なり給へば、誰も〳〵いみじくおぼし歎く。遂に七日に消え入り給ひぬ。十一月の事なりけり。いとをしむ時にもあらず、理とは思しながら、御子ども、女男あつまりて、惜みなげき給ふさまいとあはれなり。大將殿は、若君たちにそひ給うて、わが御殿におはすまゝに、立ちながらおはしつゝ泣きあはれがり、かつは後の御事、あるべきやうの沙汰も、みづから入りゐなむとし給ひけれど、父大臣、「新しき帝のゐたまうて、程なく長々とあらむ暇は、いとあしかるべし」と、切にのたまふ。女君も、「幼き人々、こゝに迎へむは、物忌などするに忌々しかし。籠め置きたるに、殿さへおはせずば、いとうしろめたなし。な居給ひそ」と聞え給ひければ、我が御殿にて、ならはぬひとりずみにて、君達うち眺めあそばして、さう〳〵しくおぼさる。かく疾く亡せ給ひぬるを見給ふにつけても、よくぞ思ふ事をいそぎしてける、とおぼす。かの殿には、御忌なき日とて、三日といふに葬め奉り給ふ。大將殿の御送に、四位五位いと多く歩みつゞきたり。實に宣ひしやう死の幸限りなしといふ。御忌のほどは、誰も〳〵、君達、れいならぬ屋のみじ

御服―喪中に著る鈍色の衣
ふち―淵に藤衣（喪服）
おきて―指圖し
部屋にもぞ云々―余り

かきに移り給うて、寢殿には、大德達いと多くこもれり。大將殿おはせぬ日なし。立ちながら對面し給ひつゝ、すべきやうなど聞え給ふ。女君の御服のいと濃きに、精進のけに、すこし青み給へるが、あはれに見え給へば、男君うちなげきて、

　涙がは我がなみださへ落ちそひて君がたもとぞふちと見えける

と宣へば、女、

　袖朽たすなみだの川のふかければふぢの衣といふにぞありける

など聞え給ひつゝ、行きかへりありき給ふ程に、三十日の御忌はてぬれば、「今は彼所にわたり給ひね。子ども戀ひ聞ゆ」と宣へば、「今いくばくにもあらず、御四十九日はてて渡らむ」と宣へば、こゝになむ夜はおはしける。はかなくて、御四十九日になりぬ。此殿にてなむし給ひける。此度こそはてのことなれとて、大將殿、いといかめしうおきて給ひけり。子ども我ら〳〵と、ほど〳〵に隨ひてし給ひければ、いと猛に、きら〳〵しき法事になむありける。事終てて、大將殿、「今はいざたまへ。部屋にもぞ籠むる」と

長居せば又繼母に押籠められむと戯ろゝ也

けしうー惡しく

こゝがちー此の方にのみ讓の多き

宣へば、「けしからず、今はかけてもかゝることな宣ひそ。忘れざりけりと聞き給はゞ、思しつゝむ事出で來なむかし。なき人の御かはりには、よろしうおぼされにしがなとこそ思はめ」と宣へば、「さらなる事、女君達にも、君こそは訪ひ給はめ」とのたまふ。越前守、かく顧みたまふと聞きて、かの大殿の奉れとて、處分し集め給ひしものども、所所の庄の券とり出て、もてまゐりて、「怪しうはべれども、昔人のいひおき侍りしかばなむ」とて奉れは、大將殿見給ひければ、おび三つ。一つは我がとらせしなり。今一つはさすがにわろし。庄の券、こゝの圖などなむありける。大將殿、「けしうはあらぬ所々をこそは領じ給ひけれ。この家は、などか君達北方の御中には奉り給はざりし。別所のあるか」と宣へば、女君、「さもなし。こゝはかう久しう住みたまへれば得じ。北方に奉りてむなむと思ふ」と宣へば、男君「いと善きこと。これは君得給はずとも、おのれあればおはしなむ。皆うらみの心どもあらむ」とうち語らひ給うて、越前守近う喚び寄せて「其許にぞ其事どもは知らむ。などいとこゝがちには見ゆるぞ。豪家とわづらはしがりて

こゝに―落窪が
なり所―別莊

あるか」とうち笑ひ給へば、「更にさも侍らず。もとものし給ひし時、みな爲置きてあづけられたるなり」と申せば、「さかしうもし給ひけるかな。こゝに誰々も住みつき給ふめるを、何しにかは、とこゝに宣ふめればなむ、北方知り給ふべし。このおびふたつは、衞門佐と、そこにと、一つづつ、三のなり所の劵と、おび一つとゞめつる。むげにさしおき給ひけむ御心ばへの、かひなきやうなれば」となむ宣へば、越前守「いと不便なる事。みづから爲置き侍らぬ事なりとも、殿になむしろしめすべし。いはんや更に、我が斯くしおくなどいひおき侍りにし、たがひては。たれも〳〵、みな少しづつ分たれ侍るめるものを」とて、取らねば、大將「あやしくもいふかな。みづからの心、いかさまにし置かばこそあらめ。かく見給へば、こゝにえ給ふ同じ事。此君は、己あらむ限は、さてものし給ひてむ。打續き幼き人々あれば、たのもし、かうては、早う四の君なむ、思ふ人すくなきやうに、ものし給ふなるを、おのれ一向に知り聞えむと思ふ。その君達の、得給はむに添へられよ。今二所をば、御男達になむつけて、仕うまつるべき」と宣へば、

現心―正氣

取りはづして―うつかりして

越前守畏りよろこぶ。「まづかくなむとものし侍らむ」とて立てば、「もし返しなどし給はむ。取りてものし給ふな。むつかし。同じ事をのみいへば」と宣ふ。「おびは猶かくて人に賜はせ、つかはせ給はむ」と申し給へば、「今用ならむをりはものせむ。疎き人達にあらねば」とて、強ひて取らせ給ふ。守、北方君達に、かう〳〵なむ宣へるといへば、北方、この家はいと惜しかりつるに、いと嬉しくのたまへど、なほ我はと領じ代へらると思ふに、いと妬ければ、「落窪君のかくし給ふか。あなうれしのことや」といふに、越前守、たゞ腹だちに腹立たれて、爪はじきをして、「現心にはおはせぬか。前々は、いとほしく恥しき事のありけるに、面いたき心地す。人のいふべき事か。まろらを徒になし給はむとや。ものしと思しける程は、いかばかりの恥をか見、ちやうぜられ給ひし。ひきかへて、かく懇にかへりみ給ふ御徳をだに、かつ見て、かく宣ふ。まして昔いかなるさまに。人ぎきも我が身ものぐるほしや。落窪何窪と宣ふ」といへば、北方、「何ばかりの徳か我は見侍る。大殿は父なればせしにこそあめれ。取りはづして落窪といひた

人々しく―人らしく
持給はぬ―北方が
領じ給はましかば―落窪が
いさ―否
おこと―汝

らむ、なにか僻みたらむ」といへば、越前守、「あはれの御心や。物思ひ知り給はぬぞかし。徳は見ずと、御心にこそ、さしあたりて見ずと思すらめ。大夫左衛門佐になりたるは、誰がし給ふにか。景純は、この殿の家司にて、加階せしは誰がせしぞ。今にても見給へ。又男も人々しくならむ事は、只この御徳。まづは家持給はぬに、この家領じ給はましかば、いづこにひきつゞきておはせまし。まづ只思しおはせよ　目の前なる事どもを見れば、嬉しく哀におぼえ給はずや。景純等も國を治めて、徳なきにしあらねど、妻をまづ思ふとて、え奉らず。今にてもえ奉るまじきは、子は志の薄きぞかし。己が生みたらむ子どもだに、かくおろかにてつかうまつらぬ御身は、かくあはれなる御心ばへを、泣く泣く喜び聞え給はめ」ととにかくに云ひ知らすれば、實にと思ひていらへもせず、「御かへりいかゞ聞えむ」といへば、「いさ、ものいへば、ひがみたりとかしがましういへば、聞えにくし。おこと、よき事知り、物の心知りたらむ人、推し量りて申せかし」といへば、守、「人の爲に申すにあらず、御身の爲の事なり。三四の君の御前をも、いかにも

さいなみ―叱責し

言ひそし―言ひまくる

罪もあらむ―後世の罪障もあらむ

仕うまつらむ、と大將殿宣ふは、北方の御心に隨ひ給ふにこそ。一つ腹の御心だに、かくやはあるとあめれば、かくこの御方の宣ふこと、まろはいかに心うし。我れ得たらむ丹波の庄は、年に米一斗だに、出で來べきにあらず。今一つは越中にて、容易く物もはかるべきにあらず。辨殿のえ給へるは、三百石の物出で來なり。かく遠くあしきは、景純が選りくれたるなり、とさいなみけれど、誰も〳〵、大殿のしおき給ひしを皆見給ひて、かくやは宣ふべき。只これにておぼせ隔なく互にかへりみるべき人だに、かゝる心を持たまへる」といへば、北方「あなかしがまし。いたくな言ひそししづめそ。誰も誰も皆貧しければ、云ふにこそあらめ」といふ程に、左衞門佐の來あひて、心にもあらずおぼえ、「身貧しけれど、よき人はかく、ことに操にをかしうぞある。まづ北方の此處におはせし程は、聞い奉り給ひしかど、聊のたまへる事聞えざりきかし。かく心苦しき御年の齢も、あはれに隨ひて、心安らかなりとこそは、密に宣ふめりしか」とのたまへば、北方「いかで我死なむ、憎み惡しきものに宣へば、罪もあらむ」と宣ふに、「あなかしこ。

なき御影—
故大納言

よし〳〵、聞えさせじ」とて、二人ながらかい續きて立てば、さすがに、「やゝ、この御返事申せ」とまねき給へど、聞き入れぬやうにていぬ。左衛門佐、「などかくあしき親をもち奉りけむ。いかで御心ようなるべからむと祈をだにもせむ。我等が爲にも大事なり」といひて、御返事はもろともにいひ合せて、大將殿へ聞え給ふ。

畏りて承りぬ。こゝにも今は、殿一人をなむ、たのもしき者に思ひ聞えさすべき。賜はせたる所々の券は、若き人々、昔人の御本意たがはむはいかでか、とつゝみ侍るを、御志のかひなきやうにやはとて、こゝになむ賜はり留めつる。この殿の御事は、いと心ばへ深う奉らるめりし所を、あだに物せさせ給はば、物しくや。なき御影にも、といとほしく侍るを、券なほおかせ給はね。

とて券返し奉る。此券を此越前守の取りて立ちければ、北方、返し奉るにやあらむ、といと怪くて、「それはなどもて往く。さ宜ひつらむものを、もて來〳〵」と呼び返しけれど、あな物ぐるほし大事の物をおろかにもいふかな、と聞きけり。大將殿の聞き給ひて、

覺束なからず云々―心置なう申されよ

すゞろ―不注意

あいなければ―面白なければ

受領―國守

「餘所の許へいかばこそ、ものしと思ひ給はめ。北方の御世の限はおはして、後には三四の君に奉り給はば同じ事。はや置き給へれ」とて、みな渡り給ひぬ。女君は、「今亦も參りこむ。かしこにも渡り給へ。故殿の御代には、君達北方をこそは、見奉り仕うまつらめ。何事も覺束なからず宣へ。隔なく思したらむをのみなむ、嬉しかるべき」など、哀に語らひ置きてなむおはしにける。大殿のおはせし時よりも、をかしき物は日ごとに怠らず。君達に、まめなるものは、夜中曉にもはこび奉り給へば、北方、實に我が子ども男女あれど、男子はすゞろなるに、我がため同胞の爲する、いとありがたし、とやう〳〵思ひなりぬる程に、年かへりぬ。司召に、左大臣、太政大臣に。大將殿、左大臣になり給ひぬ。次々の御弟どもなりあがり給へれど、一所の御うへを書きいだす、あいなければかかず。左大臣殿の北方の御幸を、人々も御同胞達も、めでたう羨む。中の君の御男の左少辨、身いと貧しとて、受領望むとて、左大臣殿の北方につきて申しければ、美濃にいたはりなし給ひつ。越前守、今年なむ代りけれど、國の事いとよくなしたりければ、

おしはりて―強情に
せめてかなしき―非常に愛する

ひきたてよくて、やがて播磨になしつ。衛門佐は少將になりぬ。「誰も〳〵この御德にて」、とあつまりて北方によろこび聞かせ、「これやは御德見たまはぬ。今よりはなほ心にまかせてものな宣ひそ」といへば、「實に理」といひてけり。このたみの司召は、この族のよろこびなりけり、と人世にいふ。かく心にまかせてし給へば、父大臣のせむとおほす事も、まづこの殿に宣ひあはするを、「あしかんなり。なし給ひそ」とある事は、せまほしと思しながら、えし給はず。我が心にいなと思す事も、この殿二たび三度としきりて申し給ふ事は、え聞き給はではあらねば、司召し給ふにも、數ならぬも、この殿の御德にてぞなりける。帝の御伯父にて、かぎりなくおほしたる。御身は、左大臣ばかりにて、御才は限なく賢く、おしはりて宣はむ事を言ひ交すべき上達部もおはせず。父大臣はたゞ同じ御子といへど、せめてかなしきあまりに、頑くかしこきものに思したり。なか〳〵御子なれ、親の心ばへには見えける。世の人もかく知りて、「大殿よりは、左大臣殿にこそ仕うまつらめ。それをぞ大殿もよしと思したる」とて、少し物のぞみたるは、參り仕う

馬のはなむけ—餞別、新任の美濃守の

女がた—姻戚

まつらぬなければ、皆花やかにて出で入り給ふ。左大殿の北方、馬のはなむけ、さまざまいかめしうしたまふ。殿人なるうちに、御用意かぎりなし。馬、鞍、調じ具してたまひ、「かくはしうする事は、こゝに宣ふことあればなり。かく下りて、飽かぬ事なくよく仕うまつれ。おろかなりと聞かば、さらにかへりみじ」と宣ふ。かしこまり嬉しくて、めでたき女がたと思ひて、「かう〳〵なむ宣ふ」と、まかでてかたる。「能く仕うまつれ、と申し給へば、御徳にかゝりたる身にこそあれ」といへば、中の君も、いとうれしと思したり。「今はいかで、三四の君に、よき人婚せむ、と人知れず見るに、さるべき人のなきこそ、くち惜しけれ」と宣ひわたる。北方、三四の君に、夏冬の御衣、御ものなど、いとゆたかに、故殿の生きてたてまつり給ひしにも優りて、いとゆたかに、御位のまさるまゝに、よろづをし給ひ、こゝろもとなき事なし。御子産み、御袴著給ふ事ども、暇なくて書かず。はじめの男君は十二にて、いと大きにおはすれば、宮仕へすともあやまちすべからず。かしこくおはすれば、春宮の殿上せさせ給ふ。書を讀み給ふにも、さとく

らう／＼し―功者に
うつくし―愛らし
ふたつなく―無類に

らう／＼しく、心柄もいと賢ければ、若うおはしける帝におはしませば、遊敵に召し遣ひ、をかしきものに覺して、笙の笛吹かせ給ふ時、教へさせ給ひければ、父大臣、いとかなしと思したり。祖父大臣の御殿に養はれ給ふ君は、九つになむおはしける。此兄君の殿上し給ふを、羨ましげに思して、「我も內裏にいかで參らむ」と申し給へば、大臣うつくしがりて、「などか今までは言はざりつる」とて、俄に殿上せさせ給へば、父大臣「まだ幼く侍るものを」と申し給へば、「なにか、その太郎には增りて、賢くなむある。弟まさりなり」と宣へば、父大臣笑ひ給ひぬ。內裏に參りて奏し給ふ。「これなむ翁の限なくかなしと思え侍る。思しめして、かへりみせさせ給へ。兄の童におはしませ。司えさすとも、兄には增らむ、と凡て此子を、太郎にはさせ給へ」と、常に宣ひて、御名も弟太郎となむつけ給へりける。この御弟の姫君は、八つにて、いみじうをかしげになむおはしければ、今より二なくかしづき給ふ。その御弟も六つ、男子四つにておはしける。又このごろもうみ給ふべし。かゝる儘に愚ならず思ひ聞え給へる、理なり。太政

御はて――一周忌

この事のすぢ――聟にとりたき希望

大臣殿、今年なむ六十になり給ひければ、左大殿、賀の事仕うまつり給ふ。事の作法いとめでたし。只思ひやるべし。舞は此二所せさせ奉り給ふ。劣らずをかしく、二所ながら舞ひ給ひければ、祖父大臣、涙を落してなむ見奉り給ひける。かく爲べき事は、すごさず、いかめしうし給へば、御德はいやまさりなり。はかなくて月日過ぎて、女君服ぬぎ給ふ。いづれも〳〵、子ども相榮ゆる程にて、御はての事などしつくし給ひける。繼母、かく子どもの喜びをしけるを、御德と喜びければ、いと嬉となむ思しける。左大臣、いかで此君達によき聟どりせむ、と思して見るに、さるべきがなきと思し渡る程に、中納言の、筑紫の帥にて下るに、俄に妻うせたりけるを聞き給ひて、人がらもいとよき人なり、とおぼしきざして、內裏に參りあひたるにも、心とゞめて語らひ給うて、さるべき折に、この事のすぢをほのめかし給ひければ、「いとよき事に侍るなり」と、申し契りてけり。左大殿、北方に申し給ふ。「しか〴〵の人をなむ、いひちぎりたる。上達部にもあり、人がらもいとよし、となむ思ふ。三の君にや婚すべき。四の君にやあはすべ

いとほしき事―氣毒なる事、面白の駒との關係

き。いづれにか」と宣へば、「いさ、御心に定め給へ。まろは四の君にとなむ思ふ。いとほしきことありしかば、思ひもなほし給ふばかりに」と宣へば、「この晦日に下るべかなり。疾くしてむ。北方にさ宣へ。よろしう思ひたらば、こゝにておはせむ」と宣へば、「文にては長々とも書かむ。みづから渡らむとすれば所狹し。少將播磨守などに、くはしく宣へ」など聞えたまふ。翌朝、少將を北方よび給うて、密に宣ふ。「みづから渡りて聞えむとおもへども、見さしたる事ありてなむ。かう〳〵の事を宣ふ。いかなるべきことにかあらむ。心にくゝはあれど、一人ある女には、思ひの外なる事もあり。この人、いとよき人なめり。誰も〳〵よろしと思ひ給へる事ならば、こゝに迎へ奉りて、ともかくもせむ」となむ宣へば、「少將、いとも畏き仰にこそ侍るなれ。あしき事にても、殿のしか宣はせむは、いなび聞えさすべきにあらず。ましていとめでたき事にこそ侍るなれ。かくなむと物し侍らむ」とて、親の御許にいきて、「しかじかなむ宣ふ。いみじうよき事なり。いかなる人なりとも、只今の時の大殿ばかりの御女のやうにて宣ひおはせ給はむを

とざまかうざまに―種種と

女君―落窪

おろかには思はじ。おもしろの駒に、いふがひなく笑はれ誹られ給ひしを、これにて恥かくし給へ、と思したるなめり。年は四十餘になむある。故大殿おはして、初めてし給ふとも、かばかりの事はえし給はじ。親にまさりて哀に、とざまかうざまに、いたくよろしうなさむ、と思したる、限なく嬉しき事。早う四の君、かの殿に參らせ給へ」と宣へば、北方、「我がなからむ後に、かくてのみあるを、うしろめたなし、たゞ受領のよからむをがなとこそおもひつるに、まして上達部にもあなり。いと嬉しきことなり。かくこまかに、後見るがあはれなる事。女君よりは殿こそ御心ばへ哀なれ」と言へば、「殿も北方を、いみじう思ひ聞え給ふあまり、まろまでは來るぞ、と聞き侍る時もあり。まろを思さば、此腹の君達を、男も女も思ほせとこそ申し給へば、いみじき幸おはしける。數ならぬ景政らだに、女は見まほしくなむあるを、この殿は、すべてこの北方より外に女はなし、と思したる。內裏に參り給ひても、后宮の女房達の清げなるに、たはむれにも目入れ給はず。夜中にも曉にも、かきたどりてぞまかでたまふ。女の男に思はる

をこに—俗言のをかしく

おはせむ限—母北の方の存命中

まが／＼し—忌はし

お—返辭

る例には、この北方をし奉るべし」などいひて、「いかゞ宣ふと、正身に聞かせ奉り給へ」と宣へば、「四の君渡り給へ」と宣へば、おはしたり。北方、「かう／＼の事なむ、かの大殿のたまふなるを、をこに人のおぼしたりし御身を、いともよき事となむうれしく思ふを、いかゞ思す」と宣へば、四の君、おもて赤めて、「いとよき事に侍れど、かゝる身を知らぬさまにや、なでふさる事か侍るべき。人のおぼさむも、かつはかの殿の御恥ならむ。いと見苦しからむ。心うき身なれば尼になりなむ、と思へど、おはせむ限は、例のかたみに見奉るをだに、仕うまつるに思う給へてなむ、今までだに侍る」とて泣き給ひぬれば、思ひ知り給へりけり、と哀にうち涙ぐみてゐたり。北方、「あなまが／＼し。なでふ尼にかなり給ふべき。しばしにても、猶花やかなるめ見給はむぞ、人もかくぞありけり、と思ふべき。おのがことに隨ひたまふと思ひて、この事し給へ」とのたまふ。少將、「御返事はいかゞ申さむ」といへば、「この君はかくなむと宣へど、こゝになむいと嬉しき事、と只ともかくも御心して、思さむ方にしなし給へ」と宣へば、「お」とて立ちぬ。

こゝに云々ー此方にて用意おきたるを用ひて

御女ー面白の駒の生ませたる子

殿に參りて、しかぐゝなむと、ありつる事を申し給へば、北方、四の君の宣ひける事を哀がりて、「さも思すべき事なれど、世にある人は、かゝるたぐひ多かなり、と思しなすべく」とのたまふ。殿聞き給うて、「北方だにさ宣はば、正身ものしと思すとも、疾くしてむ。いとよき人なり。この月晦日にくだるべし。同じくば疾くと宣ひき。はや四の君こゝにわたし給へ」と少將に宣へば、曆とりに遣りて見給ふに、この七日、いとよかりけり。何事にかさはらむ。人々の裝束は、こゝにし置かれたらむ儲のものして、西の對にてせむ、と思して、西の對しつらはせ給ふ。「四の君、はや渡り給へ」と聞え給へば、「はやはや」といそがし給へど、本意なき事なれば、いとうたて物憂く覺えて、「今々」といひて、更に思ひも立たねば、「この事ならずとも、渡り給へとあらむは、おはすまじくやあらむ。あないひがひかし」といひて、わたし奉りつ。大人二人、童一人、御供にはありける。御女は十一にて、いとをかしげなり。いかまほしと思したるを、見苦しからむとてとゞむるを、いと悲しとてうち泣かれぬ。左大殿、待ちうけ給ひて、對面し給うて、あるべき

この北の方―落窪の君

人―夫とすべき帥

かなふまじ―辭退しがたからむ

事ども申し給へど、なか〳〵初よりもはしたなく、恥しうおぼえて、御答もをさ〳〵聞え給はず。この北方の三つが弟にて、二十五になむおはしける。おもしろの駒は、十四にて聟とりて、十五にて産み給へりけるなり。この北方は、二十八になむおはしける。三日四日の程に、此君をいたはりかしづき給ふ事かぎりなし。七日になりて、西の對に、われ諸共にわたり給ひぬ。御供の人々、萎えたるは、裝束一具づつ賜ふ。人ずくななりとて、我が御人、大人三人、童一人、下づかへ二人とわたし給ふ。裝束どもしつらひたる儀式、いとめでたし。母北方、他同胞達、只こゝになむ來ける。暮れ行くまゝに、出で入りいそぎ給ふ。弟の少將、隙なくうれしと思ふ。夜うち更けて帥いましける。少將、しるべして導きて入りぬ。四の君、人もいふがひなくあらず、この殿もかく居起ちてし給へば、かなふまじかりけり、と思ひなしてなむ出で給ひける。手あたりけはひなどのをかしげなれば、嬉しと思ひけり。聞え給ひけむ事は、聞かねば書かず。明けぬれば出で給ひぬ。北方、「いかに思ふらむ」と歎き給へば、「文はたび〳〵やらねど、心長き

君―落窪

ふとしも―早速にも

いつの間に―後撰集、「いつの間に戀しかるらむ唐衣ぬれにし袖のひろまばかりに」

たぐひなむある。世にもおろかには思はじ。互に心あはぬ氣色したるこそ、かしこくもあらぬ事ぞ。まづ君を、例の懸想のやうにやは、わびいられ聞えし。思ひ出でて時々聞えしかど、みそめ奉りし後なむ、等閑にてやみなましかば、と悔しかりし。さ思ゆるぞをかしき」など、語らひ給ひて、二所ながら起きて、こなたにおはしぬ。四の君、まだ帳の内に寢給へり。北方「起き給へ」と起し給ふほどに、帥の文もて來たり。男君取り給うて、「まづ見侍らまほしけれど、隱さむと思す事も書きたらむとてなむ。後にはかならず見せ給へ」とて、几帳の内にさし入れ給へば、北方取りて奉り給へど、ふとしも取り給はず。「さば讀み聞えむ」とてひきあけ給ふ。四の君、かの始のおもしろの駒の書き出したりし文を思ふに、又さもやあらむ、と胸つぶれて思ふに、讀みたまふを聞けば、

逢ふことのありその濱の眞砂をば今日君思ふかずにこそ取れ

いつのまに戀の、

となむありける。「御かへりはや聞え給へ」とあれど、答もし給はず。大臣、「その文しば

とみ―急

こひぢ―戀路、泥

日とり―日を定め

今始めたるやうに―初婚の通に

し」とせめて宣へば、何のゆかしうおぼすならむとて、さし出し給へれば、「いたう書きそへためるは」とて、「御かへり給へ」とて、又さし入れたまふ。「はや〳〵」と硯紙具してせめ給ふ。四の君、返事もこの殿の見給ひつべかなり、といと恥しくて、えとみにも書き給はず。「あな見ぐるし。はや〳〵」と宣へば、物もおぼえで書く。

　我ならぬこひぢも多くありそ海の濱の眞砂は取りつきにけむ

とて、ひき結びて出し給へれば、大臣、「あなゆかしのわざや。この返事は、見でやみぬるこそくちをしけれ」といひ居給へるさま、いとをかし。使に物かづけさせ給へり。帥は、この二十八日になむ、船に乗りなむ日とりたりければ、出で立ち更にいと近し。かくて左大殿には、三日の夜の事、今始めたるやうに設け給へり。人は只かしづきいたはるになむ、男の志もかゝるものを、といとほしき事そはりて思ひなる。「細にと口入れ給へ。こゝにて事はじめしたることなれば、おろかならむ、いとほし」と宣へば、女君、むかし我を見はじめ給ひし事、思ひ出でられて、いかにおもほしけむ。安濃は、心うき

日たけつゝ云々ー朝も遅く歸り行きし也

めは見聞きし、と思して、「いかに、まろ見はじめ給ひし折、始めてやんごとなくのみ、おもほし增りけむ」と宣へば、殿いとよくほゝ笑みて、「さて虚言ぞ」と宣ひて、近うよりて、「かの落窪といひたてられて、さいなまれ給ひし夜こそ、いみじき志はまさりしか。其夜、思ひ臥したりし本意の、皆かなひたるかな。これが答に、いみじうちやうじ伏せて、後には喜ぶばかり顧みばや、となむ思ひしかば、四の君の事もかくするぞ。北方は嬉しと思ひたりや。景純などは、思ひ知りためり」と宣へば、女君、「かしこにも嬉しとのたまふとき多かめり」と宣ふ。暮れぬれば、帥いましぬ。御供の人々に物かづけ、饗などせさせ給ふ。四日よりは日たけつゝなむ出でける。もの〱しく淸げにめやすし。おもしろの駒と、ひとつ口にいふべきにあらず。帥のいふ。「罷り下るべき程いと近し。認むべき事どものいと多かるを、明けぬればまかり、暮るれば參るに、怠りてなむあしきに、彼所に人もなし。わたり給ひね。又下らむといはむ人召し集めて、はや思ほし立て、日はたゞ十餘日になむある」と宣へば、女君、「遠かなる所に、たのもしき人々を

かゝるやんごとなき人―左大臣

はじめの腹―帥の前妻の所生

おき奉りては、いかで」と宣へば、帥、「さは一人罷りくだれとや。たゞかく一二日見給ひて　やみ給ひなむとや」、おぼし笑ひたまふさま、いとやすらかなり。女君を、帥、容貌はをかしげなめり、心やいかゞあらむ、と飽かずおもひけれど、かゝるやんごとなき人の、わざとし給へるに、今日明日下るべきに、すつべきにあらず、と思ひて、「諸心に何事もし給へ」とて、俄に迎ふれば、「けしうはあらぬ聟どり、いと疾く迎ふるは」と笑ひ給うて、御おくり、さるべき人々むつまじき、御前にはさし給へり。車三つして渡り給ひぬ。殿よりありける御達、「今は何しに參らむ」などいひければ、北方、「猶參れ」と強ひて遣り給ひつ。我がそひてありき給ふ所にもありければ、もとの御達、いつしかとも代りゐ給ふかな。御心いかならむ。君達の御爲、あしういみじうもあるべきかな。只今の時の人の御族とて、おしたちてあらむかしなど、おのがどち言ひあへり。はじめの腹とて、太郎は權守、三郎は藏人より冠賜はりてある。このごろ死にたる腹の女子十、二つなる男子なむありける。この二人をなむ、父かなしくすとはおろかなり。權守も、

そう〳〵—雙々の字音か

あたはず—かなはず

ひそみ—眉をしわめて愁ひ

式部大夫も、送りせむとて、暇朝廷に奏して、皆下るに、帥かづけものどし給へば、人人の裝束にとて、絹二百四、染草ども、皆あづけ給へば、四の君、そう〳〵と竝べて、取りふれむ方なし。爲やらむやうもおぼえで、母北方にいひやる。「かう〳〵のものどもせよとて、絹どもあめれど、いかゞし侍らむ。殿よりはべる人々も、若うのみありて、云ひ合すべき人もなし。いと戀しくもおぼえさせ給ふを、幼き人も見まほしく侍るを、忍びて渡り給へ」と言ひやりければ、北方、少將を呼びて、「かくなむいひたる。夜さり忍びてわたらむ。車しばし」と宣へば、「忍びてと思すとも、人もまさに知らじや。また旅だちたるに、きら〳〵しき子もたまへる、子引きさげて居たらむ、いと見苦しからむ。亡せにける妻の子たちとて、十ばかりなるあるを、帥は喚び出でてつかひ給ふめれば、いとあはれなめり。わが左大殿のうへに申し給うて、よかなりとのたまはゞ、渡り給へ」といへば、北方、いとあたはず思ひて、「あの殿のゆるしなくば、親子の面も見で、くだしてむずる」とて、只ひそみにひそみ給うて、「何事もこの殿のおはせむかぎりは、え

あからさま―暫時
まれ―にも
あれ

やすくすまじかめり。我れこそ人を隨へしか。人に隨ふ身となりにたるが悲しき事。又我がいふ事、おなじ心に答へたる子こそなけれ」と宣へば、少將、例の腹だち給ひぬと見て、「何しにかは。云ひ合せ給ふ便なければ、しか申しはべるに、かくさいなむなむ、いとこそ苦しけれ」とて立ちぬ。うれしと夜晝よろこべど、腹だに立ちぬれば、なほ癖にてかくなむありける。少將、左大殿にまゐりて、北方に、かう〳〵なむ侍りつる。その事とはいはで、戀しく見まほしく宣ふとかたれば、北方、「理にこそはあなれ。はや渡し奉りたまへかし」少將「君も、渡れとも思ひ給はざらむに、ふともの し給ひなむ。便なかるべき」といへば、北方「それもさるべき事。さらば御みづからおはして、君の聞かむ折に、御消息とて、いと戀しくなむ思え給ふを、あからさまにまれ渡り給へ。遠くおはすべき程も、いとのこり少くなりにたれば、いとあはれに心細うなむ。これよりまれ出で立ち給へ、京におはせむ限りは見奉らむ、と宣ふと聞えたまはむにつきて、そこにおのづから氣色見えなむ。それに隨ひて、わたりも迎へもし給へ。そのかみ君は、

あへぬべき
―然るべき

その子とはな知らせさせ給ひそ。御供にて率て下り給ふとも、一人おはせむが御心細きにとて、北方のそへ奉らせ給ふにてありなむ」と宣へば、少將、いと思ふやうに思ひやりありて、めでたくぞ宣ふ。嬉しうあらまほしき御心かな。我が親の非道に腹立ち給ふこそ、物いふかひなけれ、と思ひて「いとよう宣はせたり。さらばしかものし侍らむ」とて、殿へいくも苦しけれど、戀しと思ひ給ふにこそあらめ、と思ひて、(脫文)女君も同じ所におはす。「いかで物聞えさせむ」といへば、帥「こゝにて聞え給はむにもあへぬべき事ならば疾く入りて聞え給へ」といへば、少將入りて、「しか〴〵なむ」といへば、女君、實にいかで對面せむ。こゝにもいと戀しくなむ思ほえ給へば、いかで參り來む、となむ昨日聞えたりし」と宣へば、帥「かしこへ渡り給はば、二所通ひせむ程に、ものしく、おのが爲になむあしかるべきを、辱くともこゝに渡らせ給へかし。人侍らばこそ、つつましくも思さめ。幼き人ばかりなむ。それを便なかるべくば、放れたる方におき侍りなむ。京にものし給ふべきほどは、實に今日明日ばかりなり。對面なくては、いかでか

さだめしも云々―少將のかれて思ひ定めし通り

はかなき事―細事

すくよか―健、しやんとしたる

わたり給ふ―北の方が

は」と宣へば、さだめしもしろく、「その事をなむ、かしこにもなげかるめる」といへば、帥、「はやよろしう定めて、此方にわたし奉り給へ。其方にまゐり給はむ事は、猶あしくなむある」といへば、少將、「さらば、かくなむとものし侍らむ」とて立てば、四の君、「かならず〱、よくそゝのかし給へ」とのたまへば、「承はりぬ」とて出でぬ。母北方の御許に來て、腹だたせ給へる怖しさに、ありつるやうに、かう〱、左大殿のうへの宣へる事、しか〱といひて、「はかなき事なれど、人におとるまじく故あり、かしこくこそ宣ひしか。心に幸あるものなりけれ」と云ふ。北方、いくべき事を、限なくよろこびて、「げに〱よくも思しよりけるかな、三の君もいざ給へ、夜さりにてもと思ふ」と宣へば、「いとにはかならむ、明日などやよろしう侍らむ」と云ふ。明けぬれば、渡らむのいそぎし給ふ。「すくよかなる衣どものなきぞ、いといとほしき。かくしの方にやあらむ」と宣ふ。左大殿、渡り給ふと聞きて、御衣などは、鮮明にもあらじとおぼしよりて、いと淸げにしおきたる御衣一具、また姫君の御料なる一領、「小さき人に著せ奉り給

心しらひ—注意し

盒器—食器　蓋あるもの

へ。旅にはあらはなる事もあるものぞ」とて奉り給ふ。北方、よろこぶ事さすが限なし。「人は、産みたる子よりも、繼子の德をこそ見るべけれ。我子七人あれど、かく細に心しらひかへり見るやはある。物のはじめに、この子のなりの萎えたりつるを思ひつるに、限なくも嬉しくもあるかな」、と例よりも心ゆき喜ぶも、帥殿へいけと計ひたるが、限なく嬉しきなりけり。暮れぬれば、車二つして渡り給ひぬ。四の君、いとうれし、と思ひて、日ごろのありさま語る。むすめは、このごろの程に、いと大きに、をかしうさうぞきて居れば、まづかき撫でて、いとかなしと覺ゆ。「これをいかにして率て下らまし、と思ひなむみだれ侍る。まろが子と知らせむ、恥しき事」といへば、北方、「左大殿の上は、しか〴〵宣ひける。いとよき事なり。まろが著たるもの、此子の著たるもの、あの殿より給へる」といへば、「かくいみじく宣ひ思しける人を、など昔おろかにおもひ聞えけむ。まろがうへをなむ、なか〳〵親たちに優りて。殿の御盒器をなむ一具たまへる。人々の裝束、几帳屛風よりはじめて、たゞおぼしやれ。これ斯くし給はざらましかば、

ゆめ／＼—決して

今参—ド人の新参者

一つ腹の云—四の君と同胞たる我だに

こゝの御達も、いかゞ見ましとなむ嬉しき」といへば、北方、「いや／＼継子の徳をなむ見る。さ知り給へ。このおんなる子、ゆめ／＼憎み給ふな。おのが子どもよりもかなしう思ひ給へ。おのれが昔憎まざらましかば、暫にても恥を見、いたき目は見ざらまし」と宣へば、四の君、「實に理」といふ。母北方見るに、帥はいと物々しく、ありさまよければ、「さいへども、やんごとなき人のし給へる事は、こよなかりけり」とよろこぶ。かくていといそがはし。今参ども、日に二三人まゐりぬ。いと花やかなり。少將これを見るにも、左大殿をいみじう思ふ。播磨守は、國にてえ知らざりければ、人をなむ遣りける。左大殿の北方、この君に、かう／＼の事しいで給へり。この月の二十八日になむ、船にのり給ふ。その國に著き給はむ。饗まうけ給へ」といひたれば、守、よろこび思ふ事かぎりなし。一つ腹の我れだに聟どりせむとは思ひよらざりつるを、この君は、猶我等を助け給はむとて、佛神のし給ふ、と思ふ。國守のよしりて、人々の著くべき設したまふ。この守、母にも似でいとよくなむありける。左大殿より遣りし御達、「今は

こよなや——此の上なし

歸り參りなむ」と申したれば「京におはせむ限は、仕うまつりはてよ。又下らむと思はむ人は、參りもせよ」といはせ給へれば、「これもいと苦しきことは、あるまじかめれど、暫のほど見るに、わが君に似奉るべくもあらざめり。初より見奉りそめて下りなむは、いかゞせむ。同じほどの殿にだに、御心よからむ方にこそ仕うまつらめ。いはんや更にこよなや。萬の事淨土の心地する我が殿をうち捨てて、退らむこそ物ぐるほしけれ」と下仕まで思ひて、一人も下らず。おとな三十人、わらは四人、下づかへ四人なむ率てくだる員に定めたりける。日の近うなるゝに、同胞たちみな渡り集まり給ひて、今はわかれ惜み、あはれなる事を宣ふ。人々參りあつまりて、裝束き花めきたるを見れば、「大殿にうちつゞきては、この君ぞ幸ましくける」といへば、「これも誰がし奉る。その御幸のゆかりぞかし」と口々に云ひあへり。明後日くだりたまふとて、「左大殿に對面し奉らでは、いかでかは」とて參り給ふ。車の多からむは所狹し、とて、三つばかりしてなむうち渡しける。北方對面して聞え給へる事どもは、書かず、思ひやるべし。たれもく

こゝの人云
云ー落窪方
の人の中下
る人と中よ
き者を以て

正身のー本
人、四君の
帯袋ー道筋

御供にくだる人々に、北方、いとよくしたる扇二十、螺すりたる櫛、蒔絵の筥に白粉入れて、こゝの人の語らひけるして、「形見に見給へ」とて取らす。御達も、思ふやうに心ばせありて人に思はるゝ、と嬉しく思ゆ。人もめでたういみじと思ひて、おのくかたらひ契りて、かへりて、「この殿をよしと思へれど、かの殿を見つれば、儀式よりはじめて、けはひことに見侍るに、心こそ移りぬれ。あはれ仕うまつらばや」と忍びつゝいひあへり。つとめて御文あり。

よべは、ほどへむ年のつもりを、取りそへて聞えむ、と思ひ給へしを、夜短き心地して、はかなき身を知らぬこそ、哀に思ひ給ふれ。

はろばろと峯のしら雲立ちのきてまた帰りおはむ程のはろけさ

まことに道のほど見たまへ。

とて、蒔絵の御衣櫃一具に、片つ方には、正身の御装束三領、いろくの織物うちかさなりたり。上には、唐櫃の大きさに満ちたる帯袋に、中に扉白入れて、うち覆ひ給へり。

の神に手むくる品々を入る〻袋

しら雲の―立つの序

近きほどに―だに―せめて御近處に居る中に

又ちひさき衣箱一具あり。この御女に遣せ給へるなるべし。片つ方には、御裝束一具、片つ方には、黃金の箱に白粉入れてすゑ、ちひさき御髮の筥入れたり。くはしく書くべけれど、むづかし。姬君の御文には、

今日のみと聞き侍れば、何ごこちせむとなむ

惜しめどもしひて行くだにあるものを我が心さへなどか後れぬ

とあり。帥見て、「いと多くの物どもなりや。いと斯くしも給はでありなむものを」といふ。御使どもに物かづく。四の君、更にきこえさせむ方なくて、

しら雲の立つそらもなくかなしくて別れ行くべき方もおぼえず

賜はせたる物どもを、人々見るも嬉しく、いみじう物さわがしうて。

となむある。むすめの君の御かへり、

これよりも、近きほどにだに聞えさせむ、と思ひ給へる程になむ。おくれぬものはこゝにも、

まかり申し―暇乞
よそにても―他人なりし時も

身を分けて君にしそふるものならば行くもとまるも思はざらまし

となむありける。北方への今宵の御かへりをなむ見て、母北方、泣くとはおろかなり。悲しうするむすめになむありける。「七十に我はなりなむとす。いかでか六七年生けらむとする。あひ見で死なむこと」と泣けば、四の君、いみじう悲しうて、「さればこそ、いかがとは聞え侍りしか。強ひて御心とつかはすにこそ侍るめれ。今はとゞまり侍るべきにあらず。心づくしになおぼしそ。さりともあひ見侍らでは、やみ侍らじ」といへば、母北方、「我やはこの事はせし。左大殿のし給ひしかば、悲しき目を見せ給はむとて、腹きたなきわざをし給ふなりけり。何か嬉しと思ひけむ」と宣へば、四の君、「今はいふかひなし。暫の程にても、御手離るべき宿世こそは侍りけめ」といひなぐさむ。少将「世にかくばかりやは。親子の別はすれど、かゝる事、云ひつゞけて泣かすかし。聞きにくしや」と制しゐたり。帥は、左大殿にまかり申しに、参り給へり。大臣、対面し給うて、物語し給ふ。「よそにても忘侍りしを、今はましてなむ。そのちひさき人の下り侍

らうたくせさせ——愛し

故祖父殿の云々——この女を四の君の妹のやうにいひなしたるなり

たゞに——空手にて

らむを、らうたくせさせ給へ。故祖父殿の、いみじくかなしうし給ひしかば、こゝにても生ふし立てむとものし侍れど、かの母北方、一人ものし給ふを、せめて心苦しがりて、添へらるゝなめれば、え留めでなむ」と宣へば、帥、「堪へむ心の限は仕うまつらむ」といふ。暮方にまかり出づれば、御裝束一領かづけ給ひ、かしこき御馬二つ奉り給ふ。いとこまかにし給へり。かへりて、帥、四の君に、「かう〳〵なむ宣へる。ちひさくおはする君はいくつぞ」と問へば、四の君、「十一ばかり」といらへ給へば、「老いたりと見し大殿の、いかに幼き子持給へりける」といふもをかし。帥、「殿の御達のかへらむに、何か賜へたる」と問へば、四の君、「何か取らせむ。さるべき物もなければ」といらへ給へば帥、「いといふかひなき事のたまふ。この日比あり〳〵て、たゞに歸し奉らむとおぼしけるよ」と、恥しげに宣うて、これはおろかなる心ぞかし、と帥は思ひて、殘るものありけるを取り出でて、大人三人には絹四疋、綾一疋、蘇枋一反。童女には絹三疋、蘇枋。下仕には絹二疋、蘇枋そへて取らすれば、帥は情ありけりとおもふ。さて時とりて、曉に

洲濱―海濱形の造物

ひれ―領巾婦人の項に懸けて飾とせし物

おぼえなく―案外なり

いそぎ立ちていとさわがし。北方、泣く〳〵、かへりなむ事を思ひわびて、四の君をとらへて泣き居たる程に、黄金して、透箱を衣箱の大きさに結べるに、朽葉の羅に包みて入れたり。「何處よりぞ」と問へば、「たゞ自から御覽ずべきなり、と申して、使歸りぬ」と申せば、あやしくて見れば、羅海の色に染めて、しきには敷きたり。黄金の洲濱中にあり。沈の船うけて、島に木ども多く植ゑて、洲崎いとをかし。物や書きたる、と見れば、白き色紙にいと小くて、船の浮きたる所に貼著けたり。放ちて見れば、

今はとて島こぎはなれ行く船のひれふるそでと見るぞかなしき

聞ゆるからに人わろし。よし〳〵聞えじ

と書きたり。おもしろの駒の手なれば、おぼえなくあさまし。誰かしいづらむ、と北方も見て、驚きあやしがる。四の君、あはれにいひ契りなども、例のやうにもせざりしかば、思ひ出づる事はなけれど、これを見るにぞ、さすがに思ひ出でらるる。少將は、「これを左大臣殿の姫君に奉り給へ」といへば、母北方、「をかしきものにこそあめれ。猶持

妹どもの—駒の妹達

我やはせし—母北方が我やは此事はせしといひて悲しみし事

めやすく—安心すべく

たまへれ」といふめれども、四の君も、なほ萬にし給ふめるものを、と思ひて、「よかなり」といふ。少將も「猶々」といひて、「我れ奉らむ」とて取りてけり。おもしろの駒は、思ひよらざりけれど、妹どもの心ありければ、子などあれば、と思ひて、たゞにやはとてしたるなりけり。

夜更けてなむ母北方歸りける。寅の時に皆くだりぬ。車十あまりなむありける。おほやけの「疾くまかれ」と宣旨くだりければ、山崎にも居たらで、やがて急ぎ下りにけり。おくりの人々も、皆帥、物かづけてなむかへしける。殿の御達皆かへり參りて、日ごろのものがたり、我やはせし、と宣ふ事をかたれば、笑ひになむわらひ給ひける。北方、しばしは見ぐるしきまで戀ひ泣きけれど、日ごろ過ぎにければ、うちわすれにけり。帥は、播磨守待ちうけて、いみじういたはりける事は書かず。左大殿「一所はめやすくなしつ。今一所だにしたてばや」となむ宣ひける。かくて、年月經るに、めでたき事どもなむまさりたりける。大貳は、たひらかにくだり著きて、左大殿に、物いと多く奉り給

いどませ—競爭させ

面だたしく—面目なり

ひけり。左大殿の太郎、十四にて御冠、姫君、十二にて御裳着せ奉り給ふ。二郎君をも、おとさじとせさせ奉り給ふに、父大臣、かくいどませ給ふ、と笑ひたまふ。年かへりては、姫君内裏に參りたまはむとて、限なくかしづき給ふ程に、はかなくて年かへりぬ。二月に參らせ給ふ。書かずとも、儀式ありさま思ひやれ。かぎりなくをかしげにおはすれば、いと時めき給ふに、いとゞ后宮、思ひ聞え給へれば、はじめさふらひ給ふ人々よりも、こよなく花やぎ給ふ。播磨守は、辨になり給ひにけり。かの衞門が男の三河守は、左少辨にてなむありける。辨の北方にて、あまた子産み出でて、いと面だたしくて、まゐりまかでしける。かゝるほどに、大殿御心地なやみ給うて、太政大臣かへし奉り給へど、帝更に用ひたまはねば、「いといたう老いて侍れど、公を見奉らぬが悲しさに、今まで參り侍りつるなり。今年なむ、つゝしむべき年に侍れば、こもり侍らむと思ひたまふるに、この職にては、公のやんごとなき政事に參らでは、いと便なかるべし。辭し奉るかはりには、左大臣をなさせ給へ。才けしうははべらざめり。されば翁よりも

せめて—切に

宮の亮—皇后宮職の次官

御後見はいとよくしはべりなむ」と、后宮してもせめて申させ給へば、帝、「何かは、生きて物し給はむこそ嬉からめ」とて、左大臣を太政大臣にはなし奉り給ふ。世人、「まだ四十になり給はで、位を極め給へる事よ」と驚きあへり。御女の女御、后に居給ひぬ。宮亮には、少將を中將になしてなむせさせ給ひける。兵衛佐達、皆よろこびし給ふ。太郎の兵衛佐　左近衛少將になり給ひぬ。祖父大臣、「我が兵衛佐をおそくなしたまふ」と宣へば、「いとわりなき事、おのれが子のかぎりを、事のはじめには、いかゞし侍らむ」と申し給へば、「これは御子かは。翁の五郎に侍れば、何かは人の謗り侍らむ。さきには御太郎、左近の司になりにしかば、こたみは右近の少將になせ。叔父にて、甥になり劣るやうやはある」と宣うて、よく〳〵、しぶ〳〵に思ひ給ふめり、と內裏に切に奏せさせ給うて、右近衛少將になし給うて、「かうこそ見め。この子狹くうまれたらましかば、これにぞ我が官冠も讓らまし」と宣ひける。かなしうし給ふとは尋常なりや。「大殿の北方御幸を、めでたし、とは古めかしや。落窪に、ひとへの御袴の程は、かく太政大

みそかに―密に

御櫛笥殿―禁中の御裝束所の係

なりあがり―昇進し

臣の北方、后の御母と見え給はざりき」とて、猶むかしの人々は、みそかごともいひける。三の君は、中宮の御櫛笥殿になむなし奉り給ひける。帥は任はてて、いとたひらかに四の君の來たるを、北方うれし、とおほしたる、理ぞかし。かく榮えたまふをよく見よ、とや神佛もおぼしけむ、とみにも死なでなむいましける。大殿の北方、「いといたく老い給ふめり。功德をおもほせ」と宣ひて、尼にいとめでたくなし給へりけるを、よろこび宣ひていますがりける。「世にあらむ人、繼子にくむな。繼子なむ嬉しきものはありける」と宣うて、またうち腹立ち給ふ時、魚のほしき時には、「我を尼になし給へり。産まぬ子は、かく腹ぎたなかりけり」となむ宣ひける。死に給ひて後も、只大殿のいかめしうし給ひける。衞門は宮の內侍になりにけり。後々の事は次々に出で來べし。御子の少將の君達、一よろひになむなりあがり給ひける。祖父大臣亡せ給ひにけれど、「我思はばなし落しそ」とかへす〲宣ひければ、わづらはしくやんごとなきものになむ、弟の君をば思ひ給ひける。左大將右大將にてぞ、續きてなりあがり給ひける。母北方、御幸

いはずとも、げにと見えたり。帥は、この殿の御德にて、大納言になり給へり。おもしろの駒は、病重くて法師になりにければ、音にも聞えぬなるべし。典藥助は、蹴られたるを病にて死にけり。「これかくておはするを、見ずなりぬるぞくちをしき。などてあまり蹴させけむ。暫生けて置いたらむものを」とぞ、男君宣ひける。女御の君家司に、和泉守なりて、御德いみじう見ければ。むかしの安濃、今は典侍なるべし。典侍は、二百まで生けりとや。

落窪物語 終

かけたる—兼れたる
うへ—妻
通ひ—妻生家にありて夫の方より通ふは古代の通習
おひいで—生長し
うしろめたう—心がかりに

住吉物語

むかし、中納言にて左衛門督かけたる人侍りけり。うへ二人をかけてぞ通ひ給ひける。一人は、時めく諸大夫のむすめ、その腹に女君二人いできたまへり。いま一人は、ふるき宮腹の御女にておはしけるが、いかなる宿世にて、この中納言よな〳〵通ひ給ひける程に、やがて人目もつゝまずなりて、捿みわたり給ひけるが、ひかるほどの女君いでき給ひける。思のまゝなれば、おぼしかしづき給ふこと限なし。

姫君日數經るまゝに、おひいで給へり。年月かさなりて八つばかりになり給ひける年、母宮例ならず惱み給ひけるが、日を經て重くのみなりまさり給ひければ、中納言に聞え給ひけるやうは、「我はかなくなりなば、この稚きものゝため、うしろめたうなむ侍るべき。我なからむあとなりとも、なみ〳〵ならむ振舞せさせ給ふな。いかにも〳〵帝に

なみ〳〵ならんふるまひ―尋常の人の妻となること
おとりてや―疎な思ふこと汝に劣らんや
昔がたりになりはてゝ―死亡し
ことのはにつけて―事に觸れて
故宮―亡母
わたり―去り
見聞えに―見てやりに

奉らせたまへ。他娘たちにおほしおとすな」と泣く〳〵きこえ給へば、中納言もうち泣き給ひて、「我もおなじ親なれば、おとりてや」など語ひつゝ、明しくらす程に、世の哀にはかなく常なき所なれば、なさけなく昔語になりはてにけり。中納言おなじ道にと悲み給ひながら、後々の事もさるべきやうにして、四十九日もほどなう果てぬれば、もとの北方へ渡りたまひにけり。姫君をさなき御心地に、ことのはにつけて、故宮の御事を思しつゝ悲しみ給ひてけるに、中納言さへわたり給ひぬれば、いとゞ徒然かぎりなく、二葉の小萩露おもけなりければ、御乳母とかく慰めてぞ過し侍りける。

中納言、ともすれば見聞えにわたりて、かへり給へば直衣の袖をひかへて、行方もしらぬほどなれば、涙を流しつゝ慕ひまほしきけしきを、御覧ずるにつけても、はかなくなりにし人の俤ふと思ひ出づるにも、胸うちさわぎ、おさふる袖もあやしくて、いとゞ心苦しくこそ侍らむ、など語らはせ給ひて、こしらへおき、我にもあらぬ心地して歸らせ給ひにけり。かへり給ひても、姫君のおほし歎きつる面影の御心にかゝりて、ことむ

慕ひまほしき—誤あるべし

こしらへおき—賺しおき

たまふる—この處誤あるべし

迎へて見聞えむ—手許に取引りて世話せん

中の君三の君—次女三女共に繼母の娘

すめたち一所に住ませまほしく思しながら、今も昔もまことならぬ親子の中なればとて、乳母のもとに住ませきこえ給へり。日数ふるまゝに、光さしそふ心地して見え給ひければ、乳母、「あはれ、この御氣色を故宮に御覽ぜば、いかばかり思しかしづき給はむ」などいひて、御髪をかきなで、泣くより外のことなかりけり。

十餘にもなり給ひければ、乳母、中納言に申しけるは、「幼くおはします程こそ、とてもかくも侍れ。この一年二年になりて、いかにならせ給ふる、年月心もとなくなむ。悲しく故宮のおほせ候ひし御宮仕いかに」ときこえければ、中納言「嬉しくも心に懸けぬることよ。我も忘るゝ時なけれども、思ふにかなはぬ事のみにてこそは過ぎゆき侍れ。さりながら迎へて見聞えむ」とて、正月の十日と定めて歸り給ひぬ。やうやう其日にもなりぬれば、迎へ奉り給ひたれば、今二人の御女たちと打語ひておはしますを見て、いと嬉しき事にぞめやすく思しける。中の君、三の君は、とり〴〵にいと匂ひやかに、なべてのにはあらぬ御氣色なれど、姫君は、今一しほにほひ加はりて、光るなどはこれを申

なべてのにはあらぬ―並々の容色にはあらぬ
ありつかはしく―似合はしく
住ませ―姫君を
聞き人には―人前にては
はていかゞ―行末如何にならん
かきくもり―胸ふさがりて
よみぢやすく―死しても心安く歿

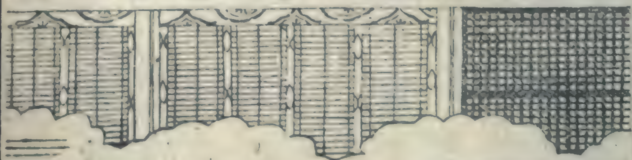
すにやとぞ見え給ひける。この姫君の御乳母子に、侍從ときこゆる侍りけり。年は姫君に今二つ許のまさりにて、姿有樣ありつかはしく、ものなどいひ出したる樣も、いとおらまほしくぞ見え侍りける。これぞ姫君につきそひて、互に片時も立ちはなれむも物憂く思ひてぞ明しくらし給ひける。中納言、西の對しつらひて住ませ侍らむとて、その營にてぞ侍りける。繼母こゝろの中にはいかゞ思ひけむ、人ぎきには聞ゆるやう、「誠に母宮におくれ給ひて後、迎へ奉らまほしう侍りつれども、今日々々とのみ思ひて過しつるに、わかき人々あまたおはする、互につれ〴〵慰めて、いと嬉しきことにこそ。いかにをさなき心地に、その昔戀しくおぼし出づらむ。あなあはれや」と聞ゆれば、乳母「まことに年比あやしき所に埋れておはせしに、はて如何など、かきくもり悲しく侍りしに、これを見奉れば萬はれぬる心地して、よみぢ易くこそ」など云ひつゞけて、うち泣き侍りけり。

むかひばらなれば、中の君には兵衞佐なる人おはせてけり。西の對に住みたまへば、中の



目と得る
むかひばら―今の妻の生める子
おどろかし―注意し
思ふさまなる人―氣に入りたる女
あくがれて―落ち付かぬこととなり
夫にてありける―誤なるべし
をさなおひ―幼時の見びら
曹司―部屋

昔、三の君むつれ遊び、互にむつましく思ひておかし暮し給ひけり。「故宮の仰せられし御宮仕のこと如何に」と御乳母わするゝ時なくおどろかし侍りければ、中納言、「われも思ふ時なけれども、北方に聞えあはせむに、我子ならねば心に急がむことも難ければ、いひも出でず」とて思ひわづらひ給ひけり。かくて月日重りゆくほどに、右大臣なる人の御子に、四位少將とて世に勝れたる人侍りける。いかにも思ふさまなる人もがな、と朝夕は御心も空にあくがれて物悲しきに、右大臣のはした者に、そらさへといふ者の夫にてありける下仕になりて、筑前と聞ゆるなむ、中納言宮の世までは、主殿太夫といふものを夫にて侍りければ、朝夕にこの姫君をば見聞えけり。筑前、右大臣の家の北方にて人のよしわろき事語るついでに、「中納言宮腹の姫君こそ、をさなおひめでたく、二葉の小袖を見る心地せしか。いかにおひいで給ひたらむ。故母宮のうせ給ひて後は、四五年は見侍らず」といふを少將立ち聞きたまひて、いと嬉しき事を聞きつるものかな、と思して、我が曹司に筑前を呼びて、「見るらむやうに、さらとある人數多あれども、物愛



さもとある人―妻の候補者

むつましく―なつかしく

申しひらかむ―無沙汰の言譯せん

くのみして過ぐす。中納言の宮腹の姫君は見しか」と尋ね給ひければ、筑前、「夫にて侍りしもの、故母宮に侍りしかば、よく見奉りて侍りし。世にうつくしく候ふ。中納言殿は宮仕をと宣へども、打叶はで思し歎くとぞ承る」といへば、「その人の事いひよりて、文など傳へてむや」と宣へば、「かなはむことは知らず、御文をもて參りてこそは見侍らめ」と聞ゆれば、よろこびて、十月ばかりに、紅葉重の薄樣に、

はつしぐれ今日ふりそむるもみぢ葉の色の深きをおもひしれとぞ

と書きて、ひき結びてやり給へば、その日の暮れかゝる程に、筑前は、中納言の許にまかりつれば、人々めづらしみあへる中に、侍從、「あなゆゝし。いかに思ひいでて參り侍るにか。その昔の心地して、いとむつましくあはれにこそ」などいへば、筑前、「はかなきことのみ繁く候ひて、心ならず今まで參らざりし。わが身ながらつらく侍るを、さてのみやはあるべきとて、まうしひらかむとて參り侍るなり。いつと云ひながら、年よりては過ぎ來し方の戀しさの頑はしさに、人々をも見奉らむとて」などいひて、姫君

かたくなはしさ—一徹なる
おぼえずながら—思ひもよらぬ事なれども
かく—斯様斯様
所せき—餘る涙が
さのみこそは—其位の事なるべし

も、ありし昔の言の葉さへあはれにとぞ聞き居給へる。さても出でざまに、筑前、侍従を呼びいだして、「右のおほいどのの御子に少將殿とまうす人の御文なり。かやうの事は口入れしにくゝ侍りながら、やんごとなき人のいたく仰せらるゝ事の否みがたさに」といへば「いさやおぼえずながら、宣ひあはすることなれば」、とて姫君にしか／＼の文とて、ひきひろげて御側におきたれば、御顔うち赤めて、兎角の御事もきこえ給はねば、理りと思ひて斯くなどいへば、筑前、そのつとめて少將殿にまゐりて、ありのまゝに聞ゆれば、「さても／＼如何おひいでさせたまひたる」と問へば、「まことに此世ならず側光ほどになむ。琴の音搔きならして御座ましゝに、筑前まゐりて、そのむかしの事ども人々に語らひ侍りしかば、母宮の御事どもをり／＼歎き給ひし御すがた、いへばおろかにこそ。女郎花の露おもげにて、まがきの外にたふれ出でたる心地して、その事となく哀にいとほしく、よその袂までも所せきほどに」などいへば、いよ／＼心空になりて、「はじめはさのみこそは、また／＼も聞えさせよ。この事かなへたらば、この世ならず思

ならはせ給はねば―姫君は斯かる事に馴れぬ故に

卑しきことならば―相手が卑賤の人ならば

おぼえ少き―御寵愛少き

なにはの事―如何なる事

いかでか―

ひ侍りなむ」とのたまへば、「すき〴〵しきやうに侍れども、昔のかくまで思したらむ事をば、いかで愚には」と聞ゆれば、いとうれしくて、また文書きてたまひければ、とりて侍従にとらすれば、「ならはせ給はねば、いみじく侘しげに思したる事のいとほしさに」などいへば、筑前、「おのれも卑しきことならば、何しに申さむずるに、覺えすくなき御宮仕よりは、この公達におはしまさば、中々めやすきことにてこそ。承るやうにては、その御宮仕の御事もかたくこそ、此少將殿は、今の后の御兄なれば、只今世にいで給はむずる人なり。御姿よりはじめて、なにはの事に付けてもひとしき人やはおはする。御ため後めたきことをば如何でか」といへば、「いさや、中納言殿も内參のことより外にのたまはず。なみ〳〵ならむさまにおぼしよらむ事はよも」といへば、姫君うれしと聞きゐ給へり。筑前「一くだりの御かへしにても給はらむ」とて責めければ、「かやうの事もならはねば」とて、思ひ放ちたるさまを見て、かへりつゝこま〳〵と語り聞ゆれば、少將、「さこそあらめ。たゞなほ〳〵も聞えさせよ。如何なるべきにか、この事かなはずば、世





何か計らはん

思ひ放ちたる―思ひもよらぬ

ゆく水に―「行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」伊勢物語の歌

對の君―姫君をいふ西の對に居れば也

あらがひ―抗辯し

いたはられ

にあるべき心地もせねば」とてうち眺めがちにておはするを、見るにもいとほしく、月毎に行きてほのめかせども、行水に數かく心地して、いひ煩ひありく程に、繼母この事ほの聞きて、筑前を呼びて、「このほど對の君に文つかはすなるは、いかなる人やらむ」と問へば、昔はとかくあらがひ侍りけれども、あながちに問はれければ、ありの儘にしかじかと聞ゆれば、繼母これを聞きて宣ふやう、「さやうの公達は、人にいたはられむとこそ思すべけれ。母もなき人よりは、三の君のねびまさり給ひたるに、さるべきさまと思ふに、みよりにこそ。たばかり給へかし。さらばそこをこそ、この世ならず思ひ侍らめ」と心ふかくいひければ、さすがに否がたさに、「まことに度々聞え侍れども、御返もたまはねば、少將殿、筑前をのみ責めさせ給ふもわりなく侍る。さりとても後まで申しえむことも、かたげに見ゆるも心苦し。さらばさちこそは」といへば、よろこびて、白き小袿一かさね、「これは三の君の」とて出し給ひければ、悦びて、「さらば少將殿には、もとの御志の人なりと知らせ奉らむ」と申しければ、「よく宣ひたり。その由にてこそ

む―大事にされん
れびまさり―年と共に美しさ増し
申しえむことも―御返事を戴くことも
さらば―然らば先方には元の姫君のつもりにして三の君を取持つべし
ゑみまけて―大ほく〳〵もので
この御かへ

は」とてよろこび給ひけり。その後筑前、少將殿にまゐりて、「申しえむ事はありがたく侍れど、今一度御文をたまひて聞えて見む」といへば、いとうれしくて、かくぞありける。

世とともに烟絶えせぬ富士の嶺のしたの思ひやわが身なるらむ

とかきて、筑前とりて、少將殿の御文とて繼母に奉れば、ゑみまけて、「美しくも書き給へるものかな。この御かへし」と聞ゆれば、三の君たばかられることをば知り給はず、はぢしらひたる姿いとめやすく、いとほしきさまなり。硯紙とりいだして、「それ〳〵」と責められて、顏うちあかめて、

富士の嶺の烟と聞けばたのまれずうはの空にやたちのぼるらむ

と書きて引き結びたるを、筑前とりて、少將殿のもとに行きて、「御返」とて聞ゆれば、少將たばかられるも知らず、急ぎあけて見たまへば、手なんど幼びれて見えけれども、悅び給ふこと限なし。またも〳〵通はしけり。對の御方の人々この由ほの聞きて、いとを

し——この返事なかき給へ

すぎさまに——通りがかりに

つまとなる——機會となる

かしく思ひおひたまへり。

かくしつゝ、日數も經ずしてかよひ給ひける。少將何心もなくてぞ過し給ひける。幼きさまも理と思ひつゝ、晝もとゞまりて見給へば、聞きし程にはあらねども、なべての人には侍らざりければ、かよひ給ひけり。中納言もたばかられるも知らず。少將に逢ひて、よろづ聞えあはせてぞ侍りける。繼母かしづき給ふこと限なし。寢殿の東面に住ませければ、少將すぎざまに西の對を見れば、よしある樣なれば、いかなる人の住むにやと、ゆかしく思して、おかし暮す程に、少將、秋の夜のつれ〳〵と長きねざめに、悲しくもの哀なる小夜中に、閨ちかき荻の葉にそよめき渡る風の音も、夜ごとにかよふ心地して、いとはだ寒き枕の下に、夜もすがらおとなふ蟋蟀の聲も、そのこととなく鳴くに、涙おさへがたきつまとなるをりふしも、やさしき箏のことの音そらに聞えければ、あなゆゝし、こは如何に、と思ひて、枕をそばだてて聞き給ひければ、西の對に聞きなし給ひけり。日比よしありて見るに、いよ〳〵いかなる人にか、と心をしづめて思ひ給ふ中

とへば|三の君に也

今は|以下少將の詞

何しにか|何の爲にか知らすべき

に、我が語ひそめし人こそ琴をば彈くと聞きしか、と思ひて「これを聞き給ふにや」と問へば、「始よりあはれに聞きつる」と宣へば、心ありと思ひて、「これはいかなる人の琴の音」と問ひたまへば、「我が姉にて侍る人の彈き給ふなり」と宣ひければ、「兵衞佐殿のか」と問ひたまへば、「さにはあらず。宮腹にておはするなり。常に心をすまして琴を彈き給ふなり」と何心もなく語るもいとほしながら、心の中には、あさましく計れにけるものかな、と思ひつゝ、對の方にいかばかり嗚呼がましく思ふらむ。筑前が口をしさよ。と思ひて、明けもはてねど、出でて筑前を呼び寄せて、恨み給ひけるに、いひやるかたなく、かたはらいたく思ひてぞありける。「今はいふにかひなし、なほ知らぬ顔にて過さむ。あの邊にだも、あなかしこ〲聞えさすな」と宣ひければ、筑前顔うちあかめて、「なにしにか」とてぞたちにける。

少將は、三の君をもあはれ、と思ひながら、思ひそめてしことの末なからむのみにあらず、さしも聞えざりし人だにもか程こそ侍れ、ましていかならむ、とゆかしくぞおもひ

いづれを梅と―古今集「雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし」

よろづ人のつゝましさに―萬事人目の憚らるれば

侍りける。いかでか見奉らむなど思ひわたるほどに、冬にもなりにけり。侍従にいかでか物いはむ、と思ひて、思ふほどの事ども書き給ひて、直衣の腰にさしはさみて、雪のいみじう降りたる日たゝずみありきて、蔀のもとに立ち寄りて聞けば、端近くゐざりいで給ひて、「をかしき四方の梢かな。いづれを梅とわけがたくこそ」といひて、うちはらふ中に、今すこし忍びたる聲にて、琴かきならして、「かひの白根をおもひこそやれ」といひてけり。これなむ姫君よ、と胸うちさわぎて、しのびかねつゝ蔀をうち叩けば、「あやし誰ならむ」と見れば、少將たちたまへり。侍従あさましく思ひて、かへりなむとする裳の裾をひかへて、結びたる文をやり給ひて、「よろづ人のつゝましさに」とてかへり給ひにけり。あやしくいかなる文かと見れば、

　白雪の世にふるかひはなけれどもおもひ消えなむことぞかなしき

とて、さまざまの事書き給へり。姫君にこれを聞ゆれば、さすがに哀に思ひながら、「餘所なりし當時だにも思ひよらざりし、今はいよいよ人ぎき見ぐるし。ゆめゆめ」とぞき

うちゆりたりける—奥まで立入ることを許されたるもの

衣のつま清げに出して—車内に特に衣服を入れて車の前後の簾の脇より外に垂れしむ之を出しぎぬといふ。

こえける。

かくしつゝ新玉の年もかへりにけり。正月十日あまりのころ、中の君、「今や嵯峨野の春の氣色をかしかるらむ、忍びつゝみむ」など誘ひければ、おの〳〵、まことになどいひて、出で立ちたまひけり。侍もうちゆりたりけるをぞ、御供にまゐりけり。網代車三輛、一輛には姫君、今一輛には中の君、三の君、一輛には衣のつま清げに出して、若き女房下仕など乗りたりけり。少將ほの聞きて、嵯峨野へさきに行きて、松原にかくれ居て見れば、この車ども近くやりよせて立てならべたり。雜色、牛飼などをば遠くのけて、侍二三人ばかり近くよせて、女房はしたものなど、車よりおりて松ひき遊びけり。姫君たち車のすだれあげたれば、たしかならねどほのかに見ゆ。少將よくかくれて見るをも知らず、女房ども、「いとをかしき物のけしき御覽ぜよかし。見苦しくも侍らず。さまざまの草ども萠えいでたり。なつかしく」など聞ゆれば、中の君おりたまへり。紅梅の上に濃き綾の袿著給へり。さし歩み給へる樣いとあてやかに、髮は袿の裾にひとしかり

松ひき―野に出て松を引き取るは初子の日の遊のならはし也。此日子の日なるべし

ありつがはしき―似合しき

とみにも―急にも

ふみしだき―踏みちらし

隱れたる―當時の諺

けり。次に三の君おり給へり。花山吹の上に萌黄の袿なり。ありつがはしきさまは今少しまさりてぞ見えたまへり。姫君はとみにもおり給はぬを、「いかに」と責めければ、侍従さしよりて、「いかに人をばおろし參らせて」と申しければ下りたまへり。櫻がさねの御衣に紅の單袴ふみしだき、さし歩み給へる御すがたいとらうたく、うつくしなど云ふもおろかなり。髪は袿の裾にゆたかにあまり、丈のほどまみ口つきいとあてやかに、こと人々よりも今ひとしほ匂くはゝりて見え給へば、これを人に見せばやと驚かれたまふ。

おの／＼人ありとも知らで遊びあへるを、よく／＼見給ひて、少將あくがれて、大なる松の下に居給へるを、この姫君しも見つけたまひて、顏うちあかめて、いそぎ車に乘り給へるにつけても、心あるさまなり。おの／＼騒ぎて隱れあへるさまも、あらまほしき程なり。少將のたまふやう、「嵯峨野のゆかしさに遊びつるほどに、車の背のし侍りつれば、あやしや誰にか、とてたち忍びたるほどに、隱れたる信あれば、現れての利生とか

まつ—松、待

そなたにこそ—君こそ返歌はし給ふべけれ

いひかはし—相談し

よしなきありき—つまらぬ出行き

むげに—無下に、一向になり

や、參りあひたる嬉しさよ」とて、

　春霞たちへだつれど野邊にいでてまつのみどりを今日見つるかな

とてうち誦じたまへば、中の君は姫君にそれときこゆれば、「そなたにこそ」と宣へば、互にいひかはし給ひて、中の君、

　かた岡のまつとも知らで春の野にたち出でつらむことぞくやしき

とあれば、少將殿、

　君とわれ野邊の小松をよそに見てひきてや今日はたちかへるべき

とて、「この度は姫君に」と聞え給へども、よしなき歩行をして見えつることを悲しく覺えて、うちそばみて御坐するを、「いかで」など責めさせ給へば、御返事なくても、むげに知らぬやうに覺えて、姫君、

　手もふれで今日はよそにて歸りなむひとみの岡のまつのつらさよ

といひ消ち給ひければ、少將いよ〳〵忍びがたさに、車のきはにたち寄り給ひて、「なに

かひも侍らじ—既にに見知られし上なれば隱れたりとも效あらじ
いつかは—何時下りたる事ありや
御口清さよ—すました口なきかるるものかな
いかに—其の調子にては夫君に對してさぞ物爭ひなせらるゝならん
つゝまし—

隱れさせ給ふらむ、かひも侍らじ」ときこゆれば、中の君、「車よりは、少將殿の一所こそおりさせ給ひつれ、餘の人はいつかは、知りたりがほにも宣ふものかな」といへば、少將うち笑ひて、「ゆかしき御物あらそひかな。いかなるよめにもこそはしろく侍るなれ。御口ぎよさよ。いかに兵衞佐殿に御物あらがひのあるらむ。うしろめたさこそ」など戲れたまひけるも、たゞ姫君にこそと氣色は見え給ひにけれ。少將殿、たび〳〵歌などよみ給へり。

年を經ておもひそめてしかたをかの松のみどりはいろふかく見ゆ

とあれば、中の君、

ほどもなき松のみどりのいかなれば思ひそめつつとしをへぬらむ

三の君も同じくかくなむ。

千代までと思ひそめける松なればみどりのいろもふかきなりけり

姫君もつつましながら、



耻かし

子日してはるのかすみに立ちまじり小松がはらに日をくらすかな

車よりおりたまひて、遊びたまふ御有様を見参らせ給ふにつけても、少將、この世に如何にながらへてあるべしとも覺え給はず、心憂くて人めも知らぬ程にぞ悲しみける。さて日も暮がたになりけるに、鶯の鳴きければ、初音めづらしく聞きて、三の君、

わが宿にまだおとづれぬうぐひすのいさへづる野邊に長居しつべし

中の君、

初聲はめづらしけれどうぐひすのなく野邊なればいざかへりなむ

ときこゆれば、少將、かくなむ。

はつこゑは今日ぞ聞きつるうぐひすの谷の戸いでて幾世へぬらむ

と宣ひて遊びくらしつゝ、かたがた歸り給へば、少將殿、人のおもかげ身にそひたる心地して、おもひは離れがたく、心の中も苦しきまゝには、侍從におひて、「あさましき人にはかられて、かゝるもの思ふ事のわりなさよ。如何にをかしと思しけむ。消えも失せ

これ―この文を

立ち寄らせ―姫君に乳

まほしけれども、さすがに棄てやらぬものは人の身に」などとて、うちなみだぐみ給ひて、「今はいかゞ。たゞ一こと聞えさすべきことの侍り。これ御覽ぜさせよ」など度々のたまひければ、侍從「昔だにも聞え煩ひし事なり。今はいよ／＼かたき仰にこそ」といへば、「我君、一度の返事をたまひたらば、この世の思出にこそと思ふなれ」と聞ゆれば、それも如何と思へども、いなみがたくて、度々ほのめかしけれども、かなはざりけり。

さるまゝに、少將思ひかねて神佛に祈りたまひける。三の君のもとへもゆかまほしけれども、思ひあまりては侍從に逢ひてこそ心を慰むれ。西の對のけしきをたゞ見ずなりなむ事の心憂くて、常はかよひければ、宵曉に對を過ぎ給ふとては、古き歌のいとあはれなるを、をかしき聲にてうたひつゝ、袖のしほるばかりにて過ぎありき給ひける。かくしつゝ明し暮すほどに、姫君の乳母例ならず心地おぼえければ、姫君のゆかしうおはしますに、立ち寄らせ給ふべきよし、侍從が許へいひやりければ、忍びつゝ御座したりければ、乳母起きいでて泣く／＼きこゆるやう、「さだめなき世と申しながら、思ひぬる

母の許に立寄り給はれと言ひやる也

かゝる心のつきぬれば—斯く異常に戀しく思はるれば

定り給はむ—身のかたまり給はむ

はての日—四十九日

ものは頼みすくなくなむ。常よりも此度は御ゆかしくて、かゝる心のつきぬれば見奉らむことも此度ばかりにや、と思ゆるに、あはれは母宮のおはしまさゞりしをこそ、悲しと思ひつるに、この老嫗さへなくなりなむ跡のゆゝしさよ。ともかくも定り給はむを見奉りて後こそと思ひしに、これを見おき奉りて、死出の山を迷はむことの悲さよ。はかなくなりなむ後は、侍従をこそはゆかりとて御覧ぜさせ侍らむずらめ」などいひて、御髪をかきなでて、さめ〴〵と泣きければ、姫君も侍従も袖を顔におしあてゝ、「我もともに具し給へ」と聲もしのばず泣き給ひければ、よその袂までも所せく聞えけり。さて侍従をばおきて歸らせ給ふべき由聞ゆれば、かへり給ひにけり。かくしつゝなやみまさりて、五月のつごもり比に、はかなくなりにけり。姫君、侍従が思ひさこそあるらめ、と乳母のなげきの上に、侍従が心苦しさ思ひやり給ふ。侍従は、母のかなしみの中に姫君の御つれ〴〵を歎きつゝ、さて後々のわざも細々といとなみけり。はての日、姫君の常に著給ひける袿一かさね、侍従が許へ遣はすとて、

この程こそ—母の死したれば也
暁の—小一條院の御歌の上の句詞書に「女の許にて鐘の音を聞きて」
これを—上の歌の下の句

からころも死出の山路を尋ねつつわがはぐくみし袖をとひなむ

とつまに書付けて遣り給ひければ、侍従是を見て、顔に押當て人めもつゝまざりけり。

とかくいとなみ侍る程に、七月七日あまりに姫君の許へ参りけるに、初秋の月いとあはれなる夜、端近く出でて、世の中のはかなく哀なることを聞えあはせて、泣き給ひたるを、少將たち聞きて、あはれさ限なかりければ、とぶらひ侍らむ、とて蔀を叩けば、侍従は、少將なりとて、出であひて聞ゆるやう、「物おもふは悲しきこととは、此程こそ思ひしられ侍れ」といへば、「さこそは侍りけめ。あなあはれ」などいひかよはす程に、小夜も半に過ぎて、鐘の音聞えければ、侍従、何心もなく物語りの中に、

暁の鐘の音こそ聞ゆなれ

といへば、

これを入相とおもはましかば

とうち詠め給ひけり。姫君も哀れとぞ聞きとがめ給ひける。さて夜も明けにけり。

かくしつゝ過ぎ行くほどに、少將いよ〳〵深く思ひなりて、「たゞ一もじの御返事のゆかしきなり。やすき程の事を、人の願ひかなへ給へかし」などいひて、

秋の夜の草葉よりなほあさましく露けかりけるわがたもとかな

など、あさからぬ樣に聞えければ、「あまりに人のつれなきも哀も知らぬに侍る」とて、歌の返すゝめければ、「あはれと思へども、人めのつゝましさにこそ」とて

あさゆふに風おとづるゝ草葉より露のこぼるゝほどを見せばや

と書きてうちおきたまふを、侍從とりて、

ゆかりまで袖こそぬるれ武藏野の露けきなかに入りそめしより

と書きそへてやりければ、少將うち見て、うれしさにも胸さわぎて、「一ことばの御返事に、世の中の背きがたく、侍從の心のありがたさよ」とて

武藏野のゆかりの草の露はかりわかむらさきのこころありせば

などいひ返しける。かくしつゝ多くの月日かさなるまゝに、いよ〳〵思ひまさりて、世

すゝめ—侍從が

ゆかりまで—緣につれたる我までも

ゆかりの草—侍從

わかむらさき

きー姫君

ながめ給ひてー少將が

くるー來る

繰る

の中をもすさみ宮仕をも忘れて、心のまゝなることならば、消えもうせまほしき程なりければ、

あまの原のどかにてらす月かげを君もろともに見るよしもがな

となむ。されども、この度は御返事もなし。

何となくながめ給ひて、三の君の御方へおはして見給へば、何心なくおはするを、いとほしくて、御物語などして、かやうに世の中のはかなきことを仰せつゞけられ、「我いかにもなりたらむ時思し召し出しなむや」と少將宣へば、三の君「時々聞え給ふさへ心憂く覺ゆるに、まして、さもあらば、我が身いかにせむ」と宣ふも、さすがに是もあはれなり。明けぬれば立ち歸らむ、とし給へば、「如何に」などきこゆれば、少將、

たえなむと思ふものから玉鬘さすがにかけて苦しと知らなむ

と宣へば、三の君、いとあはれに思ひて、

絶えはてむことぞかなしきたまかづらくる山人のたより思へば

おろしこめて―格子下して戸締したる也

心憂く―三の君が

まして―況や御出家などの事もならば如何程悲しからん

と宣へば、少將さすがに見捨て難く仰せけれども、明けぬれば歸り給ひて、いつしか御文あり、

白露とともにおきゐてはかなくも秋の夜すがらおかしつるかな

かく申し給へども、まだ人めもつゝましさにや、御返事もなし。暮るれば對の御方におはしまして、見給へば、おろしこめて人もなし。三の君の方へ御座しましたれども、物憂くて立歸りなむ、としたまへば、心憂く覺えて、

たまさかにみちくる潮の程もなくたちかへりなむ事をしぞ思ふ

としたにほのめかし給ふも捨てがたくて、少將宣ふやう、「何となく世の中の心憂くのみ侍れば、深き山にと思ひたつに、その時おぼしいでなむや」と宣へば、三の君「いかに、何故にさることは侍るべき。たまさかに待ちつけ侍るだにも心うくこそ。まして如何におはれにか」とてうち泣き給へば、あはれにて「誠やあらましごとぞ」とて、とかく明して、出でざまに對にやすらひて、

草のゆかり—三の君と姉妹なるをいふ
おなじ蓮—一蓮托生
五節に—五節の舞姫に
わが子ども—實子
はからひにて—御はからひにてなるべし君の意見通り

君があたり今ぞ過ぎ行くいでて見よこひする人のなれるすがたを

とをかしき聲して歌ひければ、侍從聞きとがめて、窓をおしあけて「いかに」といへば少將、「世の中のうさまさりゆけば、深き山にもなど思ひとりて」などいひ給へば、侍從、「いでや一念隨喜とこそ承れ。まして武藏野の草のゆかりなれば、おなじ蓮にこそ」といへば、「うれしき善智識とかやにこそ」と戯るゝも忘れがたくて、「かくこそ笑ひ給ふとも、哀とおぼしあはする事もありなむものを」といひつゝ明し暮すほどに、九月にもなりぬれば、中納言、北方に宣ふやう、「行末は知らず、二人の君はありつきぬ。この對の方を今年の五節にまゐらせばや、と思ふに、打あはぬことの心うさよ」とて歎きたまへば、わが子どもに思ひまし給へるをねたしと思ひながら、云ふやう、「なか〳〵覺すくなき宮仕よりも、ときめかむ上達部などにあはせ給へかし」などいへば、「なみ〳〵の人には見せむ事もあたらしさに」など宣へば、繼母「ともかくもはからひにてこそ」といひながら、如何にしてかあやしき名を立てゝ思ひうとませむと案じけり。

あやしき名を立てゝ—繼姫君に惡名を立てゝ思ひうとませむ—中納言に

霜月の事なれば—五節の舞は十一月の中の丑の日に行はるれば也

げに〳〵—實に〳〵罰をあて給ふべし

よく〳〵聞

中納言霜月のことなれば、出立をのみ營まれければ、繼母ともにいとなむ氣色にて、したには、人わらはれになす由もがな、と思ひ、人しづかなる時に中納言に聞ゆるやう、「聞きながら申さゞらむは後めたきことなれば、申すなり。この對の御方をば、我が女たちにも勝れておはせよかし、とこそ思ひ侍るに、この八月よりのことを露知らざりけるよ」とて空泣をしければ、中納言あきれて、「こは何事ぞ」と問ひ給へば、「六角堂の別當法師とかやいふあさましき法師の、姫君の許へ通ひけるが、この曉も寢すぐしたりけるにや、對の格子をはなちて、人の見るともなく出でにけることの心うさよ」とて、「これ僞りならば、佛神などげに〳〵」といひければ、中納言「よもさることはあらじ。女房などの中にぞさる事はあるらむ」と宣ひければ、「中の格子を放ちていでけり。うはの空なる事をばいかでか。よく〳〵聞きてこそ」などいひ給へども、なほ實にと思ひ給はざりけり。

繼母、三の君の乳母に、極めて心むくつけかりける女房に聞えおはするやう、「この對の

きてこそ―つきとめたる上なればこそ斯くは申上る也

むくつけかりける―陋劣なる

思ひまし給へる―勝りて愛し給へる

うれしく―嬉しく御相談ありしよ

ゆゝし―忌はし

いみじき―大變な

心得ぬ―合點のゆかぬ

君を、我が女たちに思ひまし給へるが妬さに、とかく言へどもかなはぬ。如何すべき」といへば、むくつけ女、「我もやすからずは侍れども、おもひながらうち過ぐし候ひつるに、嬉しく」とてさゝめき合せて、その後三日ありて、あやしき法師をかたらひ、中納言に聞ゆるやうは、「僞とぞおぼしたりしに、只今かの法師いづるなり」と聞ゆれば、見給ひけるときに出でにける。「あなゆゝしの事や。をさなくては母に後れて、また乳母さへに離れて、あはれ果報わろきものとは思へども、あさまし」とて入り給ひぬ。さて宮仕のことは思しとまりぬ。

中納言對におはしければ、姫君何心なくゐ給ふにむかひて、「いみじきことのみ出でくる事のあさましさよ」と宣まへば姫君も何事にやと思ひたまへり。中納言立ちざまに侍従を喚びて宣ふ。「あさましき事を聞けば、内參はとまりぬ」とばかり宣ひてかへり給へば、心得ぬことなれば、いひやる方なくて止みにけり。さるにても如何なるにか、とて、式部といふ女の對の方に心よせなるに逢ひて、「中納言殿のしか〴〵と仰せられしは何事に

ひきかづきて—衣をかぶりて
し得たる—しすましたる
見せばや—嫁せばや
この由—姫君の聟になりたき由
さてのみやは—其儘にも過さるまじ
たゝむ月—來月

や聞き給ふか」といへば、式部、しかぐ〜たばかる由をいひけり。侍從さわぎて、姫君に聞え合せて、「母なからむものは世に長らふまじき事にこそ」とて、二人ながらひきかつぎて打臥しながら、「この事誰にも聞えさすなとて云はむ程に、あなたこなたの名のたゝむことも見苦し」とぞ宣ふ。繼母はし得たる心地して、むくつけ女も、二人下笑に笑みあへり。

中納言、內參こそとゞまり侍らめ、さもあらむ人に見せばや、と覺す程に、內大臣の御子に宰相にて侍りける人、左兵衞督にて廿五六ばかりなるが、よろづ人に勝れたるに、この由ほのめかしければ、中納言いとよき事よ、とて、霜月とさだめてけり。おそろしき心とも知り給はず、繼母にいひ合せ給へば、「よき事にこそ」といひて、下にはいと胸いたきことに思へり。中納言對に立ち寄りて、侍從にむかひて、「內參のとゞまりしは口惜ながら、さてのみやはとて、たゝむ月に左兵衞督にとおもふなり。そのよし心得ておはすべし」とて、母宮の三條堀河なる所をしつらひて、そこに住ませ奉らむ、と營まれ

あり經むまに、—月日のたつ間に

語らはむとする—妻になれと

しわぐみ—皺よりて

けり。

姫君、「親ながら思すらむことの恥かしさよ。たゞ尼になりて聞えざらむ所にとおもふ」と宣へば、「中納言殿のかくまで思したらむ、そむき給はむはいと本意なきことにて侍るべし。北方にこそ本意なくおはしますとも、あり經むまゝに聞きひらき給ひてむ」などぞ、侍從いひ慰めける。繼母猶この事をそねみて、むくつけ女にさゝめき合せて、「この姫君を、さしもなからむずる下衆に盗ませばや」といへば、むくつけ女うち笑みて、「うばが兄の主計助とて、七十ばかりなる翁の、目うち爛れたるが、このほど年比の妻にはなれて、人を語らはむとするに、聞き入るゝ者もなきに、思ひ煩ひ侍るに、このよしを申さばや」と聞ゆれば、「言ひ合はするかひありて、いと嬉しくこそ。疾く〳〵と急ぎて」と宣へば、かしこに行きてしか〴〵と聞ゆれば、主計助しわぐみ憎さげなる顏して、ほほゑみて、「あなうれし。よきことかな。中納言殿や心えずおぼしめさむずらむ」といへば、「それは北方のよく〳〵計らひて」などいへば、「それはよきこと。あなめでたし。疾

く疾く急がばや」といふ。よく〳〵かためて歸りにけり。繼母にしか〴〵と聞ゆれば、ゑみたまうて、「たゞ神無月二十日比など聞ゆれば、十日よりさき」とさゞめくを、心よせの式部、聞きてうちさわぎて侍從に「しか〴〵とたばかり給ふなり。恐れは侍れどもゆゝしく罪深きことに侍れば、あはれさに」など聞ゆれば、「今までながらへておはします心うさよ」とて、「さきの度尼になりなましかば。そこに留めおきて、かゝる事をも聞かする」とあれば、侍從「かくまでのこととこそ思ひ侍らね。この度は理にてありける」と、ねをのみ泣き給ひけり。

さて「かくてのみ御坐しますべきにあらず中納言殿に申せ給へかし」と聞ゆれば、「北方になき事をいひつけ奉るにや。是を晴れたりとも、またも〳〵勝りざまの事もあるべし。又いかなる事もか猶たばかり給はむずらむ。たゞ聞えざらむ野山の中にて尼になりて、この世を思ひ離れむ」と聞ゆれば、「此度は理にて侍り。さらば侍從も尼になりて母の後世をもとぶらひ侍らむ。いかにその時あはれに侍らむ」とて、二人ながら袖も絞

二十日比など―左兵衛頭との婚期は二十日頃との事故十日前に盜ません

おそれは侍れども―北方に對してなりなましかば―尼になりたらばよかりしに

この度はことわり―姫君の言分が申せ―申させなるべし

るばかりにて、斯くはいひながら、わかき人々なれば、何處にていかにすべしとも覺えざりければ、姬君「乳母だにあらばともかくも計ひてまし。今はそこをこそ何とも賴みたれ。この月も過ぎなむとす。いかにも計ふべし」と宣へば、侍從も「いかにとも覺えず」などいひつゝ、とかく案ずるほどに、故母宮の乳母なる女の、宮に後れまゐらせて後に、尼になりて、住吉になむ侍りけるを思ひいでて、「覺えさせおはしますにや。しかしか」と聞ゆれば、「然るものありと覺え侍るなり。いかでか告げやるべき」とあれば、侍從が母の許にありける女のよく知りたるを呼びて、遣りける文に、

さても久しきなどはおろかなるにこそ。姬君のおひ出でさせ給ひし時、母宮もはかなくならせ給ひながらも、いとおとなしくならせ給うて、その後また侍從が母なりし人も隱れにしかば、誰も〳〵知る人もなくて、其方の戀しさに。おなゆかし。さこそ世を背きたまはめ、恨めしくもかき絕え思ふものかな。忘草のしるべとかや。さてもく人傳ならで、申しあはすべきになむ侍る。よろづを棄てて夜を晝にまゐる

聞ゆればー侍從が姬君に

北の方に云云ー繼母を讒するに落つべし

これを晴れたりともー今度の寃を雪ぎたりとも

久しきなどはー久しき御無沙汰位の言葉にては之を形容するに足らず

戀しさに―其方の戀しさに此文をやるぞ
忘草の―かく我を忘るるは其地の名物の忘草の爲か
おこなひ―勤行
御みづから―御は衍文なるべし

り給へ。あなかしこ〳〵。なべてなるらむ事には。

などかきてやりける。住吉に行きてしか〴〵と聞ゆ。

尼君、急ぎあけて泣く〳〵見て、御返事に、

まことに世をそむきて、住吉のわたりに侍りながらも、朝夕その昔の人の御事のみ心にかゝりて、あかしくらす中に、二葉に見えさせ給ひしをふり棄て奉りしかば、いかにさても生ひいでさせ給ふらむとゆかしく、おこなひの妨とならせおはしませば、わすれ草も名のみして、片時も忘れ奉ることはなけれども、はかなき世の中の癖にてよな、今々と思ひて過ぐしつる程に、若き御心地ともにおぼし出でて、かやうに仰せられたることの御嬉さよ。さても〳〵仰のまゝに、急ぎ〳〵御みづから、おなかしこ〳〵。

と書きてまゐらせたりければ、姫君侍従すこし晴るゝ心地して、人知れず出でたゝむことを、侍従にいひ合せ給ふうちに、中納言殿のゆゝしきことを聞き給ひながら、思ひ棄

三條―前に見えたる三條堀河の家

まが〳〵しき―縁起のわるい

いかに戀しく―汝なば

てず哀におぼしたるを、離れ奉りなば、いかにおぼし歎かむ、と思ひつゞけて、二人ながらうつ臥しがちにて侍るに、中納言の見給へば、さりげなくつくろひおはしけれども、姿もことの外に衰へたるに、涙のもり出でければ、「三條へわたり給はむことも近くなりたるに、いかにうつぶしがちにて衰へ給ふ」とて、繼母に聞え合せ給へば、「何事を思すにか、いかなる人を戀ひ給ふにや」とつぶやくを、心得たまはで、樣々のもてあそびなど奉り、侍從がもとへ遣しければ、「かばかり思したる親を振棄てていなば、おぼし歎かむことの罪ふかさよ」とて、また泣き給へり。中の君三の君わたりて、「いかに常にうつぶしがちには」など聞ゆれば、「この程は、いかなるべきにか、世の中もあぢきなくて、消えも失せまほしき程になむ。もしさもあらむには思し出でなむや」と、袖も所せく宣へば、「あなまが〳〵しき。何しにかさる事はあるべき。侍從君いかに戀しくおはせむ」といへば、侍從「いかならむ世までも、誰か忍びさふらはむ。おもひ侍るに、御戲ながらもあはれに忘れ難く」とて思へることの涙をとゞめて、侍從、





かやうなる程に―斯くある中にも命ははかられず

契りてぞ―姉妹と生れたるは淺からぬ宿縁なれば生死共にせんと也

大方の事を思ひて―姫君にさし迫りたる事ありとは氣付かず

命あらばめぐりやあふと津の國のあはれいくたのもりにすまばや

と口ずさみて、人め怪しき程にぞありける。中の君物のあはれを知り給へば、その事となく涙を拭ひ給ひけり。姫君「露の身のはかなきは、かやうなる程に、いかゞ」など聞ゆれば、中の君、

契りてぞおなじ草葉にやどるらむともにぞ消えむ夜半のしらつゆ

といひ給へば、姫君も侍從もいとゞ涙催されて、別れむことを悲しと思ひけり。

中の君、三の君、何となく世のはかなきをあはれと思ひ、常は心をすましておはする人なれば、と大方の事を思ひて、おの〳〵歸り給ひけり。心よせの式部、隙もあれば立ち寄り、「たばかり給ふこと近くこそ。如何にせさせ給ふべきにか。いと哀にこそ」と聞ゆれば、「かやうに思したることの忍ばしさに、如何ならむ世までもとこそ思ひ侍れ」、とあれば「誠にかくて候へども、御方をこそ頼み奉りつるに、如何にならせ給ひなむずるにか」とて、うち泣きけり。

かくて候へども—北方には遣はるれども
告げられば—告げければの誤なるべし
顔にふりかけたる—顔を隠す爲に
乳母も—乳母の誤か
筋ごとにとありとも—一本一本に抜き取れど
まろ—我

さるほどに住吉の尼君のぼりて、かくと告げければ、暮るゝほどに忍びたる車奉りければ、いひかへして、その程に見苦しき物どもとり認めてけり。心の中いかばかり哀なりけむ。その時しも中納言わたりければ、さりげなくて御坐しけれども、この度ばかりこそ見奉り侍らむずらめ、と思ひければ、忍び難き色もあらはれて、顔にふりかけたる髪のひまより、涙もり出づるを見給ひて、「いかに母宮の事をおぼすにや。乳母の事をゆかしとおぼし出づるにや、また兵衛の事を心づきなく思すにや。ともかくも、何事にても思さむやうに聞え給ふべきこそ。おやの思ふばかり、子は思はぬ事の心憂さよ。いかばかりにか哀と思ひ侍る。頭の髪を筋ごとにとありとも、いなふべき身かは」とのたまへば、「母宮のことも、また乳母の事も思ひ侍らず。殿をも見奉らで程經ることもやと、かなしく」などことばの聞えぬ程に、泣く〳〵きこえ給へば、中納言うち泣き給ひて、「三條におはしますとも、まろが生きたらむほどは離れ聞ゆべきにあらず。何かはその事をおぼす」とて立ち給ふを、今一度と顔ふりあげて見給ふに、目もくれ心もきゆる

程にぞありける。侍從とともにぞ泣きゐ給へり。小夜ふくるほどに車の出で來れば、櫛の箱と御琴ばかりぞ持ち給へる。御車のしりには侍從乘りたり。此は長月二十日あまりの事なれば、有明の月影もあはれなるに、出でて行き給ひけむ心の中、如何ばかり悲しかりけむ。嵐はげしき空に、かず絶えぬ音を鳴きわたる雁も、折しりがほに聞ゆ。雲間を出づる月の、常よりも我をとぶらふ心地ぞしける。さて尼君の許へ行きて、かきくどきこま〴〵と語りければ、「誠におほしたつも御理にこそ。今も昔もまことならぬ親子の有樣のゆゝしさよ。繼母ながらも何處を憎しとか見給ふらむ、あさまし。斯るうき世なれば、思ひ捨て侍るものを」とて、墨染の袖をしほるばかりにぞありける。夜の中に淀に著きてけり。

少將その夜對に行きて、兵衞佐といふ女して、侍從を尋ねさすれば、音もせず。姫君の御跡にふしたるかと几帳を見るに、姫君もおはせざりけり。うちさわぎて人々に尋ねさせけれども、見えさせ給はざりければ、あやしと思ひけり。「さても中の君、三の君の許

とりしたゝめたる—取りかたづけたる

思ひ給へりしかば—ばはどの誤なるべし

にがみ—苦い顔して

散りなむのち—我がなくなりて後

におはするにや」といへば、「心輕くたち出で給ふべき人にもあらず。いかなるべき」とて尋ねあへり。夜も明けぬれば、常におはせし所を見れば、傍なる夜のふすまもなくて、とりしたゝめたる景色なれば、誠に悲くて、おの〳〵忍びねに泣きけり。中納言にしか〴〵と聞ゆれば、呆れさわぎて、聲をさゝげて泣き悲み給ふ事たとへむかたなし。中の君、三の君、「あやしくこの程心うきものに思ひ給へりしかば、かくまでと思はざりしものを」とおの〳〵かなしみ給ひけり。繼母あきれたるさまして、「侍從がさとにか。たづね奉れ」とて、中納言殿の傍に、泣くよしにてにがみ居たり。少將は、かゝりければ、なさけある御返事をばし給ひてける、と思ひ續けて、對の簀子にさめ〴〵と泣き居給へり。三の君こゝかしこ見ありき給ふ程に、母屋のすみに結びたる薄樣ありけり。何となく取りて見れば、姫君の手にて、

なき名のみたつたの山のうすもみぢ散りなむのちを誰かしのばむ

とばかり書き給ひたりけり。これを見給ひて、いよ〳〵哀さまさりて、中納言に見せき

我も劣らず—悲しさは我も御身に劣らず。

よものふるまひ—よもやと思はるる案外の行跡

さるほどなれば—さるほどにこれはの誤なるべし

こゆれば、「いかなる事のありければにや、我にはいひ給ふべきにこそ、親の思ふばかり子はおもはぬことの心憂き」とて、これを顔に押當ててうつぶし給ひけり。繼母、「男などのもとにおはしたるにこそ。よも隱れはて給はじ。いたくな嘆き給ひそ。我も劣らずこそ」などいひければ、中納言、「おほくの子どもよりも、この君ばかり誰かはある。我身にもかへまほしけれども、心にかなはぬ世なれば」と、うちくどき給へば、繼母、「侍從にくるはかされて、よもの振舞どもし給ふも知らで」と、つぶやき居たれば、「あなむづかし。こは何事ぞ」と嘆き給ひける。

さるほどになれば、尼君などつれて河尻を過ぐれば、をかしうも行き逢ふ船に乗りたる者どもの、あやしき聲々して、「つまもさだめぬ岸のひめ松」と歌ひて漕ぎ行くも、ならはぬ心地してあはれなり。京の方は霧ふたがりて、そこはかとも見えず。比叡の山ばかりほのかに見えたる景色、もの思はざらむ客だにあはれなるべし。況やありがたき親にひき別れ、情ありし同胞をふり捨てて、いづちと行くらむ、と思ひつゞけむ心の中、如

いかばかりなりけむ｜この下活字本には「姫君ふる里をうきふれとのみさしはなれ心一つにこがれこそゆけと心ぼそげによみ給ひければ尼君」とありて次に住吉のあまとなりてはの歌あり

あしで｜歌などをかく

何ばかりなりけむ。これを見て、尼君、

すみよしのあまとなりては過しかどかばかり袖をぬらしやはせし

などいひつゝ、住吉に行きたれば、住の江とて所々すみあらしたるに、海さし入りたるにつくりかけたれば、簀子の下に魚などあそぶも見えて、南は一むらの里ほのかに見えて、苫屋どもにみるめかりほし、蘆の屋に心ぼそく烟たちのぼるけしき、薄墨にかけるあしでに似たり。東には籬につたふ朝顔などかゝりて、岸にはいろ〳〵の花紅葉植ゑ竝べたり。西には海はる〴〵と見えわたりて、竝み立てる松の木の間より、帆かけたる船ども、淡路島をゆきかふさまも、波にたゞよふかゞり船、はかなく見えて、日の入るは海の中に入るかとあやしまれける。わざとならでは人など來べくもなし。しづかにあはれなる住家にてぞ侍りける。ちひさやかに造りて、阿彌陀の三尊うつしならべて、月日の出づるばかりは、尼君西にむかひて、「南無西方極樂教主、阿彌陀如來、後生助け給へ」と申したるを見るにつけても、あらぬ世に生れたる心地して、姫君も侍從も「疾く尼に





一種の法、蘆の葉の如くかく故に名づく

いかにもなりたらむには－萬一の事あらば

なりて、おなじさまに」と宣へば、尼君「御髪はとてもかくても侍りなむ。御心にぞよるべき。今はこの老嫗が申さむまゝに御座しまさずば、うちすて奉りてかくれ侍るべし」といへば、これも背きがたくて、あけくれは佛の御前にて經をよみ、花を奉りなどぞし給ひける。

中納言は思ひあまりて、「今一度この世に逢ひ見せ給へ」とぞ祈り給ひける。中の君三の君なども、姫君のことにふれてあはれに、侍從が萬をかしかりしものを、あはれ如何なる所に住みて都の事をおぼし出づらむ、と忘るゝ時なく忍びつゝ泣き給ふ。繼母「何事ぞ、いつとなくいま〱しく泣き給ふは。我がいかにもなりたらむには、よも斯くは思さじものを」と腹だちければ、親ながらもなさけなく、うたてにぞ思しける。

さて住吉には、やう〱冬籠れるまゝに、いと淋しさまさりて、あらき風吹けば、わが身の上に波立ちかゝる心地してける。沖より漕ぎくる舟には、あやしき聲にて、「にくさびかける」など歌ふも、さすがにをかしかりけり。住の江には霜がれのあし氷にむすほゝ

思ひ殘す事なかりけり―あらゆる物思ひをしたり

とらすれば―此の下に脱文あるべし

むつましくて―なつかしくて

れたる中に、水鳥のつがひ上毛の霜うち拂ふにつけても、思ひ殘すことなかりけり。「中納言殿よりはじめて、かたへの人々いかにおぼし歎くらむ。親にものを思はせ奉るは罪深きことにこそ。生きてありとばかり知らせ奉らむ」とて、尼君のもとに小童の京より具したりしに、「しか〴〵の所に持ちて參りて、何處よりといはで、この文奉りて、さてにげかくれね」とよく〳〵敎へてけり。さて文をとらすれば、「いづくより」とて、はしたもの出でてとりぬ。名を問へばまうさず。出でて見れば使なし。いかなる事にか、とて文を見れば、姫君の御手にて、

あなゆゝし、世の忍びがたさよ。ゆくへも知らぬ程になりにしことを、おぼし歎く人もおはすらむ。淺ましながらたびたちつる心、たゞ思しめしやらせ給へ。慰むかたとては、そなたの風のむつましくて、明しくらすになむ。誰も〳〵御座しますにや。あはれ昔を今になす世なりせばなど。さても〳〵殿いかに思し歎かせ給ふらむ。ことに罪深くこそ。はかなき命ながらへたりとばかり聞え奉るになむ。

なげきますだ―大和の益田池は蓴菜の名所

ねぬなは―蓴菜

夜の衣なかへしつゝ―衣を裏返し

と書きすさびて、奥に、

あさがほの　はなのうへなる　つゆよりも　はかなきものは
かげろふの　あるかなきかの　ここちして　世をあきかぜの
うちなびき　群れ居るたづを　わかれつつ　ただひとりのみ
ありそ海の　かひなきうらに　しほたるる　あまのはごろも
わがごとく　ほしやわづらふ　日を經つつ　なげきますだの
ねぬなはの　くるひともなき　あしびきの　やましたみづの
あさましく　ながれ出でにし　ふるさとに　かへらむとだに
おもほえず　如何にちぎりし　いにしへの　わが身なりそも
うもれ木と　身はなりはつる　つるの子の　くもゐはるかに
たちわかれ　ゆくへも知らず　しらなみの　よるのころもを
かへしつつ　寢る夜のゆめの　ゆめならで　戀ひしきひとを

て著て寢れば思ふことを夢に見るといふ言ひ傳へあり
あふくま川を渡る—逢ふ
さまかへむと—出家せんと

みちのくの　あふくまがはを　わたるべき　わが身ならねば
ささがにの　くもでにものを　おもふかな　とりのこゑだに
おともせぬ　とをちのやまの　たにふかみ　ひとに知られぬ
としを經て　くちははつとも　なりはてぬべき

濱千鳥あとばかりだに知らせねば猶たづね見むしほのひるまを

となむありける。これを見て、只哀さ推はかるべし。中納言に見せ聞ゆれば、聲も惜しまず泣き悲み給ふ事限なし。「此使を失ひつらむ事の口惜さよ」とて、これを顏におしあてて、うち伏して、なか〳〵ひたすらに思ひつるよりは悲しくて、如何なる所にならはぬ心に旅立ちて明し暮すらむ、と悲さまさりて、やがて樣かへむとし給ひけるを、從へる人々、「今一度元の御姿にて姫君に逢ひ奉らむこそ、誰がためにも本意なるべき御事」とぞ留め申しける。少將この事のおぼつかなさに、うへのもとにおはしたれば、三の君、しか〴〵と袖もしぼる許に語り給へは、物の哀を知りて、かく宣ふよ、と思しけり。

初瀬にこもりて━中將が

夢と知りせば━「思ひつつぬれば

かくて正月の司召に、右大臣は關白になりたまふ。少將は中將になりて三位したまへり。中將はそれとも思はで、偏に神佛の御前に參りても、姫君の在所知らせ給へ、とぞ祈り給ひける鞍馬へ參り給ふとて、池の渚に鴛鴦の一つありけるを見給ひて、

わがごとくものやかなしき池水につがはぬ鴛鴦のひとりのみゐて

と云ひつゝ、祈てありき給へども、させる驗もなかりけり。春秋すぎて、九月ばかりに初瀬に籠りて、七月といふ終夜行ひて、曉方にすこしまどろみたる夢に、やんごとなき女そばむきて居たり。ひき向けて見れば、我が思ふ人なり。嬉しさせむ方なくて、「いづくに御座しますにか、かくいみじき目をば見せ給ふぞ。いかばかりか思ひ歎くと知り給へる」といへば、うち泣きて、「かくまでとは思はざりしを、いと哀にぞ」といひて、「今は歸りなむ」といへば、袖をひかへ、

わたつ海のそこともしらすわびぬれば住吉とこそあまはいひけれ

といひて立つを、ひかへて返さずと見て、うち驚きて、夢と知りせばと、悲しかりけり。

や人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを」小町の歌

さて佛の御しるしぞとて、夜の中にいでて、住吉といふ所尋ね見むとて、御供なるものには、「精進のついでに、天王寺住吉などに參らむと思ふなり。おの〳〵歸りて此由を申せ」と仰せられければ、「いかに御供の人なくては侍るべき。すてまゐらせて參りたらむに、よき事候ひなむや」、と慕ひあひけれども、「示現をかうぶりたれば、そのまゝになむ。ことさらに思ふやうあり。いはむまゝにてあるべし。いかにも具すましきぞ」とて、御隨身一人ばかりを具して、淨衣のなえらかなるに、薄色の衣に白きひとへ著て、藁履はきして、龍田山ゆき隱れ給ひにければ、聞え煩ひて、御供の者は歸りにけり。住吉には、その曉姫君の御あとに臥したる侍從に聞ゆるやう、「まどろみたりつる夢に少將宣ふやう、心ぼそかりつる山の中に、たゞひとり草枕して起き臥したまふ所に行きつれば、我を見つけて、袖をかひへて、

たづねかね深き山路に迷ふかな君がすみかをそこと知らせよ

となむありつる」とあはれに語り給へば、侍從「げにいかばかり歎き給ふらむ。まこと

血あへり—血あえての誤なるべし

なさ／＼しき—然るべ

の御夢にこそはべれ。あはれと思さずや」と聞ゆれば、「石木ならねばいかでか」など云ひつゝ、あはれに思したりけり。

中將はならはぬ樣なれば、藁履にあたりて足より血あへり、ゆきやらぬ氣色なれば、道行く人あやしき者ども、目をつけてぞ見あひける。さてもなく／＼酉の時ばかりに、はるばると並みたてる松の一むらに、漁屋ところ／＼にあり、海見えたる所に行き着き給ひぬれども、いづくとも知らず思ひわづらひて、松の下にやすみ給ひけるに、十あまりなる童、松の落葉ひろひけるを呼び給うて、「おのれは何處に住むぞ。この邊をばいづくといふぞ」と問へば、「住吉となむ申す。やがてこれに侍るなり」といへば、いと／＼嬉しきことと聞きて、「此邊にさるべき人や住む」と仰せられければ、「神主の大夫殿こそ」といへば、「さても京などの人の住む所やある」と仰せらるれば、「住の江殿と申すところこそ、京の尼上とておはする」といひければ、こまかに尋ね問ひて行き給ひたれば、江につくりかけたる家の、ものさびしき夕月夜、木の間よりほのかにさし入りて、をさな

き人ならば―「住吉の岸の姫松人ならば幾世か經しと問はましものを」古今集の歌。

聞きなし―聞く者の心からそれぞと思ふ

さしき人も見えず、いともの哀なり。日も暮れければ、松の本にて、「人ならば問ふべきものを」など打詠めて、たゞずみわづらひ給ひける。さらぬだにも旅の空は悲しきに、夕なみ千鳥あはれに鳴渡り、岸の松風物さびしき空にたぐひて、琴の音ほのかに聞えけり。この聲律にしらべて盤渉調にすみわたり、これを聞き給ひけむ心、いへばおろかなり。あなゆゝし。人のしわざにはよも、など思ひながら、その音にさそはれて、何となく立ちよりて聞き給へば、釣殿の西面に、若き一人二人がほどきこえてけり。琵琶かきならす人あり。「冬はをさく／＼しくも侍りき。この比は松風浪の音もなつかしく、都にてかゝる所も見ざりしものを、あはれ／＼心ありし人々に見せまほしきよ」と打語らひて、「秋の夕は常よりも旅の空こそあはれなれ」など打詠むるを、侍從に聞きなして、あなあさましと胸うちさわぎて、聞きなしにやとて、心をとゞめ聞き給へば、

たづぬべき人もなぎさの住吉に誰まつ風の絶えず吹くらむ

と打詠むるを聞けば姫君なり。あなゆゝし佛の御しるしはあらたにこそ、と嬉くて、簀

姫君をうしなひ奉りて—侍従が詐るなり

催す—涙を

こゝに—誤あるべし

子に立ち寄りてうち叩けば、「いかなる人にや」とて、侍従透垣よりのぞけば、簀子によりかゝりたる姿、夜めにもしるく見えければ、「あなあさまし。少將殿のおはします。いかゞ申すべき」といへば、姫君、「哀にも思したるにこそ。さりながら人聞きみ苦しかりなむ。我はなしと聞えよ」とあれば、侍従出逢て、「如何に怪き所まで御座したるぞ。あなゆゝし。其後姫君を失ひ奉りて、慰め難さに、かくまで惑ひありき侍るになむ。見奉るにいよ〳〵古の戀ひし」などいひすさびて、哀なるまゝに、涙のかきくれて物も覺えぬに、中將もいとゞ催す心地ぞし給ふ。「侍従君の事をば忍びこし物を、怨しくも宣ふものかな」と、「御聲まで聞えつるものを」とて、淨衣の御袖を顔におしあて給ひて、「嬉さもつらさも半にこそ」と宣へば、侍従理に思えて、さるにても御休み候へ、都の事もゆかしきにとて、尼君にいひおはすれば、「ありがたき事にこそ。誰も〳〵物の哀を知り給へかし。まづこれへ入らせ給ふべきよし聞え奉れ」といへば、侍従、「なれ〳〵しく無禮にはべれども、そのゆかりなるこゝに、たびはさのみこそ候へ。立ち入らせ給へ」

うちはなち―すげなく

我も云々―我も疎略には思はれども故郷への聞えを憚りて隠れたるなり

人よしあし―誤あるべし

とて、袖をひかへて入れけり。紙屏風にやまと繪かきたる一雙立てて、母屋のみすに朽木形の經かたびらかけて、いとあるべかしくしつらひたり。いと美しき足に土つきて、所所血うちあえて、顔さきあかみて、苦しげなる御姿を見て、尼君いそぎ出でて聞ゆるやう、「姫君もこれに御座しますになむ。侍從あはれとは見奉りながら、若き者にてうちはなちに申しけるにこそ。尼は、嬉きにもつらきにも習ひて過ぎたる身にて侍れは、忝くあはれに見奉る。あなゆゝし。いかでか愚には」とて、姫君にこのよしを聞ゆれば、「我もおろかならずながら、都の聞えつゝましさにこそ」と宣へば、「それも理ながら、よろづ事のやうにこそよれ。人よしあし知らぬ者の心なき石木なれども、これ程の事にはゆるぎ侍るものを。今はこの尼を重く思しめさば、申さむまゝにおはしませ。さなくば海河にも入りなむ」といひこしらへて、侍從に「たゞ姫君のおはします所へ具し參らせよ」といへば、侍從、中將にこのよし聞ゆれば、「ともかくも」とて嬉げにぞ思しける。夜更くるほどに、侍從さきに立ちてしるべしつ。さてもうちふす事もおはしまさずして、

仕うまつりし人―中將に

隨身所へくだされ―處罰の爲

思はずに―不慮に

行―精進潔齋

うれしく―中將の詞

初よりの事どもかきくどきつゝ、なく／＼宣ひけり。夜もあけ日も出づるほどに、姫君を見奉り給ひければ、嵯峨野にて見しよりも盛と見えて、ねくたれ髪のおほめきて、なつかしさ云ふも愚なり。かくしつゝ二日三日にもなりしかば、その邊にも仕うまつりし人あまたありければ、おのづから聞きつけてぞ各參りあへり。さびしき所ともなく、松のもとにて酒のみのゝしりあひければ、その邊のものども驚くほどなりけり。

かゝるほどに京には、中將殿のたゞ一人住吉へ參り給ひぬ、と聞きて、關白殿、歸りたるものをば、隨身所へくだされにけり。さてゆかりある人々、左衞門佐、藏人少將、兵衞佐殿よりはじめて、四位五位などその數、住の江にたづね行き給ひて、「いみじくおぼつかながらせ給ふに、いかに」などいへば、「示現によりてこれに侍りつる程に、思はずにこの邊にあるものに見つけて」など宣へば、「神佛へ參りては行をこそすれ。ゆゝしき御つとめかな」とて、たはぶれてうち笑ひ給うて、「うれしくこれまで尋ね給へり。難波わたりも、かゝる序なくばいかでか御覽すべき」と宣ひつゝ、夜ふくるほどに、住



かづきて―水中にくゞり入りて魚貝などとること

心安く―安心に

あづけられければ―和泉國の内なる中將の所領を支配せしむる也

の江に月さやかに澄みわたりて、松風浪の音にたぐひつゝ、淡路島まで通ひて聞ゆるさま、この世ならず面白かりければ、人々住の江にて遊びたはぶれたまへり。三位中將琴、藏人少將笛、兵衛佐笙の笛、左衛門佐歌うたひ給ひけり。姫君、侍從、尼君など、これを聞きてはるゝ心地ぞし給ひける。さて夜明けければ、海人ども召してかづきせさせて見給へり。

さて、その日京へのぼらせ給ふとて、いとこと〳〵しかりけり。姫君をば田舍人のむすめとて、相具し奉りたまふ。姫君をば尼君心やすく見奉りながら、この程のなごり申すばかりなし。尼君には和泉なる所あづけられければ、「行末の事はおもはず。たゞあの姫君の御事のみぞ思ひ侍りつる程に、今は黄泉路やすく」とておくりて、嬉しきものから、離れ行くもさすがに哀なり。「とにもかくにも落つる涙かな。佛になりなむ後ぞや止まるべき」とてくどきける。姫君も何となく二年まで住みし所、離れゆくこそあはれなれ。「尼君も如何にならひて、戀しくかたはらさびしく思はむ」など侍從に聞えおはせて見



住吉の――本此歌の下に「と打詠めければ姫君琴かき鳴らしてかくなむ。琴の音を尋ねて通へ住吉の岸の姫松われも悲しき」とあり

あやしきありきむつかりながら――不埒なる旅行な父の憤りながらも

すみ――妻にし

返り給ひければ、漸遠くなり行く程に、一むらの絶間より松の梢遥に見えければ、

すみよしの松の梢の如何ならむとほざかるまで袖のつゆけき

と思ひつゞけられける。かくしつゝ河尻を過ぐれば、遊者どもあまた船につきて、

心からうきたる船に乗りそめて一日もなみに濡れぬ日ぞなき

など唄ひて、淀までぞ著きにける。さても京へ上りつきて、殿にまゐり給へば、あやしきありきむつかりながら、北の方をしつらひて住ませ給ひける。繼母これを聞きて、「中將殿はあやしき田舍人の女をこそすみ給ひけれ、あたら人の」など、むくつけ女に言合せてそねみ居たりける。

中納言月日の重るまゝに、思のみまさりて、今一度もとの姿にておひ見むとおもふ心のつれなさよ。斯てのみあかし暮すに、などおぼす程に、年の程よりも殊の外に老いおとろへて見え給ひけり。繼母これを見て、「姫君は、たちぬる月とかや、あやしの法師に具してこそおはしけれ。たしかに人のつけ侍りしなり」と聞ゆれば、いみじき人のことも

この姫君ばかりは覺えず。如何にしてもたひらかにてだにもあらば、嬉しき事にこそ。誰人のいひけるにか。尋ねあひて、生きたるをり今一度見て、死出の山路をもやすく越えむ。うれしく宣ひたり」と宣ひければ、いとなむうげにて、「誠や、たそ。思ひ忘れて」などいへば、むくつけ女「あのもの候ふぞかし」などぞいひける。中納言心づきなしと思ひてなむ、「阿彌陀佛阿彌陀佛」とぞ申しける。

さて姫君は、「かくて侍るとだに中納言殿に申さばや。心あはせたりとて、神佛にも呪ひ給はむには、誰が爲もいと恐しき事なり」。「住吉におはせば、さてことぞやみなましか。これは遂に聞え給はむずれば、心やすくおぼしめせ」と宣へば、姫君、「おぼし歎くらむことの悲しくて、世に住むかひなくて」と宣へば、「誠にことわりながらも、只申さむ儘にておはしませ」とて二條京極なる所にわたり給ひけり。明し暮し給ふほどに、姫君過ぎにし年の十月より御氣色ありて、又の年の七月に、いと美しき若君いでき給へり。中將おぼしかしづき給ふこと限なし。

いとなむうげにて—甚いやそうにて

心あはせたり—姫君とかくしたる人と

住吉に—中將の詞

御氣色—懷姙の

親ばかり—親が子を思ふ程に

恐ろしさに—繼母の嫉みの

かうしつゝ過ぎ行く程に、中將は願はざるに中納言になり給ひて、やがて右大將になり給ひけり。中納言は大納言になりて、按察使かけたまへり。共にうち參りあひて、物語のついでに、「老いおとろへてこそ見えさせ給へ」とあれば、大納言まづうち泣きて、「誠にこれにて知らせ給へ。心にかなはぬものゝ命にて侍るかな。かくても生きて候ふ」とて人めもつゝみ給はざりけり。大將、この序にやいはまし、と思ひながら猶思ひかへして、そゞろに涙ぞもれ出でける。さてかへり給ふまゝに、かくなど語り給へば、姫君も侍從も、「親ばかり子は思はぬものぞ、と常は仰せられし言の葉かな。かやうに多くの年月を過ごしながら、かくとも聞え奉らで、思し歎かせ給ひつる、いかばかり神佛もにくしと思すらむ。あはれ女の身ばかり怨しきものは」とて世につらげに宣へば、大將「誠にことわりなり。幼きものも出できたれば、我も如何ばかりかは見せ奉らまほしけれども、この幼き人までも恐しさにこそ。さりながら知らせ侍るべき事も近くなりたり。暫待たせ給へ」などこしらへ給ひけり。

ことさら申さむ―特に御招待申上ぐべし
まがまがしき―縁起のわろき
あるべかしく―行き届きて
つかさのもの―同じ役所の官人

斯しつゝ過ぎ行くほどに、光るほどの女君いでき給ひけり。思ひのまゝなれば、おぼしかしづき給ふこと限なし。かやうに泣きみ笑ひみ明し暮すほどに、若君七つ、姫君五つまでになり給ひけり。「八月袴著といふことせむ序に、大納言殿には知らせ奉らむ」と仰せられける程に、大將殿も大納言殿もうちに參りあひて、またまづ物語のついでに、「八月十六日に、稚きものどもに袴著仕らむと思ひ侍るに、ことさら申さむ」と宣へば、大納言「かしこまりて承りぬ。さりながらも、左樣の事にまがまがしき身にて」など聞ゆれば、「如何にも思ひはからひて申すなり。かならず」とのたまへば、「ともかくも仰にこそ」とて、その日にもなりて、ゆかりある上達部殿上人など參りあへり。大納言も、すこし日暮るゝほどに參り給へり。萬にあるべかしくて、藏人つかさのものなど參りあひて、いとことごとしき樣なり。時にもなりぬれば、大將、大納言の直衣の袖ひかへて、内へひき入れ給ひぬ。母屋の御簾の前に、茵敷きてすゑきこえたり。姫君侍從近くよりて、几帳のほころびより覗けば、いかばかり悲しかりけむ、わかく盛におはせし姿の、

ゆはむとて―中納言が

思ひいでてとて―誤なるべし

なえらか―くだ〳〵としたる也

あらぬさまに衰へて、髮は雪をいたゞき、額に四海の波をたゝみ、眼は涙にあらはれて、ひかりすくなく見え給へり。「あなあさまし〳〵」とふしまろび給ひけり。さて若君姫君いだして、袴の腰ゆはむとて、うち見つゝ、袖を顏におしあてゝうつぶし給へり。やゝ久しくありて、起きあがりて宣ふやう、「いはひの所にはまが〳〵しとは、さればこそ申し候ひしものを。姫君の御有樣の、わが喪ひて思ひ歎く女の稚かりしに、たがはせたまふ所なく、その昔さへ思ひ出でてとて、忍びかねつるになむ。ゆるさせ給へ」とてむせび給へり。これを聞きて、姫君侍從、聲もたてぬべき心地ぞし給ひける。涙の色は、袿の袂に紅染の心地するまでぞなりにける。大將これを見たまひて、涙もせきあへず、見と見きゝと聞く人、心あるも心なきも涙流さぬはなかりけり。さて事ども果てぬれば、人々に引出物さるべき樣にし給ひける。その中に大納言殿には、小袿のなえらかなるを奉りたれば、あやしながら肩にかけて歸り給ひぬ。

大納言かへるまゝに、繼母にむかひて「大將の我をむつましき者に思してもてなし給ふ。

美しかりつる若君姫君かな。あはれあれを我が孫どもと思はゞ、いかに嬉しからむ。田舍人のむすめなれども、幸ある人かな。さてもその姫君の、我が喪ひて思ひなげく姫君の稚かりしにさも似たまへるよ。あはれつねに見奉らばや」とのたまへば、繼母、「三の君のもとへおはせし人なれば、その緣とてむつび給ふこそ。あはれその子たちを、三の君の中にまうけ給ひたらば、此處彼處のためにやすかりなむものを。あたら人の」などいへば、むくつけ女、「關白殿は、げすばらの子なればとて、もてなし給はぬ」とぞいひける。大納言殿は、小袿のふりたりつるをあやしと思ひて、とりよせて見たまへば、對の君に著せはじめし時の袿に似たり。老のひがめやらむとて、打返し〳〵よく〳〵見給へば、たゞ〳〵それにてありける。その時に胸さわぎて、如何にしてか持ち給へば、我にしも得させ給へるもあやし、とてたゞ雜色一二人ばかり具して、大將のもとへおはして、寢殿のすのこに居たまへり。大將いそぎ出でたまひて、「これへ」とあれば、大納言申されけるは、「申しいづるにつけて、世に嗚呼がましくなめげに侍れども、萬になつか

人目も知らず―人目もかまはず

とてもかくてもと―どうでもよしと

なるもの―叶ふもの

しくおはせば参りつるなり。ゆるさせ給へ」とて、昨日たまはりたりし小袿の、我がうしなひて候ひしもの、をさなくて著せ初しうちぎにて侍るを、老のひがめにや侍らむ、我心にかゝるまゝに、人目も知らず走り参りつるなり」と申されければ、このよし姫君聞きたまひて、いま／＼と待ち居給ひければ、大將宣はぬさきに、姫君侍從急ぎ／＼いでて、涙にくれて物をだにいひ給はねば、大納言これを見て、心も消えかへるほどなり。いかに／＼とあきれ居給へり。やゝ久しくありて、心しづまりて、大納言姫君をばそむきて、侍從に向ひてくどき給ふやう、「姫君こそ、あやしの親とて、とてもかくても思して音づれ給はざらめ。そこをば如何ばかりかは思ひ聞えし。今まで命つれなくてめぐりあひ侍ればこそ、今日は見參に入れ。思ひ消えなましかば、後の世までも、おもひにて黄泉路のさはりともなりなましか。わがなれるさま、石木ならずば見給へかし。おなゆよしの人の心や。たゞ命のみこそ嬉しけれ。あかし暮しがたくて積りし月日、いくら程までなりぬとか思ひ給ふ。あはれ／＼、人の思ひはなるもの」とて、うち泣き給へ

とて―誤なるべし

うとましき―厭ふべき

そゞろき―おちつかず

り。大將、姬君、侍從、おの〳〵はじめより終までの事ども、かきくどきつゝ語り給ひて、愚ならぬよし宣ひける時に、世のありさま、昔も今もかゝる例ありがたくぞ覺えける。

さて日暮れぬれば、大納言かへり給ひて、繼母に宣ふやう、「いでや對の君に尋ね逢ひて侍りつる。誠にあやしの法師に具して東山におはしけるとて、たゞ憂きはながらふべくもなしとて」、繼母「あな嬉しやな。如何樣にておはしつるぞ。こまかに宣へ。おぼつかなきに」といへば、「いかなる人のうとましき事をたばかりにけるにか、思ひ餘りて住吉まで迷ひ行きたりけるを、大將殿、ものまゐりの序にもとめ逢ひて、年比具しておはしましけれども、世の中のむくつけさに憚りて、かくとも宣はざりけるぞや。あやしの法師に具してありしにや、よく〳〵聞き給へ」とありければ、「さて〳〵」とて口うちあきて、目しばたゝきて、顏赤くなして、言ひ遣るかたもなくてそゞろき居たり。

中の君、たひらかにて御坐しましけることの嬉しさよとて喜び、あはれ〳〵疾く見奉ら





うとましく—繼母な
まじろひ—交際
惑ひありきけむもの—姫君
首を召すとも—わが首をとるといはれても
いなみとも—誤あるべし
まめやかに—眞實に

ばやとて、親ながらも疎しくぞ思されける。大納言よろづくどきたてゝ、身にそふべきものゝ具ばかり具して、「心うき世にはまじろひも物うし」とて、姫君の母宮の三條堀河なる所へぞわたり給ひける。大將この由を聞き給ひて、いかに候ふまじき事なり。たゞ本のやうにて御坐しますべき由宣へば、大納言殿申されけるは、あさましく惑ひありきけむものを、とりおき給ひて見せ給へば、此世ならず首をめすとも、いなみとも思ふべきにあらず、これは如何に宣ふとも、かなふまじきよし申し給ふ。姫君もまめやかに止め申し給へども、聞き入れ給はで渡り給ひければ、三條へさま〲のものども奉り給ひて、人々もまゐりあへり。「さても一人おはすべきにあらず。いたはしき」とて大將のをばに對の御かたと申す人にぞすませ給ひける。

その昔對に住みける人々、さながら大將の許にまゐりて、よろづ過ぎにしかたの事どもかたり出でて、泣きみ笑ひみ明しくらしける。その中にも心よせの式部は、又なきものにぞ思しける。關白殿よりはじめて、よろづの人々田舍の人のむすめと知り給へる程に、

かれ〳〵に—疎遠に

おとな女—女中頭

はや按察使の大納言殿の宮腹の御女とて、さも有難きなからひとて、人々もいひあひけるとかや。この事を聞きて、兵衛佐、中の君ともかれ〳〵になりにけり。さるまゝに中の君も、親ながら疎しとぞ思ひける。されば人の遠かるもことわりなりとて、二人ながら音をのみぞ泣き給ひける。姫君この由を聞き給ひて、むつましかりし人なればとて、迎へ奉りて、過ぎにし方の世のふしぎなる事ども語らひ、明し暮し給ひける。大將もよき事とて、大事のことにぞ思ひ給ひける。年月ゆくほどに、大將殿にはちゝ關白ゆづり給ひぬ。いよ〳〵末の世たのもしくぞ侍りける。若君は元服せさせ給ひて、三位中將とぞ申しける。姫宮は十八にて女御にまゐり給ひける。侍從はおとな女にて、よろづに大事の人にぞ思はれて内侍になりぬ。見聞く人羨みあへり。大將姫君すゑまで繁昌して、めでたくぞ御坐しける。さて繼母、見聞く人々にうとまれ、朝夕はねをのみ泣きたまひて、世の中おとろへて、遂にはかなくなり給ふ。むくつけ女は、あさましき有樣にて、まどひありきけるとかや。昔も今も、人にはらぐろなる人はかゝる事なり。これを見聞か

む人々は、かまへて人よかりぬべきなりとぞ。

住吉物語終

唐物語

〔第一〕昔、王子猷、山陰といふ所に住みけり。世の中の渡らひに絆されずして、只春の花秋の月にのみ心をすましつゝ、多くの年月を送りけり。事に觸れて情深き人なりければ、かき曇り降る雪はじめて晴れ、月の光淸くすさまじき夜、一人起きゐて慰め難くや覺えけむ、高瀨船に棹さしつゝ、心に任せて戴安道を尋ね行くに、道のほど遙にて、夜も明け月も傾きぬるを、本意ならずや思ひけむ、かくともいはで、門のもとより立ち歸りけるを、いかにと問ふ人ありければ、

もろともに月見むとこそ思ひつれかならず人に逢はむものかは

と、ばかりいひて、遂に歸りぬ。心の好きたるほどは、これにて思ひ知るべし。戴安道は、剡縣といふ所に住みけり。この人の年比の友なり。同じ樣に心をすましたる人に

(一)本條の出處は晉書卷八十の本傳

王子猷—王羲之の子

高瀨船—川船の一種

諸共に—「本興に乘じて來る興盡きて反る何ぞ必ずしも安道を見んや」

好きたる―風流なる
(二)白氏文集卷十二琵琶行引
白樂天―唐の詩人白居易號香山
我身一つは―「難波江の蘆間にやどる月見れば我身ひとつはしづまざりけり」詞花集顯輔
人も渚―渚無き

てなむ侍りける。

(第二)昔、元和十五年の秋、白樂天罪なくして、江州といふ所に流されぬ。其次の年の秋、入江の邊に夜友を送りけり。松風波の音を聞くに、愁の涙いと抑へがたし。かくて小夜更け行くほどに、空すみわたり、月影波に隨へるを見るにつけても、我が身一つは沈まざりけり、と思ひ亂れつゝ、人も渚を心ぼそくて歩み行くに、浪の上遙に琵琶の調さまざまに聞えて、搔き合せなどの有樣、世に類なきほどなり。これを聞くに、怪しき心おさへがたし。蜑人武夫より外に、誰かは又情あるべき、とおほえければ、聲をしるべにて、「誰の人にか」と尋ね問ふに、「我はこれ商人の妻なり。昔齡十三にて、琵琶を習ひ得たること世に勝れたりき。帝の御前にて一度調べしに、百の御引出物を賜はりき。また眉目容貌ありがたく珍しき程なりしかば、見る人聞く人、さながら思ひを懸け心を盡せりき。しかれども春過ぎ秋暮れて、みめかたちありしにもあらず衰へにしかば、世に經る力失せはてゝ、せむ方なくなりにしより、商人に契を結びて、この國の民となれりき。

取り重れたる—一層の愁を増したる

ありへしことな—事に琴をかけたり琵琶を琵琶のことといへり

商人情なければ、別を惜む事いとあさし。われを懇にせねば、出でていぬる後、立ち歸るほど久し。かへる程おそければ、おのづから待たずしもあらず。かゝるまゝには、只空しき船を守りつゝ、秋の月のすさまじきをのみ見る」といへり。白樂天、「我琵琶の聲を聞きて愁ふかし。又この語らひを聞くに、とり重ねたる心地す。我も君も愁の心おなじからずや、必ずその愁の盡きせぬことを思ひ知るべし。我いにし年の秋より、官を遁れ都をはなれて此所に沈めり。又病の莚に臥して、立ちゐる事容易からず。いと物心細き折に、浪風より外に立ち交る人もなき住處には、蘆の上葉をわたる嵐、遠近人の舟よばふ音のみ聞えて、いまだ樂の聲を聞かず。今宵の君が琵琶のしらべを聞くに、ほとほと天の樂を聞かむが如し」これを聞く人みな涙を流せり。その中にも、白樂天一人袂くちぬと見えけり。

いにしへにありへしことを盡くさずば袖に涙のかからましやは

この人は、世の中の人の心の皆濁れるを憂しとや思ひけむ、一人すまして、常は都に跡

をなむ留めざりける。

〔第三〕昔、賈氏といふ人、類なく容貌わろくて、顔うつくしき妻をなむ持ちたりける。此女、かばかり醜き人とも知らずあひそめにければ、悔しき事とり返すばかりに覺えけれど、いふかひなくて明し暮すに、善き事惡しき事、すべて物も言はずえも笑はで、常常はむすぼゝれてのみ過ぐしけるを、男類なく憂しとおもひて、此女に物を云はせ、うち笑ませて見ばやとしけれども、いかにもかひなくて三年にもなりにけり。春の野に出でて、諸共に遊び侍りけり。雉子といふ鳥の、澤の邊に立ちゐ侍りけるを、この男弓矢を取りて名を得たりければ、この雉子を立所に射殺してけり。これを見るに、年比の憎さも忘れて、物言ひ打ち笑みたりければ、男嬉しさ類なくおぼえて、

　聞かましやいもが三年の言の葉を野澤のきゞす獲ざらましかば

これを聞くにこそ、萬の事よくせまほしけれ。

〔第四〕昔、梁鴻といふ人、孟光にあひ具して年比住みけり。此孟光、世に類なくみめわ

（三）左傳昭公二十八年の條
取りかへすばかりに—本にもどしたき程に
むすぼゝれて—ふさぎて
（四）後漢書卷八十三梁

ろくて、これを見る人、心を惑はして騒ぐ程なりけれど、この男を又なきものに思ひて、かしづき敬ふ事思ふにも過ぎたりけり。朝な夕なに飯匙とりて、笥子の器物に盛りつゝ、眉の上に捧げて懇にすゝめければ、齊眉の禮とぞ今は言ひ傳へたる。

　さもあらばあれ玉の姿も何ならず二心なきいもがためには

志だに淺からずば、玉のすがた花のかたちならずとも、誠に口惜しからじかし。されども醜からぬ顏には見え難くこそ。

〔第五〕昔、相如といふ人ありけり。世に類なき程に貧くわりなかりけれど、萬の事を知り、ざえ才學ならびなうして、琴をぞめでたく彈きける。卓王孫といふ人の許に行きて、月の明き夜、終夜琴をしらべてゐたるに、この家主人のむすめに卓文君といふ人、哀にいみじく覺えて、常はこれをのみ賞で興じけるを、この卓文君が父は、相如に近く事を厭ひ惡みけれど、琴の音にや哀と思ひしみにけむ、この男にあひにけり。女がたの父卓王孫は、萬の寶に飽き充ちて、世の佗しき事を知らざりけり。かゝれども、このわび人

鴻傳
梁鴻―篤行の學者
あひ具して―つれ添ひて
齊眉の禮―膳を捧ぐる高さの眉と齊しき意
（五）史記卷百十七本傳題柱の故事は華陽國志
これをのみ―相如の琴をのみ
わび人―貧人

心つきなき―不快なる

露塵―少しも

もてけたぬ―自暴自棄せざる

〔六〕晉書卷三十三石崇傳

石季倫―石崇

にあひ具したる事を、いと心づきなきことに思ひとりて、いかにも女の行方を知らざりけれど、露塵苦しと思はでなむ年月を過ぐしける。この男、蜀といふ國へ行きける道に、昇僊橋といふ橋ありけり。それを歩み渡るとて、橋柱に物を書きつけけり。我大車肥馬に乘らずば、又この橋を還り渡らじ、と誓ひて蜀の國にこもりにけり。その後思の如くめでたくなりて、この橋をなむ還り渡りたりける。女年比貧くてあひ具したるかひありて、親しき疎き世の中の人、めもあやに見羨みける。

沈みつつ我が書きつけし言の葉は雲ゐにのぼる橋にぞありける

心長くて身をもてけたぬなむ、今も昔も猶いみじくこそ聞ゆれ。

〔第六〕昔、石季倫といふ人ありけり。萬の寶に飽きて、世の貧き事を知らざりけり。金谷の園の内に、五百の舞姫を集めて、悦び樂む事夜晝を別かず。この中に綠珠と聞ゆる舞姫なむ、數多の中にも勝れたりければ、身に優りて淺からず思へりけり。かくて月日を送るに、時の政事をとれる人孫秀、この綠珠が類なき有樣を聞く度に、人傳ならざら

む事を懇に思へりければ、堪へかねて色に出でぬ。石季倫、身をはかなきになすとも心弱からじと思へるを、この人まけじ心のいちはやさに、兵を集め勢を極めて志をやぶる。この時緑珠は、遙に高き樓の上に居たりけり。石季倫かの人の手に隨ひて、行々目を見合せて、「誰ゆゑにかくはなりぬる」、といひけるに、堪へ忍ぶべき心地せざりければ、樓の上より身を投げて死なむとするを、「身に優るものやはある」、と諫むる人數多ありけれど、遂に聞かず。

おくれゐて歎かむよりも時の間に死なむ命はをしからぬかな

いとかく思ひ取りけむ、心の有難さも云ひ盡くすべからず。

〔第七〕昔、宋玉と聞ゆる人、容貌姿世に類なく、ざえ才學雙なかりけり。此人の住みける東隣に、又世に類なく美しき女ありけり。この宋玉を、いかでと思ふ心の忍び難さに、東の垣に夜晝立ち添ひて窺ひけれど、三年まで目をだにみやらざりければ、戀ひ侘びて、終に逢ふこと知らぬ涙に沈みはてけり。

人傳ならざらん事―人傳ならで言ふよしもがなの意

身をはかなきに―身を亡ぼすとも女を奪はれじ

この人―孫秀

手に隨ひて―捕へられ率かれて

(七)文選登徒子好色賦

目をだに―宋玉が

めならぶ—見くらべらるゝ

ゆかしからずは云々—宋玉ら見たくはありしならんが

〔八〕白氏文集卷十五燕子樓

立ちおくれたる—生殘りたる

もろともに—昔の月光の今のに勝

戀ひわびて三年になりぬ花がたみめならぶ人のまたもなければ

ゆかしからずはなかりけめど、あまり心の優にて、人に物を思はせむと思へりけるにや、又さもやなかりけむ。心のうち知りがたし。

〔第八〕昔、眄々といふ人、張倘書に契を結びて、幾年經れども、露塵互に心に違ふ事なかりけり。花の春の朝、月の秋の夕、諸共に舞を見歌を聞きて、遊び戯るゝより外のいとなみなし。かゝれども、若き老いたる定なき世の恨めしさは、思の外にこの男はかなくなりにけり。その後この女、たち後れたる事を悲しと思ひて、別の涙乾く事なし。みめかたち心ばせなども、いとめづらかなる程に、世に聞えたりければ、帝より始めて色を好む人々、懇に挑み云ひけるを、限なく憂しと思ひけり。秋の夜の月限なく照らすを見ても、まづ昔のかげのみ思ひ出でられて、

もろともに見しに光やまさりけむいまはこひしき秋の夜の月

命は限ありといひながら、かくても生ける身のつれなさよ、などぞ思ひ亂れける。かく

じつゝ月日を過ぎ行けば、燕子樓の中荒れはてゝ、床のうへ傍淋しく覺えけるまゝには、手づから自ら裁ち著せたりける唐衣を、取り重ねつゝ身に觸るれど、ありしばかりの匂だになかりければ、いとゞ涙を添ふるつまとなりにけり。

　見るたびにうらみぞ深き唐ころもたちし月日を隔つとおもへば

かくしつゝ十二年の春秋を送りて、終にはかなくなりにけり。

〔第九〕昔、張文成といふ人ありけり。姿有樣なまめかしく淸げにて、色を好み情身に餘りければ、世にありとある女、さながら心強くは覺えざりけり。そのころ時に逢ひ、花めかせ給ふ后おはしましけり。數多の御中に、萬勝れてなむ聞えさせ給ひければ、この男、人やりならず物思に沈みて、生けるかひなくぞおぼえける。かゝる儘には、寢ても覺めてもこの事の忍び難きを、又云ひ合する人だになかりけれど、芹を摘み、楣に臥して年比になりぬれば、さるべきことにや、淺からぬ心の中をそらに知らせ給ひにける。哀にいみじくは思されながら、心に任せぬ御身の振舞なれば、慰む方更になくて明し暮す

れろは共に見し故なりしが

ありしばかりの―昔程の

つま―種

（九）典據詳ならず

張文成―唐の才人遊仙窟の著者

后―則天武后

芹を摘み―「芹摘し昔の人も我ごとや心にも

のはかなはざりけり」

榻に臥し―「曉の榻のはしがきもゝかき君が來ぬ夜は我ぞかずかく」

物やおもふと―拾遺集平兼盛「忍ぶれど色に出でにけり我戀は物やおもふと人の問ふまで」

（十）本事詩

四京雜記

に、いかなる隙かありけむ、夢に夢見る心地して、下紐解けさせ給ひにけり。血の涙袖に包むべき心地もせざりけれど、唐國の習慣にて、かやうの事世に聞えぬれば、いみじき大臣公卿なれども、立所に命を召さるゝ事なれば、又も逢ひ見給はず。后も哀に類なく思されながら、雲の梯とだえがちにて、踏み傳ふばかりの道だになければ、この男織女の、年に一夜の契をさへ羨みて、人知れぬ涙のみぞ絶ゆる時なかりける。かゝれども、あわただしく色に出す事やなかりけむ、物や思ふと問ふ人だになくて、年月を送るに、わりなくいみじく覺ゆるよしの文を作りて、后に奉りける。

戀ひわたる底の水屑となりぬれば逢瀬くやしきものにぞありける

この文は、遊仙窟と申して我國にも傳はれり。后これを見給ふ度に、御身亡びぬべく思されけり。唐の高宗の后の則天皇后の御事なり。

（第十）昔、德言といふ人、陳氏と聞ゆる人に相具して侍りけり。容貌いとをかしげにて、心ばへなど思ふさまなりければ、互に淺からず思ひかはして年月を經るに、思の外に世

われて―強ちに

の中亂れて、ありとある人尊きも卑しきも、さながら山林に隱れ惑ひぬ。去り難き親兄弟も四方に立ち別れて、おのがさまぐ〵逃げ彷徨へる中に、この人別を惜む心誰にも優れたりければ、人知れず諸共にあひ契りけり。「我も人も何方となく失せなむ後、おのづから世の中靜まりて、又もあひ見る事ありなむものを、その程の有樣をば、いかでか互に知るべき」と聞えさするに、女の年比持ちたりける鏡を中より切りて、おの〳〵その片々を取りて、「月の十五日ごとに市に出し、この鏡の半を尋ねさするものならば、必ずあひ見て、互にその有樣を知るべし」と云ひつゝ、いといたう打ち泣きて別れ去りぬ。

その後この男戀しさわりなくおぼえて、徒に月日を過すまゝには、いかなる人に心をうつして、契りし事を忘れぬらむ、と胸の苦しさ抑へ難くぞおぼえける。

まそかがみわれて契りしそのかみの影はいづちかうつりはてにし

かやうに思ひ遣りけるにしも、色姿のなまめかしく花やかなるにやめで給ひけむ、時の親王にておはしける人に、限なく思ひかしづかれて年月を經るに、ありしには似るべく

下もえ―内内の苦悶

もなき有樣なれど、この鏡の片々を市に出しつゝ、昔の契をのみ心にかけて、尋常は下もえにてのみ過しけるに、鏡のわれもたる人をし尋ねあひて、男女の有樣、互に覺束なからず知りかはしつ。女これを聞きけるより、覺えず惱しき心地うち添ひて、現心ならぬ氣色を見咎めて、親王怪しみ問ひ給ふを、さすがにおぼえて、暫はいひまぎらはしけれど、強ひて宣はすれば、侘しながらありのまゝに聞えさせつ。親王これを聞き給ふに、御袖もしぼりあへず、哀にいみじく思されけるにや、裝束嚴しきさまにて出し立てて、昔の男の許へ送り遣したるに、徳言かぎりなく嬉しきにつけても、まづ涙ぞさきだちける。

ちぎりおきし心に隈やなかりけむふたたびすめる中川の水

賤しからぬ有樣を振り捨てて、昔の契を忘れざりけむ人よりも、親王の御なさけは、猶類なくこそおほゆれ。

〔十一〕列仙傳

〔第十一〕昔、秦の穆公の女に、弄玉と申す人ありけり。秋の月のさやけく隈なきに、心を

心や―夫婦の

（十二）幽明詠

すまして、全く世の事にほだされず。又簫史といふ樂人あり。秋の月淸くすさましき曙に、簫を吹く聲哀に悲しき事限なし。弄玉それにや心を移しけむ、進みて逢ひたまひにけり。世の人、あさましき事に思ひ誹りたれど、いかにも苦しと覺えず、只諸共に臺の上にて簫を吹き、月をのみ眺め給ふ事二心なし。鳳凰といふ鳥、飛び來てなむこれを聞きける。月やうやく西に傾きて、山際近くなるほどに、心やいさぎよかりけむ、此鳥、簫史、弄玉、二人の人を具して飛び去りぬ。

たぐひなく月にこころをすましつつ雲るにいりし人もありけり

むなしき空に立ち昇るばかり、心のすみけむも例少くこそ。又簫の聲にめでて、人のあざけりを忘れ給ひけむも、好ける御心のほど推し量られていといみじ。

〔第十二〕昔、男女あひ住みけり。年などもさかりにて、萬行末の事まで淺からず契りつつありけるに、この男思の外にはかなくなりにけり。その後涙に沈みて、あるにもあらず覺えけるを、我も我もと懇に挑みいふ人ありけれど、いかにも許さざりけり。これ

亡影―亡失の

（十三）博物志

娥皇女英―堯の二女

紅紫などのやうに―優劣なきことの喩

を聞くにつけても、亡き影をのみ心にかけつゝ時の間も忘るゝ隙なくて、終に命を失ひてけり。その骸は石になりてけり。

ことわりや契りしことのかたければつひには石となりにけるかな

この石をば、その里の人々望夫石とぞいひける。一筋に思ひ取りけむ心のありがたさも、この世の人には似ざりけり。

〔第十三〕昔、舜と申す帝おはしましけり。御政より始めて、萬めでたき御代の例には、まづこの御事をのみこそ申すめれ。娥皇女英と聞え給ふ二人の后侍ひ給ひけり。御心ざし、いづれまさり給へりと差別見えず、只紅紫などのやうに、淺からぬ御事にてなむ侍りける。かくて多くの年月をなむ保たせ給ひけれど、この世は限ある所なれば、帝湘浦といふ所にて、はかなくならせ給ひぬ。その後二人の后、紅の涙を流し給ひて、ふるきを思せりければ、籬の呉竹も、御涙にそまりて斑になりにけり。

君こふる涙の色のふかきには竹もまだらにそむとこそ聞け

昔の人は、思ひそめつる事は淺からぬにや。

〔第十四〕昔、陵園といふ宮の内に、閉籠められたる人ありけり。玉の肌、花の容貌あざやかにて、世に雙なく美しかりけり。年若かりける時、女御にいつきかしづかれて、内裏に參りけるに、親しき疎き、楊貴妃、李夫人の例にも勝りなむと思へりけるを、數多の御方々、めざましき事になむ思しける。その御いきどほりにや、樣々のなき事によりて、陵園といふ深き山宮に閉籠められて、明くるめもなき物思ひにやつれつゝ、眉目容貌もありしにもあらずなりにけり。父母、生きながら別れぬる事を歎き悲しめども、あひ見る事なかりけり。尋常は深き宮の内に心すごくて、風の音蟲のねにつけても思ひ殘す事なし。かくしつゝやう〳〵春にもなり行けば、四方の山邊に霞たなびき、野邊の早蕨朝の雨に萠え出でて、心地よげなるも、我身の爲には羨しく覺えて、花のにほひ薫り渡るにも、獨寢の床の上心ときめきせられつゝ、哀を添へたる朧月夜のみさし入れども問ふに音なき影ばかりほのかにて明し暮すに、春過ぎ夏たけて、暮れにし秋も廻り來に

（十四）白氏文集新樂府陵園妾

なき事—無實の罪

明くるめもなき—續詞花集陵園妾の心をよめる、登蓮法師「松の戸をさして歸りし夕より　あくるめもなく物をこそ思へ」

けり。様々咲き亂れたる白菊の、夕の露に濡れたるを見るにも、昔の重陽の宴といひし事思ひ出でられて、落つる涙いとゞ抑へがたかりけり。

見るたびに涙露けきしら菊の花もむかしや戀しかるらむ

この人、山宮に閉ぢこめられて後、三代の帝にぞ逢ひ奉りける。

〔第十五〕昔、漢の武帝、李夫人はかなくなり給ひて後、思ひ歎かせ給ふ事、年月を經れども更におこたり給はず。そのかみ病せし時、行幸し給ひしかども、いかにも見え奉らざりけり。帝あやしと思して、この由を問はせ給ふに、「我君に慣れ仕うまつりし程、露康御氣色に違ひ奉らざりき。又御志淺からねば、恨を述ぶる事もなし。しかれども、病に沈み容貌變りて後、御心に背く罪あるべけれども、又思ふ所なきにあらず。紫の草のゆかりまで惠み給ひ、哀憐を蒙る事は、只君の御志の改まらざる程なり。しかるを今のかたちに昔の御心變りなば、はかなきあとにも、愁の涙色まさらむ事を思ふに、衰へたる姿、いと見え奉らまう憂し」と聞えさす。帝これを聞かせ給ふに、悲しくわりなくお

（十五）前漢書卷九十七外戚傳白氏文集新樂府李夫人

紫の草のゆかりまで―一族まで古今集「紫のひともとゆゑに武藏野の草はみな

がちあはれとぞ見る」

まもり—見つめ

繪にかける—新樂府李夫人に「丹青間出覓何通。不言不笑愁殺人」

（十六）西王母漢武内傳

ほさる。たとひ夜半の烟と立ち昇るとも、いかでそのゆかりを懐しと思はざらむ。只この世にて、今一度あひ見るべきことを、强ひて宣はすれども、遂に聞かではかなくなりにければ、帝御心に恨ふかし。甘泉殿のうちに、昔の姿をうつして、朝夕にまもり給ひけれど、物云ひ笑む事なければ、徒に御心のみ疲れにけり。

　繪に書ける姿ばかりの悲しきは問へどこたへぬ歎きなりけり

又亡人の魂を反す香をたきて、終夜待たせ給ふに、九重の錦の帳の内かすかにて、夜の燈火の影ほのかなるに、やうやく小夜更け行く程、嵐すさまじく夜静なるに、反魂香の驗あるにや、と覺え給ひけれど、李夫人の容貌あるにもあらず、なきにもあらず、夢幻の如くまがひて、束の間に消え失せぬ。待つこと久しけれど、還る事は烏玉の髪筋切る程ばかりなり。燈火をそむけ帳を隔てて、もの云ひ答ふる事なければ、なかなか御心をくだくつまとぞなりにける。

〔第十六〕昔、同じ帝、誰もとは申しながら、限なく此世を惜み給ひけり。命ながらへむ

人間に―此世に

たのめし―あてにせし

事を願ひ給ひて、まほろしといふ仙人に仰せて、蓬萊不死の藥をとりに遣しつゝ、はかなき御遊戯にも、この世にながらへておはさむ事をぞ營み給ひける。大凡人の好み願ふ事は、必ず空しからねば、この御時に當りて、東方朔といふ人、仙宮より罪を犯して、暫く人間に下されたりけるを、帝まぢかく召し使ひて、萬覺束なく思せりける事をば、まづ此人にぞ問はせ給ひける。かゝるほどに、宮の内に色黃なる雀の、例の鳥にも似ず怪しきさましたる、飛び遊びけるを、帝、「日ごろかゝる鳥見えず。いかなる事にか」と問ひ給ふに、東方朔がいはく、「君長生不死の道を好み給ふによりて、御志にめでて、西王母と申す仙女參りて遊び奉らむと、告げ知らする由の使なり」と聞えさするに、帝嬉しく思して、「いかなる有樣にて、その人を待つべきぞ」と宣はするに、「宮の中しづかにて、庭の面をきよめ香をたき、樣々の床を設け給ふべし」と申しけり。かくてたのめし程にもなりぬれば、帝御心すみて、床のもとに東方朔を隱し置きて、人知れず今や今やと待たせ給ふに、秋八月ばかりの月の光くまなき夜、香しき風うち吹きて、晴の空の

堪へずげに―たまらぬ樣に
かひなく―愚なる我にも不死の藥を求むるは聖帝に似合しからず思はる

どかなるに、紫の雲一むらたなびけり。其中より、この世ならず目もあやなる人、百人計おりくだれり。その中にあるじと覺しき人、帝に逢ひ奉りて樣々の事共を聞えさす。久しくなる程に、この人桃七つを取り出して、その三つをば帝に奉りけり。これを御口に觸れ給ひけるより、御身も輕く、御心地も涼しくならせ給ひて、空にも飛び昇りぬべく、生死の罪障も解けぬべくや思はせ給ひけむ、「この桃我園に移し植ゑて、種をも取りてしがな」と宣ひけるに、西王母うち笑ひて、「天上の木實の、人間に留まり難くや」となむ言ふにも堪へずげに思せり。又「不死の藥や侍るべき」と尋ねさせ給ふにも、「生老病死の下界に生れ給ひながら、いかでか不死の藥を求めさせ給ふべき。はかなき御心なり」と聞えさす。西王母のみにもあらず、かひなく愚なる心にも、昔の賢き聖の帝の御心とは覺えず。かくて暫ばかりあるに、上元夫人に雲璈の瑟うたせて、舉妃瓊と聞ゆる仙人舞ひけり。玉の簪を動かし、錦の袖を飜す有樣、めぐる雪にことならず。帝これを見給ふに、思ほえず御袖濡れにけり。すべてこの世の樂の聲は、物の數ならず覺

めぐる雪―廻雪は洛川の神女の舞樣を形容する詞
その御床の―以下西王母の詞
あがひて―償ひて
〔十七〕史記卷五十五留侯世家
東宮―惠太子

え給ひけるより、御心もいたくあくがれぬ。夜やう〳〵明け方になる程に、「其御床の下に隱れ居て待ちける東方朔は、仙宮の人なり。然れども、この三千年に一度なる桃を、三度まで盜める罪によりて、暫時人間に下されけり。咎をあがひて後は、又天上に還り來るべきなり」と宣ひて、紫の雲立ち返りゆきしより、御心そらにあくがれにけり。

紫の雲のゆかりをいかなればたちおくるべき心地せざらむ

この後は、いとゞ御心も空にあくがれて、いよ〳〵仙を願ひ給ひけり。唐國の習にて、かしこき帝には、仙人なども皆使はれ奉るにこそ。はかなくならせ給ひて後も、御身は留まらせ給はざりけるとかや。

〔第十七〕昔、漢の高祖と申す帝おはしけり。呂后と聞え給ふ后、東宮の母にて、誰よりも御志重く見えさせ給ひけり。外腹の親王に、趙の隱王と申す人を、御志のあまりにや、帝も東宮に立てむと思しける御氣色を、呂后見給ひて、あさましく心憂き事に思して、陳平張良と聞ゆる二人の臣下を寄せて、「かゝるいみじき事なむある、いかにしてかこの怨

こしらへ出して―巧みに釣り出して

恥づる心―高祖が

その御心なり―君等の心次第なり

君も―高祖も

官になりて―四老人が

をやすむべき」と宣ひ合するを、實にとや思ひけむ、「叶はざるまでも計ひ侍るべし」と答へて還りぬ。又この後二人の人も、世の中の亂れなむずる事をも思ひ歎きて、おのおの謀をめぐらしてけり。商山といふ山に世を遁れつゝ、帝の召すにも參らで、籠り居たる賢人四人あり、それをこしらへ出して、この惠太子に付け奉りたらば、さりとも恥づる心おはしなむものを、と思ひよりて、此山の中に尋ね行きにけり。四人の人うち見つゝ驚きていはく、「何事により、いとかく怪しげなる住處には渡り給へるにか」と聞えさするに、「世の中亂れむと仕うまつれば、我等が身までも歎き深くて、この山に隱れ居むと思ふ心侍り。しかれども世の中の亡び治らざらむ事は、只その御心なり」といへるに、この人うち笑ひて、「君も我に恥ぢ給はむ事、いとありがたかるべけれど、空しうかへし奉らむも、無下に情なきやうなれば、後の事を顧みず、今日ばかりは御送に參るべし」といへりければ、限なく嬉しく覺えて、四人の人を具しつゝ、東宮の御許へ參りぬ。忽に學士といふ官になりて、ふるまひ給ふべき有樣など、細に敎へ奉るに、たのもしく

思さるゝ―東宮が

この事―悪帝を殺せん企

思さるゝ事限なし。かくて年立ちかへる春のあした、東宮内裏に參り給へる御供に、この人ども四人、いと揚々しくふるまひ、氣高き樣にて御供に侍りけるを、帝より始めて、仕うまつる人どもも各怪しげに思へり。帝「これは誰にか」と尋ね問はせ給ふに、御供に候ひける人申して曰く、「日比めしつる商山の四皓に侍り」と申しけるに、御心も臆せられて、あさましくぞ思されける。これによりて、帝四皓に問ひて宣はく、「我昔より汝に國の政を任せむと思へり。然れどもあへて行はざりき。然るを今、年わかく稚き東宮に隨へる心知りがたし」四皓申していはく、「君は御心賢くて、世の中を平け國を治め給へども、人をあなづり賢きをもかろめ給ふ過おはします。東宮は若くおはすれども、御心おきて情ふかく、禮義を正しくし給ふと聞え侍るによりて、參り仕うまつれり」と聞えさせてければ、東宮は我よりも心賢きやと思して、この事を思ひ留まらせ給ひにけり。かゝれば、呂后、陳平、張良より始めて、世にある人々、さながら心安くなりにけり。此趙の隠王の母に、戚夫人と聞ゆる人は、帝を怨み妬み奉り給ひけるを、呂后い

いやましく　一憎く

やましく心憂き事にぞ思しける。かゝる程に帝はかなくなり給ひにければ、東宮位に即きて、萬御心に任せたりけれども、呂后年比の御憤にや、いつしか戚夫人を捕へて、髪を剃り容貌をやつして、あさましく心憂きさまになし給ひつるを、帝「かゝらで侍りなむ。この事定めて先帝の御心に背くらむ」など、様々に諫め奉り給へども、いかにも叶はざりければ、心苦しく思しつゝ過し給ふに、此趙の隱王さへ失はむとし給ひければ、帝夜も晝も、御傍に放たず起き臥し給ひけり。后隙なき事を安からずおぼして、毒入れたる酒を、この人にすゝめ給ひけり。帝心得て、「まづ我に」と宣ひければ、あわてゝ取りかへしつ。かやうに人知れず懇にし給ひけれど、いかなる隙かありけむ、類なく力強き女房二三人ばかりを遣して、帝の御側に臥し給へりけるを、情なく攫み殺してけり。上あさましくは思しながら、いふかひなくて止みにけり。さてこの戚夫人、月隈なかりける夜、心憂く悲しきにつけても、昔の有樣や思ひ出でられけむ、そのよしの詩を何となく口ずさび給ひけり。耳癖ありける者のこれを聞き咎めて、「かゝる事なむ侍る」と呂后

許由―高士傳に出でたり
巣父―これも高士傳

に申したりけるに、今一入の憎さまさりて、足手を斬りつゝ、その軀には漆を塗りて、世に汚はしく穢き溝に浸して置かれたる有樣の、其物とも見えず哀に悲しげなり。その後こはき物怪になりて、程なく呂后を取り殺し奉りけり。これよりさきに商山の四皓は、帝の御有樣を心易く見なし奉りて後、暇を申して、もとの住處に還りぬるを、世の人たとひをとりて譽めていはく、「世の中旱におひ、草木も枯れ土さへ裂けて、人の命も絶えぬべきに、一度雨降りつゝ、四方の梢をうろほし、門田の稻葉も露繁く結び居たる後、八重の雨雲山に歸り入るなるべし」となむ云ひけるこそ實にさもと覺ゆれ。又周の文王と申せし帝の御時、太公望と聞ゆる賢人、帝に召し出されて後、官位身に餘れるに、喜びて歸るおもひなかりけり。堯と申す帝、許由に位を讓らむとて、三度まで召しけるを、穢き事を聞きつといひて、潁水といふ川に耳を洗ひけるも、いかなる事にかとをかしき樣に聞ゆ。又巣父といふ人、牛を追ひてこの川を渡らむとするに、穢き事聞きて、耳洗ひたる流にしも汚すべきかはとて、遙によけて通りけるも、をこがましくこそおぼゆれ。

又水汲む瓢を、一つ竹の編戸にうち懸けたりけむが、風の吹くたびに、戸に當りつゝ鳴りけるをさへ、うるさしといひて忽に割り捨ててけり。是等を聞くにも、實にとも覺えぬに、この商山の四皓はなさけあり、人を助くる心も深くて、誰よりも世の常びたるさまにこそおぼゆれ。

いさぎよく耳をあらひし川水をけがらはしとは誰かいひけむ

〔第十八〕昔、唐の玄宗と申す帝の御時、世の中めでたく治りて、吹く風も枝をならさず、降る雨も時を違へざりければ、皆人天下穩しきに誇りて、花を惜み月を弄ぶより外のいとなみなし。帝も、色にめで香にのみ耽り給へる御心の暇なさにや、萬をば楊國忠と聞ゆる人に任せて、やうやくみづからの御政事怠らせ給ひにけり。これよりさきに、元獻皇后、武淑妃など聞え給ひし后、世に雙なく御志深くおはしましき。それはかなくならせ給ひて後は、數多の中に御心に叶ひたる人おはせざりけり。これより高力士に仰せられて、都の外まで尋ね求めさせ給ふに、楊家の女を得給ひてけり。その容貌、秋の月

世の常びたる—通俗にちかき

（十八）白氏文集卷十二長恨歌并傳

いきざし―氣象

御目のつてにだにかけ給はず―目

の山の端より昇る心地して、そのいきざしは、夏の池に紅の蓮始めて開けたるにやと見ゆ。一度笑めば百の媚なりて、人の心惑ひぬべし。すべてこの世の人にはあらず、只天人などの暫し天降れるとぞ見えける。かゝりければ、上内裏のうちに忽に溫泉を掘らせて、この人に浴させ給ふ。湯より出でたる姿誠に心苦しく、羅の衣猶重げになむ見えける。色ざし歩み出で給へるけしき、かるびたるものから、氣高く愛々しくて流石に思ふ所あるさまにふるまひ給へり。上これを見給ふ度に、嬉しく喜ばしく思さるゝことたぐひなし。只眉目容貌の人に勝れ、しわざ有樣の世に雙なきのみにあらず、萬につきて暗からず、事に觸れて情深くなむ物し給ひける。又上の御心のうちに思せることをば、さながらそらに知りてふるまひ給ひければ、限なき御志をも、世の人理と思へり。同じ車一つ床にあらねば、行幸し、いね給ふこととなし。三千人の女御后、我も／＼と侍ひ給へど、御目のつてにだにかけ給はず、只この人をのみぞ、月日に添へて類なきものにおぼしける。又驪山宮に行幸し給ひては、霓裳羽衣の舞を奏せさせ給ふ。舞の袖風にか

のついでに見やりもせず
霓裳羽衣の舞—玄宗が曾て仙人と月宮殿の天女の舞を觀て之に擬して作れる所といふ
はぐくみ—撫育し
心に—楊貴妃の
あるじ—持主

へる度に、玉の飾庭に落ち積りて、極樂世界の瑠璃の池もかくやあらむと覺えたり。大凡驪山宮の秋の夕に心を留めぬ人なし。春は春のあそびに隨ひ、夜は夜の短きをご歎き給ひける。かくて終夜終日に時をわかず、これより外の御いとなみなかりければ、國の政事の清み濁れるをもさとり給はざりけり。凡てこの楊貴妃のはぐくみによりて、世の苦しき事を忘れつゝ、誇り驕れる人その數をしらず。又天下の人尊きも卑しきも、心に違はじと思ひあへるけしきなべてならず。見る人聞く人、羨みめづるさま言ひ盡すべからず。これによりて、女子を產めるものは悅びかしづきて、かゝるたぐひを、心にかけるもをこがましくこそ。又帝の御弟に寧王と申す人、御傍をはなれず、ま近く床を竝べて、夜晝をわかぬ御遊にも必ず侍ひ給ひけり。この親王の玉の笛を、帳の内に隱し置かせ給へりけるを、楊貴妃取りて、何こなく吹きならし給ふ。帝これを御覽じつけて、「玉の笛はあるじにあらずしては吹く事なし。然るを志の重きに誇りて禮を過てり。事のみだれにはあらずや」と殊の外に御氣色變りにけり。これによりて楊貴妃、痛み

思す心や深かりけむ、鬢の髪一房切りて帝に奉り給ふ。「我身の膚、頭の髪ならでは皆これ君の賜物にあらずや。然るを我今御心に背きぬれば、罪に伏しておこたり申すべし」と、泣く〳〵聞えさせ給ふに、御使もいとはしたなきまで覺えつゝ、この由を奏するに、御心もあわて、物も覺えさせ給はずながら、時の間に召し返して、世に猶類なくもある心ばせかなと思し續くるに、御志の深さ日ごろには過ぎにけり。初秋の七日の夕、驪山宮に行幸し給ひて、織女牽牛の絶えぬ契を羨みて、はかなきこの世の別れ易きことをぞ、かねて歎き給ひける。形は六の道にかはるとも、逢ひ見むことは絶ゆる時あらじと契らせ給ひて、

すがたこそはかなき世々にかはるとも契は朽ちぬものとこそ聞け

など宣ひつゝ、御手を取りかはして涙を流し給ひけるを、末の世に聞く人さへ袖の上つゆけし。かくて年月を送らせ給ふに、右大臣楊國忠、楊貴妃の兄にて、世の政を取れりけれども、人の心に背く事多く積りにければ、世の中憤深くなりぬ。その中に、楊貴

おこたり―謝罪し

六の道―佛説にいふ天、人、修羅、餓鬼、畜生、地獄の六道

あやむる―制する

この人―楊貴妃

人の氣色―隨行者の樣子

思はずに―意外に

妃の養子に、左大臣安祿山と聞ゆる人、威勢を爭ひて、心の中憤深けれども、これをあやむる人更になし。これによりて、忽に兵十五萬人集めて、遂に楊國忠を亡すに、世の中亂れて騷ぎ罵りあへり。百敷の內までもその恐深ければ、帝外へ逃げさせ給ふ。東宮楊貴妃、御傍にさぶらひ給ふ。楊國忠、高力士、陳玄禮、韋見素、又御供に侍り。かくて蜀といふ國へ退かせ給ふに、いかならむ野の末山の中なりとも、この人とだに二人あらば、生けらむ限思ふことあらじと思さるゝに、人の氣色變りて、兵ども道をゆかず。此時上思はずにおぼして故を問はせ給ふに、陳玄禮といふ人、東宮に申していはく、「早く楊國忠、政を亂り人の心を破るゆゑに、君も今日この事にあはせ給へり。君の御敵世の仇にあらずや。しかじ只楊國忠をうしなひて、人の愁をやすめむには」と聞えさす。東宮これを聽し給ふによりて、楊國忠を目の前にはかなくなしつ。帝あさましくはかなく思されながら、この後ゆかむとし給ふに、兵ども立ち廻りつゝ、「亂の根猶あり」と申して、心よからぬ氣色ありけり。この時に、上楊貴妃の免るまじき事をさとり給ひ

にければ、御顔に袖を掩ひて、ともかくも聞えさする事なし。かゝる程に、この世に楊貴妃、いかならむ巌の中なりとも、覺束なからぬ御住居ならば、いと心苦しからず思しけるに、思の外に命絶えぬべきにや、と淺からぬ別の涙、千入の紅よりも猶色深くて、詮方なく見え給ひながら、猶々帝に目をかけ奉り給ひて、かくれさせ給ふまで顧み給へる御有樣、何に譬ふべしとも見えず。撫子の露にぬれたるよりもらうたく、青柳の風に隨へるよりもなよらかに、大液の芙蓉未央の柳に通ひ給へるをしも、情なく道の邊の寺の中にして、紲衣を御頸に引き纒ひつゝ、遂にはかなくなし奉りつ。物の哀を知らぬ草木までも色かはり、情なき鳥獸さへ涙を流せり。

ものごとにかはらぬ色ぞなかりける緑のそらも四方のこずゑも

御供にさぶらふ人、心あるも心なきも、猛きもたけからぬも、皆涙におほれて行くかたも知らず。又帝の御心のうちには、

何せむに玉のうてなを磨きけむ野邊こそつひのやどりなりけれ

大液―禁中の池の名
芙蓉―蓮
未央―宮名

ひとりや—
楊貴妃が

只御袖の下より、紅の涙ぞ流れける。御心惑にや、馬の上も危く見えさせ給へば、人々表裏に添ひ奉りて、やう〳〵行かせ給ふに、兵ども糧盡き力疲れて、帝に隨ひ奉らむ事二心なきにあらねば、陳玄禮も留むべき心地せず。かゝるほどに益州といふ國より、貢物數しらず運べりけるを、御前に積み置かせて、侍ふ人々に別ち賜はせて宣はく、「我政の清み濁れるを知らざりしより、今日この亂にあへり。我身一つによりて、去り難き親兄弟にも別れ、二なき命をも捨てて猶我に隨へり。我又石木ならねばあはれむ心ふかし。早くこの物を賜うて、おの〳〵故郷へ歸りね」と宣はする御袖のうへ、秋の草葉よりもつゆけく見ゆ。この御ことを承はるもの、皆涙をおさへて申していはく、「命終らむまでは、只君に隨ひ奉るべし」。かくて日も夕暮になるほどに、御傍淋しきにつけても、いかなる中有の旅の空に、ひとりや暗に惑ふらむ、など思し亂れたる心苦しさ、哀に悲しなどいふもおろかなり。夜もやう〳〵明方になりぬれば、又出で行かせ給ふに、有明の月西に傾く程、雲ゐ遙に鳴き渡る雁を聞かせ給ふにも、御心のうち搔きくらされて、

東宮―肅宗
失ひ―亡ぼし
さるべき事とも―玄宗が左樣にすべしとは思はれぬ也

何方へ行くともおぼされず。蜀山といふ山嶮しく阻くて、とだえがちなる雲の架橋を歩み渡らせたまふ御氣色、他目にだに猶忍びがたし。百官人數衰へ、勢嚴しかりし旗などさへ、雨に濡れ露にしほれてその物とも見えず。御供にさぶらふ人々、何事につけても物心細くおぼえて、鳥の聲もせぬ深山に、假の宮いと怪しきさまなり。月の影より外に光なき心地のみして、あるにもあらず淺ましき程なれど、所につけたる御住居はやうかはりて、かゝらぬ折ならばをかしくもありぬべし。これにつけても、九重の錦の帳の内の玉の床の上に、枕をならべ衣をへだてざりしむかしは我何事を思ひけむ、など思されけるも誠に理なり。かゝるほどに、東宮は讓をうけて御位に卽かせ給ひぬ。惡しき心ある者を失ひ、世の中をしづめて、太上天皇を迎へ取り奉らせ給ふ。ま近く内裏をならべて、萬を申し合せつゝ、御政あるべし、と聞えさせ給へどこの御物思のあまりにさるべき事とも思されず、世もたひらぎ、御心もしづまりて後は、御歎も分くかたなく一筋になりぬ。時遷り事變り、樂び盡き悲び來たる、池の蓮夏ひらけ、庭の木葉秋落

つるごとに御心の慰めがたさ、類なく思されける時は、はかなく別れにし野邊に行幸させ給ひけれど、淺茅が原に風うち吹きて、夕の露玉と散るを御覽じても、消え入りぬべくおぼしける。

もろともに重ねし袖も朽ちはてていづれの野邊に露結ぶらむ

かくのみ思しめされて、涙をおさへて立ち還らせ給ふ御有樣のよわ〳〵しさも、いはゞおろかなるべし。

別れにし道のほとりに尋ね來てかへさは駒にまかせてぞ行く

春の風に花の開くる朝、秋の雨に木の葉散る夕、宮のうち哀に淋しくて、いろ〳〵の草の花、庭の面に咲き亂れたり。また紅葉のにしき、階のうへに紅深く見ゆ。昔楊貴妃のま近く使ひ給ひし女房など、月くまなき夜は、昔を戀ふる涙にむせびつゝ、琴を調べ琵琶彈きけるにも、いとゞ御袖の上ひまなく見ゆる心苦しさ、餘所の袂までもせきかぬる心地す。忘れてもまどろませ給ふ時なければ、夢の中にも逢ひ見給ふ事はありがたし。

六の道云々―我は普く六道の狀況に通ぜり

いひしらず―言語に絕して

夜の蟋蟀、枕にすだく聲にも御涙まさり、夕の螢の汀を渡る思も、消え入りぬべく思されけり。壁に背けるのこりの燈火、光かすかにて、朝夕諸共に起き臥し給ひし床の上も塵積りつゝ、ふるき枕ふるき衾、空しくて御傍にあれども、誰と共にか御身に觸れさせ給ふべき。かくて二年ばかりにもなりぬれば、まぼろしといふ仙人參りて、「我君の御心に、楊貴妃を思せることの、限なきそこを知れり。六の道覺束なき所なし。願くは生れ給ひつらむ所をたづね見て歸り參らむ」と聞えさするに、嬉くおぼさるゝ事限なくて、御物思忽におこたりぬ。この時まぼろし、空に昇り地に入りて、到らぬ所なく求むるに、そのしるしなし。雲に乘りつゝ、猶東ざまへ飛び行くに、大海の中にいと高き山あり。その上に玉の臺金の殿ども、軒を列べ甍を連ねたるよそほひ有樣、すべてこの世の類にあらず。又その中に仙女數多遊びたはぶる。此所に行き向ひて、玉の戸ざしを打ち叩くに、いひしらず、この世ならぬ人出でてまぼろしに逢へり。楊貴妃の現れ給へる蓬萊宮これなり、といふを聞くに、嬉しさ限なくて、唐の玄宗の御使なりと聞えさす。「楊貴

心のいぶせさをはるけて――鬱懐をはらして

妃只今いね給へり。朝を待つべし」といひて歸り入りぬる後、心もとなくて一人立てり。夕の嵐音なくて、波の上遙に入日さすほど、折からにや哀に心ほそし。かくて夜もやうやう半過ぐる程に、花の扃に白露ひまなくおけるを見て、

明けやらぬ花のとぼその露けさにあやなく袖のしをれぬるかな

かゝる程に、夜も明け日も出でぬれば、楊貴妃出で給へり。金の簪ひかり鮮やかに、玉のかざり目もかゞやくほどなり。まぼろしにあひ向ひて、暫は詞に出で給はず、まづ落つる涙をぞ所狹げにおほせる。方士も袖の雫ひまなくて、やゝ久しくなる程に、楊貴妃宣はく、「天寶十四年よりこのかた今日に至る迄、帝の御心の中を思ひやるに、あさましく苦しき事限なし。かばかり妙なる所に生れたれど、契の深きによりて、猶我うき名をとゞめし故鄕のみぞ心にかゝれる。朝夕馴れし里を見おろせど、徒に雲霧のみ隔て見る晴間なし」など樣々に宣はする有樣、猶霓裳羽衣の舞にぞ似給へる。方士、帝の御心の中を知れりければ、ありのまゝに聞えさせつ。互に心のいぶせさをはるけて、方士かへ

天にあらば――「在天願作比翼鳥」「在地願爲連理枝」

馬嵬の道――馬嵬坡は貴妃の絞殺されたる處

りなむとするに、楊貴妃、金の簪を折りつゝ、「我物とて帝に奉れ」と宣はす。方士これを取りて、事淺くや思ひけむ、「金の簪は、世の中に類なきものにもあらず。當時定めて人知れる御契ありけむものを、願はくは承りて奏せしめむ」といふに、楊貴妃氣色變り涙まさりて、思し亂るゝ事ありと見ゆ。「昔天寶十年の秋七月七日、驪山の宮に侍りし時、織女牽牛の逢ひ見る夕、長生殿の内音なくして、夜半の氣色物哀なりしに、帝我に立添ひて宣はく、天にあらば羽をかはす鳥となり、地にあらば枝をかはす木とならむと。これ君より外に又知る人なし。この契の限なきによりて、必ず下界に生れて、定めて二度あひ見て、むつましき事は古の如くならむ。我この事をかねて知れり。思へばしかも悲しく、思へば又嬉しからずや」など聞えさせ給ふ御有樣にも、忍び難き御心の中顯れて、馬嵬の道の邊に、今は限と見え給へりし夕の怨も、猶只今の樣におほせる氣色、誠に梨花一枝春の雨をおびたり。

光さす玉のかほばせしをたれてなほそのかみの心地こそすれ

この道―戀の道

しかじ云々―白氏文集李夫人に「人非木石皆有情。不如不遇傾城色」

八苦―生、老病、死、愛別離、怨憎會、求不得、五陰盛

方士歸り參りて、このよしを奏せしむるに、御心日を經て惱みまさりつゝ、生れ給はむほどをも、猶心もとなくや思しけむ、その年の夏四月に、みづからはかなくならせ給ひにけり。

　知らざりしたまのありかを聞き得てぞ夜半の烟と君もなりにし

これ一人君のみにもあらず、人と生れて石木ならねば、皆おのづから情あり。古より今に至るまで、尊きも卑しきも、かしこきもはかなきも、この道に入らぬ人はなし。入りとし入りぬれば、迷はずといふことなし。しかじ只心を動し色にあはざらむには、大凡樂み榮もうきもつらきも、この世は皆夢幻の如し。八の苦遁るゝ事なければ、厭ひても厭ふべし。天上のたのしみ限なけれども、五のおとろへさとる事なければ、願ふべきにも足らず、生れてもよしなし。しかじ只心を一にして、三界を厭ひて九品を願ふべし。極樂を願ふとも、この世に執を留めば、纜を解かずして船を出さむが如し。この世を厭ふとも、極樂を願はずば、轅をそむけて車を走らしめむが如し。この世をも厭ひ、

五の衰—天人命終の非候、自光不現、花鬘萎悴、兩腋汗流、躰便臭穢、不樂本座

九品—極樂淨土、九階の等級あり

（十九）前漢書卷六十四朱買臣傳

あらぬさまになりて—離別して

斯くてしもや—皆此儘に終るべか

極樂をも願はば、苦を集めたる海を渡りて、樂を極めたる國に到らむことは疑ふべからず。ゆめ〳〵出で難き惡趣に歸らずして、行き易き淨土にいたるべし。

〔第十九〕昔、朱買臣、會稽といふ所に住みけり。世に貧しくわりなくせむ方なかりけれど、文讀み物學ぶ事夜晝怠らず。其隙には薪をこりて、世を渡る計にぞしける。かくて年月を經るに、あひ具したりける女、限なく貧しき住居を堪へ難くや思ひけん、「我も人もあらぬさまになりて世を試みむ」など細やかにうち語らひければ、「斯くてしもやありはつべき。猶今年ばかりは、心強くあひ念ぜよ」と萬にこしらへけれども、終にきかで、その年の内に離れにけり。男戀ひ悲しめどもいふかひなくて、次の年にもなりにけり。この人のざえ才學、世に勝れたる事を帝聞かせ給ひて、その國の守になされぬ。始めて國に下りけるありさま、心言葉も及ばずめでたかりけり。かゝれども、猶ありし妻の事を心にかけて、一國の内を尋ね求めさすれども、似たる人なくて明し暮すに、野に出でて狩し遊びける時、事も斜ならず、怪しく佗しげなる賤女が、筐といふものを臂にかけて、

らず
あひ念ぜよ―こらへよ
事も斜ならず―容體尋常ならず
いかなる事にか―如何なる處分に逢ふならん
（二十）史記卷四十三趙世家
言ひつけて―言ひかぶ

菜を摘みて膝行歩くを、ゆゝしげのものゝ有樣やと見る程に、我が昔の妻と見なしてけり。猶僻目にやと目を留めて見るに、いかにも違ふ所なかりければ、人知れず悲しく覺えて、くるゝや遲きと呼びとりてけり。女、我過つ事もなきに、いかなる事にか當りならむずらむ、と恐れ惑ひけれど、ありし昔の事などを細やかに語らひければ、女あさましく覺えて、この男をうち見るより、いかゞ思ひけむ、いたく惱み煩ひて、曉がたに絕え入りにけり。

もろともに錦を著てやかへらましうきにたへたる心なりせば

心短きは、何事につけても口惜しき事にこそ。錦を著て故鄕に歸るとは、この人のことなり。

〔第二十〕昔、晉の景公といふ人おはしけり。そのつかはれ人趙朔、國の政を執れり。又屠岸賈といふ人、爭ふ心やありけむ、やゝもすれば、この趙朔を退けむと思ふ心深くて、咎を求め、なき事を云ひつけて、罪に行はるべきよしを、主に云ひけれども、用ゐられ

せて
やすめ難く
——すて置き
難く
たゞならぬ
事—懐胎の
事

ざりければ、心の中に憤深くて明し暮すに、猶やすめ難くや覺えけむ、趙朔をはじめとして、兄弟さながら亡し失ひてけり。其中に年比相具したりける妻なむ、一人この事に免れにける。折しもたゞならぬ事さへありて、隱れ惑ふにつけても、わりなく悲しかりけるを、杵臼、程嬰といふ二人のつかはれ人、主を思ふ心深かりければ、人知れず隱しはぐくみて、若し生れたらむ子男子ならば、親の敵をも思ひ知りなむ、只いかにもして、事なく人とならむ事を思ひ計れりけるを、敵漏れ聞きて、目ざましくなむ覺えければ、猶尋ね求めて、その跡を滅し失はむと思へりけり。これによりて、この女隱れ惑ひながら、本意の如く男子を生みてけり。杵臼、程嬰限なく嬉しく思ひけるにも、わりなくして、手づから自ら隱し忍びつゝ養へりける程に、この敵の屠岸賈、この事を聞きつけて、あながちにあさり求めけり。母の心にせむかたなく覺えながら、著たりける袴の中に、この子を入れて敎へていはく、「親の跡を繼ぎて、君にも仕へ奉るべきものならば、物の心を知らず幼しといふとも、聲を立てて泣くことなかれ。若し又この時に當りて、

音無かりければ—聲立てざりければ

子孫長く絶ゆべきものならば、早く泣くべし」と心の中に思ひつゝ深く隱れゐたるに、本意の如く音無かりければ、敵求めかねて歸りぬ。母の心よろこび深し。然れどもこの憂におきては、絶ゆる時あるべからず、と歎き侘びつゝ、程嬰に杵臼語らひていはく、「この子を事なく養ひ立てゝ父の跡を繼がせむと、命を捨てむといづれか難かるべき」程嬰答へて曰く、「死なむは易し。平らかに養ひ立てむ事はいと難し」といふに、杵臼が曰く、「恩の深き事は君我に勝れりき。易きにつけても我まづ死なば、その後難き事を遂げて、必ず仇を報い給へ」と言ひつゝ、幼き兒を一人抱きて深き山の中に隱れ居たり。程嬰敵に告げて僞りていはく、「我求め給へる子の在所を知れり。願はくは金千兩を賜びて教へ奉らむ」といへるを、敵喜びさわぎて、忽に千兩を與へつ。をこがましくば覺えながら、しるべして此所に行き向へるに、杵臼子をうち抱きて、あきれたる氣色にてゐたり。敵これを見て、いつしか殺さむとするに、杵臼さけびていはく、「愚なるかな程嬰、昔の恩を忘れて諸共に人となさすといふとも、いかでか千々の金に耽りて、一人の子を

主人—晉侯
いと大事に—危篤に
世をなきにしなし—傍若無人に

ば殺すべき。今我を失はむことは、その由緣なきにあらず。稚き子におきては何の罪かはあるべき。願はくは生けよ」と叫びけれど、忽に二人ながら殺しつ。その後、實の子をば程嬰とりて山の中に隱せり。年月を經れども敵疑ふ心なければ、またそのわづらひなくて十五年になりぬ。その後主病に煩ひ給ひて、いと大事におはしけり。この事を占はしめ給ふに、「罪なくして罪を蒙れる人の祟」とトひ申しけり。「趙朔を滅すことは、全く我が心より起らず。只屠岸賈みづからの憤によりて、世をなきにしなしてふるまへる故に、我今この病を受けたり、天の下にあるじとして、あるまじき事をするものを退けぬは、もはら我が咎なり。然ればいかなる事をしてか、この病をやむべき」と宣ふに、韓厥といふ人、萬に暗き事なかりければ、計ひ申していはく、「趙朔が後をつかはせ給ふべし。十五になる子一人平らかにて侍り。事の有樣をば細に知らせ給はずや」と申しけり。あさましと思して、忽に召し取りて見給ふに、昔はかなくなりし親に、露ばかりも違はず似たりけるを、哀にいみじくおぼして、いつしか父の跡を繼がせ、官位身にあまる程

主君—趙武

そらだのめ—無約束

藤の衣—喪服程嬰の爲に著たる也

になりての後、本意の如く親の讎を滅し失ひつ。さるべき事にやありけむ、何事につけても世に用ゐられ、人に恥ぢられ、二十にもなりぬれば、程嬰心安くおぼえけり。かくて後、この主に暇をこひていはく、「我は早く死に侍りなむ」といふ時に、主物覺えず心あわてゝ、「こはいかに」といふに、程嬰がいはく、「我昔杵臼に誓ひき。安きにつけて先づ死なば、我は恩の深きによりて、難き事を遂げて必ず報ゆべし、と申しき。然るを我今死なずば、杵臼にそらだのめするにあらずや。賢き人は云ひつる事を違へず」とばかりいひて、遂に我身を刺し殺しつ。この時に、主あやなく思して、かゝる事を見ながら、世にあらむ事は恥なり、と覺えけれど、空しく父の跡を斷たむ事は本意ならず覺えければ、命をば棄てずして、藤の衣をぞ三年まで脱がざりける。歎き悲しむ事年月を經れども、更におこたらざりけり。

思ひ知る心はたれも深けれどかかるためしはまたもあらじな

このつかはれ人二人が後の事より外のいとなみなかりけるも、誠に理なり。あるじの名

（廿一）史記巻七十六平原君列傳
おもひづま―寵姫
うれふる―愁訴する
おのれ―跛者

をば趙武とぞいひける。

（第二十一）昔、平原君と聞ゆる人、三千人のつかはれ人を集めて、これを憐み愍に思ひけるに、此主のおもひづま高き樓の上に居て四方を見渡しけるに、跛えたる者の這ふ這ふ膝行りつゝ水を汲みに行きけり。左右の膝よりも頭猶引き入りて、人の姿にも似ず世にをかしげなりければ、この女、思ひわくかたもなくて打ち笑ひてけり。このかたは人、笑ふ聲を聞きて、「我かゝる病に煩ひて年月久しくなりぬ、今始めて人の笑ひ嘲るべきにあらず。これ偏に、君の色を好みてつかはれ人を輕しめ給ふ故なり。若し我を棄てぬ御心ならば、笑ひつる人を失ひ給ふべし」と強て主にうれふるに、おのれが憤をやむべしとは云ひながら、さすがにあるべくもなき事なれば、その後月日を經るに、三千人のつかはれ人、やう／＼數少くなりゆくを、「我聊も過つことなし。然れども怨を抱きて遁れ去る心知り難し」と、各に云ひくだしけり。この中に、事に詳なるもの申していはく、「君このかたは人を賤し給へり。これ我らが身の上にあらずや。若しかくの如

くならば、何をたのもしと思ひてか、身を捨て心を勵して君に仕へ奉るべき」といへり。か主これを聞きて、淺からぬ年比のむつましさをも顧みず、この女を忽に殺してけり。かたは人これを見て心ゆきぬ。又その外のつかはれ人ども、もとの如くかへりにけり。

思ひきやただうちゑみし言の葉の死出の山路に散らむものとは

跛えたるつかはれ人一人に、顔美しき人を代へけるもいと情なきしわざなりや。大かたこれのみならず、唐國の習にて、怪しきものなれども、云ひ立ちぬることを、帝もその志を破らせ給はぬにや。

〔第二十二〕昔、楚の莊王と申す人、群臣を集めて終夜あそび給ひけり。其御傍に、淺からず思ひ聞えさせ給ひつる后さぶらひ給ふを、人知れずいかでかと思ひ奉る臣下ありけり。燈火の風に消えたりける隙に、后の御袖を取りて引きたりけるを、限なく憤深くや思しけむ、御手をさしやりて、この男の冠の纓を取りて、「かゝる事なむ侍る。早く火をともして、纓なからむ人をそれと知らせ給へ」と申し給ふを、あるじ、素より人

（二十二）韓非子、說苑

思はずに―案外に
（二十三）後漢書卷八十四列女傳

を哀み情深くおはしければ、燈火消えたる程に、「これに侍る人々おの〳〵纓を取りて奉るべし。その後燈火はともすべし」と宣はするに、この男、涙もこぼれて嬉しく覺えけり。かくて燈火あきらかなれど、誰も皆纓なかりければ、その人と見えざりけり。かゝればこの人、いかなるわざしてか君の情を報い奉らむ、と心の中に思へりけるに、あるじ、敵の國にせめられて危き程におはしけるを、この人一人身を棄てて戰ひければ、主勝たせ給ひにけり。この事を思はずに怪しくおほして、その故を尋ね問はせ給ふに、この人申していはく、「我昔后に纓を取られ奉りて、思ひ遣るかたなく侍りしに、誰となく紛はし給ひし事、我今に忘れ侍らず」と泣く〳〵申しけり。

　なさけなき言の葉ならば今までに露のいのちのかゝらましやは

主これを聞かせ給ふにも、猶人として情あるべき事にこそと思しけり。

〔第二十三〕昔、後漢の代に荀爽といふ人ありけり。心賢く顏美しき女をぞ持ちたりける。みめ心の類なきのみにあらず、ざえ才學並びなくて、せぬわざなかりけり。これを父母

もいつきかしづく事限なし。かゝりければ、尊き卑しきさながら心をかけて、懇に挑みいはせける中に、隱瑜と聞ゆる人、心に足れる事やありけむ、この女に婚せてけり。男志し深くて、またなきものに思ひけるも、誠に理深く見えけり。三年ばかりになりにければ、月日の過ぐるまゝには、いとゞ類なくのみ覺えて、樣々に淺からず契り置きける事ども數多たびになりぬ。かゝるほどに、この男病に煩ひて後、幾程なくて終にはかなくなりぬ。女の氣色あるにもあらず、悲びのあまりにや、命も絶えぬとぞ見えける。餘所に見る人さへ、いとはしたなき程に覺えけり。月日はあらたまれども、別の涙は乾く時なかりけり。父母いかにして、忘るゝ草の種をだに取りてしがなと思へど、更に叶ふべくも見えず。この時に同じ里に住みける郭奕といふ人、世に取りて賤しからず、時に用ゐられたり。この男、思の外に年比住み渡りける妻はかなくなりて、歎やう〳〵おこたるほどに、此女を、あはれいかでかと思ふに、堪へぬ氣色いろに出でぬ。これによりて、父母煩ひなく聽してけり。この女悲しと思ひて、樣々にさるまじきよしを懇に

心に足れる―親の心に滿足する

忘るゝ草の―伊勢物語に「今はとて忘るゝ草の種をだに人の心にまかせずもかな」

おこたる―をさまる

昔の男よりも—親の言に従はされば死せる夫よりも親を輕んずるに當るを以て

ことがら—態度

嬉しく覺ゆる—郭奕が

臆せられて—郭奕が

いひけれど、「親の心にしたがはぬは、限なき罪とは知らずや。みづからの心にこそふさはしからずは思ふとも、いかでか親の本意をば違ふべき」など猶云ひけるに、昔の男よりも、生ける親のことはおろかに覺ゆる理に、まけてなまじひに出で立ちつゝ、今の男の許へゆく〳〵も、袖の雫乾く間もなかりけり。かゝりけれども、男の家近くなりにければ、色貌を改めて、喜びたるけしきになりぬ。車よりおりつゝ、なよらかに歩み入りて、帳の前に火しろくかきたてゝうち居たる、ことがら氣色をみるに、嬉しく覺ゆる事限なし。又物など見たる、うち言ひける言の葉につけても、恥しくつゝましくのみ覺えて、忽にま近く寄るべき心地もせず、臆せられて、やゝ久しくなる程に、鐘も鳴り、八聲の鳥の聲々鳴きわたりぬれば、この女、何となくすべき事ありがほにもてなして、身親しき女房一人二人を具して、端の妻戸の内に入りぬ。かくて後いたくうちなきて、女房に語りていはく、「我昔の契を思ふに、時の間も堪へ忍ぶべき心地せず。さりながら親に背ける罪を恐れて、なまじひに此所までは來たれど、生きながら二人の人に契を結

ぶべき理なければ、今はかぎりの我身とは知らずや」とて

　親にこそそむかぬ道にいりぬともふるきちぎりをいかが忘れむ

「生きては一つ床の交り絶ゆる事なく、死なば又同じ塚の塵にもなりなむと誓ひし事は、中有の旅の空にも思ふらむ。我も又忘れめや」といひはつれば、らうたき眥より、紅の涙流れ出づる氣色、誠ににほひ異なる八重の紅梅の、朝の雨にしほれて、よそほひ淋しきに通ひたり。かくて暫ばかりあるに、身の有樣をや思ひ定めけむ、指より血を出して、妻戸のうちに書きていはく、

　我がかばねをば隱瑜が墓の傍に置け

と書きつくるに、人の氣色のしければ、さわぎて、はての文字二三をば書きさしつ。みづからの帶を解きて、頸を引き纏ひて、みづからはかなくなりぬ。

　くれなゐの涙にまがふ水ぐきの末をだにこそかきもながさね

暫あれば絶え入りぬ。女房かゝへて泣き居れども、いふかひなし。かくて明けぬれば

（二十四）白氏文集卷三新樂府
上陽人—人名に非ず上陽宮に閉ぢ籠められたる宮人の義
內裏—唐の玄宗の後宮

男入り來て見るに、いかゞおぼえなむ、暫ばかり死に入りておきもあがらず。

我さへや慕ひやしなむちぎりける人ゆゑ人の絶ゆるいのちに

時の人々悲み泣きけり。この女は穎川の荀爽が女、南陽の陰瑜が妻なり。今の男は太子師郭奕といふ人なり。

（第二十四）昔、上陽人、上陽宮に閉籠られて、多くの年月を送りけり。秋の夜春の日あけくれ、月の光蟲の聲より外に、又さし入り音なふ人なかりけり。嵐にたぐふ紅葉の錦、百囀の鶯の聲も、我が爲はいと情なき心地す。夜の雨窓を打つ音にも、憂の涙いとゞ增りけり。

いとどしくなぐさめがたき秋の夜に窓うつ雨のおとぞわりなき

この人昔內裏に參りけるに、その姿花やかにをかしげなるを憎みて、楊貴妃などをも爭ふ心やありけむ、一生終に空しき床をのみ守りつゝ、花のかたちいたづらにしをれて、烏玉の黑髮白くなりにけり。

（二十五）西京雜記
數多の―多數の女御后たちの
人の敎―他人の敎唆
いとなみ―政治

〔第二十五〕昔、漢の元帝と申す帝おはしましけり。三千人の女御后の中に、王昭君と申す人なむ、花やかなることは誰にも勝れ給へりけるを、此人帝にま近くむつれ仕う奉り給はゞ、我等定めて物の數ならじ、と數多の御心にうとましく思しけり。此時に夷の王なりける者の參りて申さく、「三千人まで候ひあひ給へる女御后、いづれにても一人賜はらむ」と申すに、上みづから御覽じ盡さむこともわづらひありければ、その容を繪に書かせて見給ふに、人の敎にやありけむ、この王昭君の容貌をなむ、見にくき樣に寫したりければ、夷の王たまはりて、悅びひらけつゝ、我が國へ具して歸るに、故鄕を戀ふる淚は、道の露にもまさり、親同胞に立ち別れぬるなげきは、繁き山の行末はるかなりかゝるまゝには、只音をのみなけども、何のかひかはあるべき。

うき世ぞとかつはしるしるはかなくも鏡のかけをたのみつるかな

哀を知らず情深からぬ武夫なれども、らうたき姿にめでて、かしづき敬ふこと、その國のいとなみにも過ぎたり。かゝれども、ふりにし都を立ち別れにしより、今日に至るま

で、事に觸れ折節につけて、憂の涙かわく間もなし。この人は、鏡のかけ曇なきなのみたのみて、人の心の濁れるを知らざりけり。

（第二十六）昔、潘安仁と申す人ありけり。姿有樣類なくなまめかしく清げにて、その容は、玉などの如く光るやうにぞ見えける。秋の哀を述べて賦に作り、事に觸れて情深くやさしかりければ、世の中にありける女、さながら名を聞き容を見るより、下燃の煙絶ゆる時なかりけり。車に乘りて道を行くに、道に逢ひける女、思ひのあまりにや、橘の枝を採りて、車の物見よりうち入れけり。人ごとにかくしければ、果物車にあまりけり。

めぐりあふ事もありやとから車積みあまるまで折れるたちばな

（第二十七）昔、都に人の女ありけり。眉目容なまめかしく美しかりければ、荒き風にもあてずして、深き窓の内にかしづき養はれけり。齡やうやう人となる程に、父母世にあらむ事をかせぎ營む。この人これを聞きて、嬉からず厭しきやうになむ思ひけるを、父母しひて怨み歎きけり。「我もしさる事あらば、只家を出で飾をおろして、世にもあらじ」

（二十六）晉書卷五十五潘安仁傳

賦につくり―秋興賦文選に載せたり

下燃の烟―人知れず燃ふる思

物見―窓

（二十七）出所不詳

世にあらむ事―娘の婚姻の用意

親しきあたり―親族

思ひ放つ人・―疎む人

子を思ふ道は―後撰集兼輔「人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」

などまめやかにうきことに云ひけり。親しきあたりまでも、限なく思ひ歎きけれども、心強く思ひ立ちにけり。遂に乳母子なりける者一人を具して、何方となく失せにけり。この乳母子も、容いとをかしげにて、思ひ放つ人なかりけれども、この人と同じ心にて、人に見えむ事うるさしとや思ひけむ、鳥の聲もせぬ深き山の中に入りて、おの〳〵草の庵を引き結びつゝ、住み渡りける程に、この女の父母、二なき志ばかりをしるべにて、山林を分けつゝ尋ね來にけり。うち見るまゝに血の涙を流せども、諸共に立ち歸るべき氣色更になし。誰も、子を思ふ道は惑はぬ人なければ、さるべきものなど懇に營みやりけるを、猶うるさしとや思ひけむ、「又住所を改めて外へ逃げ失せむ」などいひければ、只二人の心に任せて過させける程に、斑なる犬の美しげなるが、何處よりとも見えず、この乳母子の庵の前に、尾打ちふりてゐたりけるを、物など喰はせて撫で興じけるに隨ひて、この犬殊の外に馴れむつれけり。徒然なるまゝに、懐になどうち臥せて、只これを愛し弄びつゝ明し暮しける程に、いとむつかしく心亂れて、あらぬすぢにのみ物の覺え

うちたへて ―ひたすらに

昔のちぎり ―前世の宿縁

ければ、この犬にうちとけにけり。さるべき前の世の契や深かりけむ、犬の思はしさ限なく覺えけるを、我ながらあさましく心憂くぞ思ひ知られける。かくて主のゐたる所へ來て、來し方行末の事など、うち語らひつゝゐたりけるに、夏の衣曇りなく透きたるより、この乳母子の肩に、犬の足跡多つきたりけるを、この人見つけてけり。「それはいかなる事ぞ」と尋ね問ひければ、ありのまゝにいはむも心憂く、けしからず覺えて、何かと言ひまぎらはすを、強ひて責め問ひければ、あらがふべきかたなくて、「我居所をさりげなくて時々見給へ」と教ふるを、怪しと思ひながら、その後は常に窺ひ見るに、うちたへて、この犬と二人寢たり。この人これを見るに、堪ふべくも覺えず侍るを、まづは心もとなく佗しかりければ、忽にその犬を呼び取りてあひにけり。思はしく悲しくぞおほえける。

あさましやなどけだものにうちとくるさこそ昔のちぎりなりとも

人の身にして犬に契を結びける、類なき程のことなれど、物の心を知らむ人はうとむべか

らず。いかばかりかはこの道に入らじと思ひ取りしかど、契の深きにおひぬれば、かしこきもはかなきも、さながら遁れがたきことにや。この犬の名をば雪々とぞいひける。

唐物語終

平安朝物語集索引

（語句は歴史的假名遣に從つて五十音順に排列しンは最末に置く）

ア

イ

ウ

ク

ケ

サ

ツ

ナ

ヒ

へ

ホ

マ

ム

メ

モ

ヰ

ヱ

平安朝物語集索引　終

大正二年三月十　日印刷
大正二年三月十三日發行

有朋堂文庫
平安朝物語集（非賣品）

東京市神田區錦町一丁目十九番地
編輯兼發行者　三浦理

東京市本所區番場町四番地
印刷者　平井登

東京市本所區番場町四番地
印刷所　凸版印刷株式會社分工場

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所　有朋堂書店

（岡山製本）





